

迷探偵

猫羽の よろず 事件簿

Studio ***46



©ハトリ

目次

前座	1
★4月下旬：うっかりOL解雇事件	2
★5月中旬：転地学習タロット事件	24
★6月初旬：応援少女迷走事件	49
-INFORMATION-	74
☆閑話：悪役令嬢翻訳事件	75
迷探偵猫羽の乙女事件簿	
転座	93
★Target.1: 烏丸悠夜越境事件	95
.....	96
☆details: 椋猫羽	117
★Target.2: 漣汐ノ香出現事件	120
.....	121
☆details: 橘水葵	139
★Target.3: 氷輪水燬邂逅事件	142
.....	143
☆details: 橘咲杏	165
★Target.4: 椋猫羽撃沈事件	168
.....	169
☆details: 夜葩風滴	189
★Target.5: 烏丸一家離散事件	192
.....	193
☆a sequel	214
謝辞	219

前座

ミステリーにファンタジーは反則です。

誰でもわかることだと思ふ。

だってたとえば、せっかくの密室殺人が、テレポーテーションで可能！

……なんて、そんな結末はつまらないから。

「^{ねこは}猫羽ちゃん。悪いですけど、この案件、貴女が担当してくれますか？」

わたしのバイト先の所長、白衣の天使と呼ばれる金髪の美女が、小さな四角い画面の中で恐ろしいことを話し始めました。

「文句なら^{かおる}髻に言ってくださいね。何しろうちの相談所は、探偵部門が常に人手不足ですから……」

断れば多分、わたしに命はありません。

この事務所では所長が法律です。いつも天使の笑顔に見えて、血も涙もない、人外の混血魔女の所長が。

次の契約更新時期がくるまで、わたしは所長のいうことをきくしかなくて、仕方なく今日は外回りに出ることになりました。

バイト時間の間中、受付に座りながらいじる、大事なスマホを握りしめながら――

* * *

★4月下旬：うっかりOL解雇事件

拝啓、父さんと母さん。
あれ、書き方こうでいいんだっけ？

ええと、わたしはやっと、この大都会な町に慣れてきました。
ここは忙しなくて、初めはどうなるかと思ったけど。
今までのわたしはのんびり過ぎたのかな。高校ってけっこう大変なんだね。

でもこの高校はどこか、変わってるみたい。
制服はおへそが出てて、スカートがひらひらしてて、何だか落ち着かないよ。
同級生が可愛いリボンで髪を二つに括ってくれて、高校ではその髪型にしました。
お休みの日は前と一緒に。あの格好の方が動きやすいしね。

帰りたいたずって言うたら、^{くどう}玖堂さんがプレゼントをくれました。
これもそれで書いてるよ。漢字苦手だったけど、これを使うと大丈夫なの。
スマホって言うんだって。PHSとちょっと似てるかな。

そっちに直接は届かないから、おねえちゃんを送ってくれると言っていました。
これね、持っていると色んなことができて、すごく楽しいです。
今日は書き切れません。また暇な時に、ゆっくりお話しするね。

でも初めてのバイトが大変で、ちょっと死ぬかもしれません。
兄さんにごめんねって言うておいてね。それじゃ、さようなら。

猫羽より

……………。

初めてのメールを親戚のおねえちゃんに送ったら、後ですごく心配されました。
「わたし、何か変なこと書いたかな？」
間違っって開いたスマホのメール画面を見ながら、廃ビルの下で立ち尽くします。

何のバイトしてるのってきかれたけど、おねえちゃんが教えてくれたバイトしかして
ないけどな。

おねえちゃん、そんなに危ないことないよって言ってたっけ。
うん、おねえちゃんの仕事の方が危ないのは確かだと思う。
おねえちゃん、いつも事務所にいないから、わたしがどうしてるのかは全然知らない
と思うしね。

でも所長は、おねえちゃんが思ってるより、ずっと危ないヒトなんだけど。
おねえちゃん、人が好いからなあ……所長もおねえちゃんには優しいし……。
もしくはおねえちゃんの方が、所長より危険なのかもしれないね。

多分、わたしに所長の魔法が通じないのがいけないんです。
この廃ビル、「よろず相談所タカノ」は、みんなにはキレイな「でざいなーず・びる」
に見えてるんだから。
わたしはいつも二階にいるけど、コンクリートのガレキ以外何もない所なのにね。

わたしの居場所、二階の入り口側の奥にあるブロック塊が硬いのは別にいいけど、下
宿みたいなエレベーターがないのはしんどいです。

一番上の、所長のいる四階はすごく少女趣味でキレイらしいんだけど、階段が怖くて
全然行く気になれないの。

所長の許さない人が入ると、八つ裂きになっちゃう仕様だもの。

だから所長は、わたしにはこのスマホの画面で指示を送ってきます。
直接会うことはめったにないかな。所長の普段のお仕事は、とても忙しいから。
「ホントに……何でこんな相談所、やってるのかな？」
看護師のお仕事、とても楽しいって、所長はいつも本音で言ってるのにな。
本当に不思議です。所長ほど、見かけと中身が合わないヒトもそうそういないと思
います。

そんなわけで、「よろず相談所」にくる依頼は、大体バイトが引き受けます。
お客さん用の一階には一応ガレキはなくて、でも壁とか床は、現実のもの以上に綺麗
な幻を見せられてるらしいです。

置いてあるのはいくつかのついたてだけ。そこに相談事例集がいっぱい、パネルに入
れて飾ってあります。

トイレを借りに来るか、何となく入って見てみて、すぐに出ていくお客さんが大半だ
けど。

興味が出たら二階に上がってくるから、まずお話をきくのがわたしの仕事なのにな。
こういう外回りの時は、お客さんが来たらどうするんだろう？

それにしても、スマホの地図って、どうやって開くんだっけ……。

おねえちゃんが教えてくれたものしか使ってないから、わたしのスマホ生活はすっごく限られています。

「いや……『アクマで GONE』、やっちゃえ」

よくわからないから、いつも地図代わりにしてる、ゲームの画面を開いちゃいます。

これ便利なの。大好きです。道端の悪魔をいっぱい集めるゲームなんだって。

スマホに映るこの町には、百種類以上の悪魔が潜んでいて、歩き回って出会うたびに魔法の網で捕まえていくの。

右も左もわからないわたしにはぴったりです。ちゃんと地図になってるんだよ。

わたしのいる場所がわかって、周囲の道がわかって、道の駅の「ゾーン」……うちの事務所にもあるんだけど、魔法の網とか道具をふるまってくれる場所まであるんだから。

「ええっと、確か、『都会ぎりぎり交差点』ゾーン……だっけ」

早く、所長に言われた道の駅に行かないとです。そこで依頼人が待ってるんだって。

所長もわたしの機械音痴をわかって、ちゃんこのゲームでわかるような指示をくれます。

そういう所は、優しいんだけどな……。

所長いわく、この日本は平和過ぎるから、もっと暗黒を招かないとだって。

よくわからないね。これだから、魔女っていう人外生物は困るよね。

夕方の空は、どんよりと青黒く曇っています。

このビルだらけの町は、空があんまりキレイじゃないね。でも日本の都会は、どこもそうなんだって。

わたしが元々いた所は、辺境も辺境な異世界みたいだから。

高校に入れる年になって、初めてわたしはここに来ました。

うちのならわしで、高校一年はこの町で、一人暮らしで体験しろっていうの。

でも兄さんは免除されてるから、ずるい。兄さんにはお仕事があるからだって。

「わたしも……ずっと京都にいたかったなあ……」

下宿先と、通う学校を用意してくれたのが玖堂さん。母さんの母さんの知り合いなんだって。

玖堂さんには、生活費は援助するけど、お小遣いは自分で稼ぎなさいと言われていきます。

高校の勉強はさっぱりわからないな。あ、でも、古文は面白いかな。

異世界の京都でずっと、わたしは日本の文化と、まじないの勉強ばかりしていたから。

所長のこと人外生物って言ったけど、わたしもそういう意味では、ちょっとアウトです。

一応人間なんだけどね。受付をさせられてるのは、門番の意味でもあって……。
でもそのために、番人に必要な力を所長がくれたのは、とりあえず感謝してます。

勉強はさっぱりだけど、運動神経は抜群だと思うわたしなので、道の駅はもうあっさり近づいてきちゃいました。

とても気が重いです。所長が探偵部門を動員する時って、大体は痴話喧嘩とかなんだもの。

探偵部門って、正確には興信所なんだって。

興信所って何？ ってわたしは思ったんだけど、特定の誰かのことを調べて回るお仕事みたい。

バイトを始める前のわたしは、京都にいた頃にいくつか読んだ、かっこいい推理をする探偵さんを想像してたのに……。

まあでも、あんな頭のいい人にはなれそうにないし、誰かのことを調べる仕事は、苦手ではないです。

所長の魔法が通じにくいわたしは、まやかしを見抜く感覚を持ってるらしくて、何となく人の思いがわかるのも昔からだったし。

「直観」っていうんだって。それで多分、所長が危ない人だっていうのもわかるんだけど。

普段は親戚のおにいちゃんが探偵担当なのに、おにいちゃんはいつもさぼってるから、わたしが雇われたといってもいいみたい。

「……おにいちゃんに任せた方が、あっという間なのにな」

おにいちゃんもずるいんです。透視能力っていう、何かすごい目を持ってるから、調べ物はとても得意なんだって。

そんなわけで、人外生物の魔女の所長は、ヘンな力を持った人ばかりバイトに雇うみたいです。

「でもわたしは……一応、人間だもん」

わたしの直観は、うまく言えないんだけど、いつも身の回りのものが、色んな雰囲気と同時に観えてる。

気が付けば周りの人やものの気配が、ずっとわたしの中に入ってきて、わたしとその周りと一緒にくたになってるの。調子がいいと、かなり遠くのことまで入ってきちゃうから、そうなるとうわたし自身の目が見えにくくなるのは困るかな。

その点、スマホって便利だね。これに焦点を合わせたらすぐにはっきり見えるし、わたしとスマホは、別に一緒にならないし。

わたしはどうやら、「気配を持った存在」と同調しやすいらしくて、それで周りのことが色々わかるんだって。

スマホはただの物だから、スマホのことはよくわからないけど。
人間世界って不思議だな。生まれた時からずっと、そう思ってたな。
だってわたしと周囲は別物なのに、わたしにとっては同じで、相手もそうだと思ってたんだ。
わたしの実の兄さんがわたしと同じような感覚だったから、余計にそうだったんだと思う。
昔に一度家族と離れた後は、人はわたしと同じじゃないって、はっきりわかるようになったんだけどね。

さてと……本当、しっかりお仕事しないとです……。
——緊急に、失せ物探しを望むお客さんがいます。会って話をきいてきてください。
所長からのお達しはこうだったけど……調べ物の中でも物を探すのは、わたしはすごい苦手なので、困ります。
だってわたしがわかるのは、「気配のある」もののこと。人間や人外生物、その使う魔法とかそういう系のことだから。
ただの物を探すとすると、わたし一人じゃ心もとないから、応援を呼ばなきゃいけないなあ……。
「うう……面倒くさいなあ……」
直観の影響で、わたしの目には景色が一定しない街を歩くのも、スマホがある内はいいけど、あんまり使うとスマホのエネルギーがなくなっちゃって困ります。
あ、エネルギーじゃなくて、電池だけ……とにかくこれがなくなると、下宿に帰るのも一苦労なんだから。

いざとなったら、おねえちゃんに電話しよう。それすら、電池がないと無理なものね。
さらに、この地図のゲームを開いてると、電池がぐんぐんなくなっていっちゃう。
悪魔さん、沢山出てきてるけど、今日は捕まえてあげられないです。残念。
仕方ないから、スマホの悪魔さんは諦めて、PHSの悪魔さんにでも呼びかけることにします……——

スマホの電池がなくならないよう、地図のゲームを切って、学生鞆にしまします。
入れ替えに父さんが持たせてくれた PHS を取り出して、わたしは立ち止まります。
辺りはそろそろ、ヒトの顔もよくわからない黄昏時。
ひと気がなくて、車も少ない道路の交差点に、その女の人は待っていました。

* * *

わたし、年上のヒトが好きです。小さい頃は、いつもおにいちゃんやおねえちゃんがいて、みんながわたしを守ろうとしてくれたから。

でも、今日の前に立ってる白いスーツの女の人は、とてもオドオドしていて、わたしの方がしっかりしてるみたい。

「あ、あの……^{たかの}鷹野さんのお使いって、あなた、なんですか……？」

どうにもぼやけちゃうなあ。普段よりひどいなあ、薄暗いせいかな？

眉をよせて必死に目をこらすわたしを、ぼやけた女の人は、すごく真剣な目で見つめてきます。

「急な話で本当にすみません、でも今日中に見つけないと、もうこの会社に来るなって言われて、私……！」

「え……今日中？」

がーん。思わず声に出しちゃったわたしに、女の人は激しく頷いて、短い髪と両腕の手提げ鞆が大きく揺れます。

何だか、キレイそうな人なのに、持ってる荷物は女の人っぽくない量だね？

「こんなこと、もう鷹野さんしか頼れなくて……！　お願いします、以前みたいに、また私を助けてください！」

一見さんじゃなくて、所長のお客さん。

これをしくじったら、わたしの生命も危うい気がするので、必死にこくこく頷いたわたしでした。

女の人は、山田さんというらしいです。

現在もう、夕方の六時です。

五時に会社を出てからずっと待ってたという山田さんは、待たせたわたしを全然怒ってないみたいです。

急ぐっていうし、会社から来た道を引き返しながらか、とりあえず事情を聴きます。

「私、よくうっかりミスをしちゃうんですけど、それでいつも課長にひどく怒られていて……ミスしないようにって寝る時間も削ってチェックしてるのに、どうしても治らなくて……」

「……??」

「仕事のミスはいつもチームがカバーしてくれてたけど、今日はもう本当に、私、何を考えてるのかしら！　自分の社内IDを失くしちゃうなんて！」

「社内……あいでい……？」

それ、何？　ときこうとしたわたしを、遮る勢いで山田さんは話し続けます。

「再発行してくださいって頼みにいこうとしたら、課長についてキレられちゃって、IDないって言うてるのにきいてくれなくて、あれがないと私、会社に入れなくて、社内ネットワークも使えないしどうすればいいの……」

だらだらと大汗を流して、今にも泣いてしまいそうな山田さんです。
それだけじゃなくて、心臓もすごくドキドキしててしんどいし、首や腰のあちこちが痛いし、全身が何だか、とってもだるいし。

山田さんのそんな気配が、隣にいるとダイレクトに直観にきて、わたしもしんどくなっちゃいました。

でも山田さん自身は気付いてないみたい。
さっきからずっと、山田さんがぼやけて見えるのは、山田さんが自分をあんまり見えないからかもしれないです。
「会社には、入れないの……？」
「ああ本当、どうしよう！ 失くしたとしたら社内なのに、どうやって会社に戻ればいいのか!?!」

わたしの質問にも、答えてるようで、あんまりお話しきいてないみたいです。
「ノートパソコンだけは何とか持って出たけど、クビになっても荷物を引き取りにもいけないわ！ あああ、私、クビになるの!? どんなに課長に怒られたって、絶対ここで頑張るって決めてたのに……！」

それでそんなに、荷物が重そうなんだね。
でも、会社って、そんなに急に入れなくなるものなの？
あと……入れなくなるってわかってたら、どうして出ちゃったの……？
うちの所長に連絡するなら、会社の中でもできたと思うんだけど……。

そうして、「社内あいでい」が何かもわからないまま、わたしは山田さんの会社についてしまいました。

山田さんの言い分からすると、会社に入るために、必要な物みただけだ。
「誰かが通るのを待つしかないわ……ごめんね^{うつき}榎さん、ちょっと待っててね」
あ、それでも入る方法はあったんだね。
ドタバタしてるのかしっかりしてるのか、よくわからない人だなあ。
わたしと山田さんは会社の扉の横に張り付いて、そこが開くのを悶々と待ちます。

ちなみに、^{うつきねこは}榎猫羽がわたしの名前です。
この春から女子高校生です。それまでは異世界の京都でのんびり生きてました。
特技は直観とかいうヘンな感覚と、ちょっとだけ戦闘、後は悪魔さん探して——
「ところで、榎さんは、鷹野さんみたいに魔法を使うの？」
突然、込み入ったことをきかれちゃいました。
所長のことを本当に知ってるなら、わたしのことも、多分話してもいいんだけど……。
「あ、魔法って言ったら怒られるな。占いはれっきとした学問です！ って、鷹野さん、言ってたもんな」
うん。やっぱり、それぐらいしか知らないよね、所長のこと。

わたし達が、人外生物の集まりっていうことは、あんまりおいそれと話しちゃいけないよって、わたしは方々から注意されてきています。

所長は本職がお休みの日だけ、日本で有名な占いを売りにしてるけど、その占い師もあくまで世を忍ぶ仮の姿。

それでも色々できるみたいです。占い師さんって、すごいね。

そもそも失せ物探しなら、わたしより所長の方がずっと得意なのに、どうしてわたしに頼んだのかな。

「鷹野さんは社内にあるっていうけど、それくらい私もわかるし、でもただじゃ見つからないっていうのよ……電話じゃこれが限界だって」

今日は平日、所長は本職中。それで今日中っていうのは、確かに難しいよね。

わかりにくい独り言の山田さんだけど、あらかじめ所長、占いだけはしてあげてたんだね。

「他には、所長は、何か言ってた？」

「え？ ああ、ごめんね、何？ 榎さん」

ずっと真っ青な山田さんは、わたしが何をきいてもこの調子です。

色んな意味で、大丈夫かなあ、この人……。

何となく伝わってくるけど、山田さん、すごく思い込みが強い人なのかな。

所長は、占いは魔法じゃないって言ったみたいなのに、魔法だってやっぱり信じてるようだし。

「もう榎さんにしか頼れないの……榎さんは、どんな魔法を使うの？」

「ええと……わたし、魔法は使わないけど……」

わたしが習ってたまじないと、占いはわりと近いんだけど、どっちも魔法じゃないしなあ。

わたしはただ、ずっと持ってる PHS を使う時に、身を守るためのまじないを覚えてもらってただけだし。

というのをわたしが、答えようかどうか迷ってる間に、山田さんは思い出したようになります青くなっていきました。

「それにしても全然誰も通らないなんて……！ そりゃそうよね、この時期そんなに早く帰る社員うちにはいないわよね、どうしようどうやって入ろう……！」

納期なのに何やってるの私！ と、細い体でジタバタする山田さん。

わたしを待ってる間も仕事をするつもりで、ノートパソコンも持ち出したっぽいです。

とりあえず仕事がとても好きみたい。でも何だろう……わたし、何だか、もやもやとする……。

「山田さん……今日、ご飯は食べた？」

「え？ 今はそんなことより、とにかく中に入らなくちゃ！」

口調ほどイライラはしてないんだけど、とにかく焦ってるみたいです。
きっと山田さん、本当は優しい人だと思う。でも今は仕事のことばかり考えてて、この細い体じゃ多分、きちんとご飯も食べてなさそう。
ううん……。
わたし、どうやって社内あいでいを見つけてあげればいいのかもわからないし、それ以上にもやもやするのが……。

だめです、今はまとめられない。
お隣で山田さんが、ついにぐすと涙ぐみ始めちゃった。
わたしもそろそろ、何かできることを始めないとです。
「ああもう、早く ID を探さなくちゃ、早く中に入らなきゃ……！」
言ってる通り、まずは、中に入らなきゃいけないんだよね。
山田さんの最初の計画では、誰かが通れば、扉が開くはずだったから……。
「この中にいる人の誰かが、外に出ればいいのか？」
神妙に頷く山田さんは、それしか方法はないって思ってるみたい。
「中にいる人に電話して、開けてもらうことは無理なの？」
機械音痴のわたしでも、それくらいは思いつくんだけど、山田さんはとてつもない涙目でわたしを見返してきました。
「——そうよ！　そうじゃない！」
え……まさか本当に、思いついてなかったの……？
「ちょっと待ってね、今電話するから……って、ああもう、どうしてつながらないの!？」
あたふたと山田さんは、色々な人に電話をかけます。
でもみんな、電波の届かない位置にいるって答えられるみたいでした。

「ってそうだ、うちのチーム、今追い込みだから完全外界遮断モードじゃない……！
代表受付はもう閉まっているし、他の部署の連絡先なんて知らないし、私……！」
要するに、みんなで仕事が終わるまで、自分のスマホの電源を切ってるんだって。
そんなことって……あるのかな？
でもきっと、うちの事務所みたいに、独自の法律が山田さんの所にもあるんだろうな。
「そうだった、だから私、会社から出て鷹野さんに電話しなきゃって思ったのよ、ああもうそれが、こんなことになるなんて！」
要するに、社内でスマホの電源を入れたくなかったみたいです。
それ、どういう結果になるか、普通ならすぐわかると思うんだけど……。

まあでも。
電波が届かなくても、中にいる人の電話番号さえあるなら、わたしにもできることがあるはずでした。
わたしはそっと、ポケットに入れてた細長い PHS を取り出します。

この PHS には、電波も電池も関係ありません。
わたしの意思さえあればいい。何かを人に伝えたい、その思いさえあるのなら。
初めてのバイトを始めて以降、何度もお世話になった相手に、わたしは気重ながらも
「^{でんわ}伝話」をかけます……。

* * *

スマホの地図のゲーム、悪魔探しが、わたしは大好きです。
悪魔なんてどこにでもいます。迷える人間を誘おうと、いつもその隙を狙ってます。
でもスマホの方は、とても可愛い悪魔さん達。人間を騙すどころか、わたしの手足に
なって、スマホの中でだけどがんばってくれます。

PHS の方は、これはもう、一言ではいえない。
とても長いお付き合いだけど、たまに大分、疲れちゃいます。
でも、魔法も何も使えないわたしには必要な存在。
疲れすぎないようにと、前にいた所では身を守るおまじないを教えてもらったけど、
そうでもしないと、悪魔はわたしを喰べつくしてしまいます。

契約書代わりに作ってもらった番号を、契約媒介になる PHS に打ち込むと、これまで
契約した悪魔とわたしは話すことができ――

「あー、ネコハちゃん！ 久しぶり、元気してた？」

「うん。おねえちゃんも、元気そうだね」

伝話の先では、わたしにバイトを紹介してくれた親戚のおねえちゃんの、いつも優しい無邪気な声……とは、少々事情が違いまして。

「そうかしら？ わざわざ『私』に伝話してくるってことは、厄介事を承知の上で、でしょう？」

くすり、とおねえちゃんに棲むキレイな悪魔が、笑った顔が見えた気がしました。

悪魔とのお話して大事なことは、わたし自身が、揺らがないことに尽きます。
いつもとは雰囲気が違うおねえちゃんの声に、わざわざ伝話する危なさを感じながらも、わたしは淡々と相談します。

「あのね、おねえちゃん。電波の届かない人に伝話をかけたいの、どうしたらいいかな？」

異世界にいる父さんと母さんの PHS に、おねえちゃんはわたしのメールを送ることができます。

わたしの PHS からでは、遠過ぎて届かないの。

いつもはわたしのスマホからおねえちゃんのスマホへ、そして二人の PHS へ。

それならその逆……PHS からスマホにも、連絡できるはずだよね。

「へええ。面白いこと思いつくのね、ネコハちゃんは」

わたしの PHS は、スマホの電話とは違って、電源が入ってなくても「伝話」できます。ただ多分、その分、問題も沢山あって……。

「でもそれ、相手のスマホ、伝波対応かしら？ 日本でそんなスマホが出回った話、『私』はきいたことがないなあ」

そうだと思う。だってわたし自身のスマホが、PHS とはつながらないもの。

だからおねえちゃんにやり方をきかないと、スマホと PHS をつなげる方法がわかりません。

急に古そうな PHS で会話を始めたわたしを、山田さんはおろおろと隣で見ながら、誰か通らないか扉の方にも気を配ってます。

PHS の向こう、おねえちゃん不思議そうに、わたしに笑いかけます。

「どうして、^{サキ}私にきかないの？ わざわざ『^{サクラ}私』に伝話するなんて」

「だって、あんまり PHS を使うと、おねえちゃん……心配するもの」

わたしにとって PHS は、この遠い場所では、父さんにも母さんにも友達にもつながらない。つまり、悪魔との交信道具にしかありません。

そして使う以上、何かの悪魔の力は借りる。本当はスマホをもらった時に、PHS はもういらないよって、取り上げられそうになったんだよね。

「あらら～。そこまでみんなに心配かけても、ネコハちゃんは今も、契約した悪魔達を捨てたくないのね？」

「……………」

「悪魔なんて、人間を利用することしか考えてないのに。せっかくネコハちゃんは優位な契約を交わしてるんだから、『私』を含めて、遠慮なくはっきりと切ればいいのよ？」

さばさばと言うおねえちゃんは、本当ならもうとっくに、消えていたはずの「魔」……消すべきだった悪魔なんだと、兄さん辺りは、きっと怒りそうです。

悪魔は人間に手を貸します。きちんとした儀式のもと、契約の媒介と代償を定めて。

でも、契約とかそういうのは——正直、形だけの話でしかなくて。

悪魔からは、わたしはただの寄生相手だったとしても……わたしには、それはみんな、助け合う約束をした仲間だから。

そう言うのと、いつも難しい顔をするおねえちゃんが、改めて尋ねてきます。

「それじゃ、そんなにまでも、悪魔の力が必要な案件に関わってるの？」

「……どうだろう。他の方法もあると思うけど、急いではいるかな」

それだけえ？ と、おねえちゃんは呆れたようにため息をつきます。

「まったくうー。ルイちゃん達がきいたら嘆くぞう？」

おねえちゃんは母さんの大事な親戚です。だからわたしを含めて、母さんを心配してくれています。

「でも、お仕事だし。頑張らないと」

うん。ここで、悪魔と取引するのと、失敗して所長にたたまれるのと、わたしには大きな違いはないと思うな。

どんな仕事も、仕事は全力で取り組むべきもの。わたしは今まで、そう習ってきたしね。

「ノーっ！ 命を懸けるならそれにふさわしい仕事にしようよ！ その仕事は本当に、『私』を使うほどの意味があるの？」

……………。

隣で涙ぐむ山田さんの、失せ物探し。

失くしたものは、山田さんが会社に入るための……—

わたしが PHS に向かって、おねえちゃんにこたえを言おうと思った瞬間……。

ふっと、山田さんが割って入って、話しかけてきました。

「ごめんね、榎さん。こんなに遅い時間になっちゃって、きっと、ご両親が心配してるんでしょう」

「—え？」

「社内にあることはわかってるんだし、このまま一人で、誰かが通るのを待って、やっぱり自分で探すわ。榎さんみたいな若い女の子を、遅くまで引き止めるなんて……私、何を考えてるのかしら……」

難しい顔をして伝話してるわたしを、疲れ切った顔の山田さんは、不意に心配になったみたいです。

やっぱりこの人、とても、優しい。

今でも不安で仕方がないって、山田さんの辛さはずんずん伝わってくるのに、自分よりわたしのことを心配してくれています。

「でも……大事なもの、なんだよね？」

「そうだけど……要するに、クビになったって思うしかないのよ。再発行の話もしてくれないなんて、もう会社に入るなってことだし……」

うなだれる山田さんには、さっきまでの勢い、わたしの言葉を覆いつくすようなエネルギーはなくなりつつあるようでした。

「そんなの……私だけの問題で、くだらないことだもの……」

本当に山田さんは顔色が悪くて、今にも倒れてしまいそうです。

きっと今日は、火事場の馬鹿力でここまで来たけど、元々すごく体調が悪かったんだと思います。

こんな状態で一人で探し物をするなんて、そもそも難しいと思うし……。

「くだらなくなんか、ないよ」

わたしは山田さんに—そして PHS のおねえちゃんにも、同時にわたしのこたえを伝えます。

「大事なことだよ……山田さんは、ここにいたいんだから。そういう場所って、そんな
にないと思うよ」

失くしそうなのは、山田さん自身の居場所。

それが良い所かどうか、わたしにはわからないけど……。

「失くさないですむよう、ぎりぎりまで——まだ、できることはあると思うよ」

山田さんは、ここに入りたいと思ってて、この建物の中からも、山田さんを嫌うよう
な気配は感じ取れない。

わたしに観えてないだけかもしれないけど、山田さんがこれだけ望むなら、がんばる
価値はあるんだと思います。

「……………」

気合いを入れると、無表情に言うくせのあるわたしに、山田さんもおねえちゃんも黙
り込んじゃいました。

しばらくしてから、まずおねえちゃんが、何かを諦めたように話し始めました。

「ああもう……小さい、小さな仕事だわ……」

「……………」

「それでも、カレン直々の仕事って、小さかろうとヒトの生き死に関わる案件なのよ
ねー……ほんと、食えない女」

鷹野花憐。またはフィオナ・鷹野が所長の名前です。

看護師が本職の所長は、要するに、ヒトの命に触れる仕事がしたいみたいです。

「……いいわ。『私』が見つないであげるから、このまま電話番号を言いなさい」

「——え？」

「ネコハから直接かけられるようにはしてあげない。カレンには今回の件、ネコハの給料
から差し引いて、私にも振り込むように言っておいて」

何だかんだの、悪魔のおねえちゃんだけど。でも、わたしにあんまり PHS を使わせた
くないことは、普段のおねえちゃんと同じようです。

「わかった。ありがとう、おねえちゃん」

「『私』には何の得もないから、それは今回、さぼった奴から取り立てることにするわ。今
度会ったら、そう言ってやって」

元々わたしが、この件を引き受けた理由……探偵部門の不在者に、おねえちゃんは標
的をすり替えたようでした。

……大丈夫かな、馨おにいちゃんは。

会社にいる人の電話番号を尋ねると、山田さんは慌ててスマホを見始めました。

「え、えっと、どれだっけ、あれ!？」

さっきかけてた番号から適当に、多分会社の人！　　この番号を見せてくれて、わたし
はおねえちゃんにそのまま番号を伝えます。

その後、おねえちゃんから OK が出たので、山田さんに PHS を渡します。
「え、え？ 何、どういうこと？」
状況がよくわかってないらしい山田さんには、悪魔の力を借りた伝話。なんて、言うわけにもいかないし……。
「会社の人。つながったはずだから、お話しして」
「え、え？ あ、ありがとう、うん」
有無を言わず、PHS を押し付けられた山田さんは、落ち着いて深呼吸をしながら、伝話に出ようとして……—

「って、え、あああ、か、課長ー!？」

そのまま過呼吸になって、真っ青な顔が真っ赤に変色しちゃいました。
うなだれてた背筋をぎんとのぼして、山田さんは再び勢い良く弁明を始めます。
「あのですね、これはですね、PHS 独特の機能と申しますか、いえもう電波遮断途中に本当に申し訳ありませんがどうしてもお話ししたいことがあります!! いえそのまず私を会社に入れていただかないことにはどうにもこうにも……!!」
どうしてつながったのか、わけがわかってないわりには、山田さんのその場しのぎぶりは見事だと思うけど……。

よく、うっかりミスをするという山田さんの、これも日常茶飯事ってことなのかなあ。
一番まずい相手の番号を、このタイミングでわたしに言うのは、さすがにどうかと思いました。
いつもひどく怒られていて、山田さんに会社に戻るなといった張本人という、くだんの課長さんに……。

* * *

わたしの PHS は、悪魔仕様です。
わたしは一応、悪魔使いです。
悪魔というのは、父さんいわく、ヒトの心にあるものらしいです。
よくわからないけど、何でもいいけど、そういうわけでわたしは PHS を手放しても、悪魔を通じて PHS に伝わる内容が聞こえます。

「課長、とにかく中に入れてください! いくら私がうっかり者だからって、こんなにいきなり追い出すなんてあんまりです!」
人目のあるビル街で必死に叫ぶ山田さんに、帰り道を行く人達がちらちら振り返ります。

でも山田さんは気にしてません。むしろ PHS の課長さんが、少しうろたえた重い声で、人聞きの悪いことを言うな！ と焦ってました。

課長さんは、いいから今日は帰れ、山田！ と怒ってて、対する山田さんは、嫌です！ とひたすら訴えます。

「ID をなくしたくらいでクビなんてそんな！ もうミスしません、今度は寝ないでデータチェックしますから、今回の仕事だけでもせめて納期までいさせてください！」

誰がそんなことを言った、お前やっばり人の話きいとらんな！ と……。

何だか課長さんが、呆れつつ、大きなため息をついてるもようです。

とりあえず、わたしと山田さんのお話してみたいに、課長さんと山田さんがあんまり上手く話しをできてないのは同じみたいです。

このままだと中に入れてもらえそうにないし、思うところがあったわたしは、ちょっと間に入ることにしてみました。

PHS をさらって、山田さんが「!？」と目を見開くのもかまわず、強引にわたしは伝話をかわります。

「こんばんは。ちょっと、お話ししてもいいですか？」

「——!？ 誰、いや、どちらさまで、子供……!？」

咄嗟のことで、課長さんもびっくりしてるらしく、わたしは深々とおじぎをします。

あ、実際には当然、課長さんは目の前にはいないんだけど……。

「椀猫羽です。山田さんがもう会社に入れなくてきいて、それだと困るので、わたしも一緒をお願いをしに来ました」

「は……？ 君は、山田くんとはどういう……」

当然の質問をしてきた課長さんに、わたしは、待ってましたとばかりに——今、すごく言いたかった、思いのたけを告げます。

「わたし——探偵です。課長さん……あなたは何か、山田さんに、隠しごとをさせてませんか？」

事務所では、せっかくわたしも、探偵部門の下っ端だから……。

一度、言ってみたかったんです。

課長さんが山田さんに、何か言えてないことがあるのは、PHS の声の気配でわかったしね。

思えばわたし、バイトを始めて、はっきり探偵と名乗ったのはこれが初めてでした。

「な、何を言い出すんだ、君は……！」

あからさまに、課長さんが動揺してます。うん、やっばり、何かおかしいよね。

そして……ちょっとだけ、楽しい……。

意外に本当に、役に立つんだなあ、わたしの直観.....。

「おかしなことを言っていないで、早く二人とも帰りなさい！ 山田くんには改めてこちらから連絡するから」

「あ、でも.....」

「これ以上何が言いたいのかね。山田くんに何を言われたか知らないが、こちらも忙しいんだ、探偵ごっこはよそでしてくれないか」

あー、うん.....やっぱり、あんまり役に立ってないかも、これ。

何かおかしなのは、わかるんだけど.....でも、何かおかしいんだろう.....。

兄さんならもうちょっと、具体的にわかるんじゃないかなあ。無理かなあ。

わたしがじっと黙りつつも、伝話を切ろうとしないので、課長さんはもう少し強い口調になりました。

「今は山田くんのことに関わっている余裕はないんだ。ちょうどいいから、君が山田くんの知り合いなら、とにかく山田くんをここから離れさせてくれないか」

.....ああ、でも.....。

それでも、向こうから伝話を切らないんだね、この課長さんは——

伝話は、電話とは色々違います。

電池もいらないし、電源が入ってなくてもいい。

ただ、伝えたい思いがあれば、それを少しだけ道具や魔法で助けてやればいいんです。

「.....課長さん。山田さんを心配してるなら、そう言ってあげてください」

「——!？」

この伝話が切られないのは、理由があります。

さっきも言ったけど、課長さんはまだ、山田さんに伝え切れてない思いがあるんです。「課長さんが伝えないと、伝話が終わりません。山田さんはずっと、ここでドアが開くのを待ってることになります」

本当は伝えたい思いがあって、しかもそれが急を要するなら、一度つながった伝話は簡単には切れません。

課長さんは、山田さんに切ってもらいたがってる。山田さんに自分で、何かに気づいてほしがってます。

だから強い口調で、怒ってるように言うんだなって。それだけは、わたしにもわかったから。

息をのんだ課長さんが、少しの間、じーっと黙りました。

「.....」

その後、とても小さい、ぼやくような声が聞こえました。

本当にあいつは、人の話をきかない.....。

そう言いながら、大きな大きなため息をついた、課長さんの渋い声なのでした。

それから先は、少しだけ、意外な展開になりました。

「えっ……か、課長お!?!」

「タクシーを呼んだから、家まで送ろう。今日はもう、帰るんだ、山田」

伝話は結局切れないまま、ちょっと待ってると課長さんが言ってくれたので、扉を開けてくれるのかなと、わたし達はそわそわと待ってたんだけど……。

「お前、一度でいいから、もうちょっと自分の顔見てみる。一人じゃ絶対帰らないだろうから、私も一緒に行く」

「そんな……でも、仕事が……！」

課長さんもそのまま帰るらしく、その準備をする間、待たされてたわたし達でした。

山田さんのお父さんくらいの年の課長さんは、痩せ型だけど穏やかそうな人で、いつも山田さんに怒ってるなんて信じられません。

「チーム全員に了承はとってある。むしろ、行けと怒られてしまった。一度ゆっくり、お前にもわかるように、じっくりと指導してこいとな」

「え……はぁ……？」

「死相が出てるぞ、山田。お前のやる気は大したものだが、体調管理も大事な仕事だということくらい、大人なら自分で考えなさい」

あ——……そういうことだったんだ。

そういえばここについてすぐ、何かもやもやしてたわたしも、今すごく納得がいったのでした。

課長さんはわたしのことまで、事務所に送ってくれと、タクシーに乗せてくれました。

三人で乗って、わたしが助手席、課長さんと山田さんが後ろでお話ししています。

「お前の社内 ID は昼間、シュレッダーの中から発見された。お前、本当に全然わかってなかったんだな？」

「……すみません……ちょっと、気が緩んでました……」

そういうことじゃない。と、課長さんはまた、大きなため息をつきます。

「再発行の手続きはもう済ませてある。明日にもできあがるだろうが、お前は週明けまで休暇をとれ。その間にゆっくり、どうして休まされるのか理由を考えろ」

「……………」

「言っておくが、チーム全員、お前の能力もやる気も認めている。それでもここ最近、判断力の低下と周りを見る余裕の無さが目立ち過ぎる」

そう言えば今日、山田さんは何というか、何事も効率が悪かった気はします。

わたしは初めて会う人だから、元々そんな人なのかなと思ってたけど。
山田さんは後ろの席で、両手を握りしめて、大粒の涙を両目に浮かべています。

.....うん。その気持ちは、ちょっとだけ、わかる気がする。
わたしもきっと、自分の納得いくように仕事ができないと、山田さんと同じように悔しいだろうから。

多分だけど、山田さんには、怒れば怒るほど逆効果だったんだね。
怒られた分、その倍くらいがんばっちゃうから、そうなるとどんどん疲れちゃうよね。
疲れちゃうと、余計にもっと、色んなうっかりもひどくなりそうだしね。

かなり難しい顔で、ずっと黙り込んでる山田さんに、課長さんはぼんぼんと軽く肩を叩きました。

「まあ、そう焦るな。お前はまだ若いんだから」

.....そこで、山田さんの我慢は、とうとう決壊してしまいました。

うあああああと、山田さんが大泣きを始め、ちょうど事務所の近くについた所でタクシーも停まります。

「だって課長.....!! 課長もみんなもこんなにいい人達ばかりだから、私だけでできてないの駄目だと思って、私はダメな奴だから人の三倍は努力しなきゃいけないだって.....!!」

まくしたてる山田さんに、やれやれと課長さんは、とても優しい顔で苦笑いました。

「だから、焦るな。おれにはそれしか言えないが.....」

送ってもらったお礼を言って、タクシーを降りたわたしが見た二人のお話しはそこまででした。

課長さんは最後に、わたしにそっと、微笑みかけてくれたようでした。

事務所、もとい廃ビルの二階に上がってから、わたしは大切なことに気が付きました。
「あっちゃあ.....しまった.....家の方に送ってもらえば良かった.....」

普通のバイトさんは、タイムカードというのを押すらしいけど、この廃ビルにそんなお洒落なものはないです。

失せ物探し、一応終わったし、事務所に戻る必要はなかったよね.....。

夜八時ともなれば、外はもう真っ暗で、この辺は特に都会にしては裏通りで、街灯も少ないんです。

夜には出歩くな、危ないことはするなと、わたしはずっと兄さんから言われてるから。

兄さんから見ると、わたしは危なっかしいらしくて、兄さんこそってわたしはいつも言いたくなるんだけど。

でも、今日みたいなことなら、ちょっと楽しかった。
最初は気が重かったし、わたしはあんまり、お仕事を楽しいって思ったことはないんだけど.....。

所長もいないし、帰らなきゃと思っていたら、不意にぎいっと二階の扉が開きました。
「——ああ？　こんな時間まで何やってんだ、猫羽」

黒に近い銀髪で、わたしの父さんと同じように、前髪の一部だけが黒い親戚のおにいちゃん。

もとい、わたしが外回りに出る元凶になった、さぼりっぱなしの探偵さんです。

いつもかっこいいジャケットを羽織るおにいちゃんは、有無を言わず、大きなバイクでわたしを下宿まで送ってくれました。

「あんまり流^る惟^い達^だに心配かけんな。俺が殺されるから」

うん、おにいちゃんもね。もう何度も死にかけてるもんね。

とりあえずは、おねえちゃんの悪魔によろしくね——.....。

* * *

わたし、お肉が大好きです。

その次に甘いものが好きです。

お肉は高いから、わたしのご飯は大体いつも、沢山入った菓子パンの一つで済ませます。

「あーもー！　檢さん、またそんな偏食してー！」

屋上で一人、空を見ながら食べるのが好きです。

それなのに最近、やたらにまとわりついてくる同級生がいます。

「お金足りないなら、かーさんに文句言うから言ってよね!?　檢さんみたいな年頃の女の子は、もっとしっかり食べなきゃ育たないよ、色々！」

うろううん.....やっぱり、この人、ちょっと苦手だなあ.....。

わたしが小柄で、体型も貧相なこと、いくら玖堂さんの息子でも、そんなにはっきり思っほしくないなあ.....。

というわけで、わたしの下宿生活を預かる玖堂さんの子供の一人、いつも元気な鳥頭のサトシは、こうして妙にわたしにかまってきます。

わたしが難しい顔で黙ってパンを食べてると、サトシの後ろから、こっちも同級生のヒトが、サトシよりずっと怖い顔でわたしを睨みました。

「サトシの言う通りです、猫羽。偏食はいけません、お金が足りないなら自炊するなり要求するなり手を打ってください」

何処から見ても、全く普通の人間のサトシに対して、全然普通じゃない同級生のヒト。

このヒトとサトシが、高校ではよく話しかけてきます。

「ああ、橘さん、そんなに怒らないであげてよ。楡さんも高校に慣れるの大変なんだよ、何かあったらおれが頑張るから、何でも言ってよ！」

何やら、サトシの関心はそのヒトにうつったので、わたしはちょっとだけほっとします。

サトシは橘さんと呼んでるけど、わたしはなぎって呼びます。水に葵と書いて、水葵^{なぎ}って読むんだって。日本語って不思議だね、どうなってるんだろう。

わたし、年上の人好きだけど、同年代は実は苦手です。

なのでこうして、ほとんど返事もせずにいるようにしてたら、サトシみたいな物好き以外、普段は話しかけられないんだけど.....。

「楡さんと橘さん、どっちも高校からの編入だけど、ほんとと変わってるよなー。おれは二人共、何かミステリアスでいいなと思ってるけど！」

一匹オオカミと呼ばれるわたしと、人当たりがきつくて、いつも怒ってるような水葵。青っぽく見える不思議な銀色の長い髪で、道行く人が思わず振り返るくらい、キレイな顔をしています。

わたしとの関係は、水葵は母さんの召喚魔ってところかな。それでいて、兄さんの協力者というか、わたしと兄さんの見張り役というか.....。

「私の役目は、猫羽に学業をまっとうさせることです。あまり猫羽を甘やかさないでください、サトシ」

わかるのは、母さんからわたし達のことを頼まれてる水葵は、とても厳しくて口うるさいこと。それでもわたしは、水葵くらいしか知り合いがいません。

この町には、親戚のおにいちゃん、おねえちゃんはいるけど、わたしの元々の友達や知り合いは誰もいません。

多分水葵だけです。本当は兄さんを助けてくれるはずなのに、兄さんからわたしの高校生活を助けてくれと頼まれたみたいで、だからわたし、水葵には頭が上がらないんだけど.....。

「.....わたし、優しくしてもらえたほうが、いいな」

水葵に対して答えたはずが、何でか後ろで、サトシがガッツポーズをとっちゃいました。

「うわ、楡さんから返事してもらえた！ 今日のおれ、超らっきー！」

いつも大体、見つめるか頷くか、首を振るしかしないわたしです。

どうせ一年たったら、元の所に帰るんだし、ここでそんなに誰かと仲良くする必要はないと思うし……。

「猫羽。都合のいい時だけサトシを利用しないでください。調子に乗って猫羽に付き纏われるようになったら困ります」

水葵の言う通り、サトシみたいな普通の人が、わたしに関わるのは少し危ないこともあります。

事務所みたいに、人外なヒト達ばかりの所なら、わたしも普通に話すんだけど……。

そんなわけで、わたしにとっては、高校はただの仮眠スペースなのでした。

それじゃ勿体ないって、おねえちゃんには何度か言われたんだけどね。

「それにしても楡さん、やっぱりツイインテール、似合うよなー！ 橘さんのセンス、グッジョブ過ぎだろ！」

「私を懐柔しようとしても無駄です、サトシ。そもそも猫羽のリボン私の主が選んだもので、髪型の指南もそちらによるものです」

「……………」

ちょっと変わってるらしい女子の制服——おへそが出る詰襟のジャケットと、大きなベルトのふんわりスカートに合わせて、明るいミカン色のリボンをくれたのは、兄さんと水葵を支える死神さんです。

わたしの紫苑の髪を心配して、わざわざ手配してくれたの。人間にはない髪の色だから、このリボンをつけたら傍からは黒髪に見えるからねって、親切な一品なんだ。

「あるじかあ。橘さんってたまに、凄いこと言うよねー」

水葵は一見、とても美人で、すらっとしたモデルさんみたいなヒトだけど、水葵も実は生粋の悪魔なんです。兄さんと一緒に死神さんの力を分けられつつ、母さんが召喚してる悪魔っていう、何だかややこしい関係性だけど。

母さんも死神さんも、わたしや兄さんを見守りたいという優しい思いは一緒で、だからわざわざ、わたしの高校に水葵を派遣してきたわけです。

高校生活。わたしは全然楽しくなくて、これもお仕事だと思ってます。

早く終わらせて、元の所に帰りたいけど、今はまだまだ始まったばかりです。

昨日出会った山田さんは、今頃、どうしてるかな。

ちゃんと休んでるかな。自分を削るほどに、お仕事が大好きだなんて、わたしにはとても不思議な人だったなあ。

お仕事のために自分を削るヒトは、わりと沢山見てきたんだけど。

好きでやってるヒトって、今まであんまりいなかったから。

所長みたいに野望とか、私腹を肥やすためならわかるんだけど……まだまだわたしも、知らない世界がいっぱいあるみたいです。

「とりあえず楡さん、今日の放課後、スイーツ天国行こうぜ！　もちろんおれの奢りだし！　その代わりデートって感じだし！」

「サトシ、それはNGです。正直なところは評価しますが、デートはお断りです」

何事もはっきりと言う水葵の前で、わたしは黙って何も言いません。

「えー！　うそうそ、ちゃんと橘さんも一緒だからさー！　それもダメなら妹も呼ぶから、遅ればせの歓迎会でさー！」

「私は嫌です。サトシと出かける理由が私にはありません」

本当に水葵、はっきり言うなあ。

それはともかく、わたしはもう一度、黙って首を振ります。

学校が終われば、今日はすぐに、昨日の件を所長に報告しにいかないとしたし。バイトを休むなら、もう少し前から言っておかないとしたし。

こういういきなりのお誘いに、わたしが頷いたことは、ほとんどないかもしれません。

「ああもう、楡さんってつれない……でもそんなところがまたときめきハート、ベリーキュート……」

サトシは本当に変な人です。でもすごい明るくて、この前向きさは、兄さんとかには見習ってほしいかも。

「残念ですが、猫羽には既に仕えるとした相手がいます。それ以前に、猫羽の兄がアナタの存在を許しません、サトシ」

なんか水葵、大真面目に、凄いこと言ってるなあ。

仕える相手かあ。そうできたらいいんだけど、でもそれもここにいたら、夢のまた夢ってお話だなあ――

水葵に悪気がないのは、わたしはわかっています。

水葵の手助けの代償は母さんが支払ってる。水葵と兄さんはあんまり仲が良くないけど、どっちも死神さんにお世話になってる。

わたしは兄さんにそばにいてほしいけど……それは兄さんに負担が大きいから。

兄さん、ごめんなさい。

わたしの安全のために、最大限のことをしてくれているのに、わたしは危ないバイトを始めちゃいました。

とりあえず今のところは、所長お手製の門番用大鎌は使わずに済んでいます。

できればこれからも、使わないで済んだらいいと思っています……。

4月下旬　了

★5月中旬：転地学習タロット事件

こんにちは。ウツギ・ネコハです。

わたしのバイト先の所長、天使みたいな金髪の魔女が、またもや不吉な笑顔を浮かべ始めました。

「くすくすくす……あらあら、可哀想ですねえ、猫羽ちゃんってば」

「え……フィオナ、どうしたの……？」

「猫羽ちゃんの今度の転地学習、占って見たんですけどね？ どう見てもこれは、事件発生の暗示ですねえ」

え……どうして所長、そんなこと占ってるの？

転地学習って、高校の泊まりがけの行事のこと？ あんなに平和な人達の中で事件なんて、わたし、絶対に嫌だからね？

「それならそんな、不毛なイベントは欠席して、仕事に精を出しませんか？」

え……ひょっとして所長、わたしにバイトを休ませたくないだけじゃないかな？

でもわたしは、せっかくお友達もできて、初めてのお泊まりをすごく楽しみにしてたんだから……。

「……事件なんて、絶対に、わたしが起こさせないもん」

悪魔使い探偵見習いの、その名にかけて。まだ意味がさっぱりわからない、転地学習のしおりを握りしめながら。

そうしてわたしは、探偵にあるまじき、事件抹消の反則を誓います——

* * *

仮眠スペースなはずの高校で、優しい女の子のお友達が、一気に二人できました。

そう言ったら、わたしにバイトを紹介してくれた親戚——事務所で営業を担当してる咲姫おねえちゃんが、すごく喜んでくれたのでした。

「良かった、猫羽ちゃん！ どうしてそんな心境の変化があったの!？」

高校に一年しかいないわたしは、あんまりお友達を作る気はなくて……一匹オオカミって言われてたくらいだから、咲姫おねえちゃんは相当不思議そうです。

瓦礫^{がれき}部屋の事務所の二階で、向かい合ってブロック塀に座るわたしとおねえちゃんに、三階から下りてきた馨^{かおる}おにいちゃんが、呆れたように笑いました。

「誰が仕組んだんだ、誰が。穂波達を猫羽に引き合わせたの、どう考えてもてめえじゃねーか」

さすがは探偵先輩のおにいちゃんです。おねえちゃんが、もー！ と、凶星をさされたみたいに、怒って立ち上がります。

事の発端は、わたしがちょっと、高校の屋上で倒れちゃったことで……その時に助けくれたのが、お友達になったホナミとユイなんだけど。

二人は元々、わたしを知ってたそうです。

ホナミが馨おにいちゃんの従妹で、咲姫おねえちゃんの後輩でもあって、わたしと仲良くなりたいと思っててくれてたんだって。

じゃあ、わたしは屋上が好きだから、そこで話しかけてみるといいよって二人に助言したのが、咲姫おねえちゃんみたいです。

それでわたしが倒れた時に近くにいて、すぐに助けてくれたんです。

「猫羽ちゃんの人見知りぶりは知ってるでしょ!? ここは思い切り、褒めてあげるところなんだから！」

わたしとおねえちゃんの間にあるブロック塀は、よろず相談所のお客さんには応接セットの机に見える場所です。

そこに背中向きに腰かけた馨おにいちゃんが、咲姫おねえちゃんに意地悪そうに笑いかけます。

「どうだかなー。危なっかしい兄貴が大事過ぎて、他の奴が目に入らないだけ。に、俺には見えるけどねエ」

「それで済んだら、猫羽ちゃんに悪魔は必要ないでしょ！ できればもう、悪魔は全部祓ってやってくれて流^る惟^いちゃんに頼まれたこと、忘れちゃったの!?!」

……どうして二人共、わたしにお友達ができたことだけで、よくわからないケンカをしてるんだろう。

こういう言い合い自体は、二人にはいつものことなんだけど。

わたしは悪魔使いです。父さんがくれた PHS を媒介に、それで話せる悪魔さんと契約しています。

魂とか血とか、支払う代償が大きいほど、すごい助けをもらえるんだけど、わたしはわからないことを教えてもらうとか、簡単な相談に留めてます。向こうが独断で動かないように、まじないも教えてもらってます。

それでも悪魔さんは仲間だから、契約は切りたくないというわたしを、おねえちゃんも母さんも常々心配してるわけでした。

それを一番うるさく言われてるのは、馨おにいちゃん……母さんにとっては、実のお兄さんも同然のヒトのはずなんだけど。

「猫羽ちゃんは悪魔以外に、頼れる相手を見つけなきゃだよ！　せっかく友達ができただから、いい機会じゃない！」

「同年代のダチができたって、猫羽の中身は大して変わってねえよ。悪魔と同じく、自分の魂を差し出す相手が少し増えた、それだけの話だろ」

大丈夫かな、馨おにいちゃん。あんまり普通の咲姫おねえちゃんをいじめると、悪魔のおねえちゃんにいじめ返されちゃうと思うな。そうしたら今度は悪魔のおにいちゃんが出るかな？

うぐぐ、と言いつ返しえない様子の咲姫おねえちゃん、涙目になって馨おにいちゃんを睨んでるしなあ。

壁の割れ目から入る隙間風で、咲姫おねえちゃんのまっすぐな長い髪が、ほんの少しだけふわりと揺れます。

薄暗い事務所の中でも、淡く光る桜色の髪。人間じゃないおねえちゃんは、人間にはない青空色の澄んだ眼差しで、わたしをもう一度見つめてきました。

「……それで、猫羽ちゃん。そろそろ PHS は、もう卒業しちゃえないかな？」

ずっと前から、何度も言われる、咲姫おねえちゃんの大きな心配。

わたしもさすがに、申し訳ないんだけど……いつもこの言葉には、黙って俯くことしかできません。

悪魔と契約してるのは、誰に強制されたわけでもなく、わたし自身の意思です。

だからそれは、わたしがやめようと思わないと、誰もやめさせることはできないんだ。

わたしと同じで、悪魔と長く契約してる馨おにいちゃんは、それを嫌と言うほど知ってるんだよね。

「別に今すぐ、命に関わるわけじゃねーし。下手したら寿命が縮む、悪魔に利用される、その辺を気を付ければいって話だろ」

そもそもおにいちゃんは、咲姫おねえちゃんの中の悪魔とも、もう長い付き合いになります。

悪魔さんとは、関わりを絶つよりも、うまく付き合う方がいい。

おにいちゃんがそう感じてること、わたしもわかるから。わたしも、おねえちゃんの中の悪魔さんには、消えてほしくないから……何となくずっと、悪魔さんを手放せないできてます。

咲姫おねえちゃんは、長い長い溜息をついていました。

「.....でも、いつかは悪魔を卒業しなきゃ駄目だよ？ 猫羽ちゃん」

わたしはこくりと、おねえちゃんや母さんをこれ以上心配させないために、黙って小さく頷きます。

とりあえず、悪魔の話はさておき、差し迫った相談にわたしは移りました。

「あのね、おにいちゃん、おねえちゃん。フィオナが今度のわたしの転地学習、行かない方がいいって言うんだけど.....」

「姉貴から聞いてるよ。正位置の『死神』が出たって話だろ、行き先の占いで」

「そうそう、それ！ いかにも不吉だよな、何か対策を立てていかないかね？」

所長は色んな占いができるんだけど、その中の一つに、タロットカード占いがあります。

それで言うと、出てきたカードの暗示は意味深なんだって。正位置であれ逆位置であれ、物事の終わりや破滅とか、そこからのやり直しとか、色々大変みたいなんです。

わたしが転地学習でバイトをお休みする日は、馨おにいちゃんは絶対出勤、咲姫おねえちゃんも仕事があるみたいです。

なので二人して、ううんと唸ってしまいました。

「悩んでも仕方ねえし、ついていくのが一番早いんだけどな。その日、依頼が入っちゃってるし、すっばかしたら姉貴に殺されるな」

「私達がどうしても行けない日なことも含めて、本当、嫌な感じ！」

わたしは無理をしてほしくないし、ついてこなくていいよって、申し訳なさそうな二人に何度も言います。

タロットカードの意味がさっぱりわからなくて、どうやって調べたらいいの？ ときいたら、馨おにいちゃんがわたしに向いて座り直してまで、うむうむと頷いてきました。「それは俺も、前から気になってたな。猫羽は知識のなさを悪魔と直観で補ってるけど、それもそろそろ限界じゃねえか？」

わたしは元々、異世界に住んでたので、普通のことが全然わかりません。

それでも結構、勉強してた方なんだけど.....探偵に必要な量としては、悲しいくらいに足りてないみたいです。

「せめてスマホの検索機能くらい覚えろ、使え。せっかく持ってるんだから」

「.....それ、私も大分、教えたんだよ。でもねえ、人には向き不向きがあるって、あれほど思い知ったことはなかったなあ」

何だそりゃ。と不満げな馨おにいちゃんが、わたしにスマホを出すように言ってきました。

検索機能.....知らない言葉とか名前を調べるのにはそれがいいって、咲姫おねえちゃんも前に教えてくれたんだけど.....。

まず、知らない言葉なら、わたしは平仮名でしか入力できません。
読めない漢字とか、普通に打ったら出てこない字とか、どうやって変換したらいいかもさっぱりわかりません。わたしが知ってる漢字なんて、きっと普通より少ないもの。

それなら「音声検索機能」を使えと、おにいちゃんがショートカットを作ってくれました。

「このボタンを押して、スマホに話しかければいいの？」

これだと少なくとも、耳で聴いたことくらいは、調べられるはずだよね。

試しにスマホに、「死神」と「タロット」を、真っ先に言ってみます。

そうすると……。

「——おにいちゃん、どうしよう、二十二万六千件、結果があるって……」

早くもわたしはパニックです。スマホを持ちながら、わたわたふるえちゃいます。

「全部見なくていいんだよ。それっぽいページだけいくつか開けてみろ」

「それっぽい……？ ええと、上から順に……新品、三千五百円？」

「一番上は大体密林とか宣伝だ、パスしろパス！」

「宣伝？ それってどうやって、見分ければいいの？」

そもそも、密林って何なんだろう？ スマホの中に木が生えるのかな？

これだけ沢山の結果があって、どの結果が正しいとか違うとか、何も知らないわたしは、何を基準に判断すればいいんだろう……。

さすがのわたしの直観も、どれが嘘で本当か、スマホからではわかりません。

みんなはこれ、どうやって使いこなしてるんだろう？

「……わかった、検索はやめ。猫羽は電子辞書でもまず持ち歩け。っつか、広辞苑アプリ入れといてやる」

察しのいいおにいちゃんは、早くも諦めたみたいでした。

でも、こうじゃんって、何なんだろう……工事、円……??

そんなこんなで、結局大きな対策は立てられないまま、馨おにいちゃんと咲姫おねえちゃんとの、楽しいお話の時間はすぐに過ぎていっちゃいました。

普段はあんまり、こうして三人で揃える機会は少ないんだ。馨おにいちゃんが咲姫おねえちゃんを、避けがちなこともあるからだと思う。

所長の不吉な予言のおかげで、おにいちゃん達と沢山話せたことは、わたしには良かったです。

咲姫おねえちゃんは最後に、わたしに「お守り」だという蛇のキーホルダーを渡してから、馨おにいちゃんを引っ張って事務所を出て行きました。

「今日こそは色々、サシで話をつけましょーか？」

「いや……それは、ゴメン、こうむり……」

馨おにいちゃんは咲姫おねえちゃんに、沢山の借りがあります。特に、悪魔のおねえちゃんには頭が上がらないみたい。だからいつも、探偵部門もさぼって、なるべく逃げ回ってるの。

今日はわたしのために、みんなで直接集まって話してくれたおにいちゃんに、わたしは黙って手を振るしかありません。

夕空の下、預けてくれた蛇のキーホルダーを握り締めながら、騒がしく去っていくおにいちゃんとおねえちゃんを見送ります。

——いい加減にしてほしいですね、あの二人も。いつになったら素直にくつつくんでしょうか。

手の中の「お守り」から、そんな苛立った声が聴こえた気がして……わたしも思わず、うん。と頷いたのでした。

* * *

友達と仲間って、同じもの……なのかな？

長い間走ったバスを降りてから、わたしはふっと、考え込んでしまいました。

「檢さん？ 点呼があるから、早く集まらないと」

「あ……ゴメン、なさい……」

人間としては全然普通でないわたしの、初めての転地学習。

同級生で、同じグループになった班長さんが、ぼけっとしたわたしを引っ張ってってくれます。

わたしの高校がある都会と、同じ地域だとはとても思えない、草深い山の中にわたし達は着きました。

ゆりかごみたいなバスがあんまり眠くて、景色もろくに見てなかったわたしには、これは衝撃でした。

「なにこれ……ねえ、すごく……」

手を引いてくれる班長さんには、聴こえないくらい小さな声だけど、思わず呟いちゃいます。

「ねえ、すごい……楽し、そう……」

建物だらけ、人間だらけのこの世界にも、こんなに自然だらけの場所があるものなんだね。

整備されてないでこぼこの道、木と土の匂いがする柔らかい風。噴水みたいなワクワクが心の底からあふれ出します。

どうしよう、わたし、ビックリしてます。きっと今日は、はじけそうなくらい楽しいと思うな？

こんな気持ちは、誰に伝えればいいかな。友達？ 兄さん？ 事務所のみんな？
でもそのどれも、わたしの「仲間」じゃない気が、ここに来て急にしてきたのでした。
だって誰も——ただこういう所にいるだけで、それだけで楽しいなんて、思うことはなさそうだから。

わたし、昔、ずーっと昔に、こんな山の中で生きてたことがあるんです。その頃には、あんまり思い出したくないけど、サツリクのお仕事をしていて……森の妖精や、気ままな天使って確か呼ばれてました。

バスを降りて深い森を目にした瞬間から、その感覚が蘇ってきました。
町中よりもずっと綺麗な空気を、小走りで浅く吸い込むだけで、どんどんテンションが上がっていきます。

家族から引き離されて、サツリクの天使になりたての頃、大きな森に隠されて生活してました。あの頃は一人が当たり前でした。

その後わたしが協力できるようになったのは、悪魔さんだけです。
悪魔はわかりやすく、契約の通りに動いてくれる。でも他のヒトはそうはいかない、わたしの直観はいつもそう感じてました。
守ってくれるヒトも、いつかはいなくなるから。一人で攫われて、サツリクの天使になったみたいに。今まで何度も、兄さんと離れなきゃいけないかったみたいに。

集合場所について、自分のC組の列に並ぶ前に、E組のユイとホナミが、わたしを見つけて声をかけてくれました。

「あ、楡さん！ 後でまた、遊ぼーねえ！」

「昼食前に、ちょっとだけ休憩時間あるし。またその時にでも」

おっとり眼鏡で、二つお下げの似合うユイと、馨おにいちゃんの従妹なだけあって、ぶっきらぼうな美人さんのホナミ。

ここまで連れて来てくれた、班長さんの手の温かさや、ユイとホナミの嬉しそうな顔に、不覚にもわたしはじんときちゃいました。

変わった制服の高校生が、山の中の広場にぞろっと揃って、今日一日だけだけど、同じグループのみんなで一つ屋根の下で寝る。

本当にわたし、楽しみにしてたんです。元サツリクの天使のわたしには、全く知らない世界だから。

先生達の諸注意の後、泊まらせてもらうバンガローに、先に荷物を運び込みます。

「転地学習のしおり」によると、これからみんなで展望台まで登って、そこの広場でお昼ご飯なんだって。その前にちょっとは、ユイやホナミと話せるかなあ。

所長の不吉な予言があるから、相談したい事があるって、二人にはあらかじめ言っているんだ。お友達にも協力してもらいなさいって、咲姫おねえちゃんから言われてるし。

でも相談できるまでに何か起こっちゃったら、それはもう、どうしようもないけど.....。

高校の人に相談するなんて、思いもよらなかったわたしの肩を、不意にぱんと、誰かが叩きました。

「椴さん、元気ー!? 何か困ったことあったら言ってよ、おれ椴さんのためなら、真夜中の女子部屋でも駆けつけるからー！」

グループの後ろの方を歩いてたわたしに、問題だらけの言葉を叫ぶ、今日も元気な鳥頭のサトシです。

.....男子のお部屋、こっちじゃないよね？

それは大いにつっこみたいけど、他に気になることがあって、わたしは立ち止まってサトシに振り返ります。

少し離れても、わたしは同じグループの人のいる場所が気配でわかるので、サトシと遠慮なく話を始めました。

「.....今日は、連れのヒトは来てないの？ サトシ」

「うわ、椴さんに名前でも呼んでもらえた！ 非日常の最たる大自然効果、すげー、感動！」

相変わらずサトシの明るさは、わけがわかりません。

でもこの山の奥で、いつもより気持ちが良くなってるのは、サトシも同じなのかな。お金持ちのサトシは、学校の行き帰りには従者さんがついてくるから、ちょっと息苦しそうなんだ。

「今回の転地学習では、校医代わりにって別の奴が来てるんだよ。何かあったらそっちが対応するから、おれは晴れてフリーなわけでした！」

あ、そうなんだ.....つまり、校医として従者さんをわざわざ潜り込ませてるんだね。玖堂さん——サトシのお母さんは何だか凄いなあ、色々。

「それよりさ、橘さんはやっぱり来てないの？ しおりの班割見て、もしやって思ってたんだけど」

少し心配そうなサトシは、友達や兄弟姉妹をととても大切にしている優しい人。

十人兄弟の真ん中で、わりと色々、苦労してるみたいです。そういうところは、わたし、嫌いじゃないです。

そう思った瞬間、わたしは、あ。と、自分でも驚く心に、ここで気が付きました。

「.....大丈夫だよ。なぎがいなくても、優しい人はいっぱいいるから」

「えー、それなら良かった！　ほんっと楡さん、無表情に見えて、珍しくめっちゃ楽しそうだし！　こんなウキウキした楡さん、橘さんに見せてやりたいっつーの！」

リュックにつけたお守り、蛇のキーホルダーが、ちらりと不服そうに揺れます。でもわたしはお構いなく、サトシとのお話を続けます。

友達でも、ただの同級生でもないサトシは、多分わたしの「仲間」なんだ。

だってサトシも、ここにいるだけですごく楽しいって心が、わたしとそっくりだから。

.....咲姫おねえちゃんが言った、わたしは人見知りという言葉の意味が、今ちょっとわかった気がする。

友達もだけど、仲間をもっと作れたら、わたしは悪魔を卒業できるのかな.....？

すごく楽しい心になったのに、誰に言えばいいか、さっきは全然わからなかった。ユイやホナミも、みんな楽しくないことはないみたいだけど、わたしやサトシの「楽しい」は度が過ぎてます。

みんなと違う自分の心を、わざわざ口にするのは、わたしはほとんどしません。だからきっと、無表情って言われるんだね。

お金持ちの家のサトシは、フリーでみんなと遠出できることがほとんどないみたい。その解放感も、きっと説明するのは難しいんだろうな。

再集合の時間が迫ってるから、それ以上は特に喋らず、サトシとは別れました。

でもちょっとだけ、嬉しかった。

わたしのこんなワクワク感を、わかって喜んでくれる人もいるんだなって。

もうとっくに荷物を置いた班長さんが、わたしを見つけてこっちに来ました。

「あ、楡さん。早くしないと、集合遅れちゃうよ」

「うん、ごめん。先に行行って、走って追いかけるから」

バンガローの鍵を預かって、みんなが出た後で、やっとわたしも部屋に入ります。

みんなより出遅れて、案外良かったかもしれません。

登山用のナップサックに、お弁当セットと水筒を移すために荷物を開けると、鞆についたままの大事なものが、退屈そうにわたしを睨んでいました。

「.....あ、ごめん」

咲姫おねえちゃんが「お守り」にと渡してくれた、蛇のキーホルダー。

すごく不機嫌そうだから、ベランダにこっそり出してあげて、わたしの帰りをのんびり待ってもらうことにしました。しおりには、おもちゃとかはなるべく持ってこないように書いてあったし.....目立たないにこしたことはないよね。

トイレと洗面所は共同の、丸木でできた小さなバンガローが、ひっそりといくつも並んでいます。今日はこの山小屋で、みんなとお泊りするんだなあ。

ワクワクするけど、わたし、変なことをしないといいんだけどな。

わたしが同年代の人を苦手なのは、みんな、わたしと何かが大きく違うからです。育った場所も、境遇も違うし、仕方がないよね。

だからいつもは一人でいるし、いざとなったら、久しぶりに森の中で一夜を明かそうか、なんて思っちゃいます。

でもさすがに、それは駄目かな。サツリクの天使の頃ならともかく、今のわたしは普通の人間の弱さだもんね。このぐらゐの規模の山でも、危ない動物は沢山いるだろうし。

「お守り」のキーホルダーも、持っていった方がいいのかもだけど……でも、昼間は何かあったら、わたしでなく先生に解決してもらった方がいいしね。

不自然なくらい、木の匂いがするバンガローを後に、班長さん達を追いかけます。山歩きをしっかりと覚えてる体は、あっという間に先頭の子を追い抜いちゃいました。

わたしがそれだけはしゃいでるのを、同級生で気付いてるのは、どうやらサトシー人くらいでした。

わたしにとっては、スマホはおもちゃみたいなものなんだけど、転地学習にはスマホはOKでした。

展望台までガイドをしてくれる人が、集合したわたし達を前に声を張り上げました。「皆さん必ず、スマホの位置情報サービスをONにしてくださいね！ 万一誰かが迷子になった時、これで探すことができますからね！」

位置情報、さーびす、かあ……スマホを持ってるだけで、居場所までわかっちゃうんだ、すごいよね……。

でもどうやって、設定したらいいんだろう。ううんと首を傾げていたら、隣に並ぶ班長さんが笑って、貸して、とわたしのスマホを持っていきました。

「椀さん、取っつき難いと思ってたけど、案外天然なんだね」

「……ゴメンなさい。ありがとう……」

これで多分、わたしのスマホも、居場所がわかるようになったみたいです。

でもそれって、誰にどこで見張られてるか、わからないってことでもあるよね……転地学習が終わったら、咲姫おねえちゃんに元に戻してもらおう……。

山頂の展望台に向かって集団で歩き出しながら、不思議でまだスマホを見つめてるわたしに、歩きスマホは駄目だよ！ とさとす班長さんです。

色々教えてくれてとても嬉しいから、こくこくと何度も必死に頷きます。そのたび何故か、ますます班長さんは顔をやわらげて、わたしにかまってくれるのでした。

大自然コウカって、やっぱりすごいかもしれない。

山歩きが得意なわたしは、ちょっと疲れた同じグループの女の子とか、荷物を持ってあげたり、急な斜面は手を引いてあげたりしました。そうしたら気が付けば、色んな人とわたしは話していました。

それでますます、ワクワクが止まりません。みんなでお出かけするって、こんなに楽しいことだったんだね.....。

そんなに遠くない山頂に着けば、もうすぐお昼ご飯。

その前にはきっと、ユイやホナミとやっと話せます。

あんまり楽し過ぎて、何から話せばいいんだろう。そんなわたしの頭からは、不吉な占いの結果なんて、さっぱり吹き飛んでいたのです。

* * *

誤算だったあ、と.....。

大きな眼鏡を小さく直しながら、感無量そうに、最初に口を開いたのはユイでした。「まさか楡さんが、ここまでホントに、やまねこ属性だったなんて.....ううっ、やっぱりワタシの眼鏡に狂いはなかったよう、ほーちゃん.....！」

山猫みたいな野生児。っていうのは、他のヒトにも言われたことがあるけど.....そんなわたし、今、生き生きしてみえるのかな？

感激してるユイにしがみつかれたホナミが、いつもの事だと言わんばかりに、小さく息をつきます。

「ごめん、楡さん、気にしないでやって。楡さんみたいな無愛想で強い女の子に弱いだけだから、この子」

「ちょっと、ほーちゃん！ ツンデレのほーちゃんがそれを言っちゃ駄目なんだよ、きけん過ぎるのは一緒なんだからね！」

「ああもう、だから、誰がツンデレよ！ 大体あんたの眼鏡は偏向フィルターかかり過ぎなのよ、愛想無しって言われたって普通誰も嬉しくないんだからね！」

うわーん、ってそこで、ユイが嘆くふりをします。それでもワタシは不器用なほーちゃん達がいいのー！ って、直球に言います。

ホナミはうつつまって、それ以上言い返せなくなっちゃってます。

二人は本当に、仲が良いんだと思う。でもユイはさっき、ほーちゃん「達」って言うてくれて、それはとても嬉しいことの気がします。

ホナミは従兄の馨おにいちゃんから、わたしを頼むって言われたのが最初らしいけど、人の好き嫌いが激しそうなのに、わたしのことは大丈夫と思ってくれてる感じだし。

お昼ご飯はグループで食べなきゃいけないくて、あんまり時間がないので、わたしは単刀直入に、二人に相談事を切り出しました。

馨おにいちゃんの従妹なので、うちの所長のことも知ってるホナミは、すぐにわたしの話をわかってくれました。

「うええ、花憐さんがそんな占い、言ってたんだ……あの人の占い、結構当たるのよ、怖いことに……」

展望台の広場から少し離れた林の中で、わたし達はホナミが持ってきてくれた敷物の上に座ります。

気性はちょっときつそうだけど、ホナミって、気が利く方だと思うな。わたしもユイも、全く手ぶらでここに来てるし。

対してユイは、頭がいい人みたいで、スマホにその場で「タロットカード」「死神」って話しかけて、音声検索を始めました。

「うーんー……確かに『死神』のカードは、思いもよらない出来事とか行き詰まりとか、どのサイトにも不吉だって書かれてるよねえ……でもでも、サイトによっては、新たな世界への旅立ちとか、むしろ生命の象徴なんだとか、そんなリーディングもできるみたいだよー？」

すごいなあ……普通はみんな、こうやってスマホを使いこなしてるんだなあ……わたしたんて、ついこの間に教えてもらってなければ、ユイが何をしてるのかもさっぱりだったと思うな……。

スマホをしまったユイが、眼鏡の下の大きな可愛い目を強くしかめました。

「どんな事件が、有り得そうかなあー？ この転地学習中に、何か起きるとしたらー」

まさにそれが、わたしの考えたかったことです。でもわたし一人じゃなくて、みんな考えてくれるのは心強いです。

「何があるかな……終わりとか破滅とか、怖いこと……」

「と言っても、たかだか高校生の事件でしょ？ せいぜい喧嘩とかじゃない？」

「そんなことないよー、ほーちゃん！ 高校生探偵が解く怖い事件簿は、世の中にすごい沢山あるじゃないのー！」

あんたそれ、漫画の見過ぎ。冷静なホナミの横で、わたしは「思いもよらない」ことを思うのに、早くも頭が痛くなってきました。

「避けられない死、みたいに、覚悟を持って向かわないといけない変化だって……誰かに問題が起こって、それが何かを変えていく、ってこととかかな？」

わたしも所長に、「死神」の意味を色々と聞いてきたんです。そこからわたしなりに考えたこたえなんだけど、やっぱりこれ以上はうまく言葉にできません。

「すごい曖昧だけど、まあそんな感じで、考えるしかないか。それなら今日の予定、事件が起こりそうな所、ちょっと見てみない？」

そこでぱっと、転地学習のしおりを取り出したホナミです。

本当に色々、準備がいいなあ.....助かるなあ、わたし、見習わないと.....。

お昼ご飯の後には、大きく三つのイベントがありました。

ホナミが赤ペンで星をつけてるのが、そのイベントです。

- 12:30 昼食
- 13:30 集合 諸注意
- ☆ 13:45 レクリエーション（クラス対抗）
- 15:15 集合 下山
- ☆ 16:30 カレー作り
- 17:30 夕食
- ～19:30 自由行動 別紙の順に入浴
- 19:40 班長会議
- ☆ 20:00 集合 肝試し
- 21:00 解散 施錠
- 22:00 就寝

わたしにはよくわからない単語も多いです。なのでわたし、今まであんまり真面目にしおりを見てませんでした。

「事件を止めること.....何かできるとしたら、自由行動の時くらいだよね」

「別に椴さんが無理に事件を止めること、ないとは思うんだけど。椴さんの身に何か起きるとしたら、ちょっと困るしね」

ホナミもユイも、どっちかというのを心配してくれてるみたい。

思えば出会いは、屋上でわたしが倒れたことでした。単にちょっとした五月病だって、後で水葵が言ってたんだけど。

「これねえー、一番怪しいの、肝試しの時とかじゃないかなあー？ レクリエーションの時は先生達も沢山いるし、ワタシが何かやらかすなら、やっぱり夜に、それも人目の少ない時にすると思うなあー」

レクリエーションと肝試しって、そんなに大きなイベントなんだね。どっちもさっぱり、言葉の意味がわからないんだけど。

ユイの言葉は一理あるのか、ホナミが難しい顔で考え込みました。

「肝試し、ねえ.....これ、希望者しか参加しないでもいいやつだけど。そこで起こる事件って、何があるかしら.....」

「そーだよねえー、ううん.....このチャンスに、好きな子に迫って、そのまま暴行しちゃう男子とかがひょっとしたらいるとかー？」

「あんた発想怖過ぎ！ 楡さん固まってるじゃない、ちょっと！」

うん、びっくりしちゃいました、わたし。

言葉にする前からユイの考えてることは、何となく伝わってきて.....。

ユイはおっとりしてるのに、頭の中が物騒なところ、ちょっとだけ所長と似てるかもって。

「でもでも一、最悪の場合を想定しておかないと、何かあった時に迅速に動けないよおー」

「それはわかるけど、せめて話の段階踏んでからっていうか、少なくとももう少し言葉を選びなさいよ！」

「でもでも一、じゃあほーちゃんは、どんな事件を思いつくのー？」

「え.....それは.....」

二人の勢いが強くなって、何も言えないわたしの前で、ホナミもバツが悪そうな顔になっちゃいました。

「たとえば.....もしもうちに、いじめられっこがいたら、やり返そうとして間違っ殺しちゃうとか.....」

それも十分、物騒だよお、とユイがつっこみます。

何だか二人共、想像してるものが生々しくて、わたしはその気配にひたすら恐れいっちゃいます。

「.....あのさ。何であたし達、よってたかってこんな物騒なこと、ずっと話してるの」

「ほんとだねー。今この山の中で一番不穏なの、私達じゃないかなあー」

「しかも楡さん、怖がってる場合じゃないし。言い出しっぺ、誰よ」

本当だ、わたし、二人の間で縮こまってる場合じゃなかったです。

人間世界って、わたしの住んでた異世界よりずっと平和なのに、どうして二人が思いつくことはわたしより怖いんだろう？

話してる内に、お昼ご飯の時間が来ちゃいました。

広場に戻りがてら、E組のグループで班長さんをしてるホナミが、わかりやすい方針を立ててくれました。

「とりあえず、様子のおかしい奴がいないか気を付けとこうか。班長会議の時にも、周りに変な奴がいなかったかきいてみるから」

そうだね、きっとそれが一番です。

わたしの直観が、何のためにあるのか。さっきの二人みたいに物騒な気配を感じたら、それに注意を払えばいいんだよね。

相談にのってくれたユイとホナミに、お礼を言って別れます。

わたしはそのまま、久しぶりに、直観のアンテナを広域に伸ばし始めます。
人が沢山いて騒がしい町では、こんなに広い範囲はとて探れません。
でも今のわたしは、綺麗な空気の森の中で元気いっぱい。
それで感じるみんなの心に、不穏な空気があるとは思えませんでした。あくまで今、この瞬間には。

ホナミはさっき、別にわたしが、無理に事件を止めることはないって言ってくれました。確かによくよく考えたら、わたしに関わる事件なのか、それも所長にきけてないです。

同じグループのみんなと、輪になってお弁当を出しながら、わたしはふっと考え込みます。

わたしが出したお弁当を見て、隣に座った班長さんが、あれっと思いを丸くしました。
「椀さん、お弁当、それだけ？ 何かおかずはないの？」

「うん。わたし、おにぎり以外、あんまり作れなくて」

料理も全然知らない上に、そもそも朝が弱いわたしは、これでも精一杯だったんです。高校ではいつも菓子パンで済ませてるし、お弁当自体、これが初めてなんだよね。

自分で作ってるの？ と驚いた班長さんが、何やら、お弁当の蓋に自分のおかずをいくつも置き始めました。

「それじゃ、椀さんの手作りおにぎり、これと替えてくれない？ 沢山あるみたいだし、いいでしょ？」

「.....いいの？ 多分そんなに、おいしくないよ？」

ご飯をどれだけ炊けばいいかも、よくわからなくて。おにぎりの数だけは沢山できちゃったから、それはとてもありがたいんだけど。

おにぎり一つ持ってった班長さんが、一口食べて、おいしい。と笑ってくれました。それを見た他の子ども、おにぎり交換会が始まっちゃいました。

.....故郷の京都にいた頃に、おにぎり作りだけは習ったことがあって良かったなあ。養子に行った兄さんの、お義父さん達がおにぎりが好きだったんだ。

そして、同じグループの子が、みんな優しくて本当に良かったなあ。

こんなに楽しい雰囲気の中で、事件なんて、やっぱり起きてほしくないな。
わたしに何ができるかはわからないけど、わたしがみんなと違うからこそ、やるべきこともあるんじゃないかな。

殺伐とした異世界にいたから、余計にそう思うんだろうけど。

こういう平穩は、全然、当たり前じゃない。

所長の占いのことがなくても、そうだったよね。わたし一人くらい、それを心配する高校生がいてもいいよね。

お昼ご飯の次のイベント、レクリエーションは、わたしがバイトでいない放課後に同級生が練習してた余興大会でした。

レクリエーションって、楽しいことって意味なんだって。譬おにいちゃんが入れてくれたスマホの辞書で調べました。

肝試しは、勇気を試す行事らしいんだけど、それって何をするんだろう？

レクリエーションの後は、バンガローの近くに帰ってすぐ、夕飯用のカレーをみんなで作らなきゃいけないくて、転地学習って大忙しです。

ユイやホナミとも何も話せないまま、肝試しのことも、誰にもきけてません。

後片付けまで一気にしなきゃいけないご飯は、一応係を分担してるけど、連携して動くのがわりと難しかったです。

みんなで何かやるって、楽しいけど、その分大変なんだね。

お風呂が初めての広さで、そこでまた、わたしのテンションが上がります。時間が少ないのが残念でした。

いつも着けてるリボンを外すと、魔法が切れて、人間にはない髪の色がばれちゃうんだ。だから、洗う時以外は髪をまとめて上げていたら、いいリボンがもったいないよって班長さんに笑われちゃいました。

「今度、楡さんにお洒落道具とか、色々あげるね。楡さん、せっかく可愛いんだから」

今日はずっと、わたしに優しくしてくれてる、上機嫌な班長さん。

ちょっと不思議でした。昼間はそうでもなかったのに、夜に近付くにつれて、班長さんの楽しさがどんどん増えてるんです。

最初わたしは、サトシとわたしの「楽しい」は、度が過ぎてるって言ったけど……。

それに近付きつつある、班長さんの心。それだけは少し、気になってきた、初めての集団旅行の夕方でした。

* * *

肝試しって何か、よくわかってなかったわたしは、参加の希望を出してませんでした。今思えば、その方が好きに動けて良かったです。お風呂が終わってから肝試しが終わるまで、希望を出してない人は自由時間です。

みんなで夕飯を食べた食堂は、肝試し希望者の解散時間まで出入りが自由です。ジャージに着替えた高校生が、いっぱい集まっています。

班長会議が終わってすぐ、ユイやホナミにも来てもらって、もう一度同じ相談を始めるわたし達でした。

「今の所は、何もおかしい気配はなかった……と思うよ」

「うんうんー、こっちもー。ほーちゃんはどう、班長会議では何かあったー？」

ユイ達のグループの班長さんをしてるホナミは、別に、と肩をすくめるだけでした。「うちの高校、そもそも私立でガラは良い方だし。そうそう、めったなことはないと思うのよね」

わたしもそれは、薄々感じてました。

町を歩くと、ちょっと不良っぽい制服の人とかもいっぱいいるけど、この高校はとても平和なんです。

ユイがうんうん、とホナミに頷いてました。

「いじめも絶対ないとは言えないけどさー、中学に比べたら、みんな育ちが良いよねえ。あの頃はほーちゃん、よく先輩に絡まれてたもんねー」

こら！ とホナミが、余計なことを言うなどユイに怒ります。

「ほーちゃん本当、気が強いよねえ。隠れファンクラブの人も結構いるしさー」

「な、何言ってるのよ、別に全然関係ないし！ 今はあれ、『死神』の話でしょ、ねえ楡さん!？」

そうなんだけど、不穏な気配とかさっぱり、見事に何も感じられなくて……変わったことといえば、うちの班長さんが、どんどんルンルンって感じになってたことぐらいだし……。

なのでわたしも、ついついホナミに続きをきいちゃいます。

「ホナミは、ケンカが好きなの？」

「ってええ！ なんな何言ってるのよ、楡さんまで！」

「うわあ、楡さんすごい、豪速直球・ドストレートだあ……さすがにワタシも、そこまでは無理だったなあ……」

ちょっと、あんた達！ と怒るホナミを、ユイは笑いながら、わたしはぐっと口を閉じながら真剣に見つめます。

ホナミはちょっと靈感が強いけど、普通の人間の女の子だし。あんまり無謀なら心配なんだけど。

動揺してるホナミは、わたしまで大きく動揺させるこたえを、そこで返したのです。「有り得ないし！ っていうか橘さんみたいな超絶ツンツンがお姉さんの楡さんに言われたくないし！」

って……えっ……？

水葵が、わたしの……お姉さん？

「えええー。楢さんと橘さん、同学年なのに、いいのかなー？ 楢さんのお兄さん、犯罪じゃないかな、それー」

「っても、誰もそこまで言ってないし！ たとえよ、ものの！」

「だって二人共、仲良く一緒に暮らしてるみたいだし。毎日お兄さんが橘さんを見送りに出てるって、ご近所でも評判なんだよ、微笑ましいよー」

え……ええええ？ 水葵と兄さんが……同、居？

それ、ウソ……わたし、全然、きいて、ない……。

「ほら、あんたが変なこと言うから、また楢さん固まっちゃったし！」

「あれれ、本当だー。楢さん、橘さんとお兄さんは、実際はどんなご関係なのー？」

ホナミもユイも、今ここで、何も嘘はついてません。だから水葵と兄さんが一緒にいるっていうのは、わたしが知らないだけで、きっと事実なんだと思う。

ええっと、わたしはてっきり、兄さんは故郷にいたと思ってたのに……。

水葵が何処にいるのかは知らなかったけど、水葵は悪魔だから、居場所なんて困らないと思ってたのに……。

「兄さんは……なぎと一緒に、こっちに住んでるの……？」

この間、玖堂さんに挨拶にいった時に、確かに兄さんに偶然会えたんだけど。玖堂さん宅は、わたし達が異世界からこっちに来るための中継地点です。だからたまたま、来てたのかなって思ったんだけど。

すぐに帰るって言ってたし、向こうにはツグミ——兄さんの連れ合いだって、一緒に住んでるはずなのに……。

わたしが本当に何も知らないのを、ユイもホナミも、ようやく気が付いたみたいでした。

「あれえ……楢さんのブロンドお兄さん、下町の隠れビジュアル系って、結構有名なのにー。楢さんにはもしや、内緒だったんだあ？」

「うわ……何か、ごめん……里史に教えてもらったんだけど、わりとよく駅前で見かけるからさ、お兄さん……」

急に淋しくなったわたしは、思わず、涙ぐんじゃいました。

兄さん、こっちにいるならわたし、もっと会いたいのに。でも、教えてくれないってことは、来ちゃダメだってことだよね。

「内緒ってことは、ますますいけない関係だねえ……ねえ、ほーちゃん」

「だから、あんたねえ。お兄さんは妻子持ちって噂だったし、今時男女でルームシェアもなくはないし、そういうのもアリってことじゃないの？」

ここでさらにわたしは、動揺も忘れて一気に吹っ飛びました。
「いない、いないよ、子供なんていないよ。ツグミともまだ、お義父さんが許してくれないんだよ」
「あれー、そうなんだあ？ 噂って本当、当てになんないねー」
「そうなんだ……そうよね、見た感じ、まだまだ若かったしね」
人間世界ってほんとに怖い。兄さんが突然、お父さんにされちゃいました。
二人が言うには、兄さんは駅前商店街でこっそり、よくバイトをしてるらしいです。
それだけわかったわたしは、それ以上は追及せずに、今夜は部屋に帰ることにしたの
でした。

とりあえずショックです。ふらふらしながら山道を戻りました。
兄さん、実はこっちに来てるなんて。何で、どうして、兄さんに会っちゃいけないんだらう。
水葵のことだから、わたしを甘やかしちゃダメと思って黙ってたんだ……でも水葵も兄さんも、こっちで暮らそうと思うと、それは相当大変なことのはずです。
「転地学習だって、お金もないから、参加はできないって言ってたのに……」
水葵はあくまで、悪魔の力で人間達を騙して、こっそり高校に紛れ込んでるだけです。書類とかが残るようなことは何もできないんです。
ここは異世界と違って、水葵にも兄さんにも異質な環境。だってまず、故郷はこんなに発展してなくて、車や高層ビルや、スマホもないよ。
水葵はすごく強い悪魔さんなのに、ここにいるとちょっと弱くなるって言うし。水葵が弱くなれば、水葵に助けられる兄さんも弱くなります。
二人が異世界にいる分には大きな問題はないはずだけど、こっちでは二人共、いる時間が長いほど弱るし、そもそも人間世界って、何をするにもお金が必要で面倒なはずなのに……。

「わたしのせい……なの、かな……」
わたしは確かに、慣れない高校に水葵がいてくれて、窮屈ではあるけど心強かったよ。でも何も知らなかった。それが悲しくて、泣き出しちゃいそうでした。
兄さんの中ではきっと、わたしはまだまだ、守らなきゃいけない妹なんだ……水葵と二人で、無理をしてまでも……。

青い顔色で、のっそりバンガローに入ったわたしだけど。
それでもすぐ、わたしはその異状に気が付きました。
「——あれ？ ユカリは？」
もうすぐ門限なのに、班長さんがいません。肝試しにも参加はしてないはずなのに。他の子が、しゅっと、いたずらっぽい顔でわたしに笑いかけました。

「あの子、親がすごい厳しくってさ。こういう時でないと、ゆっくり彼氏といらんないんだ」

門限の後は、敷地内の共同トイレと洗面所を除いて、部屋から一歩も外に出ちゃいけません。

先生も定期的に見回りにくるし、どうするの？ って、わたしは焦ってききかえします。

「これこれ！ 電気消したらわかんないでしょ、ぱっと見」

そこには、風船で作った頭にかつらをかぶせて、布団の中に布団をつめて、さも班長さんが寝てるかのような工作物がありました。

みんなそうして、最初から協力するつもりだったみたい。知らなかったのはわたしだけで.....わたしはその瞬間から、嫌な予感に胸を掴まれちゃいました。

——楡さん、案外天然なんだね。

大人しくって、優しそうな班長さん。夜になるにつれて、どんどんワクワクとしていったあの心。

鍵は班長さんが持ってるから、いつでも出入りできるって、みんな何も心配してないみたいだけど.....——

「.....わたし、ちょっと探してくるね」

え？ ってポカンとしてるグループの子を背に、わたしは迷わず、部屋を駆け出していたのでした。

不穏な気配なんて、何もなかった。取り越し苦労なら別にいいんです。

でもわたしには、本能的な危機感がどうしても拭えませんでした。

「夜の森で、どこで.....二人でいるの.....!？」

昼間は平和そうに見えても、ここはわりと、厳しい自然の山の奥です。

蛇だって猪だって、野犬だって。動物は悪いことを考えないから怖い気配はしないけど、存在自体は沢山あります。

わたしですらも、夜は大人しくしておこうって思った山なのに、もしも猛獣の縄張りとかに、班長さんが間違っって迷い込んだりしたら.....！

「死神」のカードの話がなければ、わたしもここまで焦らなかったかな。ううん、やっぱり、同じことをしたと思います。

それはわたしが、山育ちだから。自然の怖さを、誰より知ってるから。

ずっと優しくしてくれた、班長さんの気配を探して、走って辿り着いた先には——途中から嫌でも感じてしまった、当たってほしくなかった悪い光景。

出産をしたばかりで、子供を守ろうと、物凄く気が立ってる大きなお母さん熊。
それに睨まれて震え上がる班長さんと違う組の男子が、月明かりの枝道にいたのでした。

「——目を離さないで！ 絶対視線を逸らさないで、ゆっくり静かに後ろ向きに逃げて！」
ざざざと、大きな音を立てて、二人と熊の間にわたしが駆け入ります。
驚いた二人はわたしの方を見かけたけど、わたしが叫んだ通りに慌てて熊を睨みます。
わざわざ音を立てたわたしの思惑通り、お母さん熊がこっちを向きます。

二人は多分、先生達に見つからないように、歩道から大きく離れたこの熊の領域に入っちゃったんだね。

お母さん熊も、出産のために、随分遠くから来たみたいですよ。この辺りで熊が出るってわかってたら、先生達ももっと注意するはずだし。

「楡さん……！ 私……！」

わたしを見ずに、熊を必死に見つめたままで、班長さんが死んじゃいそうな声を出します。

でもわたしはかまわず、とにかく指示を出します。

「急いで逃げちゃ駄目！ 早く動くものを動物は追いかけるから！ 今はこっちに気が向いてるから、ユカリ達は逃げられるから、落ち着いて！」

お母さん熊も、怯える二人より、わたしが一番強い——目を離しちゃいけない相手だとわかったみたいです。

一緒にいた男子にも促されて、じり、じりっと、班長さん達が離れていきます。

わたしはただ、わたしの全気合いをのせて、視線だけでひたすらお母さん熊を牽制します。

少しでも隙を見せれば、お母さん熊が攻撃に出る間合いにわたしは入っちゃってます。そうしないとこっちに注意を向けられなかったし。

わたしの護衛武器、所長がくれた番人鎌は、普段はスマホの中に封印してます。目を離した瞬間に襲われると思うから、取り出すこともできません。

ううん、人間の女の子って、本当に無力だなあ。PHSを出して、悪魔さんに頼ることすらできそうにないし。

本当に突然、窮地に立たされちゃったけど。でもとにかく、間に合って良かったな。

わたしはわたしに優しくしてくれた人、みんな、大好きだから。

だから班長さんさえ、無事に逃げてくれたら……何も、後悔はないと思うから。

二人の足音が遠ざかったところで、不意に気が抜けちゃって、お母さん熊がついにその手を大きく振り上げました。

「……！」

斜め前にいたわたしに、鋭い爪を袈裟がけに振り下ろしてきます。

最初の一撃だけは何とか、ごろんと前に転がって避けられたけど、背中にかすってジャージが大きく破られちゃいました。

「っ——」

それだけがせめてもの抵抗です。体勢も崩れて、木を背にして腰をついたわたしに、もう逃げる術はありません。

まるでスローモーションがかかったみたいに、ゆっくりとこっちに向かってくるお母さん熊。怒りに満ちたその姿を、わたしは一筋の閃光と共に、視界に捉えたのでした——

* * *

とりあえずわたし……とても困りました。

キレイだけど厳しい声に散々怒られながら、背中に大きく爪跡のついたジャージを見つめて、早足の帰り道で途方に暮れます。

「ちょっと、聞いているんですか、猫羽は。私が間に合わなかったらどうする気だったんですか、大体私は何のために、こんなしょぼいキーホルダーにされてまでついてきたんですか、全速力の猫羽を必死に追いかけた私の身にもなって下さい」

手元には、水も滴る、「お守り」の蛇のキーホルダー。もとい、咲姫おねえちゃんに違う依代に遷してもらった水葵が、危ないことをしたわたしをとうとうと叱ります。

でもわたしにとって、大きな問題は、一つだけでした。

「どうしよう……ジャージの上着、これしか持ってないのに……」

背中の上から下まで三股に裂けたジャージは、何だかすごく、不良さんが着るみたいな荒々しさになっちゃいました。

転地学習が終わったら、当分着る機会はないと思うけど……わたしは一年しかいないのに、冬になる前に新しいのを買うべきなのかな？

こっそり買わなきゃいけないとしたら、何処で買えばいいのかな。高かったからお金を貯めなきゃいけないなって、頭がぐるぐるして、とても悲しいです。

バイトを休んだ分も、お金が減っちゃう現実だから、お財布が終わるって意味の「死神」だったのかなあ……。

わたしの忠告通り、最後まで静かに逃げたらしき班長さんは、やっと部屋に辿り着く寸前でした。

追いついたわたしは、班長さんを捕まえて、大泣きしてるのをまず必死になだめる状態になっちゃいました。

一緒にいた男子は自分の部屋の方が近くて、怖くてすぐ帰っちゃったみたいです。
せめて最後まで、班長さんを部屋に送るくらいはしてほしいよね。もう、根性が後少し足りないなあ。

「ごめんね楡さん、本当ごめん、ごめんなさい……！」

わたしが無事だったことを、向こうにも連絡してもらいました。

そしてわたしは班長さんと、一番大事な約束をします。

「これ、内緒。わたし達だけの秘密にしよう、ユカリ」

「ええっ……でも……！」

事件なんて、何も起こさない。そう誓ったのはわたしだし、班長さんはもう十分、痛いくらいに自分で反省してます。

それに、熊に襲われたなんて言えば、あのお母さん熊も狩られちゃうかもしれない。それがわたしは、すごく心配でした。

今日の場合、悪いのは、お母さん熊の領域を侵した人間。

他の観光の人のために、熊を見ましたくらいは、後で先生に言おうと思ってるけど。

そんなわたしを、水葵はくどくどと怒りました。兄さんと住んでるらしいことも、きけないくらい強い勢いで。吊るしてたバンガローのベランダからわたしを追いかけてきて、捨て身の突撃でお母さん熊を怯ませてくれなかったら、わたし、危なかったしね。

本当に、すごかったよ。水しぶきをあげて飛んできた水葵が、そのまま特攻していったのは、まるで津波みたいだった。

お母さん熊の後ろにその閃光が見えた時に、やっと水葵のことを思い出したわたしも、どうかと思うんだけどね。

今回、お守りとして、直接転地学習に参加せずに同行してくれた水葵は、本当は海の竜の悪魔です。高校に通ってる時は、別の人形に宿って人間のふりをしてるだけ。

今回は人形からキーホルダーに遷してもらってこの姿だけど、本当はとても迫力のあ
る、渦潮のドラゴンさんな水葵です。

「全く、咲姫に感謝するんですね。彼女に私を遷せる力がなければ、隠れてついてはこれ
なかったですからね」

「うん、ありがとう。助かったよ、なぎ」

班長さんを部屋に帰してから、人のいないトイレで、水葵と反省会です。

咲姫おねえちゃんは母さんと親戚みたいなものだから、当然、母さんが召喚する水葵
のことは前から知ってます。

「ああいう時はまず、先に鎌を出してから場に飛び込んでください。それくらいの猶予は
あったでしょう」

「うん、そうだね。なぎを忘れてたことも含めて、わたし、まだまだだね」

まあその場合、鎌を持った姿を班長さん達に見られる困りごともあるけど……。

何か起こる可能性はわかってたんだし、探偵はもっと冷静に、状況を見極めろって。譬おにいちゃんもそう言うだろうなと、ひたすら反省です。

あと、危ないことって、不穏な気配からだけ起こるわけじゃないこと。それも今回の教訓だよな。

様子がおかしいという意味では、班長さんの変化に、わたしは気が付いてたんだから。むしろこの人間世界は、何気ないことの中から、事件が起こる方が多いみたい。わたしも兄さんのことで動揺してたから、冷静な判断ができなかったと思うし。

水葵にキーホルダーのふりに戻ってもらって部屋に帰ると、にわかになんか騒がしくなっていました。

あれ、班長さん、さっきのこと喋っちゃったのかな？

そう思ってたなら、外から慌てたノックが響いて、先生や他の男子達が沢山集まってきました。

担任の先生がすごく険しい顔で、室内を確認してから厳しい声で言いました。「全員揃ってるか!? いいか、肝試し中にこの近辺で不審者が目撃されてる！ 今夜はトイレに行くだけでも、絶対二人組以上で出ること！ それも他の者を起こして行くこと、できれば朝まで我慢すること！ いいな!？」

そうして現状を一部屋ずつ、男子をお伴に、みんなに伝えてるみたいでした。

あれ……熊は全然関係なくて、不審者って……今日はまだこれ以上、何かが起こるの……？

急に不安になったわたしに、先生についてきたらしいサトシが、とんでもないことをそこで続けたのでした。

「何でも、金髪の外人男が一人、近くをうろついてるらしいって！ みんな本当に外に出んなよ、どうしても出たい時は男子や先生を呼んでな！」

がーん……！ 思わず声に出しそうになって、わたしは必死に、自分の口を押えましました。

金髪の外人男。ずっとわからなかった「死神」の意味。

思わず握り締めてた水葵も、わたしが想像したことをすぐに察したみたいでした。——……なるほど。キーホルダーなんて心許ないと、確かに散々、彼は言っていました。

わたしの学校生活を見守るように、兄さんから頼まれてる水葵。

水葵と兄さんは同じヒトの「力」を借りて使えます。それが死神さんなんだけど、そんなヒトが見込んだ兄さんも、そう言えば大昔に死神って呼ばれてました。

水葵と一緒に暮らしてるらしい兄さん。金髪の外人なんて、兄さんそのもの……。

水葵の力を追ってこれば、兄さんも何とかここに辿り着くことはできると思います。
この時間までがんばって動いてくれたら。

「ほんっとー、誰なんだろうなー！　こんな山奥に現れる、外人の不審者なんてさー！」

生徒全員に、緊急連絡をしてみわるために、サトシ達はすぐに行っちゃいました。

わたしは水葵の言葉で確信したけど……当然、真実を言えるわけもなく……。

兄さん、ごめんなさい。わたしを心配して来てくれたんだろうけど、わたし、今回は、
事件を起こさないって誓ったから……。

スマホの「位置情報さーびす」とかに監視されてなかったら、会いたかったけど……問題ない高校生活は、大変です……ぐすん……。

5月中旬　了

★6月初旬：応援少女迷走事件

久しぶりです。ウツギ・ネコハです。

最近、スマホで育てる不思議なお友達を馨おにいちちゃんが教えてくれて、お友達とゆっくりお話しするために、バイトの時間を減らす日が増えちゃいました。

スマホのお友達より、現実のお友達を大事にしてください！ って、咲姫おねえちゃんに怒られました。よくわからないけど、ちょっと反省してます。

一応放課後からバイトまではなるべく、いつものように高校の屋上において、スマホのばーちゃんなお友達とは話さないようにしてるんだけど……。

現実のお友達？ の一人、坊主に近い鳥頭で野球部のサトシが、突然差し迫った顔でわたしの方に走ってきました。

「椴さん！ ごめん、助けてー!!」

その時のわたしは、この依頼がわたしにとって大事件になるなんて、思いもしませんでした。

元々悪魔使いのわたしが、わたしという人間として、今ここにいること理由。

人間も悪魔も、ばーちゃんなお友達も全部、同じくらい大切なわたしに、誰かの灰色の眼が迷彩の問いを投げかけます――

* * *

スマホの中にしかいないお友達って、人間よりも大事じゃないものなのかな？

「アクマで GONE」で捕まえるアクマさん達も、お話しして育てる新しいお友達も、どっちもとても優しいのにな。

そんなことを思いながら、バスの外を眺めるわたしに、隣に座るサトシが両手を合わせて拝んできました。

「今更だけど、ほんっとありがとな、椴さん。バイト休んでまで、こっちに参加してもらっちゃってさ」

「ううん。また山に来て、わたし、嬉しいよ」

まるで転地学習の時みたいです。山の中を走るバスの後ろの方に、わたしは乗ります。

ちょっと大きな川にかかる、コンクリートの橋を通ってきたり、転地学習先よりは野生っぽくない山だけど、森が見えるだけでわたしは十分わくわくするから。これは確かに、スマホのお友達とお家にいると、味わえないことだよ。

今日はサトシの野球部の試合です。上級生にとっては大事な引退試合らしくて、それも姉妹校との伝統的な試合で、最初と最後に応援団のセレモニーがあるんだって。

よく校庭で練習してるの、わたしも屋上から見たことがあります。大勢で一人の女の子を投げたり受け止めたり、サーカスみたいな動きをしたり、応援団ってすごいな、人間の女の子も意外に危ないことするんだなって、不思議に思ってたんだけど.....。

「楡さん、めちゃくちゃ飲み込み早いつて、団長が驚いてたよ。このままチアリーディング部に入部してほしいってさあ」

やっぱり危ないのは危ないことらしくて、引退試合の直前に一人、怪我人が出ちゃったみたい。それでサトシが、わたしの運動神経を見込んで、代わりをしてほしいって急をお願いに来たんだ。

「.....この部に入ったら、いつも、山に来れるの？」

「いやー、残念だけど、毎年この引退試合くらい。そうだよなー、完全に山行きで釣ったみたいなもんだもんなあ、ごめん、楡さん」

元々わたし、放課後は探偵見習バイトをしてるから、クラブ活動はできないなと思ってたけど.....お小遣いあきもやがなくなっても、こうやって山に来れるならいいかなって、ちょっと思いかけてた朝靄あきもやの空の下です。

この試合、山奥の高校でやるんだけど、楡さん、山好きだよな？

そう聞いてきたサトシに、わたしはすぐに、こくこく頷きました。

下宿からどうすれば山に行けるのか、わたしはわからないし。譬おにいちゃんに頼めばバイクで連れてってくれると思うけど、譬おにいちゃんも忙しいし。

「良かった！ 交通費は当然、部の方で持つからさ！ 後はじゃあ、楡さんところの事務所に、楡さんを貸して下さいってお願いに行けばいいよな？」

サトシはびっくりすることを言ってきました。要するに、「応援団のヘルプ」を、バイト先のよろず相談所に依頼しようとしてくれたみたい。

本当に、サトシって見かけによらずに、色々気を使ってる人だな。わたしがバイトをお休みしたら、バイト代が減っちゃうと心配してるのがわかりました。

でもわたしは、ぼかんとしてから、すぐさま断っちゃいました。

「ううん。だって、他の応援団の人達は、お金なんてもらわないよね？」

応援団にそんなに興味はないけど、大好きな山に連れていってもらえて、わたしの得意な運動で人の役に立てるのに。

他の人達も、好きで応援しに行くんだよね。わたしだけお金をもらうのはおかしいと思うから。

応援団が全員揃わないといけないセレモニーは、最初と最後だけだから、試合の間は遊びにいいよと、サトシが言ってくれました。

「椀さんが応援してくれてたら、おれはチョー嬉しいけどさ！　っても多分ほとんどベンチだし、椀さんの好きなようにさせてあげてって、団長さんには言っといたから！」

応援団の人ともちょっと仲良くなったし、一人だけ抜けるのは迷ってます。でも、どうしても、森の誘惑には抗いたいです……。

山の中には立派な校舎と運動場のある、お金持ちそうな姉妹校。裏手の駐車場につくと、町よりずっと綺麗な空気だけで、わたしはもう感無量でした。

うん。応援団やスマホのお友達とは後でも会えるけど、この山には今しかいられないんだから、やっぱり思う存分味わっていかないと。

「椀さん、ほんっと、意外にわかりやすいね。目がすごいキラキラしてる。無愛想なのは変わらないのにね」

荷物も持たずにバスから降りて、ふるふると両手を握って感動してるわたしの後ろで、サトシはとても嬉しそうにわたしを見守ってました。

先輩の団長さんに連れられて、知らない高校のキレイな更衣室で、初めて着るユニフォームを団長さんが貸してくれました。

「うっわあ、椀さん、超似合ってるわ！　ねえちょっと、ほんとにうちの部に入ってくれない!?　主に私の目の保養のために!!」

「えっと……ごめんなさい、わたし……」

三年生の団長さんは、これが最後の大きな応援らしいです。わたしも一年しか高校にいないし、団長さんが望むみたいに、団長さんがいなくなってもずっと参加はできないし。

わたしみたいな、突然の新入りを良く思わない人もいるから、優しい団長さんがいないならこの先は不安だし。

紫の襟が深いV字型で、ひらひらのミニスカートでおへそが出る水色のユニフォームを着ると、他の団員さんの視線が沢山刺さるのがわかりました。

わたし、まな板みたいな体型だから、そんなに可愛くないと思うんだけどなあ……こういうのって、咲姫おねえちゃんみたいにスタイルがいい方が似合いそうなのに。

何あれ、悔しいって、色んな人が思う気配を感じ取ってしまうわたしの「直観」は、空気の澄んだ山の中で今日は抜群です。

この服装、女の子向きなのかもしれないけど、外を歩くにはちょっと寒いな。山ってわりと冷えるんだよね。

転地学習でボロボロになったジャージの上着は、一応持ってきたんだけど、制服以外の荷物は全部、バスに置いてきちゃいました。最初のセレモニーが終わったら、取りにいけるかな？

団長さんは忙しいし、サトシにきこうと決めて、鍵のかけられる更衣室を後にします。他にはあんまり、話しかけられる人がいなさそうです。

ううん……山に来れたのは嬉しいんだけど、何だか思ったよりも、わたしのことを良く感じない人が多かったみたい。練習の時は急いで精一杯だったし、気が付いてなかったけど。

応援団って、信頼関係がとっても大事らしいです。仲間を信じて危険な演技をするわけだから、わかる気はするんだ。

普通はみんなで時間をかけて、練習して成功させていく部活。その分、わたしみたいなぼっと出で、しかもすぐ色々できた人間は、悪目立ちしちゃったんだ。

わたしはただ、手伝うならちゃんとしなきゃって、がんばっただけなのにな……みんなも、急な代理に感謝はしてくれてるんだけど、人の心って複雑だなあ……しゅん……。

団長さんがわたしを可愛がってくれるのも、他の人にはあんまり良く映ってません。団長さんにとっては、最後の大事な試合の応援をきちんとできるのが嬉しくて、わたしに大袈裟に感謝してくれてるみたいなのに。

何かこれ、何だろう……ちょっと、覚えがある感覚だなあ……。

何だったっけな……何でだろう、あんまり、思い出しちゃいけない気がする……。

それでも、実際の演技と私情は別物です。失敗したくない思いはみんな同じだから、最初のセレモニーは、二つの高校の野球部員の歓声の中で、しっかりと終えられることができました。

広い校庭で、サトシ達と同じ側でわたし達のために作られた特設テントの中で、団長さんが少し申し訳なさそうに、わたしに声をかけてきました。

「ごめんね、楢さん。後は好きにしてくれていいよ。あ、でも、試合終了が近付いたら電話するから、スマホは持って出てね？」

すっかり忘れてました。がーん、という顔で、わたしはゆっくり頷きます。

ジャージもスマホも、悪魔使用の PHS も全部バスの中です。やっぱりこれは、サトシに相談して取りに行かないと。

居心地が悪くなっちゃったから、山には遠慮なく行けるんだけど、サトシはちょっと残念そうでした。でもそれを隠して、笑顔でわたしを駐車場まで連れてってくれます。

うう、これも何だか、今日は辛いな……スマホのお友達やアクマさんなら、元々気配がない相手だから、こういうのは感じないですむのになあ。

「運転手さんにはさっき電話したから、ほら、バスに戻ってくれてるぜ」

あのバスはそもそも、サトシのお母さんでわたしのホストファミリーでもある、玖堂さんが手配したものみたい。サトシはとてもお金持ちの子供だから、安全面には注意が必要なんだって。

ドアを開けてもらって、バスの中に置いたままの手荷物から、わたしはジャージとスマホと PHS を取り出しました。

と言っても後の荷物は小銭とハンカチくらいしかないから、もう手提げごと持って出た方がいいかな？

そうして手提げに戻そうとして、ふっと、わたしはあることに気が付きました。

「.....あれ？ 何で.....PHS に、着信？」

日本で主に使ってるスマホならともかく、わたしの故郷の異世界でしか、本来は使えない PHS。

普通の電話からは繋がらないし、番号を知ってる人もそんなにいません。相談所の所長と馨おにいちゃん、咲姫おねえちゃんくらいなのに。

実は悪魔使いなわたしが、契約してる低級悪魔さん達との媒介が、この小さな PHS です。悪魔さんに何かをお願いする時には、ここから連絡します。

でも、着信があれば、PHS に棲んでる悪魔さんが気配で教えてくれるのにな。そんなに距離も遠くなかったし、わたしの直観も冴えてるから、悪魔さんの声が聴こえないとは思わないし.....。

番号も非通知だし、別に大事なことじゃなかったのかな。そう思って PHS を片付けて、運転手さんにお礼を言ってバスを降りると、サトシが何だか困った顔をして駐車場の入り口の方を見てました。

「.....？」

あっちゃあー、と、どうしてなのか、サトシが気まずそうにしています。その視線の先には、サトシ達の試合相手のユニフォームを着る高校生と、その男の子に怒られながら、入り口の鉄柵にしがみつく小さな白い服の女の子がいました。

「あれ、確か今年卒業のエース、当真先輩じゃん.....何だろ、何か揉めてる？」

お人好しのサトシが気になって仕方ない、今まさに始まっているはずの試合の相手と、謎の小さな女の子の言い合い。

わたしには直観で、兄妹だなんてすぐにわかりました。

そしてこの後、わたしの唐突な残業が始まります。

* * *

補欠選手のサトシはともかく、もう試合が始まっているのに駐車場にいる人に、サトシが野球帽を脱ぎながら駆け寄りました。

「当真先輩ー！ どうしたんすか、まだ出てなくていいんすかー！」

「……？ お前、玖堂……」

大人しそうですが無愛想な、ほとんど角刈りの先輩さん。サトシとは練習試合の時にあったことがあるみたいです。

先輩さんはサトシを横目に、まだ入り口にしがみついた白いパーカー姿の女の子を、苦い顔をして見下ろしています。

「ほら、いい加減にしてくれよ、^{みお}滯。校庭に戻らないならさっさと帰れ。応援してくれるなら戻ろう、それだけだろ」

短い三つ編みの女の子は、きっと先輩さんを見上げます。

「いやっ！ お父さん、今日は来るって約束したんだから絶対に来るの、ここで待ってるの！」

女の子——ミオは、お父さんが車で来る姿をイメージしてるみたいで、わたしの中にミオのお父さんがぼんやり映し出されます。

本当に冴え過ぎだなあ、わたしの直観。それにしても、先輩さんとよく似て無愛想な、そして元気の無さそうなお父さんだなあ……。

先輩さんは苛々とした様子で、駐車場の入り口から動こうとしないミオの腕を掴もうとしました。

でも、その時に一緒に言った言葉が、とても逆効果だったみたいで……。

「こんな所で滯を一人にしたら、おれが母さんに怒られるだろ。頼むから言うことをきいてくれよ、父さんなんてどうせ来ないって最初からわかってるよ」

それを聞いたミオが目を見開いて、先輩さんの手から素早く逃がれました。溢れる激昂がダイレクトにわたしに伝わってきて、わたしは思わず息を飲んじゃいます。

ミオはそのまま、涙声で叫びながら、入り口から走って出ていっちゃいました。

「ケータの大ばかーっ!! もうっ、知らないからっ!!」

「って、ちょ、滯……!?!」

先輩さんは一瞬、追いかけてやろうとして、でも試合のことをすぐに思い出します。切札的な扱いをされてる人みたいだけど、出番はそう遠くないってことだよな。

帰れて言ったのは先輩さんだし、無理もないかなって、わたしは思っちゃったけど……でも、まだ小学生くらいのミオを、一人で帰して大丈夫なのかな？

サトシも補欠とはいえ、出番が来ないとは限らないし、困って立ち尽くす二人に、わたしは珍しく、自分から声をかけました。

「わたし……探してこようか？」

「——へ？」

「って、楡、さん？」

「何だか放っておけない、そんな感じのミオです。ここで一番、自由に動けるのはわたしだし、人探しはそんなに苦手じゃないし。」

「でもそんな、知らないあんたに——」

「いいの、楡さん!? ごめん、絶対お礼きちんとするから、ここはちょっとよろしくな!!」

試合が進んでるはずの中、ハラハラしてみたいいなサトシが、強引に先輩さんを校庭方向に引きずり始めました。

「っておい玖堂!? 引っ張るなよ、何様だよおまえ！」

「当真先輩、大事な引退試合っすよ！ きっと監督怒ってるっすよ、おれも一緒に謝りますから！ っていうかエースのいないフジ校に勝っても嬉しくないっすから！」

有無を言わず連れてくサトシは、ひょっとしたら、部活中は漢気が増すのかもしれないなあ。自分が責任取る！ って背中を示してるよ。

そんなことを考えながら、わたしも二人に背を向けて、ミオが駆けてった方を目指して駐車場を出たのでした。

わたしは直観でだけど、話の流れから、サトシにも先輩さんとミオが兄妹だってわかったみたいです。

大事な引退試合が始まっているのに、まだ応援に来ないお父さんを、ミオは怒ってみたい。確かに今日は沢山の家族が応援に来てて、広い駐車場も車がいっぱいです。

「あ、これかな..... ミオ、足跡.....」

高校の近くだと、他にも人の気配が多過ぎて、わたしの直観でも、会ったばかりのミオだけを辿るのは難しいです。

敷地内はキレイに舗装されてるけど、一歩出ると林道の駐車場は裏手にあって、歩いてくる人は多分通らないから、ミオらしき足跡を見つけるのは何とかかりました。

「すごく足早いし、この辺りの道もよく知ってるはずだよな..... もう見えなくなっちゃってる.....」

そんなに時間がたってないのに、ミオの姿は何処にもありません。林道から脇にそれた方が、お家への近道なのかな？

もう少し高校から離れないと気配も探れそうにないし、まずはとにかく、小さくて浅い足跡を、目を凝らして必死に追います。

こういうのは、目がいい兄さんの方が得意分野だろうな..... 破れた背中を下手くそに自分で縫った赤いジャージを着ながら、探偵見習いなわたしの人探しが始まりました。

林道で、土の道路上の足跡は、少ししてから脇にそれて林に消えちゃいました。後は草が不自然に折れてる部分——踏み跡を辿るしかなさそうです。これは山好きなわたしでないと見分け難いだろうな。

「そろそろ気配、わかる、かな？」

すうと息を吸って、林の中にわたしの直観のアンテナをのぼします。

進行方向に、いくつかはある、色んな人間の気配。草の踏み跡とそれを一緒に追って、わたしが行く方に誰かはいること、確認しながら行かないとです。

それがミオじゃなかったら、後は四方八方、気配だけ頼りに当てずっぽうしかなくなっちゃうね。それだと最後のセレモニーの時間が間に合うかな、ちょっと心配。

「でも……この怒ってるのは、多分、ミオだよな」

踏み跡の先に感じるのが、一番ぶんぶんしてる気配だから、多分大丈夫だと思います。

ミオもかなり、山に慣れてるみたい。普通の人は通らないような獣道を使って、何処に行こうとしてるのかな？

大人しげで無愛想なお兄さんと、感情的でマイペースなミオ。何だか、わたしと兄さんみたいだなあ。

わたしはミオみたいに、ぶんぶんはしないけど、心のままに動くのは一緒だと思う。

林の中の獣道は、いつの間にか森ほど深い所に入って、草むらより更に歩き難い、岩肌剥き出しの地面になってきました。

ざらざらの砂の地表で、足跡はほとんど追えなくなったけど、代わりにミオの気配が近くなってきます。

同時に伝わる、一際強いその心に、わたしは、あれ。と……不意に、体が硬直して立ち止まりました。

「……父さんの……バカ……？」

ぎゅっ、と。

赤いジャージでふさぐわたしの胸が、唐突に不穏な鼓動を打ち始めます。

「怒ってる、だけじゃない……………ミオ……？」

人気のほとんどない林の奥で、ミオの心だけがしっかり届くようになってきたから。

そしてそこが、わたしが好きな山の中——それしかほとんど知らなかった、昔のわたしの世界に近かったから。

「父さんの……嘘、つき……？」

急に、涙がどっと溢れました。

あれ、おかしい。これはミオの心じゃない、ミオは泣いてなんかいない。それなのに、何でわたしは、勝手に胸の奥が痛いんだろう？

「ホントの父さんじゃ……ない、くせに……………」

刺さるように出てくる、ミオに引きずられた誰かの言葉。

それは紛れもなく、わたし自身……意識の底に沈み続けた、わたしの忘れたかった心で……——

何かを探して、無心に暗い森をさまよう、一人ぼっちの赤いわたし。
同じことが大分前に、もう随分と前に……——

わたしが大昔に攫われて、長い時間がたった後に。
悪魔使いになってからの記憶。その真っ黒な痛みが、不意に浮かび上がってきました。

沢山の悪魔を抱えて、もっと強い悪魔の言う通りに、悪魔のために動いてきたわたし。
途中で突然現れた父さんと兄さんは、悪魔達にとっては、わたしをたぶらかす邪魔者
なだけでした。

だから確か、ここみたいな森の中で……わたしと父さんは、一度、本気で戦ったこと
があるんです。

——何でこんなことをするんだ！ 俺達と一緒に来るんだ、そんな武器は今すぐに捨て
てろ！

必死に叫ぶ父さん以上に、悪魔がいなきゃ戦えないわたしは必死だった。気が遠くな
るくらいに長い間、暗くて寒いだけの所で、わたしは誰かを待っていました。

攫われた後、サツリクの天使になったわたしを、見つけてくれたのは悪魔だった。ヒ
ト殺ししかできないわたしと、ずっと一緒にいてくれたのも悪魔だった。

なのにどうして、悪魔を捨てろなんて言うの？

父さんなんてとっくに父さんじゃない。わたしを助けるのは諦めたくせに、諦めなかつた兄さんのために、兄さんを守ろうとついてきただけなくせに——

ぞわりと、背中の中を、息の止まりそうな寒気が上がります。

何なんだろう、これ。わたしにもこんな、真っ黒な心が潜んでたんだ。ミオの怒りよ
りずっと強い、わたしの父さんへの激しい感情。

立ち止まってる場合じゃない、ミオの気配が離れてくのに、涙が止まらなくなって両
肩を抱えちゃいます。

「違うよ、それは違うよ……父さんは仕方ないの、だって……」

わたしの兄さんと父さんは、本当の兄さんと父さんだけど……。

同時に、兄さんも父さんも、わたしと血はつながってません。兄さんと父さんもそう
で、わたしと母さん以外は、生き物としては、本当の家族とは言えないんです。

——え？　アークちゃんは、ずっとここにいるの……？

サツリクの天使だったわたしは、ずっと、暗い水底にいました。

わたしに気付いて、水底から引き上げてくれたのが、咲姫おねえちゃんの悪魔と……わた
しにこの紫苑色の髪をくれた、「霧」の名を持つ誰かでした。

——ずっと、独りなの？　それならこっちにおいで……私が、アークちゃんの水の器
を作ってあげる。

日本風に言えば、悪魔使いに転生したにも近いわたし。たった一人で、全然知らなかつ
た場所へ。

でも、わたしと兄さんだけは、憶えてるの。わたし達が本当は、家族だったっていう
ことを。

「だって……父さんは……わたしのせいで……」

駄目だこれ、こんなこと、今は思い出しちゃいけない。

サツリクの天使になったわたしは、普通の人よりはるかに、長い時間を過ごしてきた
から。

実際に血がつながった父さんと母さんは、とっくの昔に死んでしまってる。そんなこ
とを、よりによってこんな時に、思い出さなくていいのに……——

水の器に引き上げられて。悪魔使いになったわたしの前に、兄さんと一緒に現れたの
は、兄さんが見つけた「父さんと同じヒト」です。

わたしを助けるのを、最期まで諦めなかった兄さんは、わたしのことを憶えていてく
れた。意識の底に沈められても、「妹を助ける」願いを想い続けてました。だからもう一
度、わたし達は会うことができた。

悪魔に言うなりのわたしは、闇雲に悪魔に従ってたわけじゃない。代わりに「兄さん
がほしい」のが、わたしの条件でした。悪魔はちゃんと、叶えようとしてくれたもの。

それを阻む今の父さんは、わたしには邪魔だった。だから本気で戦って、そして——
わたしは負けたんです。

——……一緒に来るんだ。お前達のことは、絶対に……何をしてでも、俺が助けるから。

嘔吐きって。あの時はそう思ったけど、わたしは負けちゃったから。

今の新しい父さんには、他に大切なものが、山のようにあった。ほとんど初対面のわたしの優先順位なんて、それに比べれば下の方でした。

今日の団長さんと同じだよ。一時的でも、大事な新メンバーと思ってはくれてるけど、元からの仲間の方がそれ以上に大事。そんなのは当たり前のことだもの。

……急に、すごく哀しくなって、その場に座り込んでしまいました。

わたしの直観は、こういうのが悪いところです。考えなくてもいいことまで、時には感じ取ってしまうから。

膝を抱えて、めそめそ泣き出したわたしを、物言わぬ森だけが見守っていました。

* * *

すまない……って。わたしの本当の父さんは、最期にそう言いました。

わたしを助けられなくて、ごめんって。わたしが生きてると——もう一度会えると、信じられなくなって、ごめんって。

思い出すと、堰^{せき}を切ったように溢れ出す、遠過ぎる昔の残酷な記憶。

ミオを探さないと、こんな山の中でうずくまってる場合じゃないのに、わたしはぐずぐず泣き続けます。

攫われたわたしを守ろうとして、本当の母さんは殺されました。そこからずっと、行方不明だったわたし。母さんもわたしも殺されたと思った父さんは、その耐え難い憎しみから、誰彼構わず殺す化け物になっちゃったんです。

わたしを探してる間は、父さんも我慢してた。でもいつまでも会えなくて、父さんは絶望しちゃって、その間にわたしは、悪い化け物を処刑する存在、サツリクの天使に育てられました。

化け物と人間の混血だった父さんと母さんの、人間の血だけをひいて生まれたわたし。化け物なのに人間の心を持った父さんは、普通よりも不安定だったようでした。

「悪いのは……いなくなったわたしなのに……」

一番悪いのは、わたしを父さん達から攫ったヒト。それはわたしだってわかってたけど、その時正しかった選択は、暴走する父さんを止めることでした。

「だってそれは……わたしにしか、できなかったから……」

兄さんだけが、わたしの閉じ込められた心を見つけてくれた。果てしない無謀なことと知りながら、わたしを探し続けてくれたんだから……。

だからわたしはミオみたいに、兄さんに、「大バカ」は言わないだろうな……——ふっと、そんな現実^{いま}のわたしの心が、兄さんを想ったことで持ち上がりました。

「……そっか……『時間』って、大事、なんだ……」

兄さんとわたしは、実の父さんがいた頃には、本当に再会はできなかった。でも、それだからこそ、今のわたし達があるんだよね？

「兄さんが、新しい父さんと母さんを見つけてくれて……わたしも悪魔とがんばったから、兄さん達に会えたんだよね……？」

知らない所で、良いか悪いかもわからないことをしながら待ち続けるのは、とてもしんどかったけど。

それから今日まで、兄さん達と家族みたいに過ごして、それでやっと、わたし達はまた、本当の家族になれたんだよね。

応援団でも、これはきっと同じだよね。もうちょっと一緒に過ごしてみないと、受け入れてもらえなくても仕方ないよね？

ここまで思うと、わたしはどうして、今へたり込んじゃったのかがやっとわかりました。

「情けないなあ。こんなに気にしてたんだ、わたし」

よし！ と立ち上がって、スカートの土を払いながら、ミオの追跡を再開します。

「違うよ、わたし。わたしの居場所は、元々ここじゃないんだから」

まとまり切っていない応援団の中で、ごめんねって、団長さんに言われちゃった。わたし、団長さんにわかるほどしょぼんとしてたの、自分でわかってなかったんだ。

ミオの心に引っ張られて、辛いことを思い出しちゃったのも、わたしが弱ってたからなんだ。攫われた頃のわたしって、攫ったヒト達を除いて、周りにはほとんど嫌われてたから……。

「拒まれるのは、辛いけど……そういうことも、あるよね」

人間に戻れてからは、優しい人達ばかりに会えたから、わたし、甘え過ぎてみたい。
世界の全部がわたしの味方じゃないのは、当たり前のことだよ。

わたしは「仕事」でここに来たんだ。わたし自身の、山に行きたいって報酬のために。
それで文句を言ってるよりも、ちゃんとここを楽しまないと。ミオを探すことだって、
そのオマケみたいなものだしね。

そうして何とか、気を取り直した矢先に、りんりんんとスマホに着信が入りました。
えっ、もう試合終了!? どきどきとしたわたしに、電話をかけてきたのは、団長さんから
わたしの連絡先をきいたサトシでした。

「ごめんね楡さん、勝手に番号きいて! あのさ、さっきの子だけど、家には帰ってない
みたいなんだ。楡さんはもう見つけた?」

あの後、ミオのお兄さんがお家に電話したみたい。わたしはサトシに、ごめん、まだ
だよって返します。

そう言えば、サトシのお母さんからもらったスマホなのに、サトシと電話したことは
なかったなあ。そんな不思議なことに、わたしは今更気が付きます。

「当真先輩は、高校からなら、多分家か川にいるだろうって。悪いけどそのまま、搜索お
願いしていいかな?」

「うん。重要な情報、ありがと、サトシ」

「え、重要!? うわあ、楡さんに褒められちゃった、らっきー過ぎる今日のおれ!」

すごく重要でした。何でかという、さっきから急に、ミオの気配が弱くなっちゃっ
たから。

あれ、これじゃ、何を追いかければいいんだろう。焦ったと同時に、スマホが鳴った
んだけど、何でか喜んでるサトシを置いて、わたしはさっさとまた歩き出します。

ミオの気配が弱まった理由を考えながら、水の匂いがする方を目指して、道なき道を
前に進みます。崖に近い斜面を一気に滑ったり、木を伝って歩ける所に降りるのは、ど
れくらいぶりだろう.....山ってこういう所が楽しいんだ。

靴が大分汚れちゃったけど、応援団ではわたしは中の方にいるから、気付かれないと
いいんだけど。

「ミオ、これ.....寝ちゃった、かな?」

あんまり怒ってたから、怒り疲れたかのように、ミオの気配はさっきから静かです。

ほどなくして、川辺に辿り着きました。行きにバスで通った川の、上流だと思うんだ
けど。

ここからミオを探すには、どうすればいいかな。更に上流に行くか、それとも下流に
行くか.....簡単なようで、正反対の方向だから、難しい選択です。

「あの小さな体だと.....下りることはできても、上るのは難しいよね.....?」

ここより上流に、誰か気配がないかは、念のために必死に探します。下流は普通に、橋
を通る人とか沢山の気配があるから、ミオの気配はもうわからなくなってます。

少なくとも、上には全然、人はいないと思う……気配の結果と、思考の結果を合わせて、わたしは下流に行くしかないよね。

それからかなり、危ない所も通って、必死に川を下りました。

これ、ミオ、絶対違うルートを使ってるよね。じゃないとこんな急流、わたしでも苦労するよ？

「それとも……こっちじゃなかったのかな……？」

不安が段々、強くなってきます。そのせいで余計に、距離が遠く感じられたのかもしれない。

一番急な所を過ぎた後は、途端に川が広がって、ミオが反対側にいたらどうしようって、そんな心配までも加わってきます。

そうしてやっと、バスで通った橋の下まで、川下りをしてきたところで。麓の陰で、コンクリートの上で丸まって寝ているミオを見つけた時には……わたしはふうっと、両胸を撫で下ろしていました。

「良かった……わたし、運が良かった……」

もうちょっとカッコ良く、探偵的な推理をした上で、確信してミオを見つけられたらもっといいんだけど。わたしにはまだまだ、これが限界だなあ。

そもそもわたしから、ミオの居場所、手掛かりを尋ねて電話するべきだったよね……でもサトシの番号もお兄さんの番号も知らないし、それは無理だったかな。

眠るミオの隣に座って、そっと頭を撫でると、ミオの目元に小さな涙の痕があるのが見えました。

ここまで近くにくると、ミオが見てる夢までわたしの直観には伝わってきます。

「……そっか……ミオは、そうだったんだ……」

父さんは父さんじゃない。わたしを引きずったミオの心。ミオは実際に、ミオのお母さんの連れ子みたいです。

ミオの夢では、お母さんに連れられるミオと、お父さんに連れられるお兄さんがいる。おぼろげなイメージだけが、じっくりわたしに伝わってきます。

ミオのお母さんは、ミオと一緒に、とてもエネルギーがある感じ。でもお父さんは、大人しそうなお兄さん以上に、何だか疲れてしんどそうです。

夢って不思議だよな。四人で初めて出会ったミオ達が、そのままお父さん抜きで、お母さんの運転で高校まで来ました。

——今日、お父さんは、来れないかもしれないって。お父さんもしんどいの、代わりに敬太を応援してあげてね、滯。

これは多分、今日の朝のことだよね。その時からずっと、ミオ、怒ってたんだね。強く諭すようなお母さんには、何も言い返せなかったから。

少しすると、頭を撫で撫でしてるわたしに気付いて、ミオが目を覚ましました。
……え？ って、ぼかんとした顔で、知らないわたしをミオは見上げてきます。
わたしも、何て説明すればいいかわからなくて、何となくじっとミオを見つめてたら……あんまり人見知りしなさそうなミオは、思わぬことを、最初に口にしました。
「おねえちゃん……天使？」
「——え？」
「ありがとう、ミオのこと、なでてくれて。何だか、すごく、気持ちが良かった気がするの」

そう言えば、夢の最後の方は、ミオが怒った場面のはずなのに、寝てるミオの心は静かだったな。お母さんに言われたことを、冷静に思い出してた感じ。

でもやっぱり、天使？ なんてきかれると、わたしはどう答えていいかわかりません。
ううん、確かに昔はそうだったような、でもそれは怖い方の天使だったような……今は悪魔使いだし、むしろ悪魔に近いんだけど、そんなことを初めて会うミオに説明するのもおかしいし……。

わたしがきょとんと黙っていると、ミオは元気に起き上がって、強そうな笑顔でにかつとわたしをまっすぐに見ました。
「あたし、トウマ・ミオだよ！ ミオって呼んでいいよ、おねえちゃんも名前教えて！」

ううん。わたしよりよっぽど、喋るのがきっと上手いなあ、ミオって。
わたしもようやく、ミオにつられて笑いながら、当たり前の自己紹介を言うことができました。

「わたしは、ウツギ・ネコハ。わたしもネコハでいいよ、ミオ」
どうしてわたしがここにいるのか、それもミオは、別にどうでもいいみたい。知らない相手なのに、大らかだなあ、すごいなあって思います。
ネコハ？ うわあ、かわいい、ネコネコ！ って、妙にミオが嬉しそうだから、わたしも自然と嬉しくなったのでした。

* * *

それからミオと、二人で小さな堤防に座って、川を眺めながらのお喋りが始まっちゃいました。
「ミオはね、今日はほんとに、お兄ちゃんの応援に来たんだよ。でも、やーめた！ やーめーっぴ！」

「え……どうして？」

「ケータが悪いんだよ！　ほんとはお父さんに来てほしいくせに、どうせとか言うからさ！　お父さんだって、ケータのためならがんばるって、ミオ知ってるのに！」

わたしが赤いジャージを着て、ユニフォームが半分見えてないから、対戦校の応援団だって、ミオはわかってないみたい。

ここにいる理由も話しそびれて、ミオの話がどんどん先に進むから、わたしは高校に帰ろうって言い出せなくなってます。

「ケータはエースなのに、今まで一回も、お父さんは応援に来てないんだよ。だから今日だけは、最後だから、がんばるって約束してたのに！　お父さんもケータもウソツキなんだよ、もう知らないから！」

「……………」

大事な引退試合、何が何でも、がんばりたいんだって。

団長さんも、同じこと、思ってたなあ……そんなにも大事なことだったんだね、普通の人間の感覚だと……。

そうなると、空いた時間は山で遊びたいってわたしの姿も、他の皆には印象が良くなかったんだろうな。人間世界のお仕事って、難しいね。

わたしは話についてくために、気になるところに質問をしつつ、ミオにちよくちよく相槌を打ちます。

「お父さんは、お兄ちゃんのためなら、がんばれるの？」

何だかそれは、よくわからないけど、ひっかかっているな。

どうしてなのかは、ミオがすぐに、わかりやすく答えてくれました。

「そーだよ！　ケータと夜には、よくキャッチボールしてるし、ミオの前だといつも嫌そうなのに笑ってるし！　別にいいけどさ、今日くらいはホント、しっかりしてほしかったな！」

思わず、胸が詰まりました。

ミオとお父さんは、血がつながってない。わたしがそれを知ってるって、ミオは当然知らないから、さらりと言ってるみたいだけど……。

実の子供の、お兄さんのためならがんばられても、ミオのことは嫌いって……そういうことになっちゃうのかな？

わたしが声を呑んだことに気付いたのか、ミオはうっぷんを晴らすように、ミオのお家の事情をそのまま続けます。

「お父さんね、いつもお家にいるんだよ、それなのにミオとは遊んでくれないの。お母さんもワガママ言っちゃだめって怒るし、ミオはサベツされてるんだよ！　そんなの気にしてないけどね、ミオは強いからね！」

不敵そうに、笑いながら言うミオは、友達とかにも同じように話してるんだと思う。
そこには不満というより、何というか、ミオなりの優しさがあって、わたしはちょっとじんとしちゃいました。
「……ミオ、強いね、本当。お父さんは遊んでくれないけど、ミオは気にしてないんだね」
「そーだよ！ ミオ、気にしてないもん！ でもさ、ケータの応援くらいって思うじゃん、あんなにみんな、親がいっぱい来てるのにさ！」
ミオは多分、本気でお父さんに嫌われてるとは、思っていないみたい。しんどいのはわかかって、だから「気にしてない」って言えるし、「サベツ」は冗談として言って、ミオなりに笑い話にしてるんだと思う。
それが感じ取れただけでも、わたしは少し、ほっとしました。
ミオ、すごくいい子だと思うな。強気以上に強がりなのが、ちょっと気になるところではあるけど。

血がつながってない親子って、どうやって仲良くしていくか、簡単にいくとは限らないよね。わたしもそれは、よくわかるから。

だから何となく、わたしはあっさり、それを口に出しちゃいました。
「……うん。遊んでくれなくてもいいけど、応援くらい、一緒にしてくれてもいいのにね」
「そーだよ、そー……って、え？」
「しんどいから遊べないのは、しょうがないよね。でも……せっかく、一緒に何か、できそうだったのにね」

呆気にとられたように、ミオが横を向いて、声も無くわたしを見上げてきます。
強がりな目が抜けたミオの大きな目を、わたしは何も考えずに、じっと見つめ返します。
だってそれは——わたしがミオなら、そう思うだろうから。
「ミオもお父さんも、お兄ちゃんを応援する気持ちは一緒なのに。そういう時くらい……わたしなら、父さんと一緒に、何かしたいけどな」
「……………」

黙り込んだミオが、地面についた両手を握りしめて、息を飲みます。
両目に途端に、涙が溢れていくのを見て、あちゃ……と、わたしは、自分のウカツさに気がきました。

あんまり関われないお父さんと、一緒に何かしたい。血がつながってなくても、ミオはきっと一生懸命、仲良くなろうとがんばってきてる。

お兄さんのためだけなら、あんなに怒らないと思う。今日の約束、すごく楽しみにしてたんじゃないかな、ミオ……。

それを、思った方がいいけど、すぐに言うのは、多分良くないよね。ミオがぼろぼろ泣き出してから、わたしは遅ればせに悟りました。

「.....わたしにも、兄さんがいるから。ごめん、わたしなら、だったんだけど.....」

「.....～～!!!!!」

わたしの方に体を傾けたまま、声を上げないように、必死に我慢して泣くミオ。何だかとっても、申し訳ないです。

でもミオは、わたしを悪く思っていない。むしろ、心配をかけまいとして、大泣きするのを堪えてるみたい。

強がりだなあ、本当に.....これ、更に慰めようとしたら、逆効果な気がする.....。

その後は何も言わずに、ミオが落ち着くのを待っていました。泣きたいだけ泣いてから、ミオはふん、と、元通り川の方を向いて、怒ったような顔で座り直しました。

しばらくの間、居心地は悪くない沈黙。ミオが必死に、自分の心を見つめてるのが伝わってきます。

わたしの前で泣いてしまったことを含めて、ミオは自分がどれだけ、お父さんとの約束を大事に思ってたか、はっきり自覚したみたいです。

そうして、わたしの方は向かずに、灰色の川面を見つめたままです。

ミオはさっきと打って変わった、小さな声でそれを呟きました。

「.....しかた、ないんだよ.....」

「.....？」

「お父さん.....病気、なんだって。だから、しんどいから.....ミオがいると、よけいにしんどいんだよ、きっと」

「.....——」

ケータのためならがんばるって、知ってるのに。

最初にそう言ったミオは、本当の本当は.....気にしてないなんて、強がりの大嘘なんだ.....。

嫌われてるわけじゃなくても、大切には思われてない。もしかしたら、迷惑になるかもしれない。

今日もひょっとしたら、お父さん一人なら、応援に来れたのかもしれない。そんな風に考えて、ミオが高校から出てきたんだって、やっとわかったわたしは.....今日一番の大ウカツでした。

どうしよう。今前にいる、ミオの気持ちはわかっても、会ったことのないお父さんの心までは、さすがにわかりません。

ミオの心にも、気付くのが遅過ぎました。兄さんならすぐわかるだろうに。

「……………」

俯いてしまってるミオに、何て言葉を返せばいいんだろう。このまま放っておくのは、無責任だと思う。

ミオを泣かせてしまったのはわたしだし、そもそもわたしは、ミオを探しにここまで来たんだから……。

考えないと。わからないなら、探偵なら、考えてこたえを出さないと。じゃないとわたしは、何のためにここにいるんだろう。

でも、どう考えても、お父さんの心なんて推理できるはずがない。全然手掛かりがなさ過ぎるから。

それならまずは、外堀をかためないと……そう思って、辛い話とはわかりながら、わたしは質問を返しちゃいました。

「ミオはどうして……そう思うの？」

自分がいれば、お父さんは「余計に」しんどい。遊んでくれないとか、嫌そうな顔をしてるとか、いっぱい情報は先に聞いたけど……それは病気だからって、ミオも半分、納得はしてる。

だからそこで、納得し切れない一番の理由を、わたしはあえてきかないといけませんでした。

そうでないと、下手に言葉をかけても、傷付けてしまいそうで。

ミオのこたえは、わたしが予想してた通りでした。

「……あのね。ミオは、お父さんの、本当の子供じゃないの」

大事なのは、それをわたしに、「答えてくれるかどうか」。わたしが「何も知らない人間」のまま、適当なことを言ったって、ミオは嫌だと思うから。

だからわたしは、ほっとしながら、わたしのこたえを返すことができました。

「そうなんだ。……それ、わたしもだよ、ミオ」

「……え？」

わたしと今の父さんも、血はつながってない。それをそのまま、ミオに伝えます。

「でもね。本当のお父さんじゃなくても、たとえば前世では、お父さんだったかもしれないよ。ミオがお父さんのこと、嫌いじゃないなら、一緒にいる人って——何か縁があって、一緒にいるものなんだよ」

「……え……えええええ？」

わたしはとても、大真面目にがんばって、いつもより沢山喋ったのに。ミオは何でか、暗い顔を吹き飛ばして、大笑いを始めちゃいました。

「おねえちゃん、ちょっと、ホントに天使ー！ 何それ、今まできいたことないよ、そんなお話！」

「う……ううん……」

「あぶない人って思われちゃうよ！ うん、ミオは嫌いじゃないから、別にいいんだけど！」

嫌いじゃない。そこにはわたしとお父さん、両方含まれてること、ミオの次の苦笑いで伝わってきました。

「ホント……そうだったら、いいな……」

とりあえず、苦笑っぼくても、ミオが気を取り直してくれたのは良かったんだと思う。簡単に解決することじゃないと思うし。わたしにできることなんて、後は多分、ミオと一緒に高校で応援をするくらいで……。

そんなわたしを厳しい現実突き落とす、無情なスマホの着信音が、そこで高く鳴ったのでした。

「——！」

「？」

着信の理由を悟って、青ざめたわたし。不思議がるミオの横で、わたしはさっぱり、時間を考えてなかったことを思い出します。

「あ、楡さん？ 今もう七回裏だから、そろそろ帰ってきてもらえる？ それじゃ、よろしくねー！」

えっと……この橋から高校まで、バスでも少しかかったよね……急いで走って、間に合うのかな、これ。

いやいや……そんなわけないよね、わたし、ただの人間の女の子だよ？

こっちも大事な仕事なのに、この痛恨のミス。わたしはなりふりかまわず、この辺りに詳しいはずのミオに助けを求めました。

「ううん、ここからすぐ上にバス停があるよ。間に合うかはわからないけど、急ご！」

そう言ってミオは、橋の上へ出られる登り口へ、あわあわするわたしを案内してくれたんだけど——

その古い階段から、あんまり不意に、しんと降りてきたあるヒトの姿を目にして。

わたしがこれ以上ないくらい、飛び上がって動揺する姿を、ミオには見られることになっちゃいます。

* * *

——まったく、と。珍しい知らない車を、すごい速さで運転しながら、警おにいちゃんが大きな溜め息をふうつつきました。

「七人乗りを借りといて良かったぜ。当たるんだよなー、こーいう時の俺の判断」

ど真ん中の席でミオと座って、ううう、とかしこまるわたしの後ろで。三列目から、聞き慣れた声が返っていきます。

「さすがあ、鷹野先輩ですねー！ レンタカー一つにもぬかりなし、ねー、ほーちゃん？」

「ま、まあね……そういうことに、しといてあげる……」

応援団をするわたしの応援に来てくれたっていう、ユイとホナミの嬉しい姿に、わたしの隣で、同じく応援に来てくれた咲姫おねえちゃんが笑いました。

「ウソウソ！ 予約してなかったから一番安いコンパクトカーが空いてなくて、朝にも借りれなかっただけじゃない？ 騙されちゃダメだからね、結葉ちゃん」

「てめえ、開会の方が見れなかったの、まだ根に持ってやがんのかよ。そう言うんなら自分で車の手配くらいしやがれ、バカ女」

いつも寝坊がちな馨おにいちゃんと、朝型の咲姫おねえちゃん。朝には間に合わなかったけど、わたしの応援に駆けつけてくれたら、肝心のわたしが高校にいないくて、サトシから事情をきいて、わたしを探しに来てくれたみたいです。

でもわたしが、一番驚いたのは、そこじゃなくって……。

「大体、車を待ってたから、コイツを呼ぶ時間もあったんだろーが。コイツなしで気付かれずに猫羽をすぐに探せって、いくら俺でもさすがに時間かかるぜ」

馨おにいちゃんが厳しく文句を言いつつ、空いた左肘で、助手席に座るヒトをこつんとこずきます。

まだ驚いてて、ほとんど喋れないわたしの代わりに、そのヒトは馨おにいちゃんにお礼を言ってくれます。

「本当、ありがとう、馨。借りは返す、いつかその内」

助手席で困ったみたいに、硬く笑うそのヒトの首に、咲姫おねえちゃんが真後ろから椅子ごしに抱きつかしました。

「別にいいんだよー、気にしないで！ 火療^{かりょう}も困ったでしょ、急に猫羽ちゃんの晴れ姿を見に来いなんて言われてもねえ。それでも付き合ってくれる辺り、さすがだよねえ、お父さん！」

咲姫おねえちゃんが、ともすれば馨おにいちゃんに近い程に心を許して、べたっと甘えられる珍しい銀髪のヒト。

名前も多分、こっちではそうそういないと思う、「ウツギ・カリョウ」……つまり、楡猫羽なわたしの父さん。

わたしと同じPHSを持ってて、それを使ってわたしを迅速に探し出して、橋の下に迎えに来てくれた父さんは、少しだけわたしに振り返りながら、いつものように不器用に笑ったのでした。

馨おにいちゃんが試合終了に間に合うように、猛スピードで高校に戻ってくれて、とにかく何とか車を出たわたしを、ミオが心配そうに見上げました。

「大丈夫、おねえちゃん？ ビックリし過ぎて、何だかヘンな感じになってない？」

「……うん。わたしもあんまり、最近父さんと喋らないから、困ってるんだ」

「ええー、そうなんだ。そんなふうに見えなかったけどなあ。お父さん、うれしそうだったじゃん」

わたしの PHS には一回だけ、伝波の違いか非通知になった、父さんの着信があったんだけど……元々、わたしを驚かせようって、みんなしてこっそり応援に来たみたいですよ。

その通りにわたし、ものすごく驚いています。これ、体ががちがちなんだけど、この後うまく演技できるのかなあ？

わたしはまず、ミオをお兄さんの所に連れていかなきゃと思ったから。校庭でうちの高校の応援側に行くみんなとは離れて、二人で隅の側溝を歩いて逆側にいきました。

そこでわたしだけでなく、ミオにも待ってたビックリのお話。

ミオが見つかったって、サトシから連絡が入ったのか、駐車場に近い校庭の方に同じように隅を歩いてくる、ミオのお兄さん——……は、今、まだグラウンドに立ってるはずで……。

「——濡……！ どこ行ってたんだ、お前……！」

とても憔悴した顔付きで、ミオに気付いて駆け出してきた、しんどそうな中年の男の人。

ミオのお兄さんによく似た顔を見て、ミオも手をつなぐわたしと同じように、えええ!? と固まってしまいました。

「おっ……お父さん!？」

男の人は本当に怖い顔で、それで余計にわたしもミオも、言葉もなく立ち止まっちゃいます。

「いくら電話しても出ないし、母さんが電話しても出ないし、折り返しもよこさないし!!」

「えっ!? ……あっ!？」

ミオが、子供用みたいな小さなスマホを取り出して、着信履歴を見てあたふたしています。

多分ちょうど、寝ちゃってた時に鳴ってたんだね。やつれてるお父さんは、いつにない剣幕みたいで、ミオはかなり驚愕しています。

それだけ心配だったんだ、ミオのお父さん。それがわかるから、わたしは別に、怖くはないけど……ミオは「嬉しい」を感じる以上に、びくびくしちゃってます。

何か、父さんみたいに不器用で、損なお父さんだなあ。父さんもコワモテだから、子供に怖がられるんだよね……優しい性格なのになあ、おかしいなあ。

でも、通りすがりのわたしのそんな心配は、ミオ達には無用みたいでした。
「無事で良かった……ほら、もう終わりそうだけど、約束通り一緒に敬太の応援に行こう」

動けないミオの前まで来て、お父さんは小さなミオをたどたどしく抱き上げます。

はっとしたミオは、お父さんの首にひしっとしがみついて、いつも通りみたいに強気なこたえを返しました。

「そ、そーだよ、遅いよお父さん！ 早く早く！ 行こ、早く！」

声には出ないように隠してるけど、ミオ、お父さんの頭の後ろで、またぼろぼろと泣いちゃってるね。

お父さんには、涙は見せたくないんだね……わたし、応援してるからね、ミオ。

「お前なあ……こういう時はまず、謝らないといけないんだぞ……」

嬉しかっただろうに、強がりなミオと、ミオの重さを感じてないように歩きながら、呆れたように言うお父さん。これ、どっちも似た者同士……なのかな？

でもお父さんは、こんな切迫した時でないと強がれない、普通のしんどい自分が嫌いみたい。わたしが一瞬、間近で感じたお父さんの心は、そんな苦しい気配でした。

対戦校側の応援に行く、ミオとお父さんの後ろ姿を見送るわたしに、ミオはお父さんにしがみつきながら手を振ってくれました。

「おねえちゃん、ありがと！ おねえちゃんもがんばってね、『前世』だからね！」

それは多分、わたし達二人だけの、笑顔になるための合言葉。ミオが嬉しいから、わたしも嬉しくなって、気が付けばすっかり、がちがちな体は柔らかくなりました。

本当の意味は多分わからないまま、ノリで言ってきたミオに、は……？ と、お父さんがわたしに振り返りかけてました。

でもミオを抱えながらだと、まっすぐ歩くだけで精一杯みたい。お父さんも、何とかなるといいね。こっそり、応援してるね。

何となく名残惜しくて、ミオ達がお兄さんの方に無事につけるまで、その場で見守ってしまいました。

そんなわたしの後ろに、気が付けば、当り前みたいに父さんが静かに立ってました。

「お疲れ、猫羽。さっきのは、猫羽の探偵バイトなんだって？」

「……うん、人探しだよ。解決できて、本当に良かったよ」

ミオとお父さんには、これからも色々あるだろうけど。わたしの仕事としては、これでいいんだよね？

間に合うように戻ってこれたから、ミオもお父さんと一緒に、お兄さんの応援ができる。それが嬉しくて、わたしはちゃんと素直に、父さんに自分の心を伝えます。

「父さんがわたしを見つけてくれたおかげだよ。ありがとう、父さん」

馨おにいちゃんの服を借りて、短い銀髪に黒メッシュと、容姿もほとんどそっくりな父さん。違うのはいつも硬い表情で、おにいちゃんよりぎこちなく笑う父さんは、わしゃわしゃと、わたしの頭を撫でてくれました。

「流惟は来れなくてすまない。ごめんねと伝えてくれと、泣く泣く言われてきたよ」

「大丈夫だよ。そもそも無茶だよ。急に来いと言われてたって、母さんは悪魔なのに」

それでも母さん、残念がってるだろうな。わたしはただ、応援団のヘルプで、ちょっと色々してるだけなのに、晴れ姿って……馨おにいちゃん、案外大袈裟だなあ。

ひょっとして、父さんをからかいたかっただけじゃないかな。いつもそういう感じなんだよね、父さんと馨おにいちゃんって。正確には、馨おにいちゃんの悪魔——龍斗おにいちゃんが、父さんの双子に近い化け物っていうけど、事情は色々込み入ってます。

わたしが待機しないといけない応援団のテントに戻るまで、久しぶりに一緒に歩きながら、わたしは一番気になることを尋ねました。

「兄さんにも会ってくの？ 父さん」

「……知ってたのか。アイツもこっちに来てることは」

まあ、ばれないわけもないか。と、父さんは平静です。

そうでもないんだけどね。わたしには、体の弱い兄さんの気配はわからないから。

「同居の奴になるべく会いたくないからな。一応定期的に連絡しろとは言ってるし、そっとしておくよ」

「そっか……父さんはなぎのことも苦手なんだね」

兄さんを助けてもらってる手前、父さんも水葵には頭が上がらないんだけど。父さん、悪魔が嫌いなのは昔からみたい。そもそも母さんが悪魔になったのも、悪魔に殺されちゃったからだしなあ。

でも、悪魔が嫌いなのに、悪魔使いのわたしは自然に娘でいさせてくれるって、結局「縁」なんだろうな。

嘘吐きって、思っでごめんね。今更だけど、父さん、大好き。

ひしっと父さんの腕にしがみつきながら、応援団に戻ると、行きにはいなかった父さんの姿にみんながすごく驚いてました。

「え、え、うそ、まじ!? 楡さんのお父さん、超イケメンじゃない!?!」

「ていうか楡さん、ハーフなんだ!?! あーもう、それならわかるし、そんだけ可愛くても仕方ないし!?!」

……? 何だかよくわからないけど、あんまり良くないことを言われた気がする……わたし、こういうノリは苦手だから、やっぱり入部は遠慮しよう……。

父さんは父さんで、娘が世話になってます、と顧問の先生と団長さんに生真面目に挨拶してます。帰る時にも、玖堂さんにちゃんと挨拶していくんだって。

わたしは閉会セレモニーが終わったら、帰りは車にさせてもらって、父さんにスマホのお友達を紹介するんだ。ホナミ達の紹介は、さっきにもう終わってるから。

父さん、何て言うかな。何となく、悲しそうな顔で、いつかは卒業した方が.....って言いそうだなあ。悪魔さん達のことも、もう無理には、捨てるとは言わないしね。

.....あれ？ そう言えば、サトシ達の試合.....どっちが勝ったんだろう？

6月初旬 了



-INFORMATION-

ここまでご覧下さりありがとうございました。

★ 2023.2.24：本作公開 (<https://puboo.jp/book/134686>)

☆この後に「番外編」のあるバージョンを3/14以後は固定配信します

☆続編：『迷探偵猫羽の乙女事件簿』 (<https://puboo.jp/book/134653>)

★ 2023.2.22-3.14：星空文庫にて本作のパラレルシリーズ掲載 (<https://slib.net/a/25945/>)

『探偵に悪魔は反則です』(2.22-)・『探偵に天使は味方です』(3.3-)

※本作は「有り得なかった夢」の橘診療所シリーズで、星空文庫の方がほぼ原作です



続く
▼続かない
続く?

2/24
Happy
Birthday!

このシリーズは当初から、
思い付き更新形式でした。
今後更新される可能性は
ゼロではありません。

ひとまず2学期序盤の話は
『乙女事件簿』です。
そして『乙女事件簿』が
BAD ENDの時の続編が
『ツキモノ-白-』です。
ご覧頂き感謝致します。

鎌を使う事件は
全て星空文庫版
掲載になりました
m0m

著：滓@kazari_sou

©ハトリ

☆閑話：悪役令嬢翻訳事件

こんにちは、久しぶりです。ウツギ・ネコハです。

だんだん、わたしのお話がヘンなテーマになってきてます。思い付きだから仕方ないね、マイブーム反映だね、と言われました。

わたしも兄さんも、昔から、優しいヒトが好きです。

見た目は怒ってても、心は優しいヒトも大好き。それ、「つんでれ」って言うんだよ、ってユイが教えてくれました。

ホナミみたいなヒトのことみたい。うん、確かに、大好きかもしれないです。

今回の依頼は、ホストファミリーの玖堂さんのお家に関わること。サトシがわざわざ、わたしをお家に呼んでまで頼んできたことです。

サトシは兄弟が沢山いてみんなと仲良しだけど、三つ離れたお姉さんとだけは違うみたい。今日はわたし、玖堂さんのお家に潜入して、それを確かめてきます。

* * *

猫羽ちゃん、ご指名です。

所長がにこにここと言うてくるたび、わたしは身構えるくせがついちゃいました。

だってわたし、まだ探偵見習いなのに、どうして指名されるのかがさっぱりわからなくて。所長は何だか、面倒そうな依頼が来ると、わたしに回せばいいと思ってる気がするの。

それでも今日は違いました。知り合いからの依頼だから、わたしの担当。

詳細は現地で、とわたしが向かったのは、ホストファミリーの玖堂さんのお家です。

そこではサトシが、どうしてか屋敷と一緒に建ってる診療所の方で、こっそりわたしを待ってました。

「来てくれてありがと、楢さん！　ちょっとあんまり家族に聞かれない話だから、こっちでごめん！」

ここは「橘診療所」。わたしがそもそも、この日本に来るために必要な通り道で、外来室の沢山のドアから色んな世界に繋がってるんです。

外来の休憩時間に、処置室にサトシがわたしを呼び込みます。
「いきなりでごめんな、椀さん。今日はナナが珍しく出かけるっていうから、それならここで二人になれるチャンスだと思ったんだ」

「？」

ナナっていうのは、診療所の受付をしてて、サトシの妹さんです。

真っ黒な長いふわふわの髪と、ごすろりっていうらしい真っ黒な服が可愛くて、日本の玖堂さんの家から橘診療所に入るといつも受付に座ってます。

「絶対内緒にしてな！ これ、今まで誰にも話したことなくってさ」

「？」

サトシは相当、話すこと自体を迷ってるみたい。どうしよう、何か言っているのかな、わたし。

「椀さん……おれ……」

「……？」

物凄く真剣そうな目。いつも明るいサトシが嘘みたいです。

そもそもどうしてわたしなのかな。黙ってサトシの言葉を待ちます。

「とりあえず、これ……椀さん、着てもらえる？」

そうして差し出されたのは、玖堂さんのお家のメイドさん達の制服。

探偵のお仕事と言っていいのか、わけのわからない依頼がここから始まります。

お仕事だから、処置室のカーテンの中で依頼通りメイド服に着替えると、サトシが歓声をあげてわたしを出迎えました。

「うわあ、椀さん、やっぱ制服系めっちゃめっちゃ似合うのな！ まじかわ！」

「……」

わたしはよくわからないけど、これ、いつものナナに近い服装だね。

こんなにひらひらは着たことがなくて、何と言えればいいかわかりません。

「じゃあごめん、今から現場見せるからさ！ 食堂なんだけど、椀さんは隅でお盆持って立っててくれたらいいから。後で椀さんの夕食別に用意するから、ほんとごめん！」

サトシの依頼は、わたしがこっそりサトシ達のお夕食に立ち会うことです。

兄弟が沢山いるサトシは、玖堂さん達が忙しいから、両親とはめったにご飯を食べれないみたい。その分、兄弟は絶対一緒に夕飯を食べるようになって、昔からの決まりなんだって。

それで、その決まりにずっと反対してるお姉さんがいるんだって。

サトシはそれに困ってるみたい。「マサミ姉が怖くて困るんだ」って、何とか対策を探してほしいと、わたしに依頼してきたわけでした。

「ナナがいたら、下手したらとぼっちりくっちまうから。何とか今日、無理言っていきなり来てもらってごめんな！」

何だか色々、サトシの兄弟仲は複雑みたいです。

メイドさんに変装したわたしもちょっとだけ、ドキドキしながら食堂に潜入することになりました。

でもやっぱりこれ、探偵のお仕事じゃない気はするね.....。

サトシ曰く、マサミお姉さんというのは三つ離れてて、一言で表せば「悪役令嬢」らしいです。

サトシ付の召使さんの先導で、食堂に向かう傍らで、わたしに色々前情報を教えてくれました。

「あくやく令嬢.....って、なに？」

「うん、ごめん、わかりやすいかと思ったけどちょっと違ったかな。マサミ姉は見た目別に令嬢じゃないし、むしろ中高は一貫してグレてたもんな」

サトシの兄弟のヒトはみんな、それぞれ个性的みたいなんだけど、その中でマサミお姉さんは平凡だ、と続けました。

「スピリチュアル一直線の美貴姉、高貴を絵に描いた春貴兄の間で、のんびり育つにもアイドル厚美やタレント正男兄、芸術家の美佐みたいな下がいてさ。特徴のないマサミ姉がグレた気持ちは、おれも平凡だからわかるんだけどよ.....」

サトシってけっこう、リアリストだよ。時々わたし、何となく思います。

「だからナナが生きてる内は、おれ、一番気が合うのがマサミ姉だったんだ。それがナナが死んでから、めっきり変わっちゃってさ.....」

あれ、何だか急に、リアルじゃないお話が混じってきてない？

さっき確かに、「ナナは出かけてる」って言ったサトシなのに、わたしは思わず首を傾げます。

でもそのことをきく時間はなく、食堂についちゃいました。

サトシの召使さんの手引きで、わたしは他のメイドさん達と一緒に、ずらっと並んで食堂に入ります。

玖堂さん家では、沢山の人間のメイドさんと執事さんに加えて、サトシ達兄弟には個別に専属召使が一人ずつ付いてるんだって。

でも子供だけの夕飯では席を外すんだとか。だからいつも、食堂で何が起きているか、それはメイドさん達と子供達だけが知ってるみたい。

「こら、里史、遅いぞ。私や厚美だって頑張って帰ってきてるのに、高校生が夜遊びするんじゃないや」

「ごめーん、美貴姉。今度から気をつけるー」

食堂では大きなテーブルに、八つの椅子と、二つの子供席がありました。椅子は四つずつ向かい合っていて、子供席が一番奥で二つ、八つの椅子とは垂直にテーブルに向かって並んでいます。

一番下の子達は双子なんだけど、まだ三歳で、大人が付いてないにご飯をちゃんと食べれないみたい。隣でメイドさん達が待機してます。

サトシに声をかけたのが奥の端に座る、一番上の美貴お姉さん。玖堂さんにそっくりできれいなサラサラのロングヘアーです。

そこから年齢順に同じ側に座って、五番目のサトシから反対側に座るから、サトシの正面が美貴お姉さんの席になるんだね。

「.....」

美貴お姉さんの隣で、ショートカットの茶髪のヒトが黙って苛立たしそうにしています。これがマサミお姉さんだと、あらかじめ席を教えられました。

総勢十人、サトシと兄弟のヒト達。

わたしが昔によくいた御所でも、広いお食事部屋はあったけど、ここにはかなわないなあ..... 玖堂さんって凄いヒトだな、と改めて思います。

子供は絶対、学校の必須参加行事でない限り、夕飯をみんなと一緒に食べる。それがサトシ達の決まりだけど、ナナは例外みたいでした。

テーブルのナナの席は空いています。今日は珍しくナナがいないって、来る前にサトシも教えてくれたしね。

——ナナは長く病气してたからさ。献立も一緒のものは難しかったし、健康なおれたちでも子供ってよく風邪とかひくから、うつしちゃいけないって、ナナは基本、自分の部屋でご飯を食べてたんだ。

子供席に近いサトシと美貴お姉さんが向かい合って座るのが奥で、入り口の近くの、サトシ側の端っこがナナの席。

サトシの前は美貴お姉さんで、斜め前がマサミお姉さん。サトシの隣の厚美が、マサミお姉さんの正面になります。

厚美はアイドルやってるって、サトシが言ってたけど..... アイドルって、兄さんが一時期やってた歌を歌うヒトみたいな感じだよ、多分。

髪は短いけど、玖堂さんにそっくりです、厚美。美貴お姉さんもだけど、凄く華やかな顔。

マサミお姉さんはお父さん似なのかな。キレイだけど落ち着いてる感じ。

それにしても、頂きます、の後はみんな黙々とご飯を食べてて、大勢のご飯ってこういうものなのかな？ 何だか淋しいなあ、この光景。

潜入してサトシの後ろの方で立ってるわたしが、そうして違和感を思い始めた頃に、その沈黙の理由がわかることになります。

発端は、サトシの隣で厚美が、着信の鳴り出したスマホに出たことでした。
「あ、ごめんなさい、今食事中で……！　後ですぐかけなおします！」
慌てて応答した厚美を、電話が終わってから、目のマサミお姉さんが食事の手を止めてぎろりと睨みました。
「……何で、スマホ持ち込んでの、厚美」
「あ、これ……！　ごめんなさい正美姉さん、ついうっかり……！」
「持ち込み禁止、応答禁止、下らない決まり。でもあんた達でしょ？　それでいいから夕飯一緒にしようなんて、バカげた決まりに従ってるのは」
元々、夕食を一緒にする決まりが嫌というらしいマサミお姉さん。
アイドルの厚美はとても忙しいみたい。少しの時間でも無駄にしたくなくて、スマホを手放したくない思いがちょっと伝わってくる。それが尚更、マサミお姉さんには気に食わないように見えました。

食堂の空気が、一気に気まずくなりました。
気にしてないのは美貴お姉さんと春貴お兄さん。年長の二人くらいです。
「ごめんなさい、ごめんなさい。次から気を付けるから、正美姉さん」
厚美は平謝りしてる。それは、これ以上話を聞くのは嫌、みたいに。
「あんたいつもそれ言ってるでしょ。あんたの『次』はいつに来るの？」
マサミお姉さんはますます、不機嫌になっていきます。
ちょっとカチンときたみたいなのが、席が遠いのに、次に声を出した正男お兄さんでした。
「あのさあ、正美姉。そうやってすぐ突っかかるの、やめてほしいんだけどさ」
ナナの空席の正面にいる正男お兄さんは、サトシより色々オシャレをしてそうな制服姿で、入り口側の端から悠々と大きな声を出します。
「強制が嫌なのはしゃーないけどさ、この僅かな一時くらい我慢してくれよ？　何でわざわざ、みんなのご飯の空気をまずくするんだよ？」
それだとまるで、みんなが黙々とご飯を食べてるのは、マサミお姉さんに何か言われるのが嫌だから、というような内容だね。
サトシも依頼してくるくらいだし、そういう部分は確かにあるんだろうけど……。

反論されたマサミお姉さんが、更にシビアな顔付きになっちゃいました。
ううん…… こういうのは本当、ご飯が美味しくなくなりそうだね。
でもそこで、マサミお姉さんはしかと、「あくやく令嬢」の下剋上を始めます……。

* * *

子供だけの夕食の場で、言い合いのきっかけになっちゃった厚美が、間に入った正男お兄さんを取りなしました。

「正男兄さん、いいの。私が悪いんだから、正美姉さんを責めないで」

それに正男お兄さんが応える前に、マサミお姉さんがまたぐっさり切り込みます。
「誰彼構わずいい顔してんじゃないわよ。私いいコです、可愛いでしょ？ ってアピールしたいなら、その目のくまぐらい消してからにしたら？」

「正美、姉さん……！」

ぱっと、厚美が両手を自分の頬に当てます。

確かにマサミお姉さんの言う通り、厚美、華やかな顔なんだけど、かすかにくまがあるね。忙しくてあんまり眠れてないんじゃないかな。

「正男もね、アンタね。いじめられる妹を守る良い兄さん気取り、芸能界じゃそれで良かったとしても、今ここで一番空気読めてないのはアンタよ」

「な……！」

がたっと、正男お兄さんが思わず立ち上がります。

相変わらず年長の二人は何も言いません。我関せず、とご飯をのんびり食べ続けます。

可哀相なのは下の子供達かなあ。ただ青ざめるサトシをはじめ、二つ隣の美佐はまるで顔を隠すみたいに、お皿を持ち上げてご飯を食べてます。子供席の二人は何が何やらわからずに、苦笑するメイドさん達からご飯を食べさせてもらってるけど。

マサミお姉さん、はっきり名指しで非難されたのは今までそんなになかったみたい。

今日はもう遠慮はいらないとばかり、他のヒトにも物言いを始めました。

「美佐もね。行儀悪い食べ方、見苦しいからやめろと何度言えばわかるの？」

「……ううー……」

「学校も行かずに絵ばかり描いて、来たくないなら夕飯もボイコットすれば？ 中途半端に見苦しい食べ方続けるよりずっとましじゃないの？」

あくまでこんな、「絶対一緒に」なんて夕食、くだらないとばかりにマサミお姉さんは言います。

「大体死んだ菜奈だって夕食免除されてたんだから。今日もないし、健康なら例外は認めないとか、そこまで親も言ってないんじゃない。何でわざわざ、こんな茶番をいつまでも続けてるわけ？」

そこでびくりと、俯いていたサトシの肩が震えました。

どうやら、それは……ナナのことだけは、サトシも、聞き逃せなかったみたい。

「……マサミ姉。ナナは、死んでないだろ」

今日はたまたま、出かける用事があっただけで。
最近はずっと、端の空席にいつもついてるはずのナナを思いながら、サトシが必死に声をあげます。

サトシが入ってきたのが意外みたいに、マサミお姉さんは一瞬、表情をきょとんとさせていました。

「今日はナナ、ほんとに珍しい機会だからいないけどさ。いないからって、そんな好き勝手言うなよな、マサミ姉」

ナナは死んだ。そう言ったマサミお姉さんが、ちらりと端の空席を見ます。

「.....なに、アンタ。あれが菜奈だとまだ思ってんの、サトシ」

その声は今までのイライラというより、どっちかという、何だか空ろでした。

でもサトシが一番聞きたくないのは、その一言みたいに思えました。

「だからそういうこと、言うなってさあ！ ナナがいつも、マサミ姉と話せなくなって寂しいって、何度言ってるのか知らないのかよ！」

そう言えばわたしも、初めてユイやホナミ——サトシの元々の友達に会った時に、聞いた話を思い出します。

——ねー、ほーちゃん.....里史くんの妹さんって、亡くなってなかったっけ.....？

——.....よね、確か.....白血病で、二年くらい前.....。

マサミお姉さんは、今までとはちょっと違う風に顔をしかめます。

サトシとは元々気が合ってたって、その影響なのかな。サトシにはあんまり、きついことを言いたくないようにも観えました。

ナナの席の前において、さっきしぶしぶ座り直した正男お兄さんが、ここで間に入りました。

「やめろよ、里史。菜奈は死んだ、それはお母さん達からも散々言われたことだろ」

「でもな、正男兄.....！」

「俺もいつかは、言わなきゃなと思ってたんだけど。菜奈、ご飯が食べれるわけでもないのに毎日ここに来るの、さすがに時間の無駄だろ。毎日そこで、空っぽのお皿を前にしてる姿、それ見る俺の気持ちとか考えたことある？」

今日はナナがいないから、色んな人の本音が出てるみたいです。

サトシもそうだよ。ナナがいないから、とわたしを呼んだんだもの。

正男お兄さんの言ってることで、わたしはもう一つ、ホナミ達が言ってたナナのお話を思い出しました。

——玖堂先輩はその後、お母さんが妹に似せた機械を作ったって、嘆いてたよねえ……。あんなの、妹じゃないって……。

——よね……。正美さん、妹に骨髓あげるほど、可愛がってたみたいだし……。

そう言えば前に、スイーツを食べにいこうってサトシが言い出して、ナナも誘おうと言って、水葵が苦い顔をしてたっけなあ。

今のナナは多分、何かを食べることはできない体。このあたりでようやく探偵らしく、わたしもこっそりアタリをつけます。

「気が重いんだよな。食べるものがないからいつも必死に何か話そうとしてくるの、菜奈」

ナナの前に座る正男お兄さんの本音。それを聞いたマサミお姉さんが、さっきまでと違って、またイライラモードに戻っちゃいました。

「だから正男は偽善者だっけの。喋りたくないなら黙ってれば？」

「そんなんますます空気悪くなるだろ！　悪くしてる誰かさんが言うなよ！」

「空気悪い空気悪いって、アンタ空気清浄器？　ムードメーカー気取るつもりなら、もう少しは話術でも磨いてきたら？　親の七光りのエセタレントくん」

うわっ。とさすがに正男お兄さんがキレちゃいそうになったところで、慌ててサトシがもう一度声を出しました。

「それは正男兄！　ナナ、むしろ正男兄が気にするから頑張って喋ってんだよ！　いつも気を使わせちゃって悪いなって、ナナも言ってるんだ」

「……え？」

「もう一緒に夕飯出ない方がいいのかな、元々そうだったし、って。でもおれ、せっかく元気になったナナがいるのに、それも嫌なんだよ」

きっと、病気の体から、ご飯は食べれないけど元気に生きられる人形になったナナ。サトシが話していいか悩んでたのはこれだったんだ。

日本では普通、有り得ないことなんだろうな。ただの人間には難しいよね。

だからそれはナナじゃない。そう言いたげなマサミお姉さんが、不意に立ち上がりました。

「……出なくていいわよ。そもそもあれは、菜奈じゃないんだから」

そのまま、ご馳走様、と言って食堂から出ていっちゃいます。

後にはちょっとぼかんとしながら、平穩の戻った食堂で、ちょっと暗い顔になったサトシ達がいたのでした。

まいったなあ……。と。

途中で割って入ったサトシが後悔するように、食器を置いて頭を抱え始めちゃいました。

「マサミ姉……やっぱりまだ、ナナのこと、ただのそっくり機械だって思ってた……」

それは……。と、わたし、ちょっと違和感がありました。

でもここでは潜入してるだけだから、まだ何も言えない。そう思って黙ってたら、不意に、サトシの前の美貴お姉さんが初めて話に入りました。

「——そりゃ、母さん達から、『菜奈は世間的には死んだことになった。でも本当はこの新しい体で生きているから』なんて言われたって、母さん達がショックでちょっとおかしくなったって思うでしょ、フツー」

美貴お姉さんは何やら達観してます。玖堂さんの養子の咲姫おねえちゃんとよく一緒にいる姿を見かけるけど、スピリチュアル系が好き、っていうのも、そこで色んな経験をしたことからきてるみたい。

「どの道対外的には、菜奈は死んだって言わなきゃいけないんだし。菜奈の魂はちゃんとそこにありますなんて、正美が言い出したら逆に心配するわ、私」

美貴お姉さんはそれを自然に受け入れてる感じ。でも、何かとシビアそうなマサミお姉さんは違うのかもしれない。

他の子供達も、きっと戸惑ってるんだ。ナナとほとんど同じヒトが毎日その席にいるけど、本当に信じていいんだろうか、って。

それじゃあ、サトシはどうなんだろう.....？

ちょうどわたしが、その疑問を持ったのと同じ時でした。

美貴お姉さんが食事を終えて、改めてサトシに問いかけます。

「ねえ。里史はどうして受け入れられたの？」

「え？」

「菜奈は菜奈だって、よくわからなくても、何となく信じてるんでしょ。心霊現象とかそっち系大好きな私ならともかく、里史はどうして信じてるの？」

サトシはそれを尋ねられて、ぐっと黙って、俯いちゃいました。

ああ.....これ、ちょっと、痛いな。わたしも辛くなっちゃいます。

ナナの前の体が死んじゃった時、すごく泣いた記憶がサトシによぎってる。それは、マサミお姉さんと一緒に.....ナナのお葬式で、二人で抜け出して泣いてる姿でした。

——せっかく.....せっかくマサミ姉も頑張ったのに、ナナ、治らなかった.....。

何だか大変そうだったナナの病気。「こつずいあげる」というのを途中にしたみたいだけど、それに協力できるの、マサミお姉さんだけだったみたい。

それだけじゃなくて、日頃はさっきみたいにイライラしてるマサミお姉さん、ナナにだけは優しくかったんだ。サトシはそれを思い出してて、だから今、マサミお姉さんがナナを受け入れないことを辛く思ってる。

胸がととても、痛くなりました。

サトシの気持ちも.....マサミお姉さんの気持ちも、ちょっとだけわかる気がして。

サトシはどうして、新しいナナを受け入れられたのか。

それは子供達だけでなく、口止めされてるメイドさん達とかもみんな聞きたいみたいで、食堂中の視線が集まります。

サトシは困ったように考え込んで、一度わたしの方を振り返りました。

わたしは、じっと、サトシを意識して力強く見つめます。

サトシが考えたこと、間違っていないよ。わたしも直観だけだけど、伝わってほしいな。

少し後に、ちょっと諦めたように笑って、サトシがその心を話し始めました。

「だって……今でもナナ、マサミ姉が大好きなんだもん。そんなの……あそこまで言われてもそう思えるのなんて、ナナくらいだろ」

——はっ、と。正男お兄さんや、しばらく何も言わずにいた厚美が、少しバツが悪そうに顔を上げました。

「正男兄も厚美も、ナナに冷たいマサミ姉にモヤモヤしてんじゃん。おれもそうだし、それが普通だと思うんだ。でも……ナナは違うんだ」

そこまでサトシが話した時に——どうしてか、美貴お姉さんが突然、わたしの方を見つめました。

え？　　と思って見つめ返すと、まるで咲姫おねえちゃんみたいないたずらっぽい顔で、美貴お姉さんが笑いました。

「——だって。それじゃ、そろそろ、探偵さんの所見を聞かせてもらえる？」

そしてどうしてか、その後わたしはメイドさんの姿のまま、ナナの席で話を始めることとなります……。

* * *

ええっと。美貴お姉さん、スピリチュアルとかが好きだけあって、鋭いのかな？

それとも玖堂さんの養女の咲姫おねえちゃんから、わたしのこと聞いてたのかな。

サトシに改めて「実は同級生」と紹介されて、ナナの席についたわたしは、まずぎらぎらと正男お兄さんが見つめてきたから、何も言えなくなっちゃいました。

「へええ、何か随分可愛い新人がいると思ってたら、里史の同級生ってさあ！」

「やめろよ、正男兄。正男兄がテンション上がるってわかりきってたから、母さん椀さんのこと、おれとナナにしか言ってないんだから」

わたしは玖堂さんに生活を援助してもらって、高校に通うことがこの世界での宿題です。

でも正男お兄さんは、厚美ともタッグを組んで、一緒に芸能界やろう！　なんて、熱い視線を向けてきます。とても、サトシより一つ上には見えないお兄さんぶりです。

なのでわたしは、まずはそこから、話をしてみることにしました。

「……あのね。多分マサミ、マサオのそういうところ、ちょっと怖いって思ってる……」

「——へ？」

「マサオに自信があるのはいいことだけど……今、大事なお話は、わたしのこととは違うよね？」

——正男もね、アンタね。今ここで一番空気読めてないのはアンタよ。

正男お兄さんはとにかく、あんまり重い空気が好きじゃないみたい。みんなを笑顔にするのが自分の役目だって、多分思ってる。

だから突然現れたわたしのことに、無意識に話題を変えようとしちゃってる。

それは決して、悪いことじゃないけど……でも、今しなきゃいけないお話はそれじゃないよね。

え……と、ぼかんとしっちゃった正男お兄さんの次に、わたしは二つ隣の厚美の方に体を向けます。

「アツミも……ご飯の時にも電話に出なきゃいけないほど、忙しいの？」

「……え？」

「スマホ、こっそり持ち込むにしても、せめて音を切れればいいのにな。少くくらかかかってきても、出なきゃいいのにな、マサミ、怒ってた」

——誰彼構わずいい顔してんじゃないわよ。その目のくまぐらい消してからにしたら？

厚美は几帳面なのかなあ。仕事のことはおろそかにしたくないし、だからスマホも始終持ち歩いてて、かかってきたら出ずにはいられないんだ。

まだ厚美、中学三年生の十五歳だよ。それってしんどい性格だと思う。

——あんたの『次』はいつに来るの？

「そんなに無理ばかり、してたらダメだって……いつになったら、もう少し無理しないようにするのかって……マサミ、心配してる」

これはわたし、マサミお姉さんの気持ち、よくわかるよ。だってわたしの兄さんも、いつも無理ばかりしてるヒトだから。

同じ方向、わたしと厚美の間におどおどしてる美佐がいるから、わたしはついでに一緒に言っちゃいます。

「ミサにも。ご飯の食べ方は、何をやるにも大事だって、そう言いたいみたいだよ？」

「……う……？」

——学校も行かずに絵ばかり描いて、来たくないなら夕飯もボイコットすれば？

「学校は行かなくても、マサミがうるさくても、夕飯には来れるんだよね。それ、マサミは、いいことだって思ってる」

「……………」

——中途半端に見苦しい食べ方続けるよりずっとましじゃないの？

「誰かのご飯食べるのは、学校と違って嫌いじゃないんだよね。学校は行かなくても、外にはご飯食べに行けたらいいって、マサミは思ってたよ」

美佐は多分、ちょっと気難しいヒトの気がする。そういうヒト、御所にもいたけど、人嫌いのことが多かったよ。

美佐の場合、学校は嫌いでも、絵を描いたりヒトとご飯を食べたりするのは大丈夫なんだ。

それならできることを伸ばせて、マサミお姉さんは言いたいんだと思う。ご飯の食べ方が悪いままじゃ、もったいないって。

「椀さん……それ……………」

何だか、サトシをはじめ、みんなの視線がわたしに凝縮されてきました。

どうしよう……ちょっと、恥ずかしいな。

推理も証拠も何もなくて、全然探偵らしくないんだもの……。

「じゃあ、マサミ姉は……ナナのこと、どう思ってる？」

うう。恥ずかしいけど、これは答えなきゃ。それが多分、今回の一番の依頼だし。

サトシ、マサミお姉さんが怖くて困るっていうの、きっとナナのために思ってたから。

マサミお姉さんもナナのためにも、あえて怖くなってそうだから……これはちゃんと、誰かが言わないとだね。

「あのね、サトシ……みんなそれぞれ、忙しかったり、何も食べれなかったりなのに、どうしても一緒に、ご飯を食べないといけないの？」

「……………」

「みんなが絶対集まる夕食のままだと、元気になったナナも、一人だけ遠慮するのは寂しいよね。アツミやミキも、時間作るの大変みたいだし……マサミはみんなでご飯、嫌いじゃないよ。嫌いじゃないから……他のみんなは無理してるのが、嫌なんだと思うよ」

——あんた達でしょ？ それでいいから夕飯一緒にしようなんて、バカげた決まりに従ってるのは。

「食べれる時に、一緒に食べる……それじゃ、ダメなの？」

「椀……さん……」

「それはいつか、相談しないといけないことじゃない？ みんな必ず、ちょっとずつ、違うヒトになっていくのに……」

——何でわざわざ、こんな茶番をいつまでも続けてるわけ？

それを、マサミお姉さんが悪いって、正男お兄さんが責める先は違うと思う。

きっとそれは、玖堂さん達とも相談しないといけないことだよ。子供達だけで無闇に決まりを守ってても、解決しないことだと思うから。

そういうことを口に出してるの、マサミお姉さんが本当は一番、このご飯を大事にしてるからだ……と思うんだけどな……。

いいのかなあ、これ。わたし全部、推理じゃなくて、直観で言ってるだけなんだけど……探偵見習いとしてあんまりよろしくないなあ。

それでもとりあえず必死に、そこまで何とか言ったわたしに、美貴お姉さん以外は黙り込んでしまいました。

「あはははは！ 探偵さん、ナイス！ 私以外に正美の悪役語は解説不可能かと思ってたけど、そうでもなかったのね！」

美貴お姉さんは、最初からわかってたんだね。だからずっと、場を見守ってたんだ。

マサミお姉さんは多分、ものすっごく、不器用だと思う……言ってることはそんなに間違っていないのに、反感しか買っていないんだもの……。

「じゃあ、マサミ姉は、ナナのことは……」

「ナナに無理に、ご飯来なくていいって、思ってると思う。でも今日はナナがいなくて、寂しくてイライラしたんじゃないのかな……」

こんな茶番、なくていい。そう言いながら、今日のナナみたいにさぼらずに、ちゃんと来るマサミお姉さんの行動の方が本音だよ。

って、わたしは思うんだけど……マサミお姉さんがいたら、否定するかもしれないなあ。自分でもよくわからずに、イラッと云っちゃうヒトに思える……ちょっと、損な性格なのかもしれないね。

最後に場をまとめたのは、今まで存在感を消してた春貴お兄さんでした。

「……喧嘩するほど、仲良きことは美しきかな」

……うん？ わたし、正直、よくわかりません。

ヘンなヒトだな、春貴お兄さん……。

でも場のみんなは、それで良かったみたいです。

わたしが言ったこと、伝わったかはわからないけど、マサミお姉さんの印象、ちょっとでも良くなってるといいな。

だって優しいもの。マサミお姉さん。

この食堂でわたしが得た、一番のこたえはそれでした。
サトシに引っ張られて診療所に帰りながら、普段から優しいサトシはいい人だな、とも思いました。

診療所では、わたしが滅多に食べたことのないような、豪華なお夕食が待っていました。
「これ……サトシ達のご飯より豪華じゃない？」
「当たり前だよ、お客さんなんだから！　そういう常識感覚、大事にしろって、母さんもいつもうるさいしさ」
ちょっと感動しながら、あんまり食べたことのないスープから頂いてみます。
うわあ、まったくとして、トウモロコシとジャガイモと、何かいい感じの味がするね……日本ってスイーツもそうだけど、ご飯がとても充実してるよね……それだけは私、元の所より気に入ってるんだ……。

処置室の机でうるうるとご飯を食べていたら、サトシがほっとしたみたいに、くだけた格好でベッドに座っていました。

「……ありがとな、楢さん。マサミ姉のこと、かばってくれて」

「？」

「おれや美貴姉が言うんじゃ、鼻屑だって言われちゃうからさ。ナナにはどう話したらいいか、未だにわかんないけど……」

今日は一人だけ、いなかったナナ。

噂をすれば何とやらで、外来室に唐突に、ナナの気配が戻ってきました。

あれ、色んな世界に繋がる外来室に直接帰るってことは、ナナのお出かけ先は異世界だったみたい？

「ただいまー！　——あれ？　お兄ちゃんと猫羽ちゃん？」

処置室にナナが駆け込んできます。その後ろの、多分ナナを連れ出してくれた人影を見て、わたしは息を吞んでしまいました。

「え？　猫羽ちゃんいたんだ、わーい、タイミングいい♪」

ろっく歌手さんみたいなコートを羽織って、深めの帽子を被ったお洒落なヒト。

兄さんが長くお世話になってたヒトが、診療所にナナを送ってきてくれたみたい。

「^{つぼめ}燕雨くんも元気してるー？　悠夜くんも^{つぐみ}鷺ちゃんも、猫羽ちゃん達がいないと張り合いがなさそうだよ♪」

「……クウ」

「え？　^{くぬぎ}櫛くんとも知り合いなんだ、猫羽ちゃん！　今日はねえ、カイ先生のオススメで櫛くん色々相談に乗ってもらって、とても気が楽になったんだ、私！」

嬉しそうなナナが、クウの袖を引っ張って教えてくれます。クウ、そう言えばたまに薬剤師さんとして、ここ、橘診療所に出入りしてたもんね。

ナナ、本当に色んなヒトとお友達なんだね。死神の氷輪くんとも仲がいいもんね。

サトシは突然現れた美形のお兄さんなクウに、目を白黒させてナナ達を見つめています。とりあえずクウを警戒するようにナナを引っ張って、まるでお父さんみたいな顔で尋ねるのでした。

「相談って……何しに行ってきたんだ？ ナナ」

「うん。正美お姉ちゃんが、私のせいで最近イライラしてるから、私には何ができるかなあって。お姉ちゃんには心配かけっぱなしだから、どうしようって思ってたの」

「って——ナナ、知ってたのか？」

「え？ だってお姉ちゃん、昔からそうだよな？」

マサミお姉さんが、どれだけ不器用な形でも、ナナを今も心配してること。

わたしみたいな直観がなくても、ナナはそれを、心から信じてるみたい。

……そうだよな。病気ではなくなったけど、人間でない体で生きるっていうのも、よく考えれば大変だもんね。

PHSを取り出して画面を横目で眺めながら、クウはあっさり、そんなナナに言ったみたいでした。

「いいんだよー、ツンデレやヤンデレは不器用なのが仕事なんだからね。っていうか、そこがいいんじゃない！」

この数年、PHS相手に苦労してるクウが言うと、説得力があります。クウ曰く、少しでも連絡が絶えるとすぐ不安になっちゃう、「ヤンデレ」さんが伝話友達なんだって。

クウ、兄さんとかみたく不器用なヒト、昔から好きそうだよな。

サトシは、何だ……とばかりに、もう一度ベッドに座り込むのでした。

わたしはとりあえず、久しぶりに会えたクウに、「あくやく令嬢」≡「ツンデレやヤンデレ」でいいのか、美味しいご飯を食べながらゆっくりきこうと思います。

だって。

優しいヒトはみんな、わたしも大好きなんだもん。

閑話 了

迷探偵猫羽の乙女事件簿

転座

ミステリーに恋愛は余分です。わたしがバイトするよろず相談所の所長がそう言うので、なんで？ とわたしは尋ねました。

「探偵の本分は推理です。ラブコメはあくまで副次要素であって、あまつさえ乙女ゲームのヒロイン補正など完全に甘えです。正々堂々と事件を解決して下さいね、猫羽ちゃん」

おとめげーむって何なんだろう。所長、やけに楽しそうなんだけどな。

それにわたしは、探偵としては元々ちょっと反則な気がするんだけど。それは天国ルートのお話です！ と所長が妙に力強く言うので、わけがわからないけど、わたしはここでは反則じゃない探偵見習いみたいです。

相談所の先輩探偵のおにいちゃんや、営業の咲姫おねえちゃんやお友達と、沢山お出かけした夏休みが終わりました。

兄さんに頼まれてわたしを見守ってくれる悪魔の水葵は、夏休み中は力を回復すると言って里帰りしてました。一学期は別々に暮らしてたんだけど、水葵を養ってた兄さんが行方不明になっちゃったから、二学期からわたしの下宿で一緒の生活が始まるの。

里帰りする前に、猫羽、決してツキモノルートに迷い込まないで下さいね、とか言ってたけど、何だか色々おかしくないかな、所長も水葵も。

ひょっとしてここは、わたし以外みんな反則で、わたしだけが何かが違う世界？

そんな予感から始まる高校の二学期は、確かにわたしには、完全におかしな世界に踏み込んでいくのでした――

* * *

迷探偵

猫羽の

乙女
事件簿

Studio ***46



原画©ハトリ

★ Target.1: 烏丸悠夜越境事件

ずっと、突き刺さるように冷たい、暗い水の底にいました。
わたしはヒト殺しだから。沢山の命を奪ったから。
小さい頃に家族と引き離されて、その暗闇に一人ぼっちで閉じ込められて。
体は動いても、意識はいつも真っ暗なところ。光は見えてて、そっちに向かっているつもりなのに。

道は、一つだけでした。
悪いことをするヒトを殺すお仕事。サツリクの天使。それをすれば、わたしも外に出ていいって。
だから全てのサツリクは、わたし自身の意思で……沢山の命の重しで、いつまでたっても水底にいる。

——何か……言い残すことはある？

でもわたしは、殺したくないヒトは殺さなかった。殺すヒトのココロをきいて、殺さなくていいと思えば、自分に嘘はつかなかった。
それはきっと——わたしが天使なんかじゃなくて、人間だったから。

人間として在りたいなら、人間の世界に行くように言われました。
——あなた、自分が誰か、本当にわかってる？
弱くていいから、人間がいい。うん、わたしも、そう望んだんだ。
だって、ヒト殺しは——……ヒトを斬るのは、辛いから。しなくて済むなら、他のことをしたいから。
今のわたしが、人間だからできることも、何かあるはずだって——

ごぼごぼと、光に向かってわたしは必死に、毎日暗闇を這い上がります。

* * *

真っ暗な冷たい夜の中で、とても懐かしい夢を見ました。

わたしの夜はいつもこう。毎日金縛りから始まって、朝まで幽体離脱してるようなものだって、父さんの仲間のラクトは言ってたかな。ラクトがうちでよく一緒にいた小さい頃は、それも大分ましだったんだけど。

だからわたしは暗い所が苦手だし、よく夜更かしします。夜型なこともあるけど、できるだけ長く、冷たくないところにいたいから。逆に朝はとても弱くて、光の差す方へ這い上がるのが毎日大変。

体が死んだ人みたいに固まって、心は沢山色んな夢を見ます。大体は悪い夢。

でも今日は、冷たくても優しかった。何だかすごく嬉しかった。

それは多分、夏休みの直前にちょっとだけ会えた、大切なヒトが出てきたから。

黒猫みたいに真っ黒な短い髪と、光が当たると濃い青に見える、キレイな黒の目。

わたしが元の世界にいた時には、いつも小袖と袴を着てたユウヤ。

——貴女は、誰なんですか？

そう言えばわたし、あんまり自己紹介ってしたことなくて。ユウヤと初めて会った小さい時は、何て答えたっけな？

高校は一年生から入って、みんな新生だから名前だけだったし。

わたしの名前は、^{うつきねこは}楡猫羽。親戚のおにいちゃん達がいるよろず相談所で、探偵見習いのバイトをする女子高校生です。

更に本当を言うと、魔境——異世界から日本に留学してます。これはたまたま、人間じゃないヒトに出会った時には、打ち明けてもいいかなって考えてるよ。今のところはまだいないけど、こっちの世界でも人間じゃないヒトには多少出会いました。何しろわたし、人間ではあるけど、本業は悪魔使いだから。

誰に言っても、良い顔をされないわたしの特技。みんな、そろそろやめろって言うけど、わたしは契約してる悪魔さん達がいなくなるのは淋しくって。

家が呪術師の家系だっていうユウヤは、わたしよりもっと大変みたいです。わたしの周りは人間じゃないヒトばかりだけど、ユウヤは普通の人間の中で暮らしてるから。

暗闇の中で、小さなユウヤが、難しい顔でわたしに振り返ります。

——うちにまた、何を連れ込んだんですか、貴女は。

そうだね。ユウヤも、悪魔はダメだって、よく言ってたっけ。でも、使うなら上手く使うようにとも言って、そっちの方がユウヤの本音だった気がするんだけどな。

——契約の代償はどうするつもりなんです。猫羽さんには魔力も霊力もないんですよ。

ユウヤは靈感がすごく強いんだよね。わたしが家族以外に絶対言わないわたしのことを、兄さんについて御所に行く内に悟られちゃいました。

わたしはそんなに嘘はつかない人間だけど、余計なことも言わないです。特にわたしの出生なんて、とても呪われた運命の末だったから、人には知られない方がいい、と思っています。それがわたしの母さんと、母さんの母さんの願いだから。

どんなに冷たい真っ暗闇でも、そこにユウヤがいるなら、寒くはないのに。ユウヤはまるで、穢れたものを見るような眼差しで、ふっとわたしに背を向けました。

「——待って……！」

この闇ではいつも、わたしに自分のカタチなんてないのに、どうしてか思わず声が出ました。同時に黒い世界が震え始めて、必死にのぼすわたしの手だけが、薄い光で輪郭を持ち始めます。

「待って、ユウヤ……！ どうして、いなくなっちゃうの……!？」

誰にも言えないわたしの秘密。それを知ってもユウヤは決して、わたしを遠ざけたりはしなかったのに。

猫羽さんは悪いものだ、とはっきり言われはしたけど、こんな風に無下に拒絶する背中は見せなかった。ユウヤも沢山重いものを背負ってて、だからわたしはいつかユウヤの力になりたいって、それだけを願ってたから。

どれだけ必死に追いかけてやってみても、やっぱりわたしにはカタチがなくて、暗闇の中から出ることができません。

そうして遠ざかってくユウヤは、最後に一度だけ、悲しそうな顔で振り返って……。

重くて寒い心で目が覚めるのは、いつも通りの朝のはずでした。
でも、温かい。カーテンの間から差し込む朝陽が、わたしのまぶたを開けたせいか、一番最初は真っ白な世界の中でそう感じました。
「あれ……わた、し……？」

寝起きの悪さには定評があるのに、今日はやけにすっきりとした目覚め。
うん、ぼけっとはしてるんだけど、普段のわたしはもっと酷いからね？
「ユウヤ……どこ……？」
最後にあった何かを探すみたいに、パジャマの両手が宙にのびてる。
うん、この腕は間違いなく、わたしの体だよ。毎日よいしょと起き上がって実感することを、今日は自然に思える不思議な朝です。
と言いつつ、わたしの頭と体はあんまり合ってなくて。勝手にむくっと起き上がって、クローゼットや窓やドアを開けて、何かを探し始めた自分がいました。
「さっきまで……そこに、いたのに……」
気持ちはとても温かいのに、よくわからずにこぼれる声は震えてる。あれ、どうしたんだろう、わたし。

寝起きは良かったのに、そのままカーテンをめくったり、引き出しを開けたりしていると、同じ家のリビングに寝泊まりする水葵が、ぱたんと勢い良くドアを開けて入ってきました。
「出発十分前です。さすがに起きてください、猫羽」
里帰りから戻ってきた水葵は、もう高校の制服も着て、ぼっちり二学期モードです。
反対にわたしは、機嫌はいいのにパジャマのまま夢現で、え？ と水葵に振り返りました。
寝ぼけても目は笑顔っていう、謎なわたしを見た水葵は、こりゃだめだ、と思ったみたい。そのまま実力行使とばかりに、無理やり服を着替えさせにかかったのです。

さすがは水葵だなあ。これじゃ何だか、ほんとお母さんみたい。
まあ、高位な悪魔同士の母さんと同盟を結んだ海竜^{ドラゴン}だから、兄さんだけでなく母さんからも、わたしのことを頼まれてるのは知ってるけどね。

朝ご飯を食べる時間はなかったから、休み時間に食べなさいって、水葵が朝食を急いで詰めてくれたお弁当を渡されました。
「お昼は学食で摂って下さい。早起きしてお弁当を作る、と昨日はあれほど張り切っていたのに、残念です」
「うう……ごめんなさい。夏休みの内に、ちょっとはお料理上達したんだよ、わたし……」

水葵は、人間の骨からできた、人間そっくりの人形の体に宿る海竜の悪魔さんです。だから作っても、お弁当は食べられないんだけどね。

「徹夜でもしない限り、猫羽に早起きができるとは元々思っていません」

「うう……そんなことないよ、一年に一回くらいは、ちゃんとするよ……」

まだまだ夏の影が残る暑さの中で、ちょっとだけ速足で坂を下りて、予鈴五分前には高校につきました。水葵がいないとこれ、確実に遅刻だったね。

高い塀の校門の周りには、いつもほとんど人はいません。みんな大体、学校に入ってから教室に行くまでに、靴箱や廊下で違うクラスの友達と話すのが学校生活なんだって。わたしは別のクラスのお友達とは、お休みにしかほとんど会わないからわからないけど。

だから、校門のすぐ内側にいた、学生服の三人と付き人の二人がずっと、時間ぎりぎりまでわたしを待ってたことなんて……その時のわたしは、知る由もありませんでした。

「——え？」

そこでわたしの^{あか}紅色の目は、この朝から探し続けた誰かを、まだ寝ぼけてるわたしの^{たましい}意識より先に捉えることになります。

「なん……で……」

あ！ と、門がしまる寸前に入ってきたわたしに、人影の内の一人、ホストファミリーのサトシが嬉しそうに気付きました。

「椀さん、来たー！ ほら、^{はるき}春貴兄、ここで待ってて正解だったろ！」

同じくホストファミリーで、わたしと同学年のサトシより二つ上の、春貴お兄さんまでいます。今まで全然、ホストの^{くどう}玖堂さんを訪ねても会うことはなかったのに。

でもわたしが驚いたのは、サトシと春貴お兄さんと付き人さん達の後ろに隠れるように、学生鞆を抱えてつまらなそうに俯く最後の人影でした。

「ふむ、さもあらぬことであったか……いかようにすべきか？ ^{からすま}烏丸君よ」

「……」

わたしは元々、契約してる悪魔さんが翻訳してくれるから、異世界出身だけどみんなの言葉がわかっています。なのに春貴お兄さんの日本語は、正直あまりわかりません。これでもかなり日本語、勉強してるんだけどな。

それでも、「烏丸君」は聞き逃さない。わたしと兄さんを助けてくれた、守り人の家名。わたしの隣で驚く水葵以上に、固まったわたしが見つめ続ける、青白い肌で短い黒髪の学生服のヒトは……。

「なんで……ユウヤ？」

「……………」

ひょっとして、わたしはまだ部屋で寝てて、これは夢の続きなのかもしれない。そう思うほど、そこにいるのは有り得ない人影でした。

わけがわからないまま、立ち尽くしていると、時間を気にしたサトシが声を上げました。「烏丸先輩って、椋さんの親戚なんだよな？ 今日から転入することになったから、まずは顔見せ！ 春貴兄と同じクラスだから、後でまた覗いてあげて、椋さん！」

サトシはいつもお世話焼きです。そういうところ、最近ではよくわかってきて、話しやすくなりました。付き人さん達を帰らせて、何も言えないわたしを後に、ユウヤを高校の中に連れていってくれます。

わたしの方は、水葵に腕を掴まれて、ぼけっとしながら補修以来の教室に引っ張り込まれました。水葵もユウヤの実家のことは知ってるから、どうしてこんな異世界にいるのか、わたしの衝撃はわかったんだと思います。

「なにが……どうなってるの？」

とりあえず、それだけやっとならぬわたしに、斜め後ろの水葵は、さあ？ とだけ言って、つまらなそうに頬杖をついてるのでした。

お昼休みになってすぐ、わたしは三年生のクラスに行こうとしたけど、よく気配を探ると、ユウヤのかぼそいイメージは屋上にありました。わたしもいつもお昼は屋上に行くから、よし！ と、ガッツポーズをとっちゃいました。

こういう気配がわかる直観だけが、悪魔使いなわたしの特技なんだ。その延長で探偵見習いもやってるんだけど、これ以外は本当に、わたしはただの人間です。ユウヤ達みたいな靈感も、水葵みたいな魔力もないです。

「猫羽、昼食は——」

何かとわたしの生活を心配してくれる水葵に、大丈夫！ とだけ言って、教室に置いていきます。ご飯のいらぬ水葵は屋上についてくるか、教室で本を読んでもることが多くて、今日はゆっくり、図書室に返す前の『呪いの藁人形のフシギ』を開いてるから。

水葵はすごくキレイな人形の体を使って、読むものが合ってなさ過ぎ！ って、前にサトシが嘆いてたな。文字は多分そんなに読めてないけど、絵が多くてわたしもたまに見るんだ、フシギシリーズ。

でも、今日は息を切らせて、わたしは屋上までの階段を駆け上ります。

夢じゃないかな、って、その気配の源を疑います。きっと教室か家で、まだわたしは冷たく寝ていて、毎夜の暗闇からいつのまにか、誰かの夢に迷い込んだのかもしれない。そういうことも、時々あるから。

それならこれは、誰の夢だろう。一人で留学に来たはずのわたしの高校に、まさかユウヤが……わたしが将来仕えたい、淋しい雲の上の人が降りてくるなんて。

高校の中では、一番空に近い屋上。暗い階段の先でほのかに光る扉を開けると、そこに広がっていたのは不思議な世界。真っ白で深い霧の中で、色とりどりの紫陽花^{あじさい}が咲き乱れる神苑。

って、ううん、そんなわけないよね。いつも通り白くて平らで、端には高い金網のフェンスと、座れる縁がある教室くらいの広場。その一角で、金網を片手で掴んで校庭を見下ろす、小柄なユウヤの後ろ姿があったのでした。

わたしより少し背が高いくらいのユウヤは、わたしよりすごく敏感だから、屋上にわたしが来たのは気付いてると思う。

ほとんど心が動く気配もなく、ちらり、と、ユウヤがわたしの方に振り返りました。元の世界にいた時と変わらない、冷たく淋しい^{せいあん}青闇の目で。

「——ほんとに、ユウヤだ……！」

無表情なユウヤの黒い瞳に、自分でも不思議なくらいに、いっぱい笑ったわたしが映ります。少しだけ、ユウヤがぼちり、と大きなまばたきをしました。

次の瞬間にはもう、への字の口のまま目を細めて、小さな風にキレイな黒髪がさらさら揺れて、冷静沈着なユウヤらしい顔を見せてくれました。

「……貴女にしては、遅かったですね」

屋上の端にやっとなついて、わたしは両手で膝をおさえて、呼吸を整え直します。フェンスを横にして、わたしの前でユウヤは黙って立っています。

全速力でここまで来たから、さすがに息が切れちゃったんだ。それでも遅かったんだ？

よくわからないけど、体の弱いユウヤが確かに、慣れない学校でわたしより早く屋上にいたのは不思議だよ。

顔を上げて、「？」と笑うと、ユウヤが金網の向こうに視線を逸らしました。わたしはかまわず、朝からずっと気になってたことをききます。

「ユウヤ、これからしばらく、ここに通うの？」

「……そうです」

「どうして？ 御所にいなくて大丈夫なの？ それとも何か理由があるの？」

「……………そうです」

ちょっと不機嫌そうになって、目を合わせてくれないまま、ぶすっと答えました。ユウヤはキレイな顔をしてるから、伏せた睫毛が目を隠しちゃうそう。

でもとにかく、サトシが言ってたことは本当だったんだ。

わたしの通う高校に、ユウヤが転校してきた。それなら——これからしばらく、わたしはユウヤと、毎日同じ所にいられるんだって。

わたしの中で、よくわからない何かが振り切れしました。屋上に来た時に最初に観えた、幻の紫陽花がきらきらきら、ってまた光ります。

天にも昇る心地って、こういうことを言うのかな。わたしとは全然違う所にいるけど、ユウヤはいつもしんどそうで、いつか何か力になりたくって。

将来はユウヤに仕える人になるんだって、わたしは思ってたから……そのユウヤが目の前にいて、しばらく一緒にいられるなんて、信じられないよね？

これまでの高校生活も、勿論楽しかったよ。最初に来た頃は、どうして一人で人間界に行くのかわからなくて、兄さんやユウヤ達も誰もなくて、会えなくなってすごく淋しかったけど。初めて同年代のお友達ができて、色んな所にお出かけできて、人間界のいいところを沢山教えてもらえました。

それだけでも十分、幸せだったのにな。お小遣いのためのバイトも、住んでる家できちんと生活するのも大変だけど、兄さんが頼んでくれたおかげで水葵が沢山助けてくれるし。

何かもう、嬉し過ぎて頭がフワフワで真っ白になっちゃって、両手をぎゅっと握るわたしにユウヤが無言で視線を戻しました。

「ありがとう、わたし、すごく嬉しい！ ユウヤと一緒に高校行けるなんて！」

思わず全力で言っちゃった。こんなに大きな声を出すのは久しぶりで、ユウヤもポカン、とした顔になっちゃいました。

「……ありがとう、は、意味がわかりません」

あれ、そうだったか。何かおかしかったかな、わたしの正直な心なんだけど。

それから後は、入口に近い段差に並んで座って、ユウヤがわざわざ人間界に来た事情を簡単に教えてもらいました。

教室に帰るとサトシがわたしを見て、「え、椀さんさすがに笑顔過ぎ！」って、びっくりしてました。水葵には、「猫羽、昼食は……？」と、全然忘れてたことをいっぱい怒られました。ユウヤも食べてなかったし、それじゃダメだよ、心配だよ。明日も屋上に来るっていうから、今度はちゃんと、学食と一緒にいこう。そんなことを考えるだけでも気持ちがウキウキです。

でも、消え残る夢の続きは、これだけじゃなかったみたい。

この日これから、わたしは改めて悟ることになります。わたしが知らず迷い込んだ世界が、実はもうずっと、わたしを囲んで待ち構えていた現実に。

* * *

お昼ご飯を抜いたせいかな。それとも、嬉し過ぎて、疲れちゃったのかな。

そもそもわたし、高校の授業はほとんどわからないから、その日の午後は全部寝こけて過ごしちゃいました。一学期の最後はもうちょっと、頑張ってたんだけどな。

夜でなくても、一度深い眠りに堕ちると、わたしはまたあの水底に戻ります。だからいつもは、うとうとするくらいにしておいて、何か夢を見る方が好きかな。

わたしの夢には大体三種類あって、ほんとに浅い眠りの時は、よくわからないイメージの連続。これは普通の人も、そうだって言うよね。そして深い暗闇に堕ちた後には、昔の記憶ばかりわたしは見ます。

その狭間では、わたし以外の誰かが見る夢を、よく感じるがあります。わたしには自分と周囲の気配を一緒くたに感じ取る、気配の「直観」が生まれつきあって、それはとても珍しいけど、すごく強い共感能力みたいなものなんだから。だから悪魔とも有利な契約がしやすくて、悪魔使いになった経緯があります。

そうして、眠りの度に必ず還ってくる暗い水底で。

いつもわたしが沈んだ後に、すぐに願うことは一つで。

——……帰りたい……。

そこはとても冷たくって、わたし以外に誰もいなくて、わたし自身のカタチもなくて。

小さい頃に、家族の元から攫われて、一人ぼっちになったわたしは、ヒト殺しの天使になりました。人間のわたしはそれからすぐに、暗闇に閉じ込められた。だからずっと、いつまでもいつまでも、帰りたいって——そう、願ってました。

でもそれは、無理な望みでした。わたしは人間じゃなくなってたから、帰ることはできなかったの。

長く永く、処刑人の鎌で沢山のヒトを殺した罰として、奪った命が渦巻く混沌の中で、黒い水に溺れてるしかないはずでした。

もしもそこで、そんなわたしを、大切な誰かが見つけてくれなければ。

わたしにわたしのカタチを取り戻させてくれたヒト。

遠くて懐かしい、優しい声が不意に響きました。

——貴女は、ミィの声が聞こえてるのニ？

不思議な声色。霧の雨を受ける紫陽花あじさいのように、色とりどりの自分を持ったヒトの呼び声が、水底に融けたわたしをそのまま、掬い上げてくれました。もう名前も思い出せない、水の器アジサイの人。

その頃のわたしは、まだ「ウツギ・ネコハ」になれるほどではなかったけど、その器に遷された大分後に、相談所の先輩、咲姫おねえちゃんが人間のわたしを起こしてくれました。わたしが水の器に在ったからこそ、気が付いてくれることができたあの時。

——……貴女は……帰りたいの？

咲姫おねえちゃんは、半分悪魔です。水の器でたゆたうわたしに、後で気付いてくれたのは悪魔の咲香^{サクラ}おねえちゃんでした。

——それならこっちだよ。そこから出てきて、一緒に遊ぼう？

わたしが水の器に引き上げられた時には、咲香おねえちゃんは父さん達に助けられて咲姫おねえちゃんに戻って、わたしとは会えなくなっちゃいました。

水底にいる時からわたしはずっと、自分が誰かわからなくて。帰るところはあるはずだけど、自分が悪いことをして、それでここにいるんだって、それだけがぼんやり続く絶対の決まり事でした。

それでもせっかく目が覚めたのに、起こしてくれたヒトは誰もいなくなって、一人ぼっちになって。何もわからずに水底にいる時より、怖くて辛くなっちゃったっけ。

いつまた沈むともしれない水面に、紫陽花のヒトが残してくれた水の器で漂ってるだけ。それがしばらく、長く続きました。

どれだけ泣いても、誰にも声は届かない。どこまで流れても永遠に独り。きっといつまでもそのままなんだって、あの時は思った。

誰でもいいから、助けてほしくて……そうして出会ったのが、悪魔達だったんです。

帰りたい。そう願うことすら、できなくなってた。水底にいた頃はそれだけが、わたしの大事な「自分」だったのに、心だけが暗闇に隠されたみたいだった。

悪魔達はわたしを、悪魔使いの天使にしました。わたしはそこで、新しい名前と仲間をもらって、それからは優しい悪魔達の役に立ちたくて、そして……。

——逃げろ！ こいつら、アンタを攫う気だ！

その時再会した兄さんの叫び声で、わたしはやっと、わたしが人間だったことを本当に思い出しました。

悪魔達に出会ってから、悪魔達は強い力を持つ子供を集めるために、ユウヤや色んなヒトを攫おうとしたんです。わたしもそれを手伝って、偶然ユウヤを助けた兄さんは、その縁でユウヤ達の御所にお世話になることになります。

わたし、それから、悪魔達と悪いことを沢山してて.....兄さんがわたしに気付いて助けてくれるまでは、ユウヤ達にもすごく良くない敵だったはずで.....。

水底で昔の夢を見ると、いつもこうやって、いやなことばかりを思い出します。ユウヤはわたしが、ユウヤを襲った敵だってわかってたから、最初はほとんど仲良くしてくれなかったし.....あ、でもそれは今でも、そんなに変わってないかも？

ユウヤはずっと、兄さん達とは普通に喋るのに、わたしにだけは丁寧語なんだ。ここが高校の教室なことも忘れて、暗い過去を思い出すほど、わたしはうんうんとうなされていきます。

さすがに見かねたらしい水葵が、そんなわたしを無理やり起こして、深い水の底から引っ張り上げてくれたのです。

「猫羽、もうすぐホームルームです。これで今日は終わりですから、さすがにそろそろ起きて下さい」

「あ、ごめん.....ありがとう、なぎ.....」

担任の先生がもう入ってきそうだったので、水葵もすぐに自分の席に戻ります。と言っても水葵は悪魔で、完全にモグリの生徒だから、一番後ろのわたしの席の、斜め後ろに勝手に机を置いてるんだよね。一人だけぽつんと増えた席は目立つと思うんだけど、悪魔の魔法で一応ばれてはいないみたいです。その魔法をかけたのは水葵の^{あるじ}主で、兄さんもお世話になってるヒトなんだけど。

「せっかく烏丸悠夜が来たというのに、落ち込んでますね、猫羽は」

わたしやユウヤの素性を知ってる水葵は、何だか意外そうに、後ろからこっそり話しかけてきます。

「え、そう見える.....？ やだな、わたし、寝過ぎちゃったかな.....」

そう応えようとした時、先生が入ってきたので、慌てて前を向いたわたしでした。

まさかこれから、ユウヤと同じ、ううん、それ以上に驚くヒトが、後から入ってくることも知らずに。

「って.....えっ？」

初めは、ただ、ちょっとだけの違和感でした。

潜り込んでる水葵と違って、ほんとの転入生らしい薄い髪の色ヒト。転入生さんは男子生徒の制服を着て、先生に続いて入ってきました。染めない限り日本にはないはずの薄赤の癖毛に、みんながざわめいたのがわかりました。

わたしも実際には紫苑色の髪だけど、水葵の主の悪魔さんが黒髪に見えるようになって、魔法のリボンをくれてます。この蜜柑色のリボンを使う限りは、周囲には普通の日本人に見えてるはずですよ。

それはともかく、担任の先生があっさりと、わたしにとっては大きな爆弾の言葉を告げました。

「今日から二学期の間だけ、うちのクラスに入ることになった、交換留学生の鷹野^{たかの}パルシィ君だ。日本語は書けないが会話は不自由ないそうなので、わからないことはみんなで助けてあげるように」

「て……えっ!?!」

それは、わたしはあんまり聞き覚えのある名前過ぎて、思わず声を出すほど驚きました。

珍しい髪の色と名前に、みんなもざわざわしてたから、わたしだけ目立たずには済んだとは思うんだけど。それでもまるで、津波でも来たような動揺がわたしを襲いました。「そんな——……だって……！」

先生の隣にいる転入生のヒトは、震えるわたしに気付いたみたいで、わたしの方を見てにこり、と、薄い青の目で笑いました。

先生もちょうどそこで、転入生のヒトの視線の先に目をやります。

「席は、楡の後ろが空いてるな。もし不都合があればまた検討するから、当面はそこに座ってくれるかな、鷹野君」

わたしの後ろ。つまりそれは、水葵のお隣さんになるよね。

目の悪い人だと、黒板が見え難くて困ると思うけど、転入生のヒトは心から嬉しそうに微笑みました。

「大丈夫です。むしろボクも、是非そこに座らせていただきたいです」

男の人にしては高いその声。

そこにいるのは紛れもなく、わたしが悪魔使いになった理由……ユウヤや今の兄さんよりも先に一緒にいた、多分わたしのたった一人の、大事な悪魔仲間でした。

「——ねえ。ボクの天使も、そう思うよね？」

すぐ近くに来てから、わたしの横を通り過ぎる時に、こっそりささやかれた声なき声。

多分、悪魔の力を使って伝えてきたことに、わたしはただ茫然としながら、頷くことしかできずにホームルームが終わりました。

色んなことがあり過ぎた二学期の初日に。

その後はどうしよう、とちょっと悩んだんだけど……ユウヤの気配は、掃除が終わる頃にはなくなっていました。多分帰っちゃったんだろうから、そのままわたしは水葵と一緒に、何故か転入生のヒトに連れられて、バイト先のよろず相談所に向かうことになった次第でした。

というのも……。

「それでは貴方は、鷹野^{カレン}花憐のツテでここに来たというわけですか。一国の王子ともあろうものが、随分な道楽のご様子ですね」

「あはははは。相変わらず言うよねえ、君、海竜。確かに戸籍は君達と同じで、玖堂さんの世話になってはいるけど、ボクの方がよっぽど正規の留学生だと思うけどね？」

わたしの後ろで、バチバチとしながら歩く二人。この剣幕は知り合いというか、元敵同士だからというか.....。

とりあえず転入生のパルが、うちの所長の根回しで転入できて、だからよろず相談所がこの世界でのお家だとか、それで所長と同じ「鷹野」を名乗ったんだとはわかったんだけど。

「戸籍があるのは猫羽だけです。貴方達のように甘やかされた環境であれば、私は苦労しません」

「あ、そうなの？ その人形の体で堂々と出歩くことといい、実に見上げた忠義者の海竜だよね。うちの国のモノにできなくて残念だったよ、やっぱり」

「過去形でごまかされるとお思いですか。こんな所までわざわざ足を運ぶとは、今度は何を企んでいるのですか」

パルは元々、私達の故郷の世界では竜の力を継ぐ人間の国で、王子様として生まれたはずのヒトでした。

でもわたしと同じで、小さい頃に攫われちゃったんだよね。それから巡り巡って、悪魔達の元にいたわたしと一緒に、悪魔使いをすることになったわけなんだけど。ホームルームの時の簡単な言霊一つにしても、パルもまだ現役悪魔使いなんだって、よくわかってちゃいます。

わたしが兄さんに助け出された時、パルも自分の国に帰してもらえたはずなんだけど.....その後にはクーデターとか色々あって、水葵や父さん達とちょっと戦ったみたいなんです。

わたしがその場にいたら絶対止めたけど、父さんも兄さんもわたしを関わらせなかったから、あれからのパルのことはよく知らなくて.....。

毎日夕方、放課後から十九時半まである相談所の受付バイトは、いつもならわたし一人で行きます。今日はパルと一緒に、それが心配だからって、水葵もついてきてます。

わたしは幻想の鎌も持ってるし、別に大丈夫だとは思うんだけどね。わたしの護衛がこの世界での水葵の仕事だから、わたしがどうこう言える立場でもないしね。

二人の前を歩いて、相談所でいつも通り二階の受付^{カレキ}に座っても、わたしはまだ混乱が収まらないままでした。それでここまで、喋ることもできませんでした。

「ところで貴方は、さっさと自室に引っ込んだらいかがですか。こちらの地下に居室を作られたと伺いましたが？」

「やだなあ、あんな辛気臭いところより、ボクの天使の隣がいいに決まってるじゃないか。君こそ余計な詮索はせずに、護衛に徹していただろうだい」

二人は何だか、楽しそうだなあ。わたしはもう、今日は衝撃が多過ぎて、さすがに糸が切れちゃったみたい。

でも受付に座って大きく息をつくとき、バイトモードに入ったせいか、少し気合いが戻ってきました。それをちょうど見計らったのか、パルが改めて話しかけてきます。

「そうそう、ボクもタダで、ここにいられるわけではないんだ。ゆくゆくは受けをしろと言われてるから、これから引継をよろしくね、マイエンジェル」

「——え？」

なにそれ、わたし、何もきいてないよ？ でも所長なら考えかねないね。

パルは昔から、わたしの無愛想には慣れたものです。というか本来、パルの方がわたしよりもっと感情がなかったんだけど。笑顔や柔らかい物腰は全部作り物で、それをわかっているわたしも気楽で、黙って話しの続きを待ちます。

「ボクの天使は、一応探偵適性持ちだから、受けで飼育より今はどんどん、外に出てもらう、と花憐は言っていたよ？」

つまりそれは、探偵の方のお仕事や事件を、もっと増やすってことだよな、所長……。わたしは別に、受けで全然良かったのになあ……。

相談所の二階は、瓦礫^{がれき}部屋です。わたし以外にはちゃんと、所長の魔法で応接室に見えてるらしいんだけど。

座るところは二人分くらいの、ソファ代わりに対面で並んだブロック塊しかなくて、奥にわたし、入口側に水葵とパルが並んで座ります。

これじゃまるで、水葵とパルが、今日のお客さんみたいだね？

「……………」

水葵とパルの応酬がやっとなんと、そこから静かな空気が流れ始めました。

わたしはじっと、目の前で膝に手をついて座る、笑顔の張りついていたみたいパルを見つめます。

「……—」

本当に、本当に、久しぶり、だなあ……。ききたいことは、いっぱいあったけど……。何だか言葉はいらぬ気がして、じんわり、懐かしい空気に浸っちゃいます。それはきっとパルも同じで、ただ柔らかく見つめ返してくれます。

昔からそんなに、特に話はしませんでした。わたしとパルは常に一緒に、どっちも一人ぼっちで淋しくて、何も考えずに悪魔達の言うことをきいていたから。

ただ、悪魔達の役に立てれば嬉しかった。偉い上級悪魔はともかく、わたし達に直接関わってた悪魔は、優しいヒト達だったから。

たとえば、水底から水の器に汲み取られた後に、城に戻ってまでわたしを起こしにきてくれた咲香おねえちゃん。それでもおねえちゃんがいなくなって取り残されたわたしは、同じように一人ぼっちのパールに出会った。

最初は心をつにして、悪魔使いとして頑張ってたよ。でもわたしが兄さんに出会ってしまったから、わたしはパールを、置き去りにしたと言ってよくて……だから、こんな風にもう一度会えるなんて、全然思ってたかったんだ。

「君は、変わったね……ボクの天使」

「……え？」

水葵が、むう、と腕を組んで難しい顔をしてる横で。パールは後ろに手をついた姿勢で、雰囲気崩して、わたしに優しく笑いかけてきました。

パールから見れば、わたしは兄さん達を選んでしまった、あくまで裏切者のはずなのに。「そのツインテール、よく似合ってるよ。君があれから、生きていけるか心配だったけど……噂通りちゃんと人間になれたみたいで、本当に、良かったと思うよ」

人間になれて、良かったね、って。じわりと、わたしの呪われた過去を知るヒトの不意打ちに、思わず涙が滲んじゃいました。

家族や親戚、水葵とユウヤしか知らないはずのこと。パールは誰よりわたしの近くにいたから、わたしがサツリクの天使だった頃の罪を、わたし以上によく知ってるヒトだから。

「パール……わたし——」

「何も謝ることはないよ。今まで君に会える機会がなくて、残念だったよ。ボクは君にどれだけ助けられたか……ボクがこうして人間の猿真似ができるのだから、元々人間だった君と一緒にいてくれたからだよ」

「それは——わたしも……」

小さな頃に攫われたせいで、感情を育てることができなかったパール。薄くて青い目が、今はわたしをととも心配する心で、フワリと笑って細められてる。

パールも、こんな顔ができるようになったんだ。それがわたしは嬉しくて、余計に胸が詰まって何も言えません。

水葵はずっと、うさんくさそうに横目でパールを監視してるけど、わたしにはちゃんと伝わってきます。パールが本当に、事情はよくわからないけど、わたしを心配して会いに来てくれたんだって。

所長と知り合いみたいなのは、意外だったけど……多分だけど、相談所営業の咲姫おねえちゃんの采配だと思う。咲姫おねえちゃんはわたしと同じ世界の出身で、戸籍はパールの国にあるみたいだから。

兄さんがわたしを助けてくれて、それからわたしは、いっぱい優しいヒトに囲まれてる。長い間に沢山ヒトを殺したのに、こんなに幸せでいいのかなって思うくらい。

それでなくても、わたしがここに人間としているために、咲姫おねえちゃんの大事なヒトを犠牲にしてるのに……たとえそれが、母さんの命をかけた願いだったとしても。

それからはお客さんも来て、パルとはあんまり話をしませんでした。

水葵は二階唯一の精密機器のパソコンをさわってみたり、パルはわたしの仕事ぶりを見学したりと、フシギな時間です。でもしばらくこれが、バイトの日常になっていきそうです。

今日はびっくりだらけだったけど、わたし、順応性はある方だと思う。

バイトが終わって、これからどんな毎日がやってくるのか、想像できないけど楽しみでした。弾む足取りで帰ってると、隣で水葵が悩ましそうに腕を組んで俯いてました。「そういえば、猫羽……これは、里帰りしてすぐ、我が君から小耳にはさんだことなのですが……」

大変なことを思い出してしまった。水葵がそんな風に唸るのは珍しくて、わたしはきょとんと立ち止まります。

ちょうど、お気に入りの紫陽花の公園に近い昇り坂で、暗い夜に薄い霧が出始めてました。

「烏丸一家は、私の帰郷時点ですでに、『花の御所』には不在でした。その時には気に留めなかったのですが、何でも我が君曰く、烏丸兄弟にはこのところ、縁談が絶えないらしく……」

ユウヤには、六歳離れたお兄さんがいます。わたしのことも可愛がってくれて、すごく強い剣士さんで、兄さんには兄弟子になります。

硬派でかっこよくてモテモテなんだけど、剣にしか興味がないみたいです。でも、そっか、ユウヤもそろそろ元服だもんね。烏丸のお家は御所の管理者だから、跡継ぎとか色々、悩みは尽きないんだろうな……。

「そっか。ユウヤ、いいお嫁さんが見つかるといいね？」

「呑気なことを言っている場合ですか。烏丸悠夜が何と言って御所を出て、こちらに留学に来ることになったか、猫羽は他人事ではないのですよ」

そこで水葵が教えてくれたのが、今日の最後で最大のびっくりでした。

意味が全くわかりませんでした。これは事件だ、と、探偵としてのわたしが何とか持ち直します。

まさかユウヤが、御所の人達に向かって、いつも以上の営業スマイルをキレイに浮かべて。「僕に嫁いでいただくのであれば、猫羽さん以上に使える人材でないと困ります」なんて、縁談の条件として言っただなんて……——

* * *

気が付けば、もう、暗闇の中にいました。

わたしには毎日のことだけど、今日の夜もまた、暗い水底にずぶずぶと沈んでます。いつかここから、出られなくなる日がまた来ると思う。

色々あり過ぎて疲れてたから、バイトから帰ったらすぐに寝ちゃって、ご飯、って水葵が怒ってました。

暗い水底で浮かぶ夢は、大体现実の再現が多くて。今日見えたのは、お昼休みにユウヤと話したことでした。ユウヤが教えてくれた、人間界にくることになったユウヤなりの事情。

「母様が帰ってきたんです。父様が最近やつれているので、それを心配して、一度家族全員で御所を離れて静養しよう、という話になったんです」

「そうだったんだ.....それはとっても、心配だよね」

「あらかじめ言うておきますが、猫羽さんはお見舞いに来ないでください。今の貴女の年恰好で、昔のように父様に甘えられると、母様がいらぬ誤解を抱きますから」

高校が終わると、ユウヤはすぐに帰っちゃいました。わたしに家を知られたくないんだな、ってわかったから、ユウヤのお父さんには会いたいけど、諦めるしかないみたいです。

兄さんが御所に養子入りしたから、わたしもよく御所には遊びにいったんだ。特にユウヤのお父さんは、優しくて大好きだったの。御所では小さな女の子は珍しいみたいで、他にも色んな人が可愛がってくれました。

でも昨日は、気付かなかったけど.....水葵は確か、夏休みになってすぐに、元の世界に帰ったんだよね。その時にはもう、ユウヤ達は御所にはいなかったってことになると.....。

——貴女にしては、遅かったですね。

わたし、最後にユウヤに会ったのは、こっちの世界で七夕の時なんだけど。もしかしたらユウヤ、それからすぐ後に、こっちに来てたってこと？

それならユウヤが言った、言葉の意味もわかる。夏休みの間、ずっとユウヤがこっちにいたなら、気付けなかったのはクヤシイから、わたし。

そう言えばユウヤ、屋上の行き方を知っていたり、授業が終わったらすぐ帰ったり、何だかこっちの世界に慣れてる感じだったし。わたし達の元の世界とは、こっちは全然違って大変なのに。

短いお昼の夢が終わって。今日は、寝坊せずに起きることができました。お弁当を作るほどの時間はないけど、それは今後の目標かなあ.....。

水葵と一緒に登校します。教室でパルに会って、おはよう、って言うと、嬉しそうに笑ってくれました。サトシもすでにパルの所において、「今度鷹野の歓迎会しようぜ、檢さん！」って、楽しそうなお話を出してくれます。

昨日にユウヤが、今日もお昼には屋上に行くって言ってたから、昼休みにはまた一人で屋上に向かいます。慣れないパルはサトシと水葵と一緒に、所長が持たせてくれたお弁当を教室で食べるみたいだから、わたしの席が空いてる方が集まりやすいしね。

屋上の端で座るユウヤを見つけてすぐに、わたしはずいっと、気になってたことをききにかかりました。

「ユウヤ、ひょっとして、夏休み中から人間界にいたの？」

「.....」

今日はユウヤも、お弁当を持ってきたみたいです。何だかみんな、わたしよりしっかり生活してるね.....わたしなんて今でも、良くて学食か菓子パンなのになあ。

むすっとして答えないユウヤは、肯定の意味だなんて、わたしは隣に腰かけながら納得します。

「わたし、全然気付かなかった。元の世界なら京都くらいまで、ユウヤの気配なら遠くても追えるのにな。こっちは人が多過ぎるせいかな？」

「それもあるでしょうけど、猫羽さん対策として、とても念入りに隠術を使いましたから」

「あ、そうなの？ あれ、でも昨日、学校にいる時には気配、わかったよ？」

「それは隠しても無意味でしょう。橘診療所、ひいては玖堂家の協力を得ている以上、僕達がこちらにいるのは隠し通せることではありませんから」

悪魔使いだったわたしは、ヒトの気配を掴むのが得意です。頑張れば多分、街一つの範囲くらいは知り合いを探せるよ。

多少の気配隠しではごまかされない自信もあるんだけど、この分だとユウヤ、わたしに気付かれないように、本気を出して隠れてたんだ.....何もそこまでしないでも、ユウヤの珍しい一家団欒、邪魔したりしないのになあ。

手ぶらで屋上のへりにこしかけたわたしに、ユウヤがますます不機嫌そうになっちゃいました。

「.....昨日もですけど、貴女の昼餉ひるげはどうしてるんですか」

「あ」

すっかり忘れてた。ユウヤがお弁当を持ってくるなら、わたしはこれから一学期みだいに、菓子パンでも持って屋上に来ないかね。ユウヤが明日も屋上にくるかはわからないけど、わたしは元々屋上でご飯派だったし。

そうしてまだまだ、夏休みボケが抜けないわたしに、ユウヤが小さく溜め息をつきました。それからごそごそと、傍らに置いてる小さな手提げから、これもほんとにびっくりな物を、気怠そうに取り出したのでした。

「……どうぞ。母様が、良ければ猫羽さんに、と」

「って——えっ??」

手提げから出て来たのは、ちょこん、と可愛い猫柄の巾着に包まれた、もう一人分のお弁当。

え、え、なにこれ、どういうことだろ……ひょっとして、ユウヤの言う通り、わたしの分のお弁当ってこと……?

「え、な、なんで……? どうしてユウヤのお母さんが、わたしにお弁当、作ってくれるの……??」

びっくりし過ぎて、ポカンと開いた口がふさがりません。だってわたし、今まで確か、ユウヤのお母さんには会ったこともないよ?

お父さんが作ってくれたならまだわかるよ。御所に行くときよく、おにぎりとか分けてくれたしね。でもユウヤのお母さんは事情があって旅がちで、御所には滅多に帰ってこれないらしいから。

「いるんですか、いないんですか」

「え、やだ、絶対にいる!」

わけがわからないけど、がぼっとユウヤからお弁当を受け取ります。

どうしよう、わたし。自分専用になんかに可愛いお弁当、作ってもらったの初めてなんだ。元の世界ではそもそも、お弁当って文化がほとんどないし。

だから可愛い猫柄巾着を見つめて、目がきらきらしちゃいました。中には割り箸と、桜模様の小さな二段のお弁当箱が入ってて、ほんとに女子高校生さんが食べそうなお弁当は、わたしにはカルチャーショックそのものでした。

初めての手作りお弁当が嬉し過ぎて、ユウヤにききたいことがいっぱいあったはずなのに、全部何処かに吹っ飛んじゃいました。

下の段は、鳥のそぼろがまかれた白いご飯。上の段は、卵焼きとブロッコリーとお野菜の煮物。一心不乱に一つ一つ味わうわたしに、隣で少しだけ、ユウヤの目が細められた気がしました。

おいしい、幸せ、なにこれ、この世界はどうなってるの。

もうなんだか、なにがどうヘンなのかも、わからなくなっちゃった……探偵失格だなあ、でも別に事件が起こったわけじゃないし、ユウヤがここにいるのはわたしには大事件だけど、それは解決しない方がわたしは嬉しいし……あ、これはダメだわたし、間違いなく頭がふやけてポンコツになってるみたい……。

ぼーっとしながら、幸せお弁当を全部食べ終わって、しばらく余韻にひたっていると、ユウヤがお弁当を片付けようとしてました。あ、それくらい自分でしなきゃ！ と焦って、やっとわたしも現実に戻ってきます。

お弁当をしまおうと巾着の口を大きくあけると、取り出す時は気付かなかったものが、巾着の底で眠ってるのが目に入りました。

「——え？」

「！」

ユウヤがさあ、っと青ざめました。手に取ったのは多分、ユウヤのお母さんがお弁当と一緒に、わたしに書いてくれた簡単なお手紙で。

——猫羽ちゃんへ。

初めまして、悠ちゃんと仲良くしてくれてありがとう！

簡単なものだけど、良かったら一緒に食べてね。

未来のお義母さんより——

.....未来の、お義母さん？

お義母さん？ お義母さんって、義理のお母さんって意味だよな？

ユウヤには本当のお母さんだから、ユウヤに言ってるわけじゃないよね。

未来のってあるから、わたしのお義母さん、ってことだよな？

それって.....どういう.....。

ええっと。とりあえず、せっかくお手紙をもらったんだから、わたしもお返事を書かないとだよな。

ユウヤがどうしてか、慌ててばっとお母さんの手紙をわたしから取り上げたから、体をちょっと傾けて改めてユウヤの方を向きます。

「ユウヤ、ごめん。わたし今、紙を持ってないから、お返事とお礼を裏に書かせて.....」

あ、でも書く物も持ってないね。やっぱり今日、家に帰ってからきちんとして、明日ユウヤに渡せば届けてくれるかな？

「必要ありません。母様には猫羽さんがお礼を言っていた、と僕から伝えます」

「そうなの？ じゃあそれ、返して。ユウヤのお母さんの、大事なお手紙」

「駄目です。こんなものを人に見られたらあらぬ誤解を招きます」

「あらぬ誤解.....でも、せっかくお母さんが、わたしに書いてくれたのに.....」

ユウヤは天才って言われるくらい賢くて、わたしはユウヤより頭が悪いけど、その分運動神経はいいと思う。

ちょっと本気で素早く手を^{ひるがえ}翻して、力ずくでお母さんの手紙を取り戻すと、ユウヤが強握ってたから、下の方が破れちゃいました。

「あっ.....ごめん、なさい.....！」

「——」

が一ん、と、お昼が一気に夜になったみたいでした。

せっかくのお母さんの手紙、わたしのせいで、破れちゃった……お弁当もすごく嬉しかったし、わたしはただ、大事なお手紙をちゃんと取っておきたかっただけなのに……。

ユウヤも怒るかな、と思ったけど、わたしがズーンと重くなっちゃったせいか、何だかバツが悪そうに座り直してました。

「……僕こそすみません。そちらは差し上げますから、どうぞ」

「未来のお義母さんより」だけが残った切れ端を、ユウヤが手提げの中に直します。残った手紙の大半は、そのままわたしにくれました。

やっぱりユウヤ、わたしにはいつも無愛想だけど、落ち込んだヒトには温かくしてくれる優しいヒトだね。

なんだかんだの内に、お昼休みも終わりが近づいてきました。

ユウヤはこれからも、屋上でお昼を食べるみたいです。こっちの人間と仲良くする気はないから、だって。

そうだよ、ユウヤ達はあんまり、御所を長く空けるわけにはいかないと思うし。ユウヤのお父さんの静養が終われば、すぐに帰っちゃうんだろうな。

後で水葵に、お弁当箱は洗って返すものです、と怒られることになったけど、ユウヤは何も言わずに二人分のお弁当を片付けて、ひっそりと屋上を後にしました。

一緒に階段を下りる前に、わたしはハッと、踊り場で立ち止まりました。

「——そうだ、ユウヤ」

「？」

今日はわたし、何かをユウヤに言いたかったはずで。それが沢山あり過ぎて、しかもお弁当の衝撃でほとんど抜けちゃったけど、やっと何とか言葉が浮かびます。

「ユウヤ、御所で縁談が出てるって、なぎから聞いたよ。ユウヤの助けになるいいお嫁さん、早く見つかるといいね」

「——」

かちん、と。踊り場で止まったユウヤが、何故か仏像さんみたいに固まりました。

「なんでわたし以上でないと、ユウヤのお嫁さんになれないの？　沢山いると思うけど、ユウヤはどんな人をお嫁さんにしたいの？」

うん。それがわたし、すごくびっくりで気になったんだっけ。

わたしが将来、悪魔使いの特技を生かしてユウヤに仕えたいと言っても、今までユウヤは「必要ありません」の一言だったもの。

「わたし以上」が条件ってことは、多分悪魔使い以上ってことだと思うけど、それはどういう人のことなんだろう？　精霊使いとか聖女さんとかなのかな？

御所ではわたし、よく遊びに来る、ただの人間の女の子だったから。わたし以上って言われても、御所の人達もわけがわからず困ってると思う。ユウヤ、御所では愛想がいいけど、実際はすごく気難しいんだよね。

今もふるふると、ちょっと顔の上半分を真っ黒にして、わたしの踏み込んだ質問に気を悪くしちゃったみたいでした。

でもわたしは別に、ユウヤをからかうとか、そんなつもりは絶対になくって……。

「わたし、何か、お手伝いできることはある？」

せっかくユウヤが、しばらくこんなに近くにいたんだから。

さすがに人間界で、一緒にお嫁さん探しは無理だと思うけど、できることは何でも力になりたいんだ。

わたしが真剣にきいてるって、ユウヤも途中からわかってくれたみたい。手提げを握り締めながらも、険しい青闇の目に少しだけ光が戻りました。

「……そこまで事情を知られているなら。猫羽さんはただ、僕の周囲をちょろちょろして下さればいいんです。他には何も期待していません」

「そうなの？ よくわからないけど、ユウヤの役に立てるなら頑張るよ」

ううん。相変わらず、避けられてるのか頼ってくれたのか、よくわからないね。

ユウヤのことだから、きっと何か、理由があるんだと思う。わたしなんか到底推理はできないほど、ユウヤは賢くて複雑で、そして繊細なもの。

ユウヤがそれだけ色々考えるのは、いつも沢山、みんなのことを思ってるから。自分も周りも納得できるように、何事も解決していくのがユウヤなんだ。

わたしはそんな、優しいユウヤが大好きだから、再開した足取りが一段と弾みます。

反面、何だか苦い顔で階段を下りてくるユウヤに、不思議な思いで振り返りました。わたしの方は自然と、心からの笑顔が湧き上がってきました。

「ユウヤのお嫁さんになれる人は、絶対幸せだと思うな」

ユウヤはきっと、呪術師の家は大変だからって、お嫁さんを遠慮したい気持ちがあるんだと思う。だから殊更、何でもいいから条件をつけて、遠回しに縁談を拒否したんじゃないかな。

それだけ察してそう言ったわたしに、上の段でぴくりと一瞬、ユウヤがまた足を止めました。何だかほっとするような、残念そうな、よくわからない浮かぬ顔色で。

悪魔使いでも、弱い人間でも役に立ちたい。うん、わたしはそう望んでる。

今のわたしが、探偵見習いだからできることも、何かあればいいな――

これからしばらく、わたしは必死に、毎日暗闇を這い上がります。

Target.1 了

☆ details: 梟猫羽

梟猫羽という存在は、橘桃花^{とうか}の劣化版。同じ混沌の「桃花水」^{とうかすい}に接続できる魂の器ながら、それ故に境界が薄い人間の危機。

それを夏の終わりに、機械人形の一つが言い出した時には、橘診療所の院長は頭を抱えたものだった。

「おまえ……ついに出てきてしまったのか、凧……」

「あら、白々しいなあ、橘灰先生^{キツカイ}？ そのためにこの人形を凧と名付けて、わざわざ水竜をモチーフにさせたくせに？」

橘診療所を敷地内に持ち、猫羽の支援者である玖堂家当主には、何と十人もの子供がいる。その一人一人に、天才理工学者である当主が造った機械人形の召使がいて、それぞれ何かの動物になぞらえた機体で多様な個性を持たされている。どの機体も人型ではあるが、猫が原案であれば聴力や運動能力が優れていたり、犬なら嗅覚や社会性が強い、といった具合に。

そんな玖堂家の、警備を担当する第一世代の機械達は、十二支を元に造られている。しかし子供一人一人を担当する第二世代においては、モチーフと名前を提案したのは、診療所を任された院長の橘灰^{カイ}だ。

個体名を持つ人型の物には、ヒトの魂が宿り易い。機械人形がヒトのような意識を持てば、子供の養育においてプラスになるだろう、と院長は当主に提案していた。また院長がたまに休診できるように、助手である医師ロボットの「空」^{ソラ}も育てている。その医師ロボットのモチーフをネコにしてもらったのは、人間と暮らす某お助けロボットが院長は好きだからだ。

だから今、目前にいる「凧」は、同じ名前の院長の嫁の魂が宿り易いよう、あえて似せて造ってもらった——そのはずだった。

「ところでそれがどうしていったい、水竜のはずの凧が、『うなぎ』がモチーフに変えられてるの？ その改悪はちょっと殺していいかしら？」

「みなまで言わせるな……十二支にいる動物はNGだと言われたら、他にどうしろと言うんだ……」

「あのねえ、忘れてるんでしょうけど、あたしはキツネのキリちゃんにも宿れるけど？ よりによって春貴君とサトシ君の召使達にその名を負わせるとは、アナタもつくづく食わせ者よね、灰^{アッシュ}」

そうしたわけで、猫羽からは二つ上の玖堂春貴、その「機械の召使の凧」が、突然猫羽の採血をしると言ってきた。悪魔の院長はそれについて、黄泉シエオルに閉じ込めているはずの嫁が、ついに現世に降臨してしまった。そう悟らざるを得ないのだった。

「機械人形の凧」と、同名である院長の嫁の凧は、元々水竜の家系に混ざって生まれた妖狐だ。それにも色々な事情があるが、つまりは竜と狐の合いの子とっていい。猫羽はその家系に近い、水竜の血をひく人間になる。

凧と彼の間には、咲杏と桃花という娘が生まれたが、桃花の死の運命をきっかけに凧は狂ってしまった。だから凧の魂は、院長の自室から繋がる黄泉に閉じ込めているのだが、先日桃花の心霊が橘診療所に帰ったことで、どうやら凧も動き出したらしい。

「それで……山猫猫羽の血を手に入れて、どうするつもりなんだ」

ちょうど最近、猫羽の様子が少しおかしい、と猫羽のバイト先の相談所から診察を依頼されていた。だから採血するのは怪しまれなかったが、それが何を考えているかさっぱりわからない、凧の指示であるのは院長も不本意だった。

「ふふふふふ。ちゃんとあたしの言った通り、桃花が持って帰った、『汐音』の血と混ぜてくれた？」

「いや、それ、時空が違うから相当無理があったぞ。どうしてくれる」

それは院長としても不可解な事の次第だった。「桃花の劣化版である猫羽」と、「汐音がいる時空の猫羽」は、本来交われない違う世界となっている。「汐音」という名を持つ吸血鬼が、まzogく限られた時空にしか存在しないのだ。

凧の指示は、「汐音が存在しない時空にいる猫羽≒桃花の劣化版の血に、存在しない汐音の血を混ぜてくれ」という指示で、普通に混ぜようとするれば、時空に矛盾が発生するので消える。だから時空の差異に左右されない炎獄ゲヘナで行うことで何とか達成できたが、診療所に戻ればどの道その血は消える、と思っていた。

「ふふふふふ？ やっぱり汐音も猫羽も、アナタは正体を掴めてないのね」

「とりあえず、『桃花の劣化版の猫羽と汐音は同じ時空に存在し得る』のはわかった。で、おまえの言う通り混ぜた血は二つに分けたが、それをこれからどうするつもりだ」

「桃花の劣化版の猫羽」は、現在、ある危機に瀕している。だから猫羽のバイト先の魔女も、橘診療所に協力を依頼してきた。その結果が猫羽の高校に転入するはずの、烏丸悠夜と鷹野パルシィの存在だと言える。

ところが「猫羽を守る」という点において、凧のことは正直信頼できない。そもそも猫羽がその危機に陥ったのが、凧の采配の一つであったからだ。

娘の桃花を介しての縁。院長は、そこまで陰猫羽に思い入れがあるわけではないが、凧を背後で操っている炎獄の管理者が根本的に嫌いなのだ。

「そうね、これからが全ての始まりだものね。汐音の血を誰がどう引き受けるか、それがさざなみの仕組んだ、運命のゲームの一つ。こうして猫羽ちゃんの外で猫羽ちゃんと汐音が混ざれば、楽しい楽しい、猫羽ちゃんの魂の奪い合いが、これから始まるの」

風の名を持つ機械人形が、日頃は浮かべることのないあくどい微笑み。

とっくに狂気に堕ちた風が憑いているので仕方ないが、風の最も危ういところとしては、それでも風なりに誰かを助けようとしているはずの、覆せない行動パターンだった。「だから二つ、猫羽ちゃんには可能性を残しておくの。血の半分は召使の『霧』に保管させて。そうすれば風滴が、『霧』を僅かでも動かせるようになるから」

「.....風滴は、山猫の内の、あの霧の精霊のことか」

「アナタも共犯でしょ、灰。わざわざ猫羽ちゃんと同学年の、サトシ君の召使を、『霧』と名付けたのだから。そしてもう半分の血は、アナタがずっと匿ってくれてるあの子.....『水燬』に輸血してくれたらいいの」

その、「水燬」という名前を機械人形の風が口にした瞬間、院長を重い衝撃が襲った。

猫羽の魂の奪い合い。先刻風の言ったゲームの意味が、ようやく理解できてしまった。

「.....まさか、おまえ——」

「今更、待ったはなしよ。これでさざなみを一人、表に引っ張り出せる」

「——」

「水葵は退場することになるでしょうね。だから別に、水葵の体を使ってもいいんだけど.....あたしは当分、この『風ちゃん』から、状況をゆっくり見守らせてもらうね？」

猫羽を守る橘水葵が、使う人形の体にも風は宿れる。水系の竜という縁があるからで、だから同じ響きの名前が水葵にはつけられている。そうして猫羽の様々な周囲に、魂魄のみで動く風は既に手を回している。

それはおそらく、「桃花の劣化版である猫羽」が、風と同様に、広い範囲にその魂の影響を与えられるからだろう。桃花というより風の劣化版だ、と院長は苦々しく思う。

「これがあたしの、アナタへのこたえ。意味はこれから、アナタのその眼で確かめてみて」

少し前に院長は、望みは何か、と風に尋ねた。その結果、風がこうして外に出て来たのなら、確かに事態は大きく動き始めていた。

楡猫羽は何故こうも、風を動かせるのだろうか。桃花の延長として、守っている.....それだけでは説明できない過干渉だ。そんなにも「運命を変える力」——風が求めてやまなかった神性を、人間の猫羽が持っているのだろうか。

それをヒロインと言うのだ、と、二次元オタク趣味のある院長は不覚にも考えていた。

「しかし、水燬に汐音ときたか.....やっぱり、何考えてるんだ、おまえ.....」

それは猫羽に、確かな縁がありながらも、過酷な運命を暗示する名前。数多の時空の特異点な橘診療所において、多重の記憶がある院長が、それでも驚いてしまうレアな展開。

輸血しろ、と言われたが、血液型は同じだっけな。

と、ひとまず医者らしいことを考えて、今日も理性を取り戻していく院長なのだった。

★ Target.2: 漣汐ノ香出現事件

誰かが、わたしは欠陥品みたいな内容のことを、何処かで言ってるような気がしました。

その通りかもしれない、とわたしも思う。人間と言い切るには、化け物の家族や悪魔の仲間も多いし、化け物と言うにはちょっと無力。バイト先の所長が門番用に、とくれた幻想の鎌はあるけど、毎夜の水底では取り出すこともできません。ある意味一番、ここが危ない場所だと思うんだけど。

誰もが虚に沈むはずの水底で、また、わたし以外の声が聞こえました。

夢にしては、相手の姿が見えなくて、ただその思いの気配だけが伝わってきます。

——梶猫羽から手を引いてくれない？　烏丸悠夜君。

今度のははっきり、声が聞こえました。知らないような知ってるような——でも向こうは確実に、わたしを知ってる確信の声。

——どうしてあなたがそんなことを……そもそも、どうして、あなたがここに……。

震えそうな声で応えてるのは、高校の屋上にいるユウヤ。

ユウヤの前には、わたしと同じ制服を着て、同じくらいの背丈の女の子。

その黄金色の眼を見て、わたしが思ったことは、たった一つのこたえだけでした。

……ごめんなさい。

ごめんね、ユウヤ。悪いのは、わたし…… ——

* * *

最近、わたしの寝起きが悪い、と、一緒に暮らす水葵が教室の後ろの席で大きな溜め息をついたのでした。

「一学期はこんなに、毎日ギリギリ登校でしたっけ、猫羽？」

「うーん、そうだったような、違うような……一学期は家で一人だったから、ちゃんと起きなきゃ、って、気が張ってたのかなぁ……」

私のせいだと言うんですか。と水葵がふくれちゃいました。そんなつもりはなかったんだけど、不機嫌そうだから、夏休みにお出かけした所で買った、櫛型の髪飾りを思い出して渡します。せっかくのお土産、鞆に入れっ放しだったから。

夏休み中は水葵がいなくて、その間はここまで毎日眠くなかったのは、確かに少し不思議だよな……。

二学期が始まってから二週間。水葵の隣で、少しずつ学校に慣れてきた留学生のパルが、面白そうに頬杖をついて言います。

「君がお寝坊さんなのは、相変わらずなんだね。ボクも人のことは言えないけど、この高校は相談所から近くて助かってるよ」

パルはわたしのバイト先の、地下室で寝泊まりしています。地上は三階まで瓦礫の廃ビルだけど、一番上の四階と地下室はちゃんとしてるみたい。

でも地下室って、息がつまりそうだよな。そう言ったらパルは、ボクはかえって落着くよ？ 　って、悪魔使いらしく笑って返しました。悪魔を喚ぶには確かに、閉鎖的で暗い所の方が成功率が高いもんね。

パルもわたしも、同じ悪魔の所で悪魔使いになったんだけど。パル曰く、普通、人間は一人の悪魔としか契約できなくて、わたしみたいに色んな低級悪魔さんと契約できるのは珍しいタイプなんだって。

パルは一人だけなら、かなり高位の悪魔さんとも契約できて、それも必要に応じて違う悪魔と契約し直すって言うから、そっちの方がわたしはすごいと思うんだけど。

パルもわたしも、悪魔使いで、水葵は使われる方だけど高位の悪魔さんだし、この教室、人外生物の匂いが一気に濃くなっちゃったね。パルは悪魔を置いてきたって言うけど、喚べばすぐに駆け付けられるだろうし。

どうしてなのか、はあ。と溜め息が出た休み時間に、窓際の席のサトシがわたし達の方までばたばたとやってきました。

「椛さんと橘さんに鷹野、今日の放課後が歓迎会で良かったんだよな？ 春貴兄にも確認とったけど、烏丸先輩も参加OKだって！」

ああ、サトシはちゃんと、普通の人間さんだね。何でだろ、少し安心しちゃった、わたし。

そもそもわたしは、人間生活を学ぶために人間界に来たんだし、あんまり身内にばかり囲まれてるのもよくない気がする。

でもそれはそれとして、パルとユウヤの歓迎会は、とても楽しいイベントでした。

「ありがとう、サトシ。バイトもちゃんと、お休みとってきたよ」

「やったー、それじゃ遠慮なくみんなで騒げるよな！ 明日は土曜だし、今夜ははっちゃんけよーぜー！」

「はっちゃんけると言っても、玖堂家の一室を貸してもらうんでしょ？ 里史君達にはいつも通りの夕ご飯じゃないのかな？」

「甘いな鷹野、うちは夕飯、結構厳しいんだから！ 霧と凧だけは同席させるけど、家族以外で夕飯食べるってそうそうないんだぜ！」

キリとナギ。いつもサトシや春貴お兄さんの登下校で一緒な、護衛の付き人さん達のことです。すごいお金持ちだもんね、玖堂さんの家って。

ナギは水葵と名前の読み方が一緒で、ちょっとややこしいよね。その上付き人さん達も実は人形で、悪魔の水葵と近い機械仕掛けで動くみたいだけど、人間の世界にも不思議な人形さんがいるんだって、最初はびっくりしたよ。

でもユウヤ、人が多いの嫌いそうなのに、歓迎会よくOKしたなあ。多いと言っても春貴お兄さんと、わたしとサトシと水葵とパルだけけど。

水葵とユウヤは顔見知りだけど、パルのことはユウヤ、警戒してたよね。まあ、わたしと一緒に昔ユウヤ達を襲った悪魔使いだから、仕方ないね。

二学期が始まってから、昔の悪い夢を見るが増えました。だからちょっと、気持ちが落ち込んでるかもしれないです、わたし。

ユウヤは夏休み中からいたっていうから、ユウヤに会ったからじゃないと思う。水葵は一学期からいたし、違うといえばパルがいることなのかな.....パルは何も悪くないけど、わたしがサツリクの天使だったことを、一番直視させるヒトなのはそうだよな。パル自身、どうして留学に来たのかも、まだよくわからないし。

そう思いながら授業を受けて、もうすぐお昼休みが近付いてきた頃に、普段は看護師さんをしてる所長から、思わぬメールが入ってきました。こんな時間に連絡が来ることは少ないから、あれ、バイトのお休み、駄目だったかな？ と、居眠り中だった頭がしゃきっとします。

それはいつになく長いメールで、大体は率直に電話してきて、メールは簡単に済ませる所長には珍しい内容でした。

猫羽ちゃんへ。

大事なお話がありますが、おそらく直接会って話すことはできそうにありません。

探偵見習い仕事の依頼に関しては今まで通りですが、この件については、可能な限りにメールでお話ししましょう。

取り急ぎ、貴女を狙う「見えない敵」がいます。

貴女に何か心当たりがあれば、必ずメールで返信をして下さい。

フィオナ・花憐・鷹野

「.....？」

わたしは異世界の人間だから、元々スマホは得意じゃないし、パソコンなんて全然使えないけど、所長はこの世界の人なのに機械がキライらしいです。

でもその所長が、「メールで」って念押ししてる。それに、「見えない敵」って何なんだろう？

所長は占いが得意だから、従業員の運氣や健康は占いで診てますって言うんだけど、それでおかしな結果が出たのかもしれないね。

わたしも所長も、ラインはよくわからなくて使えないので、まだ授業中だけど、わかった、とだけ返しました。こんな時間に送ってくるのは、所長が何かを心配したのは確かだから、早めに返しておかなきゃね。

わたしがメールをするのは、所長と営業の咲姫おねえちゃんくらいです。おねえちゃんに送ることは、異世界にいる家族に伝えてもらう内容だから頑張って打つんだけど、直接喋れる人とはすぐ電話しちゃいます。所長はお仕事中的ことが多いヒトだから、電話するわけにいかないだけで。

「そう言えば、フィオナにきいたっていいんだよね.....どうしてパルがこの世界に来ること、フィオナは協力してるんだろう」

授業が終わって、ユウヤが来るはずの屋上に向かいながら考え込みます。

どうしてなのか、いつもユウヤの気配はわたしより早く屋上であって、多分、授業を抜け出してるんだろうね。家族で静養にきたユウヤだから、無理に日本の高校の授業を受ける必要はないし。

でも今日は、ユウヤ以外にも、知らないヒトの気配が屋上にありました。

何だか不思議な、ヘンな気配。多分、会ったことはないヒトだけど、何処か懐かしい胸騒ぎがする。まずの話、人間じゃない珍しい気配だからかな。

ユウヤの知り合いさんか、式神さんとかかな？ と、深く考えずに屋上の扉に手をかけようとしたところで、反対側から先に開けられてしまいました。

「……え？」

扉を開けたのは制服の女の子。リボンの色が違うから三年生の人。

わたしよりずっと長い黒髪のアインテールが、扉の前にいたわたしをよける時に、ひらりと揺れました。薄い眼鏡をかけた黄金色の眼は、わたしの方に見向きもしません。

ただの人間のわたしは、まるででないものみたいな感じで、ずっと下に降りていっちゃったけど。わたしの方は、ヘンな気配の正体のヒト、とわかって動揺します。

——なんで……夢の、——……？

一瞬、そう思ったけど、そのヒトの姿が見えなくなると、わたしは自分が驚いた理由が急にわからなくなってポカンとしました。

「……あれ？ ユウヤと同学年の人……かな？」

昼休みになってすぐ、屋上に来たわたしより先にいたから、ユウヤと同じで授業をさぼって屋上にいた人はずだよな。

二人の気配が近かったから、ユウヤと一緒にいたんだろうな、ってわかって、それ以外は何だかどうでもよくなりました。

やっぱりユウヤの、知り合いの人かな？ 屋上で今日も、わたしの分までお母さんがお弁当を持たせてくれてるユウヤの所へ、首を傾げながら改めて向かうわたしでした。

この高校は、「あめにてい」が凝ってて、人が集まりやすいカフェテラスとか、校庭にも涼しいベンチが沢山あります。だから、空調もない屋上は人気がないって、前にサトシが教えてくれました。かえってわたしやユウヤみたいに、静かなのが好きな人には向いてるんだよな。

今の季節はちょっと暑いけど、元いた世界にはそもそもエアコンなんてなかったから、暑さや寒さはここの人達より強い方だと思う。

ユウヤはユウヤで、陰になる僅かなスペースを確保して、わたしを待っていてました。

朝からちょっと気分が冴えなかったけど、ユウヤのお母さんのお弁当を食べると、いつもすごく元気が戻ってきます。

「ねえ、ほんとにこれ、洗って返さなくていいの？ わたしあれから、なぎに沢山怒られたんだよ」

「屋上に水道がないので面倒でしょう。猫羽さんに毎日僕の教室まで、洗ったお弁当箱を返しに来てもらいたくありません」

素っ気なく言うユウヤは、いつも不思議。放課後は逃げるようにいなくなっちゃうし、わたしにあんまり自分を訪ねてくるなって言うのに、お昼はこうして毎日一緒に食べてくれるんだよな。

お母さんがお弁当を作るからだ、って溜め息をついてたけど、わたしはおかげで、毎日おいしいお弁当をユウヤと一緒に食べられます。

「そう言えばユウヤ、さっき誰かと話してた？　わたし入口ですれ違ったよ、三年生みたいな女のひとと」

「漣きざなみさんですか？　特に話した覚えはありませんが、確かに屋上には来ていた気がしますね」

え？　とお弁当箱をしまいながら、わたしは首を傾げるしかありません。

「ユウヤの知り合いじゃないの？　人間じゃない気配だよな？」

「人間じゃないヒトくらい、猫羽さんの周りにもぼつぼついるでしょう。一応気になって名前は覚えましたが、いちいち気にしていたら身が持ちません」

あんまり興味は、無さそうなユウヤ。嘘はついてないって気配からわかるし、そんなに大きな「力」は感じないから、無害認定したってことなんだろうけど……。

「じゃあ、ユウヤは——そのヒトと話したことは、ない？」

確かにさっき、屋上に二人がいた時には、気配が間近にあったはずなのに。

それよりも前。何処かで二人が話してる姿を、わたしは見たような気がするのに……。

その些細な現実のずれが、わたしの胸を大きく叩く違和感でした。

理由がわからないまま、何だかしよぼん、としちゃいました。

ユウヤが嘘を言ったわけでも、隠しごとをされてるわけでもないのはわかるのに、何かがヘンです。ユウヤがわたしに気配を遮断して、何かを隠そうとするのは昔から沢山あって、淋しいなど思うことはあったけど、今回はそれでもないよね。自分でもおかしい気がします。

「……どうして僕の同学年の人が屋上にいだけで、猫羽さんがしょんぼりしてるんですか」

うん、人の心に敏感なユウヤが、そうきくのも当たり前だよな。

わたしも何が引っかかっているのか、もう少しで届きそうな気がして、ますます考え込みます。

——楡猫羽から手を引いてくれない？　烏丸悠夜君。

あれ、これは確か、今朝の不思議な夢だったっけ？

この一言だけ浮かんでも、わけがわからないなあ。そもそもわたしが見る夢って、大体過去の出来事なんだから、今さっきのヒトのことを今朝に見るわけがないし。母さんみたいにごくたまに、未来を夢に見ちゃうヒトなら別だと思うとけど、わたしにそんな大変なチカラはありません。

わたしがずっと難しい顔をしてるから、ちょっとだけバツが悪そうに、ユウヤが立ち上がりました。

「この人間界では、僕の力も五分のーに制限されるんですから。わざわざ自分から、火種には関わりませんよ」

火種……？

あ、そっか。人間界で人間じゃないヒトに関わるのって、普通に考えたら危ないことだよな。ユウヤの慎重な性格ならなおさらだね。

わたしがノンキ過ぎるのかな。バイトを始めた時に、所長から門番用の幻想の鎌ももらって、スマホの中に置いてて、いつでも取り出せるから。元々わたしが持ってた宝を組み込んだ鎌で、人外生物にはほぼ対抗できるはず、って言われてます。

お昼休みも終わりに近いし、わたしも立って、スカートのホコリを払います。

「そっか。じゃあ音楽室の地縛霊さんも、体育館の亡霊さんも、ユウヤには関係のないことだよな」

「視聴覚室の悪霊と更衣室の怨霊は、さすがに護符を貼りましたけど。というか日本の学校は、どうしてこうも怪異の宝庫なんですか」

あ、他にもそんなにいたんだ……わたしが友達から聞いたのより多いね。

靈感の強いユウヤは気になるんじゃないかな、大丈夫かな、と思ってたんだ。ユウヤは体が弱いから、無理はしないでほしいな。

「この世界は、淋しい人がいっぱいだけど、それは大丈夫そう？」

ユウヤのお父さんもそうなんだけど。時々、世界中の淋しさが自分の中に入ってくるような、そんな発作が起こるんだって。ずっと強過ぎる靈感のせいで。

こっちの人達は元の世界より、みんなの淋しい気配が強くて、わたしも不思議。スマホで誰でもすぐに会えるし、こんなに人が多い所なのに。

「猫羽さんに憑いた人外生物の多さも、大概ですけどね。猫羽さんは祓っていいんですか？」

「別に、どっちでも？ わたしは、ユウヤが幸せなら何でもいいよ」

「……？」

「ユウヤがここにいるだけで、わたしは凄く嬉しいもの。だからユウヤはわたしにも、無理に関わらないでいいよ？」

無意識にそう口にしてから、そこでやっと、わたしは自分がしょぼんとしてた理由がわかりました。

階段を降りようとしたユウヤが足を止めて、怪訝な顔つきでわたしに振り返ります。

「それはどういうことですか、猫羽さん」

「ううん……わたしもよくわからない。急にそう思ったんだけど……」

確かにわたしも、人間とは言い切れないヒトだし、そもそもからして悪いものだったし。だから今、こんな言葉が続いて勝手に、ぼんぼん出てくるのかもしれない。

「ユウヤ、わたしに関わらない方がいいんじゃないかな……今のユウヤ、何か無理をしてるって、そんな気がして仕方なかったの」

それがきっと、人間としてここにいるわたしが、ユウヤに言える最大のこと。
伝えなきゃいけない夢のこたえ。わたしの知らないわたしが必死に、それだけは言わ
せたかったことに思えました。

ユウヤは大きな黒い目をぴくりと見開いて、それから一瞬、急な頭痛に耐えるみたい
に顔を歪めました。

「——ユウヤ？」

ほんとに少しの間だったけど、わたしの直観にまで伝わってくる強い目眩。

ユウヤは元々体が弱いから、体調が悪い時はわたしもよくわかったんだけど、それと
は何だか違う種類の不調みたいで。

「ユウヤ、大丈夫？ やっぱりユウヤ、何か少し、変……」

「……気にしないで下さい。自分のことは、自分で何とかできます」

でも、と思わず、制服の裾を掴んじゃいました。だってそれだけ、ユウヤが苦しそ
うだったから。

ユウヤはハッとしたりするようにわたしを見て、どうしてか少しだけ、いつもより表情が柔
らかくなった気がしました。

「……それから、猫羽さん」

掴んだ裾とは反対側の手で、ユウヤがそっとわたしの手を取って、服から離しました。

「僕は別に、貴女のためにここにいるわけじゃありませんから」

……って、え？

何でそんな、当たり前のことをわざわざ、ユウヤはほのかに笑って言ったんだろう？

キョトン、としてたら背中を向けて、三年生の階まで降りて行っちゃいました。

それはきっと、ユウヤが知ることのできないユウヤ。消えゆく心が辛うじて言った、
さっきのわたしへのこたえだとは知らずに。

* * *

それから後の、午後の授業は、とことん眠って過ごしちゃいました。

先生達はもう、一学期の駄目駄目ぶりから、わたしのことは諦めてると思う。高校に
は一年しかいない予定だし、あんまり注意されたことはないです。

何だか、ここにおいで、って、誰かに呼ばれたような気もしたんだよね。

深い眠りと共に暗闇に堕ちたら、今日は何故か、聴いたことのある声のような揺らぎ
が水底に満ちてました。

——……さよなら、猫羽。……幸せに。

これもきっと、いつかにあったはずの誰かとの記憶。

でもまだわたしは、この声のヒトとつながってる。ここでわたしを守ってくれてるんだって、冷たい場所でも不意に心が温かくなりました。

——それは違うわ。貴女を留めているのは、わたしじゃなくて、烏丸悠夜。

……え？ 何処にあるのかわからない目で、どこから聞こえるかわからない声のヒトを探します。

——わたしがしてあげられることは、一つ。ここなら貴女は邪魔をされずに、水に流される気配を探れる。でもそれはますます、貴女の境界を薄くしていく。

声のヒトは、何だか哀しそうです。それはまるで、このままだと「さよなら」が本当になるって、そう嘆いてる同じ声色でした。

——わたしの存在は、貴女にとっては諸刃。それでも貴女が真実を望むなら、貴女はここからさざなみと闘いなさい、猫羽。

それって、どういうことなんだろう？ 最後の声に応えようとした時、ごぼり、と急に呼吸ができなくなりました。

そもそもわたしは水底にいるのに、どうして喋れると思ったんだろう。

でも今、聞いておかないと、声のヒトには簡単には会えないとわかってたから、必死にわたしは吐くような叫びを絞り出しました。

「待って——ユウヤがわたしを留めてるって、何のこと、トウカ……!？」

待って——って。

教室で叫びながら起きてしまったわたしは、完全にイタイ子でした。

「……どうした、楡。わからないところでもあるのか」

ちょうど、担任の先生の授業で良かった……ごめんなさい、ってすぐに謝って、しゃきと座り直します。

うん。やっぱり学校で深く眠っちゃうのはダメだね、もうしません。みんなの抑えた笑い声が沢山直観に響いてくるから、さすがにわたしも心から後悔しました。

授業が終わって、当番になった空き教室の掃除をしながら、水葵が厳しい顔で追い打ちをかけてきます。お土産の髪飾り、早速着けてくれてるのは嬉しいんだけど。

「やはり猫羽の眠りには何か異常が起きています。一学期には外でもこんなに、深く眠ることはそうそうなかったでしょう」

「うーん……夏休み中に所長にも、ちょっと診察を受けてこいって言われて、その時は一応、大丈夫だって言われたんだけど……」

机が少ない教室だから、わたしと水葵で箒を使いながら喋って、同じ班のパルと後三人が机を運んで雑巾をかけてくれます。

「それではやはり、現状は二学期からですか……鷹野花憐が診察に行け、と言ったほどとなると、夏休み中にも何か山があったはずですが、それは切り抜けている要因も気になるところですね」

「うーん……ただ、いっぱい、みんなと遊びに行っただけなんだけどな。いつもよりずっと沢山お出かけしたから、疲れて眠いだけだろうなって、夏休み中は思ってたよ」

そういう意味では、夏休み中もすでに毎日眠かったんだっけ、わたし。

一学期はまだ、こうじゃなかった気がする。そう思ってたら、水葵がずばっと、わたしが自分で知らない時のことを言うのでした。

「思えばあの、六月末のサボタージュからですね。原因があるとすれば、あれしか考えられません」

「って——あれ、って？」

「烏丸悠夜が除霊してくれた、憑き物のことです。猫羽は二週間も我を失って、バイトを休んでいたじゃありませんか」

あれ……そういえば、七夕にユウヤと会った時は、そんな話だったんだっけ？

あれ、憑き物とかそういうのだったんだ？ それすらわたし、知らなかったよ……。

知らないところで、わたしはいっぱい、ユウヤに迷惑かけてたんだなあ。

またちょっと気持ちが落ち込んできたけど、お互い掃除が終わったから、別の班のサトシが駆けてきました。

「お待たせ、楡さん橘さん！今日は車で迎えに来てもらってるから、春貴兄と烏丸先輩も駐車場で待ってるよ！」

「ボクの歓迎会なのに、さりげなく今ボクの名前を飛ばしたね？ 里史君」

「あっはっは一、細かいこと気にすんなよ鷹野！ そういや楡さんは、体調大丈夫？」

わたしの盛大な寝言をきいた一人のサトシに、うう、と赤くなってしまいます。

パルは何も言わないでいてくれたけど、サトシってほんとに正直者だよな。

玖堂さんのお家まで、みんなが乗れる広くて立派な車に初めて乗せてもらいました。

王子様のパルは、すごくリラックスして満足そうだったな。でもパルの後ろに座ったユウヤはずっと警戒体勢で、実際のところは今日の会には、近くでパルの現状を視るために来たんだって何となくわかりました。他にはあんまり、ユウヤとパルが接触するような機会はそうそうないもんね。

警戒心満点のユウヤを横目に、パルがこそっと、わたしに耳打ちで尋ねてきました。
「烏丸先輩はどうしてあんなに、ボクをずっと警戒してるの、マイエンジェル？」

「.....あ。パル、憶えてないんだ.....」

そうして玖堂さんの家のパーティー部屋に、みんなでお邪魔させてもらうまでの間に、わたしはユウヤのお家のことを簡単に話しました。わたし達が昔に、攫おうとした子供達に関わる家の一つを。

ユウヤもパルから、悪魔の気配がすることに警戒してたから、わたしと一緒にいた悪魔使いだよ、って教えてます。パルが同じ異世界出身だとは伝わったけど、どこの国の王子様かまでは、今でも知らないと思う。

あんまり思い出したくないことだから、どっちも簡単にしか説明してない二人のことが、この先にヘンな事態を呼んでしまいます。

玖堂さんのお家って、やっぱりすごい。一度だけお友達と行ったことのある、スイーツビュッフェみたいなご馳走.....好きな物を好きなだけとって食べられるお夕食が、歓迎会の広い部屋では待ってました。

「なんだよー、バイキング形式ってちょっと忙しいじゃん！ 霧と凧しかいないから手が足りないのはわかるけどさあ」

「申し訳ありません、里史様」

「いや別に、霧は悪くないし！ てわけでみんなごめんな、好きな物取ってまたこのテーブルに戻ってきて！ お茶とジュースとコーヒーがあるから、好きなの言って凧に入れてもらって！」

てきぱきと幹事さんをしてくれるサトシは、まずパルに付き添って行って、お料理の説明とかとり方を教えてます。水葵は物が食べられない人形だから、形だけコーヒーを淹れてもらって、コーヒー好きらしい春貴お兄さんと話してます。

わたしはユウヤと一緒に、お皿を持ってお料理に向かいます。わたしも慣れてるわけじゃないけど、ユウヤがびっくりしてるから、少しなら教えられるかなって。

和食以外をあんまり知らないユウヤと、あっさりめのご飯を選んだと、パルの所からこっちに来たサトシが、何だかまじまじとわたしを見てきました。

「椀さん.....烏丸先輩のそばだと、いっつも凄い笑ってんなあ.....」

「.....そうかなあ？ サトシが歓迎会を開いてくれたからだよ、ありがと」

「え、そう、そう!? 椀さんもしっかり食べていってな、肉料理とデザート中心にしてくれて、シェフには頼んでおいたから！」

ううう.....わたしがお肉とスイーツが好きだって、サトシにはしっかり把握されてる、ちょっと恥ずかしい.....そもそもユウヤとパルの歓迎会なのに.....。

ユウヤはもう少し軽いものの方がいいと思うから、わたしとは大分違う取り合わせを勧めて、みんなで最初のテーブルに戻りました。

テーブルは円形で、特に何も考えずに座ったら、時計回りにサトシ、私、ユウヤ、春貴お兄さん、水葵、バルになったんだけど。二人の付き人さん、キリとナギが席についてないから、バルとサトシの間が二つ空席でした。

最初の乾杯のすぐ後に、何を企んだのか、悪魔みたいな笑顔になったバルが楽しそうに話し始めました。

「こっちにおいでよ、マイエンジェル。そんな無愛想な先輩の隣はやめてさ」

ううん。来た時から思ってたけど、エンジェルとかずっと出てくるバルって、やっぱりきっと王子様なんだね.....昔は名前と呼ばれてたのになあ。

ずっと無言だったユウヤは、ぴくりと眉をひそめただけです。わたしはバルの意図がよくわからなくて、きょとんと対面で見つめ返します。

「エンジェルって、たまに凄いこと言うよな、鷹野。そりゃ楢さんは天使だとおれも思うけどさ」

「勿論それは、彼女だから特別なんだ。遠い昔、一つになった仲だからね」

ごふっと、いつも無関心そうな春貴お兄さんが突然むせました。大丈夫かな、何かよっぽどショックなことがあったのかな？

え？ とサトシも目を丸くしてるけど、バルは全然かまわずに、フォークを握り締めてご飯を食べるわたしに笑いかけます。

「ねえ、ボクの天使？ 選っておいでよ、あの頃みたいにボクの胸元に」

まぐまぐと美味しい鳥さんを飲み込んで、わたしはふう、と息をつきました。

バルはあんまりご飯が進んでないみたい。笑顔だからわかりにくいけど、きっと緊張してるんだろうな。

今も同じ、悪魔使いなわたしとバル。

「そうだね、あの頃は淋しくなかったよね。今でもつながってるよ、わたしとバルは」

今度はサトシまで、ぶへと吹き出しかけちゃいました。

サトシも春貴お兄さんも、どうしたんだろう.....ユウヤは水葵と一瞬だけ目を合わせてから、やれやれ、という風に、マイペースにご飯をゆっくりと食べてます。

何だかヘンテコな空気になったテーブルを見て、お水を持って待機してた付き人さんのキリが、何故か赤い顔でおずおずと話し始めました。

「あの、失礼ながら、楢様はもしや——鷹野様とは、深い関係でいらっしゃるのですか？」

あれ、キリ、いつもはこんな柔らかい表情をしたっけ？ そもそも大体、サトシの後ろで黙ってるのに、話しかけてくること自体が珍しいよね。

サトシに付きっきりの、召使さんの人形。白いエプロンに長い紫苑色の髪が似合う、メイドさんのキリ。でも人形さんには人間みたいな気配がほとんどないから、質問の意味はわたしの直観でもよくわかりません。

「深い関係って.....契約のこと？」

悪魔を使役するために、必要な過程。それはわたしやパルにとっては、悪魔と友達になるみたいなもので、キリがきいたのは何だか違うことの気がするけど、他にこたえが思い浮かびません。

「それは、そうするよね。じゃないとパルとも、一緒にいられなかったし」

「う、楡さん、それって……まさか鷹野と楡さんは……」

「いや、ボクは一人としか契約できないから、ほとんど彼女が主体なんだ。ボクの天使は、沢山の相手と契りを交わせるみたいだからね」

うん、悪魔を複数抱えられるのは、わたしの珍しい特性だってパルは言ってたっけ。でも何で悪魔の話になったんだろう。玖堂さんの所の人には意味がわからないよね？

ここでまた、何故かしーんとして、次に口を開いたのは、お箸を静かに置いたユウヤでした。

「せっかく頂いているご馳走が冷めてしまいます。猫羽さんを口説きたいなら、後日にしていただけませんか」

くっ、と水葵が、耐えられなかったように笑って、顔を隠すように両手で覆っちゃいました。普段あんまり笑わないもんね、珍しいね、水葵。

それにしても、わたしをくどくって、どういうことだろう……そんなお話だったっけ、今までのって……。

とりあえずわたしも、さっきからお料理が気になってたから、ユウヤにうんうん頷くんだけど。

「ああ、それじゃ後日なら、ボクの天使を口説いてもいいのかな？ 烏丸先輩は跡取り問題で大変だときいたけど、ボクも周囲が早く身を固めろって煩くてねえ」

「——」

びっくり、とユウヤが眉をひそめて、横目で冷たくわたしを見ました。

彼に何か、余計なことを言いませんでしたかって、そんな感じ。え、わたし、ユウヤはいずれ京都を管理する内の一人だから、近い国のパルも仲良くしてねって言っただけなのに……。

「えーっ、鷹野まだ十六なんだろー。その悩み、早過ぎね？」

「まあ、お国柄ってやつかなあ。母なんて十五の時には、もう婚約者が決まっていたみたいだしね。烏丸先輩はそこのところ、どうなんだろう？」

「どうして僕に話を振るんですか。いずれ人の上に立つ方であれば、その軽率な言行を改められたらいかがですか」

「あれえ、烏丸先輩、何かやけに雰囲気^{から}が鹹いねえ。しかもボクの、お家事情も知ってる？ それなら話は早いわけだけど？」

今度はパルが、ちらっとわたしを見ます。ええん、わたし、攫われた王子と一緒に悪魔使いしてたとか、ユウヤには言っていないよ……。

何だか、次のお料理を取りにいける雰囲気じゃなくなっちゃった。何でこんな話になっちゃったのかなあ。水葵はずっと笑ってるし、春貴お兄さんはそしらぬ顔でコーヒーを飲んでるし、キリとナギはふんふん、と興味深そうに黙ってきいてるし……。

わたしのお腹が限界を迎えたと同時に、隣でがたっと、ユウヤが立ち上がりました。「あ、先輩、二週目ですか？ さっき言って和食も追加させたんで、良かったらどーぞ！」くううう。と鳴ったわたしのお腹は、サトシの声にかき消されて、やったあ、とわたしもご飯をまた取りにいけます。

ユウヤは普段、そんなに食べないのに、あえて空気を変えてくれたのかな。それともわたしがあんまりふるふる、フォークを握りしめてたからかなあ……。

その後はわいわいと、主にサトシと楽しく喋って、美味しいご飯がどんどん進みました。だってユウヤとパルがずっと、静かに睨み合ってるんだもん。

水葵は何だか、滅多に見せないお母さんみたいな顔で座ってるし、始終穏やかな春貴お兄さんの近くにいると、ヒトが変わっちゃうのかもしれない。

って、帰り道で水葵に言ったら、失礼な、と笑いながら返してくれました。「こんなに平和な時間は久しぶりでしたよ、私も。夏休み中、私は猫羽のお出かけには、ご一緒できませんでしたからね」

あ、そう言えばそうだったね。だからお土産も渡したんだしね。

人間界で消耗した力を、回復するには時間がかかるらしくて、水葵は里帰りしてたんだ。夏休み中なら相談所のみんなが、わたしを守りやすいから、いなくても安全だろう、って。

「先刻のような猫羽の様子を見れば、我が君も流^る惟もどれだけ喜ぶことでしょう。猫羽を人間界に留学させることになった時は、正直正気か、と疑ったものですが……」

水葵は、檢流惟——母さんと同盟を結んだ悪魔です。悪魔同士だから、それは契約じゃなくて、純粹に友達みたい。わたしも悪魔さん達のこと、仲間だと思ってるし。

「猫羽は、幸せにならなければいけませんよ。あなたは、ヒトの果てしない望みでこの世に戻り、そして今もなお、多くのヒトや悪魔に慕われている」

「……—」

あれ、なんでだろ……わたし、急に、何だか何かがおかしくなって。

体がすくんで、何も言えない。足も勝手に、立ち止まっちゃいました。「京都にいた頃のあなたは、いつか、烏丸悠夜に仕えたい、とそう言っていましたね。今でもその気持ちは、同じですか、猫羽？」

「……え？」

「あなたは本当に、それでいいのですか。それであなたは、幸せにはなれそうですか？」

「え……なぎ……？」

立ちすくむわたしを、横から覗き込むように、水葵がとてもキレイな顔で笑います。

暗い夜の街灯の下で、左だけお土産の髪飾りを着けた、長い青銀の髪がさらさらして
る。怒ってばかりの水葵じゃなくて、長い時を越えて生きる悪魔さんは、どうしてこんな
に嬉しそうに笑ってるのかな？

悪魔は誰でも、人間の心に付け込むことが好きです。するりと不意に、隙があれば入っ
てきちゃうの。

水葵は淡い月光を背に、ちょっと悲しそうな顔で笑い直します。

「猫羽と暮らし始めて、私にもわかってきました。あなたはそれだけ、広範囲の鋭敏な直
観を持っているのに、あなた自身に関する事だけは、あえて遠ざけようとしている」
「.....？」

「率直なのは、あなたの体だけです。踏み込もうとすれば、こうして、怯えて立ち止
まってしまうように」

気が付けば、まるでがちがちに硬直してるみたい、わたしの全身。あ、とそれに気
が付いた瞬間、体の力が抜けて声が戻ってきました。

「今日はどうしたの、なご.....急に、そんな」

「あなたが我が君によく似ているからです。あなた達は、時に、生きているフリをした屍
のようになる。まるで自分のことが他人事かのように、我が事の話となると、こうして
鈍くなってしまふ」

ふう、と。水葵はわたしを見るのをやめて、元通りに夜の道を歩き始めました。

「.....あなたは幸せになって良いんですよ、猫羽」

ずきん、と。咄嗟に一緒に歩き出せなかった、突き刺されたようなわたしの胸を、言
葉にできない何かが襲いました。

忘れてたけど、今日は朝から、わたしが沈みがちだったこと。水葵の細い後ろ姿は、大
切なことをわたしに伝えようとしてる、それだけはわかりました。

それが何なのか、全くわからないわたしは探偵見習失格だね。

でもひょっとして、それも水葵の言う通りなら.....それは.....——

* * *

その日の昼に、暗い水底でわたしを見守る誰かが、水門を開けて、揺らぎをもたらし
てくれたからかもしれません。

まるで、堰を切ったみたいに、わたしがいない場所でのことが、現実の一つとしてわ
たしの夢の侵蝕を始めました。

歓迎会の後、玖堂さんの家からの帰り道で。

キリが送るパルは、何でもかまっすぐ相談所に帰らずに、ナギが送るユウヤを追いかけたみたいでした。

「烏丸悠夜。君はどれだけ、彼女の危機に気が付いてるの」

「.....？」

昔みたいに、感情のない顔と声のパル。追いかけてると気付いてもそのままにしたユウヤも、パルと話をしようとしています。

「貴方こそ、何故今になって、猫羽さんに近付くんですか。猫羽さんの危機なら、数か月前から始まっていた——それも彼女が悪魔使いだからで、同じ悪魔使いの貴方の存在が、良い影響を与えるとは到底思えません」

「うん、わかってるよ。君が迅速にこの世界に来て、彼女と神域を秘密裏に切り離してくれたおかげで、ここでの夏を彼女は乗り切れた。でもその有り様を見て、彼女を狙っている者が、何も対策を打たないと思う？」

夜の色が混じったせいか、パルの髪が、昔みたいに真っ黒になって見えました。ユウヤとは違うクセ毛だけど、ほんとはこうして黒い髪だったんだよね、パル。

「残念だけど、君ほどの術師でも、既に敵の術中にある。それはこの世界では、力が弱まってしまう君も、結局ぼくも条件は同じ。ぼくは敵のことを知っているからここに呼ばれたけど、それでも微々たる抵抗しかできない」

「.....——」

「今こうして話をしたことも、君とぼくの中ではきつくなかったことになる。ぼくにできるのは外面を粉飾して、内側に介入されるまでの時間差だけで、少しでもこうやって警告を促すこと。この話が彼女に届くように、ぼくと彼女の繋がりを掘り起こしてでも、祈ることくらいしかできないんだ」

そこでユウヤの感情が大きく動きました。わたしもすぐに、引き込まれるくらいに。

ユウヤも何か、心当たりがあったんだと思う。いつもならそれくらいしかわからないのに、永い闇から融け出したこの夢は、昨日のお昼にわたしが感じたはずの気配のことまで、今頃中身を伝えてきました。

昨日のその瞬間には、何もわからなかったこと。

二人だけしかない屋上で、ユウヤを覗き込んで、無邪気な顔で微笑む人影。

「昨日の話、考えてくれた？ 烏丸悠夜君」

「.....」

「唵猫羽からは、手を引いて。貴男が夏休み中からずっと邪魔をするから、私は彼女に近付けないの」

ユウヤがぐっと、歯を食い縛るのがわかりました。

だってそこにいるのは、小さい頃のユウヤを可愛がってくれたヒト。ユウヤのお父さん達の仲間、いなくなってしまったヒトだったから。

「……嘘です」

「——え？」

「……あなたは、^{しおのか}汐ノ香さんなんかじゃない。^{さざなみ}漣 汐ノ香……あなたがその姿でそう名乗るのは、水葵さんや水葵さんの主に対する侮辱だ」

ここでやっと、わたしもそのヒトのことを思い出しました。

昨日感じていた気配は、似てるけど少し違ったから、すぐには記憶が浮かばなかった。でもそういえば確かに、わたしがパルと一緒にいた頃、わたし達はそのヒトに会ったはずです。

「たとえもしも、悠夜君の言う通りだとしても……それで、猫羽の罪が変わるわけではないよね？」

……うん、その通りだよ。このヒトが誰でも、それは同じこと。

ごめんなさい、って言って、許されるようなことじゃない。

ごめんねユウヤ、悪いのは、わたし……——

「優しい悠夜君に、本気で私の邪魔はできないでしょ？　でもそれじゃ、悠夜君が苦しいと思うから——邪魔できないように、私がしてあげるね」

そうして人影は、キレイに笑って屋上を後にして、残されたユウヤは両手を握りしめて立ち尽くして……屋上の入り口でわたしとすれ違ったヒトは、ほんのり笑って、階段を下りていってしまいました。

その後はまるで、何事もなかったみたいに、ユウヤは屋上でわたしを待っていました。

「さざなみ……しおの、か……——」

わたしは必死に、溺れそうになりながらその名前を繰り返して、ごぼごぼと光の方へ這い上がっていきます。

このことだけは、今、水底に置いていっちゃいけない現実。

それはうなされるわたしを揺り起こしてる、大事な悪魔さんのためでした。

「猫羽、大丈夫ですか、猫羽！　気をしっかり持って下さい、猫羽！」

水底ではわたしは真実が見れるって、昨日誰かに言われました。

でも朝のわたしに戻ると、すぐに薄れてしまいそうで。起きてすぐ目の前にいた水葵に、わたしは必死に掴みかかりました。

「なぎ——……わたし、見つけた、あのヒト——……」

「——猫羽？」

「なぎ達が探してる大事なヒト……汐ノ香がいたの、ここに……」

「汐ノ香……？　猫羽……どうして、その名を……？」

わたしを揺り起こして水葵が、膝立ちする床の上で茫然とベッドに手をつきました。
わたしは気が付けばすごく泣いてて、それで水葵も心配したから、起こそうとしたみたいです。まだ涙が止まらないけど、よししょ、と気合で体を起こして、ベッドの上にアヒル座りで水葵と視線をまっすぐ合わせます。

「漣汐ノ香。これ、なぎ達が探してるヒトのことだよな？」

「……………」

「何処にいるのかは、今はわからなくて。それでも確かに昨日は、高校の屋上にいた。ごめんね、今頃やっと夢で気が付いて」

「夢で……気付いた？」

そこで水葵は、いつもの厳しい顔に戻って、わたしをまっすぐ見つめました。

「猫羽、その夢の見方は危険です。それでなくともあなたは直観が広範囲なのに、それではますます、あなたの魂が拡散してしまう」

「……え？」

「複数の悪魔を従えられる、あなたの本質です。あなたの魂は、あなた一人の内に収まらず、だからこそ広範囲の化生の気配を感知できる……けれどそんなことをしていれば、こうして体の方に負担が現れるのは当たり前です」

要するに最近、わたしの寝起きが悪いのは、夢が負担になってるって言いたいみたい。うん、それはその通りかもしれない。

でも所長が言ってた「見えない敵」と、この夢は何か関係があると思う。じゃないと今まで、わたしがすでに感じてたはずの気配を、夢でなきゃわかれないうちにおかしいもの。

昨日ユウヤが、屋上で誰とも話してない、って言ったことも。

本当は黒い髪のパルが、わざわざ薄い赤毛や笑顔に偽装してることも。

まだ推理は不十分だけど、何かはわたしの中で、少しだけつながった気がします。だからわたしは、水葵にそれを言わないといけませんでした。

「……もう一度、元の世界に帰って、汐ノ香のことを調べてみて、なぎ」

「——」

「わたしは多分、直接何かされることはないと思う。それができるなら、とっくにわたしは、ここにはいなくなってると思うの」

水葵もみんなも、よく心配してくれるけど、わたしだって所長がくれた幻想の鎌があるから。人間以外の存在相手なら、戦って身を守ることは多少できるよ。

契約してる悪魔さん達も、魔の領域の危険があれば、PHSで教えてくれます。怖いのはむしろ、異世界の出身者を監視する天使や人間の不審者で、それはもう、普通の人間と同じように防犯意識を持つしかないよね？

「……そうですね。猫羽の言う通りです」

水葵はすごく、苦い顔付き。でも、わたしの覚悟は認めてくれたみたいでした。
「汐ノ香という存在が現れたのなら、私は真実を見極めなければいけません。それにはあなたの言う通りに、我が君の協力が必要です」

そもそも水葵が、わたしを守ってくれたのは、主従は関係のない厚意だもんね。水葵達にとって大切なものが現れたなら、そっちを優先してほしいから。
「我が君も動揺することでしょう。あなたのその心遣いに感謝します——猫羽」

所長に先にメールを打つことにしたから、高校にはちょっと遅れちゃうけど、行けるから大丈夫、って言って、水葵にはすぐに帰ってもらいました。

それくらい重要なヒトのことを、わたしは見たから。わたしがサツリクの天使だった頃、直接戦ったわけじゃないけど、どうしようもない咎の巻き添えにしまった相手。名前を知らなかったヒトのことを、わたしが確信を持って口にしたから、水葵も信じてくれたんだと思う。最近わたしがヘンなことも併せて、何かが起こってるはずだ、って。何より水葵が大きく動揺するほど、大切なヒトの名前だから。もしもわたしの勘違いでも、黙ってることはできませんでした。

その時わたしは、どうして今、水葵とはこのことについて話せたのか、そのおかしさには気付いてません。

ユウヤほど強い力を持ったヒトからも、見えなくされてしまった存在。
パルが夢づてに警告してたこと——そもそもそのヒトが、わたしの前に現れた理由。
——それはますます、貴女の境界を薄くしていく。

とりあえず、水葵がしばらくいなくなるなら、夢を見過ぎずしっかり起きられるようにしないとだね。そんなコントロールができれば、だけど……。

こんなことを相談できるとすれば、まずは所長だろうな。そう思いながら、もう何を書くか半分以上抜け落ちてしまって、わたしは所長に何とかメールを送信しました。

フィオナへ

見えない敵に、多分会ったよ。なぎに調べてもらうことにしました。

でも夢の話だから、どう書けばいいかわからなくて。

なぎは、夢を見過ぎたらダメだって。フィオナはどう思う？

猫羽

Target.2 了

☆ details: 橘水葵

橘水葵の経歴は長い。しかし、水葵という名をもらったのは最近だ。

覚えている最古の名前は渦。それはあくまで、今の自我が発生した時のもので、それ以前のただの海竜だった頃の古い歴史は記憶に遠い。

海竜は一応、召喚獣という分類の幻想生物になる。本体は猫羽の故郷の異世界でも地球でもなく、橘診療所の在るような世界の狭間——時の闇と呼ばれる高次元に、概念としてのみ存在している。

その「渦」が、決められた世界に作用する時、海竜という概念が「力」として顕現する。だから本来、特定世界の自然現象でしかない存在なのだが、それが魂という意識を持ったのが召喚獣と言えた。

現在、海竜の主君である吸血鬼は、成り行きで海竜の「力」を引き受けただけで、竜という種の馭者では本来たり得なかった。

「へえ～。お前はそもそも、オレのかーさんにあたる人の召喚獣だったわけ」

竜という自然の脅威が、世界に跋扈していた古い時代ならともかく、現代ではまず優れた召喚者がいない。そもそも自然現象には魂がないため、魂代わりになってくれる召喚者がなければ、自然のままに荒ぶるだけのものだ。

だから海竜は、その元人間の女性に出会うまで、今のような自我を持つことは久しくなかった。遠い昔は別の召喚者と組んだこともあるが、千年単位の話になるので、とても今の己がその頃と同じ自我であるとは保証できない。

「かーさんが天使になった人間だったから、次の主君にも天使を探したってわけか。それで汐ノ香に目をつけたなら、わかるよ」

一代前には、女性の人間だった天使と契約を交わした。その主君が滅びた後に、再び近い血をひく少女姿の天使と契約を交わした。

——あなたは天使だが.....あなたの力に私は惹かれる。

ところが少女天使も消えてしまった。仕方ないので、その少女を探す吸血鬼と協力することにして、主従の契約を吸血鬼と結んだ。実際に海竜の活動を維持する魔力を与える役割は、猫羽の母である椋流惟に担ってもらった。吸血鬼は吸血鬼であるくせに、魔力を持っていなかったからだ。

吸血鬼のような魔性の化生や、概念を基盤とする幻想獣は本来、物理的に世界に干渉する実体は魔力で維持する。人間では体力と言われるものに近い。

海竜の名を持つ幻想獣は、本来当然海中に在るが、ヒトとして人世で動くために、吸血鬼の母の骨から造られた人形に宿った。そもそもの主君だった縁^{えにし}があるから、その人形に憑りつき、動かすことができる。しかし実際に躯体を動かすには魔力が必要となる。「ごめんよ、オレはお前の『力』は助けてやれるけど、今以上の魂は与えてやれない。オレを守りたいと思ってくれるのは助かるけど、お前の本当の主は汐ノ香だからね？」

海竜の心、「渦」という「力の本体」は、今でも時の闇に在る。海水もなしに海竜が「渦」を使うには別の源が必要であり、そのために吸血鬼から「水の精霊」を貸し与えられている。その精霊も元々は、吸血鬼の母が司っていた「力」だ。

今の海竜は、体は魔力で、「力」は精霊で、そして意識を作る魂は吸血鬼の母の未練で代用している。体と「力」と意識が、そうして別個でも流用できるのが高次存在だ。人間はこの三つを、セットの心霊と魂魄を使って自己の連続性を保つ生き物で、そうでもしなければ己を己と証明できない、と言い変えて良い。高次存在の心は、時の闇に在る「力の本体」が強固なので、そうそう「違う己」にはならないし、なってはいけない。

思い入れが強いのは、「渦」の名をくれた人間の女性だった。夫を早くに失った孤独な女性は、たった一人の息子も殺された悲愴さで、その子の代わりに造られたのが現在の主の吸血鬼だ。できれば守ってやりたく思う。

本来の主君である少女天使も同じことを望み、それでこそ同調できたのが水葵と汐ノ香だ。だから消えたはずの汐ノ香が地球に現れたことは、看過できない。

そう思ったから、猫羽の護衛を中断してでも、帰郷を決めた水葵の前に。その件^{くだん}の少女天使は、容赦なく姿を現していた。

異世界に手間なく帰るためには、通らなければいけない橘診療所。猫羽の下宿からそこに行く途中の公園で、水葵は出会ってはいけない者の姿を見つけてしまった。

「そんな——本当に貴方なのですか、汐ノ香……！」

水葵と同じ高校の制服を着て、公園の中に立っている長い黒髪の少女。

僅かにクセのある細いツインテール。水葵の主君だった少女天使と寸分違わず、ただその黄金色の眼光だけが、水葵の動揺を辛うじて押し留めていた。

黒髪の少女は、くすり、と笑い、誘うように公園の雑木林に消える。

おそらく罠だとわかっていながら、探し求めた本来の主君を見過ごすことはできなかった。この公園にはある理由で、人外生物が入りたがらないようにする呪術が施されていると水葵は知っているが、それを破ってでも追わざるを得なかった。

少女の後ろ姿を追う内に、水葵には嫌な予感だけが強まる。自身は不利だ、と「力の本体」が囁いている。それだけでなくともこの地球のある人間界では、水葵が属する本来の世界より「力」の量が五分之一に絞られてしまう。異世界の者である水葵の枷だ。

だから現状を、誰かに最低限の式で伝えておかなければ。意識はそれを冷静に命じているのに、行動に移す前に、少女を追いかけることだけを人形の体が優先してしまう。「つつ——……猫羽、すみません……！」

たったそれだけ、想いを残しておくのが精一杯だった。猫羽からももらった櫛型の髪飾りが落ちたのを拾う余裕もない。

思えばこの時、高位存在としての水葵は、すでに己の敗北を悟れる経験知を持っていた。それが果てしなく、長い時を過ごしてきた海竜が自ら掴んだ魂——願いだった。

林の中にぼつんと潜む、和風な休憩所を背に、黒髪の少女は立ち止まった。ふと気が付けば、季節外れの霞が^{かすみ}辺りに立ち込めており、少女が人払いのために起こしたのだ。

険しい気分で立ちすくんでいる、水葵への少女の笑顔が白い。少女の身から発する「力」は、確かに探し続けた主君のもので、体に合わず大人びた声は不躰に放たれていた。「久しぶりだね、リタン。悪いけど、邪魔はしないでいてくれる？」

水葵の両手と両足が、霧より冷淡な霞に絡めとられてしまった。

あまりに繊細で避け難い鎖として、四肢を凍てつかせる雪の霞。纏わりつく白い空気
の正体を悟って愕然とする。

「何故この力を——我が主の姿と力を使うあなたは、何者ですか!？」

「どうしてそんなことをきくの？ リタンはそもそも、私のためにいる竜なのに」

その言いように、ますます水葵に不快感が募る。かつての主君は決してこんなに、醜い
笑顔を浮かべはしない。問答無用に水葵を従わせようとしたこともない。

「でも、そうなんだよね。私のこと、^{汐ノ香}みんなに伝えられると、困っちゃうから」

「——……！」

「ごめんね。しばらくリタンには、眠っていてももらわないと」

ただ一言で、全身から力が抜けた。四肢の拘束は本気を出せば解除できるだろうが、ま
ず抵抗そのものができない声。それは、青白い逆向きの鱗が浮いた、神の首輪を刻む喉
が紡ぐ、あまりにおかしな白い呪縛。

「リタンは歴史が長過ぎるから。さすがの私も、隠し切れないものね……」

まずい、とはっきり自覚できた頃には遅かった。

——これは私と、同等の高位存在……精霊を核とする今の私では^{橘水葵}対抗できない……！

まさかこんな相手に、人間界で出くわすとは。異世界の海竜にも誤算だった。

それが何故、かつての主君の皮を被っているのか、やっと心当たりが浮かんだところ
で、橘水葵の全身は白い霞の中に消えた。

水葵と同じく、少女を探し続ける吸血鬼に、何一つも伝えられることのないまま。

★ Target.3: 水輪水燬邂逅事件

ごめんなさい。それしか言えなかったわたしに、そのヒトは暗い水底の彼岸で、悲しく笑いました。

どうして謝ることがあるのか。わたしは役目を果たしただけ、と、サツリクの天使に笑いかけます。

—何か……言い残すことはある？

あの時そのヒトは、今みたいには笑ってなかった。まだ死にたくない、そう、誰もが思うようにわたしを呪ってたはずです。

生きてくために、とても沢山の人を、そのヒトも傷付けました。

だから、お互い様だ、って。そんなの、わたしに都合がいいだけの話なんだ。だってわたしは、そうした咎だけで、そのヒトを殺したわけじゃなかったから。

そのヒトがいなくなったことで、いっぱい悲しむヒトがいました。そのヒトを助けようとして、白い夜の中に消えちゃったヒトも。

それが、漣汐ノ香。そういう名前の、元は人間の女のヒトだった天のヒト。

だから今、現世に戻ってきた天のヒトは、殺されたヒトのためにわたしに言います。

「水燬に命を返してあげて。楡猫羽」

わたしがこの暗闇でなら、天のヒトにもこうして会えること。開けられた水門から移る水位が、新たな世界の訪れを伝えました。

「そうすれば風濤も人になれる。烙鍍^{らくと}さんも還ってこれると、あなたは知ってる？」

ラクトとかざり。知ってる名前と知らない名前。でもどっちも、わたしの大事なヒト。

ミズキとラクト、そしてかざり。天のヒトが現れたのは、その三人のためだったから。

それならわたしは……これからどうすれば、みんなを助けられる？

償うことは、最初からできない。でも今からでも、手を伸ばすことができるとしたら。

わたしとみんなを隔てる透明の川。二つの門に囲まれた谷底の部屋。

溢れる水路に満ちる白い夜が、ここから始まるとわたしは知ります。

* * *

うるさい目覚まし時計を止めて、すぐにスマホを手に取りました。どうしてかわからないけど、何だか急に、気になって仕方なくて。

そこにはバイトの、所長からのメール。あれ？ と首を傾げながら、寝ぼけ頭のままで画面を開きます。

猫羽ちゃん

今日は高校、お昼までですよ。

その後、事務所でなく私の勤務先に来て下さい。お昼ご飯を一緒に食べましょう。

そしてお友達の言う通り、あなたの夢には問題があります。

お昼の時に、もしも私がこの話題を出さなければ、メールを必ず見返して言って下さい。

フィオナ・花憐・鷹野

うーん……何の話だろう、所長？ お昼を一緒にとって、すごく珍しいね？

でも下の方まで読むと、わたしが所長に先に送った、前のメールがついてました。

>フィオナへ

>見えない敵に多分会ったよ。なぎに調べてもらうことにしました。

>でも夢の話だから、どう書けばいいかわからなくて。

>なぎは夢を見過ぎたらダメだって。フィオナはどう思う？

>猫羽

……あれ？ わたし、こんなメール、所長に打ったっけな？

そう言えば今日は、水葵が起こしに来ないな。もしかしたら、先に高校行っちゃったのかな。目覚まし時計をかけたのも久しぶりだし、うるさすぎてあんまり好きじゃないのに、わたしはどうしてセットしたんだっけ？

何だか「？」だらけだけど、朝の時間は早く過ぎて、急がないと遅刻しちゃいます。

水葵が用意してくれたサンドイッチが、冷蔵庫にあるを見つけました。美味しく食べてから高校に向かって、ついたわたしを待ち受けてたのは、思いもかけない事態でした。

「あれ？ パル、なぎはまだ来てないの？」

「——？」

わたしの後ろには、パルと水葵が座る机があります。水葵の机には『呪いの薫人形のフシギ』だけが入ってて、鞆がないです。

そこにいるのはパルだけでした。わたしの質問を何だか不思議そうにするから、わたしも「？」が頭を飛び交います。

まだちょっと時間があつたから、窓際のサトシの席まで挨拶にいきます。

「昨日はありがと、サトシ。ご飯もデザートも美味しかったし、みんなでご飯が食べられて嬉しかったよ」

「え、ほんっと？ やったー、楡さんに褒められたー！」

歓迎会、企画してくれたのはサトシだもんね。会費もいらなかったし、わたしは玖堂さんにはお世話になりっぱなしです。

「ところで、なぎは見なかった？ わたしより先に出たはずなんだけど」

「——え？ なぎって、誰？」

すとん、と。

頭にまるで、サツリクの天使時代のわたしが入り込んだみたいでした。

「誰、って……橘水葵、ってヒト、サトシは知らないっけ……？」

そんなはずはない。そう思いながら、サトシのきよとんとした顔に、わたしはすぐに確信しました。パルのさっきの反応も思い出して、無意識に声がつぼみました。

「たちばな、って、診療所にそういう人いたっけ？ おれは心当たりないなー。良ければ今度、カイ先生にきいておこーか？」

「……ううん。ごめん……変なこと言って」

胸の中を、冷たい実感が駆け回りました。

落ち着かなきゃ、って思いながら、自分の席に戻ります。後ろのパルにも改めてきくと、パルは海竜の水葵は知ってるけど、この高校にいるとは思ってないのがわかりました。

「隣はボクが来た時から空席だよね？ ボクはしばらく、あの海竜の噂もきいてないよ」

水葵は元々、モグリの生徒だったから、水葵の存在を不自然に思われない魔法がかかってました。だから先生達には、認識されてないはずですよ。

水葵のことを知ってる人だけが、水葵がいるってわかる魔法。休んでも不思議に思われないのはおかしくないけど、今日みんなの反応は、これ、水葵、初めからいなかったことになってる……。

サトシもパルも、水葵がいた、とまず思っていない。昨日一緒に、歓迎会に出たばかりなのに。フシギの本も机の中にあるから、確かに水葵はその席にいたのに。

ユウヤも水葵を忘れちゃったかききたかったけど、今日は高校がお昼までだから、すぐに帰っちゃいました。所長とご飯を食べる約束もあったから、ユウヤには会えませんでした。

所長は普段、この街の中央にある病院で、パートの看護師さんをしています。

今日は夜勤明けで、所長も午前で仕事が終わったんだって。お昼までには時間が余ったはずなのに、事務所で話したくなくて、病院に来て、と言ったみたいでした。

病院の最上階の食堂につきました。夜勤明けだから、いつもより疲れた顔をしてるけど、今日も所長は白い肌にきらきらの金髪でした。

「すみません、わざわざこちらまで来てもらって。今日は私をご馳走しますから、何でも好きなものを食べて下さい」

「ありがと……でも何で、いきなりそこまでしてくれるの？」

「そうですね。私も不思議だったんですが、玖堂さんへ送ったメールを見返すと、どうやら『これは深刻なスタッフ引き抜きの危機だから』、と打ってありましたねえ」

所長が「玖堂さん」という場合、相談所の営業な咲姫おねえちゃんのことです。咲姫おねえちゃん、玖堂さんの養子だから。

でも何だか、質問のこたえが変だね、所長。相談所じゃなくここに呼ばれたことも変なら、理由もさっぱりよくわかりません。

所長はそれ以上の理由は言わずに、わたしのオムライスが運ばれてくるまで、温かいコーヒーを飲みながら違う話に入りました。

「とりあえず、身の周りで、何かおかしいことは起こってませんか。猫羽ちゃん」

「え。起こったばかりで怖かったんだけど、何で知ってるの？」

「私にも関係のある話だからです。この件に関しては、周囲の人間が信頼できません。だから二人だけでお話したかったんです」

そう言えばそうだよ。所長がわざわざ、パルの留学に関わってること、そのお話もまだきけてないや。何だか急に、所長が輝いて見えてきたよ。

でも所長の言い方をきいてると、咲姫おねえちゃんのことまで疑ってるみたい。相談所では話せない、ってそういうことだよ？

わたしの考えたことを読んだみたいに、所長が珍しく笑顔を消して、大きな溜め息をついてしまいました。

「玖堂さんは、猫羽ちゃんを大事に思っていますが、大事な相手は他にもいます。彼女は今回、中立だと思って下さい——迂闊に信用してはいけませんよ、猫羽ちゃん」

「……え？」

——こっちだよ、って。

水の器で漂っていた、独りぼっちのわたしに気付いて、目を覚まさせてくれたおねえちゃん。その悪魔の声を思い出しました。

「確かにパルシィ・ディレス・ディアルスを、猫羽ちゃんのために連れて来たのは玖堂さんです。けれどここからの彼女の行動は、下手をすれば、猫羽ちゃんの敵側を利するものであるはず」

「えっと……わたしの敵、ってなに？ フィオナ……」

「それが説明できたら、苦労しないんですけどねえ。そちらは可能な限り、メールで話しましょうね。メールなら記録が残りますから——猫羽ちゃんは、先ほど尋ねた『おかしなこと』の話を、今、わたしに説明できますか？」

「……—え？」

あれ。そう言えば、おかしなことがあって怖かったのは覚えてるのに、実際、何があったんだっけ？

所長なら相談できるって、確かにさっき、輝いて見えたばかりなのに。

「わからなければ、貴女もメールを見返してみてください。何かヒントがあるかもしれません」

所長もさっきからずっと、携帯を睨んだままです。わたしも言われた通り、スマホを必死にいじり始めて、何だかおかしなお客さん達です。

病院はスマホをいじっちゃいけない所もあるっていうけど、ここは大丈夫だって所長が言うので、遠慮なくメールを開きました。

「——あ。そうだ……なぎがいなくなっちゃったの、フィオナ」

所長に送ったメールを見返して、やっとわたしはその言葉が出てきました。

同時に背筋が冷えました。サトシやパルが認識しなくなっちゃった水葵を、わたしまで今、相談できなくなりかけてたって。

メールには、「なぎに調べてもらいます」って書いてる。わたし、何を調べてもらおうと思ったんだろう。そしてどうして、それを所長に言えなかったんだろう。

「私が何度も、メールで相談しよう、と言った意味、わかってもらえました？」

「……うん。怖いね——これ」

もしもわたしが、メールに水葵のことを書いてなければ、きっと何も言えなかった。所長は多分、わたしが相談できなくなることをそのものを、予見してたはずの言葉。

「正直なところ、貴女がいう『なぎ』が誰かも、私にはわからないんです。でもそれは、おかしなことでしょう？ 『お友達の言う通り』と、私も貴女に返信してるのですから」

そこでようやく、所長がわたしをここに呼んだ意図も伝わってきました。

何かがおかしい。それが「おかしなこと自体」を、こうして一緒に確認するためだったんだ。

「私も最初は、玖堂さんとのやりとりで気が付いたんです。覚えのないメールをいくつか、彼女に送信していることに」

「——……」

「初めは彼女の、洗脳の力を使われたのかと思いました。でも彼女であれば、こうして後でわかる証拠は残さない、と言われてまして」

ええと、まずおねえちゃんのは洗脳の力じゃなくて、それはどっちかというとパルの特技なんだけど.....でも、人間の所長からしたらそう見えるんだろうな。

それはともかく、ここまでのお話でわかったことは一つです。所長もその結論を、相談所の探偵のおにちゃんから助言されたみたいです。

「誰かが、わたし達の意識を、何かいじってる。そういうこと？」

「それしか考えられません。だからおそらく、私は『見えない敵』と、貴女に送ったんでしょう。それ以上のことは、もう何も言えません」

そこでわたしのご飯が到着しました。すると所長はあっさり話をやめて、ゆっくり食べるように、と笑顔になりました。

「顔色が悪いですよ、猫羽ちゃん。今日も休んでもらっているいいので、後の心当りはメールで打って下さい」

「うん.....今話しても、わたしもフィオナも、メモも取れないもんね」

「とにかくメールを確認すること。それをそのまま、目に見える場所に書いて貼って下さい。私はそれを見る度に、何か異状だ、とその都度認識できているんです」

なるほど、それは一番確実だよな。わたし達の意識には介入できても、メールとか現実のものには手出しできてないんだもんね。

じゃあ帰ったらそうするから、それだけ今、送ってほしい。そう所長に頼んだら、快く「メールを頻繁に確認・^{ホウレンソウ}報連相する習慣をお願いします」と、メールで送ってくれたのでした。

ご飯を食べ終わったら、相談はお開きになりました。所長がパルに名字を貸してまで、異世界留学を助けてる理由も、咲姫おねえちゃんの依頼としか言えないんだって。

これは多分、おねえちゃんに会って話した方が早いんだろうけど、家に辿り着く頃にはわたしはもう、水葵のことも、ユウヤに水葵についてきこうと思ってたことも、考えられなくなっていたのでした。

部屋のドアに、「とにかくメールを確認送信」って、貼り付けました。それから今までのメールも、ベッドの上で見返します。

「なぎに調べてもらいます」。その一文でわたしに、暗い気持ちが蘇ります。

「まだ帰ってこないし.....何処に行ったのかな、なぎ.....」

人間界に来てから、水葵とは毎日一緒にいたから、心細いな。夏休みはいなかったけど、二学期からは家でも一緒だったし。

でもきっと、調べることが終わったら戻ってきてくれるよね。そう言い聞かせるのに、ざわざわした胸がどうしても治まりません。

ユウヤがスマホを持ってたら、水葵のことも電話してきけるのにな。お家を探しても、探してる間にまた意識に介入されちゃう。

咲姫おねえちゃんにはそんな風に、リアルタイムにヒトを洗脳するようなことはできません。おねえちゃんは大体、直接会ってその眼に映る人に対して、「その人の中にすでにある心」を揺らす能力の持ち主だから。だからそれで、水の器で眠るわたしも目覚めたんだし。

それは確かに、相手に「心」がありさえすれば、悪いコにしたり良いコにしたり、力を覚醒させたり封じたりと、色々できて反則なんだけどね。

会ってお話しするのは、難しそうでした。それなら咲姫おねえちゃんにこそ、電話するのが一番だよ。

スマホでおねえちゃんに電話するか、それともおねえちゃんの悪魔——咲香おねえちゃんに接触するか。わたしは久しぶりに、悪魔を使う時のためのPHSを鞆から取り出します。

スマホがわたしの探偵道具なら、PHSは、悪魔使いとしてのわたしの武器。

わたしはまだ悪魔じゃないけど、悪魔になる可能性はあるから注意しろ、ってみんなに言われます。PHSをあんまり使うと、余計にそうなるって。

悪魔というのは、ヒトの心を誘惑する反則。咲姫おねえちゃんは、そう言ってました。咲香おねえちゃんは悪魔に育てられたから仕方ないけど、わたしはまだ人間でいられるから、咲香おねえちゃんとあんまり話しちゃいけない、って何度も言われたなあ.....。

スマホとPHS、どっちを使うか悩んでたら、突然知らない番号の着信がスマホの方に入ってきました。

「え？ 誰.....これ？」

わからないけど、わたしのスマホを知ってる人は、少ないはずだから出ます。

たとえば、部活のヘルプをした時の部長さんとか、番号を教えたけど登録してない人がいるから。だっておねえちゃんがいる時でないと、登録の仕方がわからなくて。

おそろおそろ、もしもし、と言うと、聴こえた声はよく知ってる人でした。

「あ、椀さん？ 今話してもだいじょーぶ？」

「あれ。この番号、サトシだったんだ.....」

あ.....部長さんに番号を教えた時、確かサトシからも電話があったっけ。その後、登録してもらうの、忘れてた.....めったにかかってこないもんね、サトシからは。

「おれさ、今、春貴兄と烏丸先輩の家にいるんだけど、先輩が椀さんと話したいってさ。先輩が変わるから、遠慮なくゆっくり話してくれな！」

昨日の歓迎会のお礼、って言って、サトシ達はユウヤの家に招待されたみたい。玖堂さんが援助してる借家だと思うけど、ユウヤのお父さん達ならお礼はしようとするよね。

そしてサトシのスマホを使って、ユウヤが連絡してきてくれたんだ。心細くて仕方なかったわたしは、サトシに思いきり、ありがと！ って言ってから、電話を代わってもらいました。

「もしもし、ユウヤ？」

「猫羽さんですか？ すみません、式神を送ろうとしたんですが、妨害に合うので里史君の力をお借りしました」

「ううん、こっちで力使うと大変だから、何かあるならわたしから行くよ。ユウヤは体が弱いんだから、無理しないで」

ユウヤのお家じゃない所なら、ユウヤだって会ってくれるよね。会えばわたしが甘えなくなるから、ユウヤのお父さんに会わせたくないだけなんだから。

「そうですね、里史君達の前で込み入った話をするわけにいきませんし、良ければ橘診療所に来て下さい。里史君達が帰る時に、僕もそこに行きますので」

玖堂さんのお家。その一部に橘診療所はあります。他にわたしとユウヤが知ってる場所は、高校か紫陽花の公園くらいしかないし、公園に来てもらうのは遠いからすぐに頷きました。

これからサトシ達とユウヤ達のお茶会が始まるみたいで、橘診療所には夕飯の時間に行くことになりました。

ちょっと時間があるから、その前におねえちゃんに連絡しとこう。そう思って、咲杏おねえちゃんに伝話するかはユウヤに相談してからと決めて、わたしはそのままスマホで咲姫おねえちゃんに電話しました。

「もしもし？ 猫羽ちゃん？ 電話は久しぶりだね、元気してた？」

「うん、おねえちゃん。夏休みは沢山、遊びに連れてってくれてありがとう」

「えー、水くさいなあ、お礼なんていらないからまた行こうね！ それで今日はどうしたの？ 猫羽ちゃんからかけてくるのは珍しいね」

いつも明るくて、気さくなおねえちゃんの声。特に何も、変わりはないさそうです。

所長がおねえちゃんを疑ってる、は言いたくないし、わたしはあんまり、当たり障りのない大事なことから質問します。

「うん、パルからね、こっちに来たのはおねえちゃんの頼みだっけきたの。どうしてかな、って思ったから」

「ああ、それぞれ。ごめんね、忙しくて私、猫羽ちゃんには何も言ってなかったよね」

一瞬だけ、おねえちゃんの声が澱みました。これ、咲杏おねえちゃんの気配だ。

でも今はこのまま、咲姫おねえちゃんとのお話を続けます。

「そもそもは花憐が、『このままでは猫羽ちゃんが近日中にバイトをやめてしまう』って相談してきたんだよ。なのに花憐、そんなこと言ってない、って言うの」

「わたしが、バイトをやめる？」

「まだ更新したばかりだし、それはないでしょ？ って言ったら、猫羽ちゃんの意志でなくやめる、と占いで出たから問題なんだって。それはそうだよ、猫羽ちゃんがやめたいなら仕方ないけど、原因がわからないならちょっと、と思って。そんな時にちょうど、うちの王子様が留学したがって話をして、あ、そう言えば昔、猫羽ちゃんと仲良かったな、って思い出したの」

うちの王子様は、パルのことだよ。咲姫おねえちゃん、元の世界ではパルの国に戸籍があるから。

「それでまあ、猫羽ちゃんと花憐の様子を見てもらうのを条件に、王子様にバイトを勧めたわけなんだよ。私もちょっと、無茶かなあ、とは思ってたけど」

ここまではおねえちゃん、何も嘘をついてません。

こんなことを探りながらきくのはイヤだけど、咲姫おねえちゃんとはともかく、咲香おねえちゃんはたまに色々企む悪魔だから。

「でも花憐、思ったより重症みたい。王子様には一応防御策をしておいたのに、その王子様にもすぐに、花憐と同じ症状が出たから」

「同じ……症状？」

「王子様も、猫羽ちゃんがバイトをやめたいか、って話をしようとする、できなくなるんだって。パルや花憐からそういう話、最近あった？」

「ううん……何も聞いてない、わたし」

そうよねー、って納得したような咲姫おねえちゃん。胸が痛い。わたしの方が、ちょっと嘘をついちゃいました。

「二人共がこうなると、相談所の建物が何か悪いのかな、って仕事の合間に調べてみるよ。猫羽ちゃんももし、何か心当たりがあれば教えてね？」

「……うん、わかった。おねえちゃんも、何かわかったら電話してね」

了解ー♪ と明るく、咲姫おねえちゃんとの電話は終わりました。

いつも通りの咲姫おねえちゃん。スマホをしまおうとした時に、「とにかくメールを確認送信」が目について、あ、とわたしは慌てて、所長にメールを打ったのでした。

フィオナへ

サキおねえちゃん、フィオナを心配してたよ。

パルにも同じ症状が出てるって。嘘はついてなかったと思う。

でもわたしにはあんまり詳しく話したくないみたい。

今はそれだけわかったくらい。

今度、わたしはサクラおねえちゃんと話そうと思ってるよ。

猫羽

* * *

橘診療所に行くまで、もう少し時間があったから、気が付けば寝ちゃってました。
あ、夢のことを所長と話してなかった、って、暗闇に落ちてから気が付きます。「メールを確認」、これは本当、徹底しないとダメみたいです。

今日のお昼寝。沈む水底に広がる夢は、昨日からのよりも更に変でした。
いつもは真っ暗な水底にいるのに、気が付けばわたしは、真っ白な部屋にいました。一応夢とはわかりながら、夢の中で目を覚ましました。
「……え……？」

薄暗くって、白いベッドに白い機械しかない小さい部屋です。
窓がなくて、ドアが反対同士に二つあって、片方のドアだけが半分開いています。わたしはそこで、部屋の隅のベッドに寝ています。
ぼけっと天井を見上げるだけで、体が全然動いてくれない。手を動かそうとしたら、胸を刺してる細い管から、痛みが走りました。あれ、これって確か、病院の点滴のもっとすごいやつじゃなかった？

わけがわからないまま、ずっとベッドに横になってると、しばらくしてから部屋に入ってきたヒトがいました。

そのヒトはわたしが、目を開けてるのを見て、すごく驚いたみたいに駆け寄ってきます。

「水燬様、意識が戻られたのですか!?!」

その声は、多分何処かで会ったことがあるけど、気配は覚えがないヒト——というより、気配がないもの。

でも、誰、ときけることはなくて、体が勝手に口を開きました。

「……………ソラ？」

あれ、誰の声なんだろう、今の一言。きいたことはないはずだけど、それなのに知ってる雰囲気、何かが変です。

まず絶対、それはわたしの声じゃなくて、そこでやっとなわたしは、寝転んでるのはわたしじゃないことに気が付きました。

部屋に入ってきたヒトも、更に驚いています。肩までの黒い髪に白衣のヒトで、ずっとある機械の画面とベッドを交互に眺めます。

「何故、私の名をご存じなのでしょう？ 貴男の治療は、ずっとこちらで継続しておりますが、水燬様と私は初対面です」

「……ああ——……よく、わかんないけど……」

そこでずっと、わたしがなりきるベッドのヒトは、胸につながれた管の先で、小さな輸血のバックがぶらさがってるのを見つめました。

「ひょっとして……オレは、水月^{みづき}……？」

さっきから何度も口にされる、ベッドに横たわるヒトの名前。

そこにやっと、わたしが気が付いた時、白い部屋からいつもの水底に引き戻されたのでした。

夢の中では、いつもわたし、声を出しては何故か喋れません。何かを考えることはできるけど、それが人に伝わってるか、返事がなければ全然わかりません。

でも今は明らかに、そんなわたしに話しかけてくるヒトが、夢の中にいました。

「ほら、これであなたもわかったでしょ？ あなたが水燬に命を返せば、彼はさっきの夢みたいに、目を覚ますことができるんだよ」

知らない声の、話しかけるヒト。暗闇でも不思議と光がさしてきます。

それはきっと、夜は夜でも、真っ白な夜の名前を持つ天のヒトだから。

「あなたはかつて、パルシィ・ディレス・ディアルス^{パルシィ・ディレス・ディアルス}の魂となった。二人で一つの悪魔使いとなり、パルシィがヒトに戻れるように救った——それは、覚えてるでしょ？」

——遠い昔、一つになった仲だからね。

「それなら、水燬も助けてあげて？ そもそも、殺したのはあなたなのだから」

天のヒトが言ってるのは、ずっと同じことです。わたしもさすがにわかってきました。

でも、助けてと言われたって、どうすればいいかわからないよ。

水燬という名前のヒトを、殺したのはわたし。それは憶えています。だってそれは、パルと一緒にいた昔に、わたしを拾った悪魔に命令されたこと。

死んだヒトは、普通は、帰ってきません。水燬は魔性で、人の命を食べて力の糧にするヒト——魔物だったから、体だけ回復させることはできたみたい。

だから悪魔もそのつもりで、水燬を殺すようにわたしに言った。だからもし、今からでも助けられるなら、わたしは何でもすると思う……さっきのヒトの言う通りに。

もしまだ、水燬を助けられるなら、助ける方法を教えて。

そう思っても、暗闇の中でのわたしの声は、天のヒトには伝わりません。

「……どうして邪魔をするの？ 椀猫羽は、彼を救うことを望んでるのに」

天のヒトも何処か少し、苛立ったような感じです。今の台詞は、わたし以外の誰かに言ったみたいでした。

「そうすれば貴女も体を持てる。烙鍍さんと暮らせて、人間になれるんだよ、風滴」

そう言えば天のヒトは、沢山色んなことを喋ってるのに、わたしに届いてるのは一部だけみたい。この水底の揺らぎが、今までにない声を届けてるけど。

それは、始まりの水門を開けてしまった誰かがいるから。天のヒトはその誰かと、言い争ってるように見えます。

どうして誰かの声は、何も聞こえないんだろう。それがわたしは、何だか悲しくなっちゃいました。

「いつまで貴女のやせ我慢は続くかな。貴女だって、檢猫羽になりたいって思ってるくせに——」

そこで突然、じりりりり、と水底の夢は終わりを告げました。

ユウヤとの待ち合わせの時間。遅れちゃいけないから、嫌だけどまたかけておいた目覚まし時計。それがわたしを強制的に引っ張り上げていきます。

目が覚めた時、わたしの中に唯一残った言葉が、涙と一緒にぼろっと零れ落ちました。「ごめんなさい.....かざり、おねえちゃん」

わたしはいったい、誰にどうして、そんなに悪いと思ったんだろう。

多分いっぱい、色んなヒトに迷惑をかけてる。誰かが心配してるのがわかる。その気配は全部、暗闇の中にいると伝わってきます。

それでも何だか、段々、よくわからなくなってきちゃった。

わたしはいったい、何がしたいんだろう？ この白い夢は何なんだろう。

わたしの周りで何が起こってるんだろう。探偵なのに何もわかりません。

一つだけわかるのは、それはわたしが咎人だから。そのツケをみんなに払わせてるんだって、夢を見るごとに確信が深まってくこと。

ユウヤとの待ち合わせで、橘診療所につきました。サトシの付き人さんのキリが、今は夜診中だからって、処置室の方にわたしを案内してくれました。

「キリは、サトシについてなくていいの？」

「里史様はお夕食中です。ご兄弟水入らずの場ですので、私共は遠慮しております」

処置室の椅子で、ユウヤが待ってました。もう今日はとっくに授業が終わってるのに、まだ高校の制服姿です。わたしも制服のままお昼寝しちゃったから、同じなんだけどね。

キリには一旦退室してもらって、処置室のベッドにユウヤと向かい合って座りました。「えっと.....今日はユウヤ、どうしたの？」

「電話で話した通りです。式神をうとうとしたんですが、誰かの邪魔が入ったもので」

「式神って、この場合、伝書鳩みたいなものだよ。ユウヤは何の用事だったの？」

ユウヤはあんまり、深刻な顔じゃないです。むしろ、わたしの元気がないことを、ちょっと訝いぶかってるみたいです。

「用事自体は、大したことじゃなかったんです。今日は高校がお昼までなので、猫羽さんがお弁当を待っていたら悪い、と思って。でも式神に、邪魔が入る事態はおかしいですよ。それが気になったので、猫羽さんに心当たりはないか、と思って」

「——あ」

「そっか。式神さんって『力』だから、人間界で邪魔できる何かがあるなら、それは変だよな。」

「どうやら僕が、猫羽さんに何か術を使おうとすれば、失敗に終わるようになっているとそれで気付きました。父様曰く、何故か大事な手順を抜かすそうです」

「えええ……それは、ユウヤらしくないね？」

「他の術は失敗しないんですよ。大分不本意ですので、猫羽さんの所見をきかせてください」

「何だかまるで、拗ねた感じのユウヤ。珍しくって、気分がすごく和みました。」

「でもわたし、所見と言われても困るな、何もわからないよ。ここに来るまでは、何か色々話したかった気がするんだけど……。」

「ユウヤはわたしの直観のことを知ってるから、元の世界にいた頃にもごくたまに、こんな風に意見をきかれることがあったのを思い出しちゃいます。」

「わたしに関すること、って……他にどんな術を使ったの、ユウヤ？」

「それは——……別に、ちょっと結界を張ったくらいですけど……」

「なんの結界？ わたしがユウヤのお家に、こっそり近付かないように？」

「違います、貴女の下宿や公園だけです。でも公園の結界はもう、ほとんど破られてます」

「下宿や公園……目的はよくわからないけど、それってけっこう大変だよな？」

「ユウヤは体が弱いから、大規模な結界は何回も張り直せない。邪魔されるのは困ることだね。」

「どうしてそんなの？ ……もしかして、夏休みからずっと？」

「……………」

「なんでかユウヤが、不機嫌そうになりました。ふい、と横を向いちゃいます。」

「……破られていれば無意味です。人間界の制限の中では、僕は無力です」

「そんなことないよ。ユウヤはすごいよ、優しくて弱くて頭が良くて」

「体力がない不利を、ユウヤは色々考えていつもカバーしてる。すごく努力してること、わたしは知ってます。」

「それ、褒めてません、猫羽さん。体が弱いのは確かですが、その言われ方はますます不本意です」

「うん、『力』がほんと強いもんね、ユウヤ。でも人間界だと、どうしても弱まるのは避けられないみたいだし——それならむしろ、わたしがユウヤの盾になって守るよ？」

「いません。僕が信じられる護衛は兄様だけです」

「そっか……それじゃ、スパイがいいかな？ きっとユウヤの役に立つよ」

「何で僕をそうあくどい役所にしたがるんですか。御所にいた頃は確かに情報収集を助けていただきましたが、人間界でまでそんな派閥闘争をする気は毛頭ありません」

喋ってる内に、どんどんユウヤが昔みたいに意地になるのが楽しくて、わたしも悪ノリしちゃいました。

わいわいしているとドアが開いて、こほん、と咳払いをしながら、久しぶりの院長先生が処置室に入ってきました。夜診が終わる時間だったみたいです。

「取り込み中のところ悪いが、術師と山猫。揃ってるならちょうどいい、お前達には見せておかなきゃならんものがある」

院長先生の突然の提案。たまに診療所のお手伝いをするユウヤが、眉をひそめました。厄介事をよく頼まれるって、そういえば前に言ってたかも。

院長先生はかまわずに、廊下の方にくるように、とひらひら手を振ってわたし達を招きます。

「来るか来ないかはお前達の自由だ。どうやらすでにかなりの部分、^{はくや}白夜に侵蝕されてるみたいだからな」

びたり、と、わたしとユウヤが院長先生を同時に凝視しました。

先生が何を言ったか、全然よくわからなかった。でもそれは、とても大事なことのはずだ、と固まった体が伝えてきます。

「一つ言っておくが、俺はお前達の味方とは思わな。お前達に情報を与えるのなら、プラスとマイナス両方渡せ、というのが条件にされている。けれど多分、今のままではお前達は、教えなくてもマイナス方向に突き進んでる」

この橘診療所は、沢山の異世界に繋がる中継地点です。それを建てた院長先生は、悪魔でもある「神」なんだとか。

でもわたしには、サツリクの天使だったわたしを、この世に還してくれた恩人の一人。だから先生は、何かのリスクをわたしに与えてでも、プラスの情報も教えようとしてくれてるんだと思う。

ユウヤも不服そうな顔付きだけど、思う所はあったみたいです。一度だけわたしの方を見て来たから、わたしは目を合わせて頷きました。

処置室のベッドから立って、院長先生についていきます。診療所と玖堂さんの家の境界線になる廊下で、地下に降りてく階段に先生が入りました。

診療所、一階だけだと思ってたら、地下室なんてあったんだね。相談所もそうだけど、わたしはあんまり地下って好きじゃないな……基本、暗くて狭いから。

最後に入ったユウヤが階段のドアをしめると、降りてく先生はふっと、背中を向けたまま、真ん中にいるわたしに意識を向けた気配がしました。

「……どうせ聴きはしないだろうから、聞き流してくれていいが」

「——え？」

「どうしておまえは、そこまで頑ななんだ？ 山猫」

薄暗い階段。そんなに長くないのに、院長先生が喋る間、まるで時間が遅くなったみたいなきがしました。

ユウヤも後ろで驚いてるみたい。よくわからないけど、院長先生、今みたいに感情的に喋ることはめったにないから。

「結局おまえは、話さないんだな。一番話すべき相手に、そのチャンスがあったとしても」
「.....？」

「他の奴らはともかく、おまえは本来、そう簡単に意識までは介入されない。おまえが周囲に、大事な相談をしないているのは、紛れもなくおまえの意思だ」

.....大事な、相談。わたしは、何か、話したいことがあったはずだっけ。

どうしてだろう、何も言えない。先生が何を言ってるかわからないのに、どういうこと、ってきけない。.....ききたくない？

先生はそんなわたしも見透かすみたいに、お話しをやめました。今度はユウヤに意識を向けます。

「ここから見せるものは、山猫には完全にマイナスになる。けれど術師、今後のお前には必要だろうな。山猫はこの通りだから、情報は引き出せないものと思え」

「.....橘先生」

「そもそも、直観で自他の境界が危うい上に、魂と心の繋がりが一度は切れた人間の弊害だろうな。心の答は決まっているのに、魂は気付こうとしない」

地下室のドアを開ける音が錆っぽくて、ユウヤと先生の声が何だか遠くに感じました。わたしのことを言われてるのに、どうしてだろう。

地下の廊下を行ってすぐに、いくつかの部屋の一つに来ました。先生が鍵を探す間に、わたしはこそとユウヤに尋ねてみます。

「.....さっきのって、なんだったの？ ユウヤ」

「.....猫羽さんの、そういうところの話ですよ」

淡々ときくわたしに、呆れたようなユウヤ。大きな溜め息をついてしまいました。

「貴女のように、魂の抜けた人のことは、生ける屍と呼ぶんですよ」

.....ううん。何だかヒドイことを言われた気がするけど、言い返せません。

それに、生きてるシカバネって.....わたしはつい最近、全く同じことを、誰かに言われなかったっけ？

それはともかく、院長先生が鍵を開けた部屋に入った瞬間、わたしは何だか、全てを納得できた錯覚にとられました。

薄暗くて窓のない真っ白な部屋。ドアが向こう側にもあって、部屋の隅の一つベッドがあって、色んな機械に囲まれた中で――

「そんな――橘先生、まさかこのヒトは.....！」

「お察しの通りだ、術師。呼び名をつければ、氷輪水燬……山猫が背負う闇だな」

びっ、びっ、となる機械の画面。それを横に、点滴の管を胸に刺して眠ってるヒト。

わたしやユウヤより少し年下の姿で、昔の兄さんに似た銀色の髪。硬く目を閉じて横たわってる男の子。そのヒトこそ、体は生きてるのに気配が何もない、「生ける屍」でした。

「心臓が動き出したのはつい最近だ。意識も一瞬戻ったようだが、それはニセモノだからすぐに引っ込んでいる」

「どうしてこれを、僕達になんか——猫羽さん、大丈夫ですか!?!」

眠るヒトをぼけっと見てたら、わたしを急にユウヤが前から揺さぶりました。

あれ、ユウヤはどうして、こんなに焦ってるんだらう。

別にここには、ただの悪魔さんがいるだけなのに。魂も命もなくて、体だけが残った可哀相な悪魔さん……それも魔物と言うんだって、父さんは言ってたっけ？

そう、かつての母さん——橘桃花と同じように。

「大丈夫、って……ユウヤ、どうして怒ってるの？」

「猫羽さん……貴女は、泣いてることもわからないんですか」

……あれ？　ほんとだ、わたし、涙が出る。

やだな、恥ずかしいや。ユウヤにはそんな顔、あんまり見られたくない。

だってわたしは、ユウヤのこと、守りたいのに。心配をかけたなら本末転倒だから。

「……行きましょう、猫羽さん。橘先生——恨みますよ」

「できれば恩に着る方向に行ってくれ。楡猫羽の脆弱性は、ここに起因する」

それが一番大事な情報だ、と、院長先生はユウヤに伝えたかったみたい。

わたし自身は、何が何だか、なんだけど……ただ、冷たくなった手をひいて階段を上がる、ユウヤの気配が温かくて。何でか、何かを考える気にはなれませんでした。

……ほんとに、探偵失格だなあ、ここの所のわたし。

最初に来た診療所の処置室に戻ると、そこにはサトシと、付き人さんのキリが待ちました。

「あ、やっぱりそろそろ帰り？　——って、楡さん、どうしたの？」

ごしごし、と目をこするわたしに、サトシが目を丸くします。

その横でキリが、車の鍵みたいなものを持ちながら、ユウヤに向かってほのかに笑いかけました。

「烏丸様、ちょうど往診から空が帰りましたので、このまま烏丸様をご自宅にお送りする付添いを頼んでおります」

「それは助かります。けど、猫羽さんは……」

「楡様は私と、主の里史あるじがお送りします。こちらは徒歩ですが、私がついていれば心配はございません」

ユウヤのことは、顔見知りの違う付き人さんが送ってくれるみたい。わたしには家を教えてくれないし、ちょうど良さそうだね。

ユウヤは何か言いたそうだったけど、わたしのことを一瞬ちらりと見て、それからキリを見て、少しだけ息を吞んでから頷いたのでした。

「……よろしくお願いします。今日は、場所を貸していただいて、有難うございました」

わたしは結局、地下の部屋を出てから何も言えずじまいです。

ユウヤが先に診療所を出て行ってから、やっとそのことに思い当たりました。

「……あ」

「——楡さん？　どーしたの、さっきから何かあった？」

「……ううん。ごめんね、今だけちょっと、メール、打たせて」

わたしはいい、って言ったんだけど。サトシとキリが、絶対に送ります！　って言って譲らないので、一緒に玖堂さんのお家を出ました。

スマホの時計を見たら、もう夜の八時。同時に所長からのメールがあって、それで門の前で立ち止まります。

猫羽ちゃん

玖堂さんの情報、ありがとうございます。

気のせいですか？　貴女も私に、詳しく話をしたくないように感じます。

夢のこと、なぎさんのこと、何もお話しが進んでいません。

咲香さんとは話せましたか？

フィオナ・花憐・鷹野

何のことも、そこでやっと思とぴんと来て、本当に所長の言う通りでした。

わたし、今日はユウヤに、水葵や咲香おねえちゃんのことをきくはずだったのに。

——どうしておまえは、そこまで頑ななんだ？

それはおまえの意思だ、という声。それがもう一度、聴こえた気がしました。

* * *

フィオナへ

帰ったらまた連絡するね。

猫羽

取り急ぎ、わたし自身のために所長への返信を打ち終わってから、サトシとキリと歩き始めました。家に帰ってから続きを打てるように。

キリが「猫の目」というライトを光らせながら、三人でしんみり夜道を歩きます。

「榎様、メールのお返事、もっとゆっくり打たれなくて良かったのですか？」

「うん、大丈夫だよ。それよりキリ、目が光ってかっこいいね」

「ありがとうございます。私はキツネタイプなのですが、狐は猫と同じ形の瞳孔を持つということで、採用された仕様でございます」

そこでサトシが楽しそうに、わたしとキリを挟む形で喋り始めました。

「普段はライトでしか使わないけど、本気を出せば鉄板だって貫けるレーザーになるんだぜ！ だから防犯は安心してな、榎さん！」

「そうなんだ……でもそれ、もしも悪い人がいたら、殺しちゃわない？」

「あははは、冗談冗談。まあそんな感じで、霧達には色んな機能がついてるから頼りになるし、落ち込んだ時は人間みたいに相談にのってくれるんだぜー。会話機能ほんっと凄
いから、榎さんも試してみてよ」

明るく言うサトシの意図は、すぐに伝わってきました。

わたしがさっきから、様子がヘンだから、気を使ってくれてるんだ。キリに悩みを話してごらん、って、そう言ってる、サトシ。

「榎様がお話し辛ければ、私からお聞きして良いでしょうか、榎様」

「え？」

「榎様は先刻、烏丸様と何かあったのでしょうか？ 早い話、榎様は烏丸様のことがお好きなのでしょうか？」

うわっ！ とサトシが、文字通り飛び上がっちゃいました。

「さすがにそれは究極、霧！ ていうか早過ぎ！ 会話飛び過ぎ！ やめてーおれがやらせたってセクハラで訴えられるー！」

慌てるサトシに思わずわたし、小さく笑っちゃいました。

サトシってほんとに、優しい人だな。わたしが笑ったら喜んでくれたみたいで、キリと二人で、わたしを元気づけようとしてくれてるね。

ユウヤのことが好き？ って、キリはききました。

キリは機械人形さんだから、人間の言葉には普通載せられる心の気配が、ゼロじゃないけどほとんどわかりません。人と話す時はわたし、いつもそれを感じながら言うから、今はこたえを言う前に先に確認します。

「キリの言う『好き』は、つまり、発情期の『好き』？」

「って榎さんまで凄い会話してる！ なにその野生王国的な返し!?!」

「そう仰られては気恥ずかしいものですが、さようでございます、情欲についてのお話し
でございました」

「霧も何だそれ、普段そんな話するっけ!?! おれの教育って疑われない!?!」

サトシの護衛をしてる時は、黒子さんみたいに存在感のなかったキリ。

今夜は猫の目がキラキラしてて、わたしも面白くなって話を続けます。

「うん。わたしはユウヤ達に沢山助けてもらったから、役に立ちたいし好きだけど、その好きは恋愛じゃないと思う。それならパルのことも、サトシのこともみんな好きだよ」
「えっ！　じゃあおれが楡さんのこと、好きって言ったら!？」
「うん、嬉しいし、知ってるよ。サトシは優しいから、みんなのことが大好きだよな？」

ちょうど帰りの、紫陽花の公園に差しかかったところでした。
ほのかな霧がかかる夜道で、えーってサトシが、複雑そうに照れます。
「えーん、楡さんにふられたー。霧、慰めてくれよー」
全然ほんとに、悲しがってないよね。わたしを送ってくれてることもそうだけど、一学期からよくかまってくれたのは、玖堂さんがわたしの支援者で、たまたま子供の中でサトシが同学年だったから。
玖堂さんのお家の人が、みんな優しいんだ。特にサトシは、パルのこともそうだけど、自分の視界に寂しそうな人がいると気になる性格なんだと思う。
「サトシは別に、わたしでないと駄目なわけじゃないよね。それならあんまり、わたしに関わらない方がいいよ？」
何の気なく言ったわたしに、サトシが一步前に出て、わたしに振り返りました。
「えー、楡さんの恋愛観ってハードル高いなあー。でも何か初めて、楡さんの本音が聞けた気がする」
「？」
「楡さんでなきゃ駄目な人、がタイプかあ。ダメメンズに引っかけりそうで、ちょっと心配になっちゃった、おれ」
だめんず……って、何だろう……。それに「タイプ」って、そういう話だけ？

「何にせよ、私の主は対象外のようなです。残念でございますね」
「ってトドメ刺すなよ、霧！」
「愚考しますに、主が一生血液の必要な大病をされて、楡様の血しか輸血できないという場合、おそらく楡様は終生そばにいて下さるか」と
「なおのこと悪いし！　そんなんで楡さんを縛ってもおれは嬉しくないし！」
何だろう……。何だかすごいことを、話されてる気がする……。
でももし、わたしの血しか合わない状態なら、キリの言う通りそうするかな？
「霧、最近、楡さんがいるとよく喋るよなー……。しかも大体、恋バナ方面……」
ほんとに、わたしとサトシだけなら、こんなお話には絶対ならないよね。
サトシはわたしがいるのが、一年だけって知ってるから、異性でなくて、おもてなしの気持ちがいっぱいで話しやすくて。後は水葵と、パルと他のクラスの二人以外、わたしは今でもあんまり人に関わりません。

好きとか恋とか、そういうことを言ってきた人はいないけど、異性としての目を向けてくる人はたまにいるよ。高校でもバイト中でも、お出かけした所でも。

わたしに向けられる心だけでなく、好き合ってる人達の心や、逆に仲の悪い人達の思い。そういう色んな強い気配は、始終わたしに混ざってくるもの。

兄さんにも同じような直観があるけど、この感覚がわたし達には当たり前過ぎるから。誰の心でも、よっぽど強い思い以外は流しちゃうの、ひょっとしたら悪いクセかもしれないね。

下宿のマンションにつくと、サトシとキリにお礼を言って、部屋に上がりました。

一人で帰ったら、多分公園によったくらい、わたしは夜道を心配してないんだけど。それじゃダメ、って二人共に怒られちゃいました。

部屋のドアで、「メール確認」の紙を見ます。はっとして、さっきの所長のメールを見直します。これ、後で返すってわたしも送ってるから、何かをちゃんと話さないとなんだけど.....。

「ヘンなの.....頭と心が、何だかバラバラに動いてるみたい」

そうしなきゃ。って思ってるのに、パジャマに着替えた体はぼけっとスマホを持ったまま、ベッドで仰向けにゴロゴロしてます。

明日は日曜で、お昼からバイト。だからシャワーは、朝に浴びればいいよね。もうこのまま寝ちゃおう、そういう睡魔の誘惑には抗えそうにないです。

いつものわたしなら、冷たい水底に還るのが嫌で、なるべく夜ふかしするんだけど.....今日は多分、暗闇で何か、しないといけないことがある気がしたから。

眠りに堕ちる僅かな間に。そんなわたしを引き止めるような、ついさっきの音が響きました。

——そんなんで檢さんを縛ってもおれは嬉しくないし。

わたしの本音を聞けた。そう、穏やかに言ってたサトシ。わたしもこれは、サトシの本音だって感じて聞いてた。

サトシはきっと、わたしがサトシに恋をしたら、喜んで受け入れてくれると思う。でもそうじゃないなら、わたしでないとダメなことはない人。

恋って、何かな。愛は何となくわかるんだけど。

キリと話した以上のこたえはなくて、わたしの意識は暗闇に戻っていきました。

でも最後にそうやって、普段と違うことを考えてたせいかな。冷たい水の中で見えたのは、いつになく温かな夢でした。

玖堂さんの家から、小さな車が走り出しました。運転手の女医さんに道案内をしつつ、橋診療所で院長先生の弟子のソラが、後ろの座席でユウヤと和やかに話をしています。

「烏丸様、お顔が冴えませんよ。何か嫌なことでもあったのでしょうか？」

「空にまでそう見えるの？ それは相当だなあ……あ、ごめん、拗ねないでよ、空」

「いいですいいです、わかっております。どうせ私は空気読めないロボットですから、空のくせにエアリード機能が他機のように充実していませんから」

ユウヤはたまに、診療所の手伝いをしてたから、医師見習いのソラとは仲良しさんです。だから帰りの付添いも断らずに、口調も兄さん達と話す時みたいに砕けてる。

わたしもソラには、色々お世話になったよ。わたしがサツリクの天使から人間になった時、しばらく橘診療所に通ってたし、ソラには人間の魂の気配がするから、喋りやすくして。それはユウヤも気が付いています。

「そうだね……たとえば、診療所に新しい職員が来たとしてさ。その同僚は前科持ちで殺人者だったら、空はどう感じると思う？」

「それは恐ろしい話ですね。とりあえず仲良くしたくはないですね」

「そうだよな……じゃあその人が、子供の頃に戦地に攫われて、殺人者になるように育てられた人だったとしたら？」

「物騒なお話ですね。烏丸様のお住まいの地域では、よくあることなのでしょうか？」

「空のいる街よりは、あるかな。僕はたまたま平和な所に生まれたけれど、それでも人を殺せる方法は教えられてるし」

ソラは院長先生の指示で、異世界にも時々往診に出されています。だからユウヤが、殺伐な話をしても大丈夫な相手。

でもユウヤ、どうしてそんな話をするんだろう。それはまるで、小さい頃に家族から引き離されて、サツリクの天使になったわたしのことみたいで……。

「戦場が人を、特に分別のない子供を破壊に導くことは、地球でもあることですね。私なども破壊機能を持たされているので、他人事ではありません」

そっか。ソラは、戦闘ができるから往診担当だけ。全然見たことはないけど、一応とても強いみたいです。

「しかし私の場合、その機能は制限されております。私の分別でなく、ミストレスが判断すべきことです。なので烏丸さまのお話も、子供本人より周りの大人が悪いかと私は考えます」

「……僕もそう思うよ。でもそれで殺されたヒトが、空の大切な人だったら？」

「大切な人であれば許せませんし、殺されたのが知り合い程度でも困ると思われま。難しい問題ですが、誰にもほとんど、悲しむ誰かがいるのですから……それが烏丸様の悩まれていることでしょうか？」

ユウヤが黙り込んでしまいました。ソラは神妙な顔になって、隣のユウヤを見つめました。

「命を奪い、また奪われる戦場でのことであれば、お互い様だと。そう思うくらいしか、落とし所はなさそうですね」

「……そうだね。僕が戦いに巻き込まれずに済んだのは、その人のお兄さんのおかげだし……たまたま僕が手を汚さなかっただけで、僕にも有り得た話なんだ」

お話しがそこまできた時、車がユウヤの家のマンションについたみたいでした。

車を降りるユウヤはソラに、めったに見せない顔で笑いました。

「ありがとう、空」

うわあ、ユウヤ、ほんとにキレイな顔立ちだなあ。御所でも見せないこの顔はもったいないね。

でもソラは、わたしみたいにほわほわせずに、ユウヤの座ってた席に移動してまで、車の外のユウヤを見上げました。

「お待ち下さい、烏丸様。今のお話は、視点が一つ抜け落ちております」

「——？」

「烏丸様にとって、その方はどんな相手なのでしょう。ただの同僚の殺人者なら、そんな風に悩まされはしないことでしょうか？」

「……——」

帰ろうとしたユウヤが、止まりました。

ソラは何だか、いつにない大人びた声で、わたしを包む深水が今までと違う感じで揺らぎました。

「わたしは『空』です。橘先生に、そう名付けられた理由があります。『霧』と『凧』と、そしてわたしがあればこそ、混沌の水面に白夜を映せるのです」

「え……空……？」

「空がなければ、風なき霧の夜は白夜たり得ません。わたし達をどう用いるべきか、貴男は本当はわかっているはずです」

そう言えば、それはとても空ろで、おかしな幻でした。

わたしの暗闇は揺らいでないのに、何故か届いてくるユウヤ達の光景。ユウヤの家も、知らないでいなきゃ、と思ったから、わたしが観ようと思った夢ではないはずなんです。

逆に言えば、これまでの夢は、わたしが観ようと望んでたもの。今日もこれから、観ないといけない現実^{ユメ}があったから、わたしはすぐに眠りました。

ここにいと、それがわかります。起きてる時には手放してしまう、わたしの本心。

それからはもう、ソラとユウヤの混線は途絶えて、わたしは本来行くはずだった白い部屋に辿り着きました。

今日の夕方、橘診療所の地下だってわかった所。

機械と点滴に繋がれて眠る悪魔さんは、わたしが来ることをわかってたように、体から沢山の管をぶら下げながら立ち上がってました。

「……やっぱり、来たね」

「氷輪水燬」。院長先生がそう言った悪魔さん。

わたしが殺した「水燬」は、魔物だった。でもそこにいるのは、悪魔。それならわたしは、水燬と契約できる……それがわかったことが、今日一番の収穫でした。

魔物と悪魔は、同じ魔性のものでも、ちょっと性質が違うんだ。人間と契約ができるのは悪魔だけで、それは悪魔に、人間の魂と関われる心性があるから。今こうやって、このヒトにわたしがみえてるみたいに。

だからわたしは、アナタは誰？ と、その悪魔の名前を尋ねました。

「水燬——ではない、オレはニセモノ。それは、わかってるよね？」

うん。だからわたしも、ここに来たから。

アナタは多分、水燬を助きたいヒトの一人。水燬と同じ響きの名前を持つから、その体を動かせる悪魔。

名前って、悪魔とか神様とか、高次元の存在にはとても重要なんです。でもわたしの方は名乗るまでもなく、そのヒトはわたしを知っていました。

「……ウツギ・ネコハ。お前がオレを、この体に連れてきたの？」

わたしもどうして、そのヒトがそこにいるかはわかりません。そのヒトも何で、わたしのことを知っているのか、自分でもわからないみたいでした。

昼間の夢では、輸血された直後に目を覚ましてた。あの血に混ざってたヒトかなって、わたしの推理はそれくらいです。

生まれたての悪魔さんは、心の無い白い目をわたしに向けます。

それはわたしから、その命を取り返すために。

「オレは、『氷輪水月』……お前はそれを、望んでしまうの？ ……ウツギ・ネコハ」

最後の門を開くために、冷たい声が問いかけました。門を開けるための水が、ついに満ちていく真っ白な地下室。

わたしはゆっくり、真の名前を告げてくれた悪魔に、契約するための右手を差し出します……。

Target.3 了

☆ details: 橘咲杏

可愛い悪魔使いとの電話を切って、悪魔歴の長い橘咲杏は、今まで話していた玖堂咲姫の意識を眠らせて唸っていた。

「あぁーっ、もぉー！ ネコハちゃんてば、難攻不落過ぎー！」

普段はこんなに、強引な主導権の確保はしない。可愛い悪魔使いの危機が迫っているため、悪魔のはしくれとしては嫌でも起きるしかない。

咲杏と咲姫は、本来生まれたのが咲杏なのだが、悪魔のままでは人外生物の中でも特殊な力を使えず、咲姫という自分を受け入れる必要があった。この体の「心眼」は咲姫でなければ完全には使えず、本当なら消えていたのが咲杏の運命だった。

「サキは私に情報を残す代わりに、自分は侵蝕されちゃってるし、頼みの海竜は何かか行方不明っぽいし……。このままじゃ、本当にネコハちゃん、私に伝話一つもしてこずに、現世退場まっしぐらじゃない！」

咲姫に「自己」を譲ったことで、咲杏は最早、己の体をほとんど動かすことができない。可愛い悪魔使い——猫羽との連絡も、咲杏から取ることは実は難しい。

メールという、後に残るものを使う鷹野花憐の手法を真似て、咲姫当てに手紙を残してはみるのだが、この件では咲姫にも迷いがあるため、結局なかったこととして意識に介入されてしまうのだ。

「そりゃ、カザリがネコハちゃんの体を使うためなら、否応なくラクトもどきも引っ張り出されるだろうけど！ そんなニセモノごときで迷ってるなんて、いい加減諦めが悪いわよ、サキ！」

咲姫から咲杏に与えられた情報は、猫羽を守るように憑けられた霧の精霊の風濤が、猫羽の体を奪いそうになっている事態だ。風濤が何かしたというよりは、猫羽が自分から体を手放してしまう。

精霊としての風濤の契約者は、風濤の双子だった烙人^{ラクト}で、咲姫にとっては自立の術を教えてくれた師になる。咲杏の妹の桃花が死んだ時、妹を守れなかった咲杏は咲姫となって両親と決別したが、すぐに世間を知れるわけもなく、年下でも烙人に沢山助けられた。

その時死んでしまったのは、妹の桃花だけではない。烙人はそもそも、双子の風濤を助けに悪魔の城にやってきたのだ。

桃花は行方不明の咲香を探して、悪魔の城に辿り着いた。烙人とその仲間が同行してのことだが、咲香と風漓を従えていた悪魔は、咲香の力を覚醒させるために妹と風漓を殺す役となったと言っている。

精霊になる前の風漓——咲香と共に悪魔の城にいた友達と共に、混沌の「桃花水」から引き上げたのが、猫羽だった。凄まじい水の力を秘める珠玉に、随分以前に封じられていた猫羽の魂を風漓が見つけたのだ。

「だからカザリもラクトも、本気でネコハの退場を望むわけがないでしょ！ 他にラクトが還る可能性がゼロだからって、迷ってんじゃない、サキ！」

始末が悪いことに、ヒトというものは当然、完全に他者の幸せだけを願えるわけがない。風漓に少しでも、猫羽の体を使いたい心がないかと言われたら、それは嘘になる。

そして烙人も、風漓がこの世に戻れる可能性を消すことを、本気では望めない。契約者である烙人の残滓がなければ、風漓は猫羽の体を使うほどの自我を持ってない。

猫羽の直観は、二人のその迷いを感じ取っている。だから自ら、体を手放そうとしてしまうのだ。薄幸だった風漓と烙人は仕方ないが、冷静であるべき咲姫まで迷っている。「『白夜』ごときに侵蝕されるなんて、古の猫神のくせに信じられない！ むしろ私なら仕方ないけど、私だけ守って自分は手薄ってどーいうことなのよー！」

せっかく猫羽が、無意識でも咲姫に電話してきたのに、あの進展のなさは何たることか。それは咲姫が、猫羽の堅固さに屈したとも言える。何の要因か、猫羽はここ数日だけでも、どんどん再び己を手放す方に傾いている。

六月末にも一度、その危機はあった。その時には風漓に自覚を持ってもらうことで猫羽に体を返すことができたが、今度は完全に、猫羽の魂は自ら出て行こうとしている。

猫羽の直観は、元々広範囲に及ぶ。それが更に、最近は魂があちこちに飛んでいる。鷹野花憐が、「猫羽ちゃんの夢が危ないようです」と言ってきたのでわかった。

何がしかの縁ある場所に飛んでいることは、咲香が悪魔だからわかる。それでもそんなことを続ければ、あの体から完全に猫羽の魂が抜けてしまう。

仕方ないので、鷹野花憐にそうした次第をメールした。借りを作りたくない魔女だが、猫羽を雇い続けたいのであれば、むしろ咲香が感謝されている。けれど鷹野花憐からは、「精霊の件以外に、猫羽ちゃんが揺れる要因が何かあるようです」と返ってきた。

「ラクトとカザリ以外の要因？ それでネコハは、こんなに急に揺らいでるの？」

鷹野花憐も橘咲香も、橘水葵が消えた理由を知らない。水葵の過去を知っている者は少なく、水葵に魔力を与える猫羽の母も知らないことなのだ。

「確かに『白夜』も、何か大きな隙がなければネコハには付け込めないはず。仮にも『桃花水』——桃花が守り続けるネコハちゃんなのに」

咲香ははっきり、六月末の事件の再燃かと思っていた。しかしあれから気になることに、猫羽の中に桃花の影が見え難くなっている。

桃花はその名の通り、「桃花水」を扱うために生まれたような「水の流^{りゅう}」だった。死してからは悪魔の「檢流惟」となり、それは魂が同じでありながら違う心を持った猫羽の母だ。名前が変わるのはそれだけ重い変化でもある。

「桃花としての心」は、「桃花水」に残った。そこに封じられた猫羽の魂をずっと守ってきた。咲香も咲姫も、桃花と直接話すことはできないが、猫羽のことを妹^{トウカ}同然だと思っ

「ネコハちゃんが動揺することって何だろう……何のために魂を差し出そうとしてる？」

ぐぐぐ……と咲香は、これはもう緊急事態だ、と悟った。少なくとも、桃花の影が薄れていることだけでも、いい加減橘の実父に確認しなくてはいけない。玖堂家の養女になってからは、接触を全く持っていない父。

そもそも、「白夜」の情報をくれたのが父だ。何かと猫羽に関する事柄が抜け落ちるとい、おかしい意識への介入が咲姫に多発し始めた頃に、「そう言えばここ、まだ白夜が残ってたから気をつけろよ」という、謎の暑中見舞が送られてきた。「白夜」が実際何であるのか教えてくれたのは、人間界によく来る悪魔の従兄だった。

「ネコハちゃん本人はまた、カレンからつついてもらおうとして……」

気が進まないが、スマホに登録だけはしてあった父に、ラインを叩き込んだ。後で咲姫が気付けば、さぞかし驚くことだろう。

悪魔として誰かに召喚された状況でない限り、今の咲香にはこうした小さな抵抗しかできない。それでも父に関われば、咲姫にも何かの動きはあるはずだ。

気がふれたという母と共謀し、実の娘の咲香を悪魔に売って、妹の犠牲で咲姫が助け出された後には事情を知らないと言った父。いくら悪魔の一家でも酷過ぎる、と咲姫は養子にいくのにためらいは見せなかった。

『「ネコハちゃんとトウカのこと、何を隠しているの？」……これくらいは、いいよね』

「神」としての顔も持つ父は、名もなき悪魔の咲香とは、あまりに格が違う。だから捨てられたのかと思っていたが、桃花への仕打ちを見て誤解は解けた。

「混沌」の管理者たる桃花は、下手をすれば父よりも高位の存在になる。そこから分かたれた流惟にしても、かなり高位な悪魔の名を持っている。

咲香は咲姫に自己を譲ることで、「心眼」という特異な位置に立った。トランプで言えばジョーカーに当たり、反則上等の捨て身が彼女達の武器だ。

「よし！ これだけ下書き残しておけば、サキもルイちゃんに送ってくれるはず！」

誰から喚ばれたわけでもない咲香に、現在できることは全て手を打った。

妹を亡くした時のような、無力な思いは二度としたくない。猫羽さえ望んで喚んでくれたら、全面戦争だ。と、悪魔使いを待ち望む悪魔なのだった。

★ Target.4: 楡猫羽撃沈事件

「お前はそれを、望んでしまうの？ ウツギ・ネコハ」

まだ自分の心を持つ前の、生まれたばかりの悪魔が冷たい目を開きました。

心はわたしが預かってるから。これは、それを返すための契約だから。

「オレが受け入れれば、この体にはネコハの魂が宿る。ネコハが奪った水燬の命が、一緒に還る……魔物の水燬に、心が還る。それは、ウツギ・ネコハの魂を代償に」

悪魔はたとえ、自分が誰かわからなくても、魂がつながる相手がいれば、その相手が知る情報を汲み上げられます。

契約がまだなだけで、わたしとすでにつながる悪魔は、わたしがここに来た理由をそれでわかっています。

でも、ふっと、どうしてつながってるんだろう。その疑問が水底の「私」に浮かんで、わたしは立ち止まりました。暗い水底と透明な川、その境界になる白い部屋の前で。

「アナタは、水燬じゃない……のに、わたしとつながってる？」

「……」

わたしは水燬を殺した人間だから、水燬の命とは切れない縁がある。奪った命が今でも一緒に、水底にずっとあるはずなんです。

でも、このヒトは誰？

どうしてだろう。この悪魔さんは、わたしにとって、大切なヒト。だからこのまま、ここで契約をして、水燬にしてしまっただけはいけない。そんな直観が暗闇に、確かな波紋で表れてきます。

「私」の声が、開かれた水路から溢れ出します。

その彼岸には、行ってはだめ、って。そんなために門を開けたんじゃない、って。

ためらった瞬間、白い部屋は一気に、黒塗りにされて消えてしまいました。

ただ一瞬だけ、どこかほっとしたような、銀色の髪の悪魔さんを残して。

* * *

お休みの朝には、わたしは目覚まし時計をかけたことはありません。
でも今日は、早く起きなくっちゃ。朝から温かいシャワーを浴びるんだ、って、なんと
とか出かける三時間前には目が覚めました。
「.....あれ？ フィオナから、メール.....」
ぼけっとスマホを開いた瞬間、わたしの背中に冷や汗が流れ始めます。

猫羽ちゃんへ
ひょっとして、朝帰りですか？
今からでもお返事、お待ちしておりますよ。
バイトが始まるまでには、是非よろしく。
あと、咲杏さんも伝話しろと言っています。
フィオナ・花憐・鷹野

>フィオナへ
>帰ったらまた連絡するね。
>猫羽

うわっ.....これ、所長、ちょっと怒ってる、絶対.....。
何でわたし、返信しないで寝ちゃったんだろ.....ええと、これより前のメールは所
長、何て言ってたっけ.....。

>気のせいですか？ 貴女も私に、詳しく話をしたくないように感じます。
>夢のこと、なぎさんのこと、何もお話しが進んでいません。
>咲杏さんとは話せましたか？

あー.....そうだ、水葵のこと、さすがに何とかしないと。
どうして帰ってこないんだろう。でも今は先にシャワー、ううん所長への返信、あれそ
の前に、咲杏おねえちゃんに伝話だっけ.....どうしよう、頭がぐるぐるしてきちゃった。
こういう時は、悩まないことからやろう。シャワー浴びよう、ご飯も食べなきゃ。
冷凍庫に確か、水葵が色々入れてくれてたっけ。そう言えば昨日の夕方から何も食べ
てないから、それは頭も回らないよね、うん。

バイトまでもう時間がないから、わたしは急いで、お風呂に飛び込んだのでした。

毎晩わたしは、冷たいところにいるから、朝のシャワーがすごく好きです。

あったかいなあ。幸せだなあ。人間界で一番、シャワーが大好き……。

でも部屋は暑いから、服は着ないで玖堂さんからもらったバスローブを、ボタンで留めてお風呂を出ます。肩が出るワンピースみたいなバスタオル、人間界って面白いね。

とにかく温めボタンを押してください、と水葵が置いてってくれた、冷凍庫のタッパーを電子レンジに入れます。入ってるのは作り置きのおにぎり。

歓迎会の日から、買い物も行ってないや。冷蔵庫にも卵しかないことを確認した時、メールの着信音が鳴りました。わわ、所長？ と思ったら、そこにはびっくり……人間界に来てからは初めての、咲姫おねえちゃんづての母さんのメールが入ってたのでした。

猫羽ちゃん！ 流^る惟ちゃんからのメールだよ！

日本語ちょっと変換ミスしてるかも、わからない所があったら言ってね！

ひょっとして、これ、初めてじゃないかな、向こうの方から連絡が来るの。

どうやるのかわからないけど、いつもはわたしのメールをおねえちゃんが、異世界のPHSに送ってくれるの。心を届けてるだけだよ！ って言ってたっけ。

母さんからのメールの部分は、確かにちょっと、不思議なニホンゴでした。

可愛い猫羽

今日和。元気になっていますか。私は元気です。有難う。貴方は？

私も貴方のように夢を見ます。

私は貴方の願いを知っていますが何も言えません。

私も同じ間違いをしました。しかしあなたは克服しなければなりません。

それでも貴方を救ってほしい。

私は貴方を愛しています。なくさないでください。

愛 流惟

……ううん。意味は、わかるような、わからないような……。

これ、母さんの、生の言葉をききたい……スマホのメール画面を見ると電話ができないから、「私」は部屋に帰ってPHSを持って、おねえちゃんに伝話をかけました。

そうして、久しぶりに咲査おねえちゃんに伝話したこと。わたしは何も考えてませんでした。ニホンゴは変だけど、母さんのメールが嬉しくって。

発信二秒で出た咲査おねえちゃんは、咲姫おねえちゃんの中の悪魔で、同一人物だからごまかされて、伝話しちゃったわたし。それが今日の波乱の第一歩でした。

「きゃー、やったー、サキちゃんやるうー！ さっすが私ー！」

「あ、えっと……あの、サクラおねえちゃん？」

「あ、おはよう、久しぶりねネコハちゃん！ ルイちゃんのメール見た？ ルイちゃん徹夜で考えてくれた内容なのよ、ネコハちゃんのこと凄く心配してるのよ！」

なんだか咲香おねえちゃんも、テンションが高いです。悪魔って普通冷静なんだけど。

でもきいてると、咲香おねえちゃんがうながしたから、母さんはメールを書いたのかな？ 咲香おねえちゃん、どうしてわざわざそんなことをしたんだろう？

「えっと、おねえちゃん……イマニチワとかアルナンウって、なに？」

「それはこんにちとはありがとう！ あー良かったー、再翻訳を工夫して良かったー。私も日本は五年になるけど、何処までやればおかしいか、の方が難しいよね？」

「うん、なんだかよくわからないけど、ありがとう……それでね、母さんが何て言ったのか、ホンヤク前をききたいんだけど……」

喋ってる内に、おねえちゃん、わたしに伝話をさせるためにわざとやったんだってわかりました。悪魔とはいえ、おねえちゃんからそうやって何かしてくるのは珍しいね。

「うん、よく聞いてよね、ネコハちゃん？」

そうして咲香おねえちゃんは、母さんからのメールを読んでもくれます。

猫羽、元気にしてる？

私もあなたのように夢を見るの。

私はあなたの望みを知っているけど、何も言えない。

私も同じ間違いをしたから。でもあなたは乗り越えなければいけない。

それでもあなたには救われてほしい。

愛してる。どうかいなくならないで。

流惟

おねえちゃんの声と、メールの画面を見比べながら。途中で、どうしてか、じわりと涙が出てきちゃいました。

母さん、久しぶり。ほんとに母さんなんだって、今頃自覚したみたいです、わたし。

「……それで、ネコハちゃん。私に何か、話があるんじゃない？」

「……………」

「話したくなければ、今すぐ私と契約しなさい。断るなら縁を切るわよ、私は橘咲香、悪魔として汝との契約を求む！」

咲香おねえちゃんは、悪魔。だから契約して魂が繋がれば、「私」の情報がある程度は読まれちゃいます。PHSを握る「私」は、それがわかっています。

でもなんか、もういいや、って。「私」はこっくり、頷きました。

なんだかすごく、ほっとしちゃった。おねえちゃんの真の名前を受け入れて、「私」の魂におねえちゃんを入り込ませます。

PHSを切れずに黙っていると、五分くらい伝話の向こうで唸ってから、咲香おねえちゃんがやっと喋り始めました。

「そういうこと、か……あのヤロー、なんてものをネコハちゃんに見せるのよ……」

「あのヤローって……院長先生？」

「あのヤローで十分よ、我が父ながら。昔から食えない奴なんだから」

咲香おねえちゃんは玖堂さんの養女だけど、ほんとは院長先生の娘さんです。

それで言うと、わたしも娘になるのかもしれない。おねえちゃんの次の声で、わたしの生まれ……おねえちゃんの大切なヒトを犠牲にした呪いを、改めて思い出します。

「トウカの遺体を残してまで、ネコハちゃんを助けたくせに。同じようにミズキの死体を今まで残して、いったい何を、ネコハちゃんにさせようと言うの？」

ここではっきり、水燬の夢を思い出しました。同時に今の状況もわかりました。

いつも眠るごとに冷たい世界、「桃花水」に包まれるわたし。

それは本来、このカラダが「橘桃花」のものだったから。「桃花水」にずっと閉じ込められてたわたしの魂を、死んだ桃花に遷されたから、今のわたしがいます。

桃花の魂は、母さんの母さん、橘凧の体に遷って楢流惟になった。桃花としての自分の体を渡してでも、「桃花水」の中にいたわたしをこの世に戻すこと。それが悪魔になった魔物、流惟母さんの命がけの願いだったから。

——私も同じ間違いをしたから。

『「桃花水」に適合できるネコハちゃんが、トウカ——水の流に適合したのはわかるけど。ここからミズキに魂を渡せば、ネコハちゃんはミズキの体を使うことはできない」

「……」

「トウカがルイになれた——凧母さんの体を使えるのも、そもそもルイという魔物が、すでにトウカの中にいたから。大昔にルイの元から攫われて、封印されたネコハちゃんを探し続けて、ルイはやっと、ネコハちゃんをこの世に戻せたっていうのに……」

わたしに一つ一つ、言い聞かせるみたいな咲香おねえちゃん。

わたしも当然、魔物から悪魔にまでなった母さんの気持ちはよく知ってます。わたしも封印されてる間、ずっと母さん達に会いたかった。わたしに何かあったら、母さんも父さんも兄さんも悲しむって、それはわかってる。

こうやっておねえちゃんにハッキリ言われるまでは、現実では水燬のことを自覚できなかったけど。

「それでもネコハちゃんは……ミズキの目を覚まさせたいの？」

「……………」

「そこまでの契約になると、ネコハちゃんの魂はほぼ全て、ミズキのものになってしまう。トウカの体も今のように動かせなくなるし、魔物であるミズキを制御できるとも思えない。割に合わない、って、わかってるでしょう？」

それはほとんど、おねえちゃんの言う通りです。わたしも悪魔使いだから、普通に考えたらわかるようなこと。でもそれをまず、考えることそのものをしたくなくて。

頭では何かが、おかしいってわかってるのに、心が言うことをきかない感じ。

「とりあえず今日は、いつも通りバイトに行きなさい。カレンには私から説明しておく」

「おねえちゃん……そんなに動いて大丈夫なの？」

「ネコハちゃんの精霊の力を借りることになるけど、契約してくれたから悪魔として動ける。ネコハは今は、自分の心配をしなさい」

悪魔の咲香おねえちゃんは、本来ならもう消えてたヒト。疲れた、もうやだ、って思ったら消えちゃうんだって。それでも消えないのは、まだ会いたいヒト達がいるから。

その内の二人が、「私」なら合わせてあげられるヒトだと契約してわかって、複雑な気持ちになっちゃいます。

契約したから、今度はおねえちゃんからも伝話するよ、って言われて、その場は一旦PHSを切りました。

まだわたしはバスローブのまま、電子レンジのおにぎりも冷めちゃいました。ひとまず髪にドライヤーを当てると、鏡の中の「私」は、元気がなさそうな紅い目です。

——『私』はほっとしてるのに……わたしはそうじゃないの？

ブラシから流れる紫苑色の髪は、本当はずっと「私」のもの。

昔は黒い髪だったわたしを、悪魔から守るためにその精霊が来てくれたから、わたしの髪は紫苑色になった。わたしには本来扱えない、紫苑色の髪の「私」……。

その精霊は、そもそも「桃花水」からわたしを見つけてくれた水の器^{アジサイのヒト}だから、水底でも実際にはずっと一緒にいるはずで。

鏡の「私」が、わたしをじっと見つめました。こうする以外、「私」はわたしに心配を伝えられないみたいでした。

——お願い。わたしも、サクラと契約して……『私』だけだと、わたしを守り切れない。

さっきの伝話で、悪魔のおねえちゃんと仮に契約したのは「私」。おねえちゃんは気付いてたから、「ネコハちゃんの精霊の力を借りる」って最後に言った。悪魔は人間としか契約できないけど、精霊の「私」が人間のわたしと、近くなってるからできたこと。

おねえちゃんも、背に腹は代えられぬって感じだった。わたしは半分、「私」の言うことがわかってるのに、心がどうしても、うんって言ってくれない、それを自覚します。

——どうしておまえは、そこまで頑なんんだ？

咲香おねえちゃんは、これから院長先生に会いに行くみたいです。ラインで連絡をしたら、「どれの話かわからんから直接来てくれ」って、返ってきたんだって。

ずっと会ってなかった二人なのに、よっぽどだね。それだけ多分、わたしのことを心配してる。それは痛いほどわかってるのに、わたし……。

自分でも正直わかりませんでした。わたしはどうして、みんなに心配をかけてるの？
「それなら今朝、もう、すぐに……水燬と契約すれば良かったのに」

機は多分、熟してる。止められる前にあの手を取れば、誰にも余計な心配はかけなかった。ためらうくらいならやめなきゃ、って頭ではわかっているの。

でもやめるって、はっきり決めることもできない。バイトの受付けの制服を着て、重い気持ちでマンションを出ます。

こうして悩む気持ち、今までずっと、遠ざけてたんだね。それは「私」も、多分同じ。きっと「私」は、わたしが選べず悩んでる理由がわからないんだと思う。

狭苦しいエレベーターが一階について、マンションのガラスの扉を開けた時に、そんなわたし達を見透かす白い声がかげられたのでした。

「——それは、あなたの我が侘だから。悩むのは当たり前だよ」

……え？

声のした方を向くと、入り口の石の壁にもたれて、微笑むツインテールの黒髪の子。
「でもあなたは、そうしたいんでしょう？ 榎猫羽」

屋上で一度すれ違っただけで、わたしに直接会うことは今までなかった女の子。

漣汐ノ香。忘れもしないその姿を持ったヒトが、わたしを待ち受けてました。

「あなた……は……」

「初めまして、榎猫羽。橘水葵の行方が聞きたければ、ちょっとお話ししてくれるかな？」
にこり、と微笑む、夢でしか会ったことのないヒト。

このヒトのことを相談するために、水葵は里帰りしたはずなのに。その笑顔はとても不吉で、嫌な予感がしました。

「……なぎに、何かしたの？」

「ついてきてくれるかな。こんな人間くさい所では、落ち着いて話もできない」

それは畏、と、わたしにも明らかにわかる冷やかな目線。でも水葵のことは心配だから、わたしは黙って頷きました。

そうしてそのヒトが向かったのは、高校に行く途中にある紫陽花の公園。

最近は何故か、来る気になれなかったお気に入りの場所に、今日はすんなり入って木陰のベンチに二人で座りました。

制服みたいな白いツーピースが似合うそのヒトは、見た目は「漣汐ノ香」でした。
「本当は、今朝で決着がつくと思っていたのに。この体を動かすのは疲れるから、あまり直接は会いたくなかったの」

わたしが知ってる「漣汐ノ香」は、パルと一緒に悪魔使いをした頃に、悪魔達の敵側だったヒト。その頃は今と同じ姿の、特殊な人形を使う天使で、キレイな羽があったはずです。でも今は羽のない人形を動かすだけの、よくわからない何かみたい。

「ねえ。なぎは、どうしたの？」

「なぎ。……リタンは元々、私の『力』。だから私に返してもらうのは、自然な成り行きだよ」

そう言うとそのヒトは、ポケットからある物を取り出してわたしに渡しました。

「これ——なぎの、……」

手渡されたのは、水葵にあげたお土産の髪飾り。

——猫羽、すみません……。

僅かなイメージだけが、髪飾りにこもる気配から伝わってきます。水葵がこう残したってことは、言葉通り、このヒトの所に還っちゃったのかな……？

「私達は、あなたの望みも迷いも、わかってるつもりだよ。検猫羽」

「……」

「あなたには償いをしろ、と言うんじゃないの。他でもないあなたが望むことでしょ？」

——水燬を助けてあげること」

単刀直入に、水底での話の続きが始まりました。

もう夢の中でなくてもわたしが自覚できるから、このヒトは現実でも会いに来たんだね。

「償いならば、ためらって当然だよ。あなたの魂があなたの体からなくなれば、悲しむヒトが沢山いるもの」

「……………」

「それでもあなたは、水燬に魂をあげたい。それは償いではなく、あなたの我が儘。私達が強制してることですらないって、あなたは知ってる」

そっか……それはきっと、そのヒトの言う通りでした。

望みだから、迷ってるんだ。するべきことじゃなくて、むしろしない方がいいことなのに、わたしは望んでしまってる。

みんなが心配するし、悲しむのに。それは……わたしの我が儘だよ。

汐ノ香の姿のヒトは、わたしから水葵の髪飾りを受け取ると、ベンチから立ち上がって半分振り返りました。

「私が誰かも、あなたには実際、特に重要じゃないでしょ？」

「……うん」

「私は水燬を助きたい一人。水燬の内であなを待ってる、水月——水面に映された氷の輪、^{かがみ}汐音のように」

「……え？」

シオン……って、誰のことだろう？ この流れだと、水燬のニセモノ？ わたしと契約をしようとした、今朝の悪魔さんのはず……でも、それは誰なの？

朝の夢と同じ疑問を持ったわたしに、汐ノ香のヒトは後ろ手を組んで、鮮やかに軽く笑いました。

「汐音は、世界に遺した私の羽から生まれた、月影の悪魔。私と同じで、この世界にもう居場所がないから、あなたの血を媒介に水燬に移植したの。それがあなたと汐音の、この世界での唯一の繋がり」

「——……」

「だから私のことは、誰にも言わないでね？ この件が終われば私はまた消えて、もうみんなに会うことはできないのに、苦しめるだけだから」

汐ノ香のこと。水葵と今の主の悪魔さんが探してるって、わたしも知ってた。でもその悪魔さんには、言うなってこと。同じ姿と「力」を持つヒトが、今、ここにいるのに。

「私はもう、大切なヒト達には会えない。それでも私がここにいること、あなたは思うかな、椀猫羽」

「……え？」

そこでそのヒトが口にしたことは、きっとわたしが、最後の一線を踏み越えるのに必要な後押しでした。

「あなたはみんなが悲しむ、と迷ってるけど、別にここから、消えてしまうわけじゃない。たとえ水燬に魂を渡しても、玖堂咲姫の内に在る咲香のように、あなた次第で誰かと話をすることもできる。それならそれは——そこまでためらうべき『我が儘』なのかな？」

ここから消えるわけじゃない。わたしは、水燬みたいに死ぬわけじゃない。

それなら一番、優先されるのは誰か。今までみたいに無意識でなく、はっきりここで、わたしは全身で自分の道を悟ります。

「バイトの帰り、またこの公園で待ってる。あなたの答を、その時教えて？」

もう何も言えずに頷いて、公園を後にすることしかできませんでした。

こたえはとっくに、決まっていたこと。それでもひとまず、バイトは行かなきゃだものね。

* * *

事務所の廃ビルにつくと、パルが先に、二階のガレキに座ってました。

そっか、受付見習いだっけ、パル。いつまで日本にいるかはわからないけど、異世界から来て右も左もわからないのに、飲み込みが早くて仕事のできる王子様です。

「やあ、今日も可愛いボクの天使。どうしたの、何だか顔が暗いよ？」

「そうかな。パルこそ、元気？ そろそろ人間界疲れ、出てくる頃じゃない？」

受付側のガレキで隣に座ると、パルの体調不良がよく伝わってきました。

ユウヤよりは体が強いけど、パルの方が人間の血は濃いんだよね。だから何も、大きな「力」は持ってなくて、人間界だとほんとにただの人間と同じ体力。

「君が平気そうにしているのに、ボクが弱音を吐いたら情けないじゃない？」

「うん、わたしは最初、すごくしんどかったよ。今ではだいぶ慣れたけど、バイトを始めた時なんて特に大変だった。パルはえらいね、昔から我慢強いね」

もう赤ちゃんに近い年齢で、生まれてまもなく悪魔に攫われて、悪魔に一度食べられちゃったパル。だから今、男の子の制服を着てるけど、パルのほんとの姿は女のヒトで、パルを食べた悪魔が若返った体です。

男のヒトにしては高い声色。人間としてはそう強くない体力。食べられても心がパルに戻れたのは、パルがわたしと同じで、竜の宝の中に魂がいたからです。

「そうかな、ボクは『こうじやくふう黄雀風』頼りで、何となく何事もやり過ごしてるだけだよ。君の『とうかすい桃花水』の方が、今でもしっくり来そう」

パルのお母さん——女王様は確か、「りゅうせいか流星火」を受け継ぐ人間。

わたしの母さんは「くもいのそら雲居空」を、伯母さんから預けられています。どれも古くから伝わる自然界の大きな「力」で、竜の血をひくヒトだから適合するもの。わたし達二人みたいに、自分の体を失くした存在を、たましい助けてくれた「命」の宝です。

「そうだね。パルは風より水寄りだったね、どっちかというと」

「というより、そうなりたかったよ。ボクはあのまま、君と一緒にいたかった。君がボクの魂でいてくれた頃は、体が女であることも気にならなかったし」

受付バイトは始まっているけど。お客さんが来ないので、昔話に花が咲いちゃいます。

パルは完全に男の子なのに、その状態は不便だろうな。しみりと見つめ返します。

「ボクが普通の男だったら、君のこと、すぐにも王妃として迎えたのにね」

「うーん……この先パルは、女王様にはならないの？」

「いや、王位継承も『いとおおじ黄雀風』も、いとこおじ従叔父に任せるつもりだよ。だから君さえいいなら、ボクのパートナーになってほしかったな」

両足に肘をついたパルが、じっと、笑顔のまま隣のをわたしを見つめます。

でもわたしは、ガレキに両手をついたまま、首を傾げるだけでした。

「……本気じゃないのに、どうして？　パル」

「——何で、そう思うの？」

「だってパルは、ほんとにそれを望むなら、男の人にもなれるよね？」

人間界では、まだ完全には、性別を変える術はないっていうけど。わたし達の故郷なら、そういう魔法は多分あります。悪魔使いのパルならなおさらです。

「ははは。まあ、王にも女王もなりたくないから、この体が都合いいのはあるよね」

「だよ。今は一時だけ、わたしを守りに来てくれたんでしょ？」

パルは結局、今でもあんまりやりたいことがないみたい。それでもパルの国のクーデターの時、矢面に立って守ろうとしたヒトがいるから、一番大事なのはそのヒトだと思う。そもそもわたし、一度パルを裏切った身だし。

でも、片思いなのかな。一番大事なヒトが手に入らないなら、淋しいからもう一度わたしといたい、そんな気配が隠せてません。

「わたしのこと、ごまかせると思った？」

「まさか。君の直観の苦悩を共に味わったのは、多分ぼくくらいなのに」

「わたしの……苦悩？」

そこでパルは、体をこっちに向けます。わたしの括り髪から耳を覆うように右手を当て、おでことおでこをそっと合わせました。

冷たい手は昔とあんまり変わらなくて、薄い赤毛に隠される額から、今までよりも強い気持ちが伝わってきます。

「誰より純粋で透明だった、ぼくの友達。君の手を血で汚したのは、ぼくに責任がある」

「……—」

「君が殺戮など望んでいない、とぼくはわかってたのに。君に悪魔を憑けたのは、他ならぬぼくの手配だったんだから」

パルはそこで、わたしが水燬を殺した時を思い出してました。

パルにとって、ユウヤは沢山襲った誰かの一人だけど、水燬だけは他の悪魔の手伝いでなく、わたしがパルの目の前で殺したヒト。

だからそれは、パルの感傷。わたしはパルがいなくても、「桃花水」に封じられたヒト殺しで、サツリクの天使だった……それはパルも知ってるはずなのに。

「遅かったんだよ。君がヒトを殺してきた理由に、あの頃には気が付けなかった」

「……え？」

「ぼくは君が、殺戮をするのは当たり前だと思ってしまった。そうでなければ、君にヒト殺しはさせなかった……ただ淋しくて、悪魔に可愛がってもらおうとしたぼくのために、君は必死で、悪魔達の言うことをきいていたよね」

パルはほんとに、申し訳なく思ってるみたい。でもそれは、わたしには違います。

「だって、パル……それがわたしの、意志だったでしょ？」

淋しかったのは、わたしも同じ。そしてパルの望みを叶えて、悪魔達のために動きたい、と思ったのもわたし。

強制されたわけじゃなかった。そうしたい、って、願ってたのはわたしなのに。

「だからこそ、だよ。子供だったとはいえ、それでもぼくは——……」

昔とは違う、薄くて澄んだ青い目が潤みます。

変わってしまったわたしの紅い目を、パルがまっすぐ、間近で捉えます。

これはちょっと、ずるいよ……パル。

今のパルは、心からわたしのことを気にかけてて、そして……わたしを心配するまっすぐな想いで、わたしに働きかけようとする。

「.....わたしを、洗脳しちゃうの？ パル」

元々は、パルを攫った悪魔ヒトの女が持ってた力。ほとんど人間のパルが唯一、「黄雀風」以外に手に入れた特殊能力。

どうしてそれを今、わたしに使おうとするんだろう？ そこには全く悪意がないから、抵抗する思いも起きなくて、わたしはそのまま目が離せなくなりました。

撫でるような右手が、するりと首から肩に降りて。ふ、と微かな吐息を感じました。

このまま力を受け入れたら、どうなるのかな。パルと一つだったあの頃に戻る？

回らない頭でぼうっと青い目を見つめていたら、今度は確かにふう、と息をついて、パルはわたしの腕まで滑らせた手を放しました。

「まいったな。ここで彼にしてやられるとは、遠い仇を打たれた気分」

「.....？」

「そして二重にまいった、これは。君は本当に、誰かが君の魂を奪おうとする時、抵抗しようとはしないんだね.....」

下ろした右手をもう一度、パルはわたしの括り髪に当てました。蜜柑色のリボンで結ばれた付け根に。

すると、静電気が走ったように手がぼちっとして、それ以上わたしには触れられないみたいに、近付けた顔も離して座り直したパルでした。

「.....ダメ元できくけど。今の、やり直したいから、そのリボン外してくれって言ったら、さすがに断るよね？」

あ、そっか。ツインテールにしたわたしの紫苑色の髪を、日本人みたく黒髪に見せてくれてるはずのリボンは、水葵の主の悪魔さんが魔法をかけてくれてます。

そういう偽装だけじゃなくて、洗脳対策や魔除け効果も、一緒につけてくれたみたい。昔にパルとわたしの契約に拘束されて、苦労した悪魔さんだもんね。

魔法のリボンをくれた悪魔さんに感謝しつつ、わたしは苦笑いをします。

「.....自分から外すのは、やっぱり無理かなあ。わたしもあの時裏切っちゃったから、パルに騙されるならいいけど、なぎとかには怒られちゃいそう」

「言うと思ったよ。不意打ちしておいてなんだけど、その抵抗をもうちょっと早く見せてほしかったな。ぼくだから受け入れてくれるっていうなら、歓迎だけど」

パルは今頃、ちょっと恥ずかしくなったように、頬杖をついてそっぽを向いちゃいました。悪魔使いにはハッターも大事だから、きっと何かの理由で思い切ったんだろうな。

「.....タイムアウトかな。君をどうしようと思ったのか、もう意識できない」

そのぼやきをこぼした時だけ、パルの髪が一瞬黒く見えました。

わたしと繋がる悪魔使い。その本当の姿が、まるで何かに暴かれてしまったみたいに。

それからしばらくして、お客さんが来たり、多分橋診療所に行った咲香おねえちゃんからすごく長いメールが来たりで、バイトの終わりまでばたばたしてました。

ネコハちゃん、よくきいてね？

今何が起こってるか、異状に気付けるのはどうやら私とネコハちゃんだけ。バカ父は「白夜」の仕業っていうけど、それは「忘却」の力を司るという、古い「川の神」の別名なの。凧母さんが大昔に封印したらしいのに、どうしてそんな奴がここにいるかはわからないけど、ネコハちゃんの魂を狙ってるみたい。ネコハちゃんに関わる人達の中から、ネコハちゃんの危機だけが忘れさせられてる。

パルシィは元々洗脳的能力があるし、サキがちょっと外装を加えてるから意識に介入されるのが他の人より遅いけど、それでもネコハちゃんを守り切るのは難しいって。

トウカに守られたネコハちゃんか、サキに守られた私しか、「白夜」には対抗できない。(バカ父はもちろん信用できない！)

ひとまず対策打てるまでは、うちで一緒に生活しましょ。今日のバイトが終わったら迎えに行くから、事務所で待っててね。

ざっと読み終わって、なるほど……と、現状をやっと納得しました。

汐ノ香の姿をしたあのヒトが、きっと「白夜」だったんだね。水燬のため、って言うけど、魔物の水燬とあのヒトにはどんな関係があったんだろう。

それを何も知らないままで、わたしはこたえを出してほんとにいいのかな？

わたし達の意識に介入してたのが、「忘却」という力。

メールではあんなに色々言ってきたのに、相談所にいる所長が、直接何かを言いに来る気配はないし。ユウヤも屋上で、汐ノ香のヒトと話をしたことを覚えてなかった。パルももう、わたしに何かしようと思ってなくて。そういう「力」なんだ、つまり。

これから咲香おねえちゃんと一緒にいれば、わたしは多分もう忘れません。あのヒトの目的が何なのか、多分探偵として調べるべき事件を。

「じゃあ……今日が確かに、タイムリミット、だね」

「——？」

白夜のヒトは、まず、どうやってわたし達の意識に介入してたんだろう。メールや貼り紙を消すような、現実にある物に何かをすることはできなくて、わたしに関する記憶をごく一部だけ、わたしの周りのみんなはいじられてる。

一部だけってことは、わたしの存在を全部忘れさせることは、多分できないんだ。本当にわたしを狙ってるなら、その方が確実にはずだから。さらに言えば、わたしに関する記憶としない記憶、みんなの心の動きを見分けて、リアルタイムで介入できるのは何故？

「そばにいらなくても、『忘却の力』をふるえる……それは、わたしみたいに気配を探ったり、遠くから心を読む力に近いよね、そんなの……」

「——？ さっきからどうしたんだい？」

悩み過ぎて、思わず呟いちゃってました。お客さんを玄関まで送ってきたパルが、不思議そうに二階に帰ってきます。

パルは他の人より、介入されるのが遅いって、メールにさっき書いてあったよね。試しにちょっと相談してみます。

「パルは、『白夜』って神様のことは、知らないよね……？」

「——ああ、なるほど。それだ、それ。ぼくがここにいるのはそのためなのに、また忘れさせられてしまったね」

パルの目がちょっと、怒ったみたいに鋭くなりました。

あれ、パルはこれ、ひょっとして、「白夜」にもものすごい心当たりがある気配？

「君にはあまり教えたくなかったんだけど、何かあるなら仕方ない。今から話すこと、それもぼくは話したことをおそらく忘れるから、何度でも聞き返して思い出させてね」

「……——」

「ぼく達が悪魔に従ってた頃、漣汐ノ香という敵がいたよね？ ぼく達が契約して拘束した翼の悪魔——海竜の今の主を、助けようとした人形の天使が、漣」

そうしてパルは、わたしが忘れたかったあの頃の禍を、ここで全て明るみに出します。

「翼の悪魔も漣汐ノ香も、ぼく達が殺した水燬を可愛がってた。翼の悪魔はそもそも水燬を助けるために、ぼく達と契約をすることになったからね」

それはわたしも覚えてること。でもそこから「白夜」のヒトと、どう繋がるのかな？

「君の兄さんは君を取り戻すために、ぼく達を悪魔側で守る翼の悪魔を一度殺した。その時漣汐ノ香は、自分の天使の羽を翼の悪魔に移植して蘇生させて、羽を失った漣汐ノ香自身は消えてしまった。そこまでは君も覚えてるかな？」

それは、思い出したくなかったことだけど、こくりと頷きます。

ほんとの汐ノ香は、そうやって、水燬を助けようとした悪魔さんのためになくなっちゃった。でも、汐ノ香の羽を受け取った悪魔さんは、目を覚ましても兄さんを恨まなかった……むしろ、殺された時に兄さんに奪われた翼の一部で、その後の兄さんを助けてくれました。失くした翼と一緒に心が薄れて、汐ノ香に会えなくなった魂は静かで、まるで壊れてしまったみたいで。

今でもわたしに、偽装と魔除けのリボンをくれたり、汐ノ香の代わりに番人をして天国から出られなかったりと、いっぱい迷惑をかけてる悪魔さんのこと。

「翼の悪魔と漣汐ノ香はね。ぼく達と会うより大分前に、封印が解けた白夜に対して、もう一度封印するために戦ってるんだ」

「——え」

「翼の悪魔と契約した時、ぼくは彼と性質が近いから、彼の記憶をいくらか観たんだ。白夜のような『神』は普通殺せなくて、拮抗できる高位な海竜を持つ漣汐ノ香の内に、白夜は再び封印された。でも漣汐ノ香が羽を失い、海竜も手放したらどうなると思う？」

「……！」

それでやっと、水燬と汐ノ香と白夜、その三つがわたしの中で繋がりました。

「白夜は、封印されてた汐ノ香の体——残された人形と力を奪った？」

「それが、漣汐ノ香が消えた真相。何故今頃、白夜が汐ノ香の未練の水燬を思い出したかは知らないけど、君に関わるならそれ以外の縁は考えられない。君の周囲に白夜の力が現れたときいて、ぼくはここに呼ばれたんだ」

白夜のことを知ってるパルを呼んだのは、咲姫おねえちゃん。おねえちゃんも白夜に記憶を消されてしまってるけど、最初は誰より早く白夜に気付いて、手を打ってくれてたんだね。汐ノ香に最後に関わったのがわたしとパルだから、白夜の痕跡を追って。

「咲姫おねえちゃんは、何処で白夜と関わってるの？ 凧お母さんが白夜を昔、封印したことに関係してるの？」

「その通りで、始末の悪いことに、白夜は夢を通してヒトに介入する力がある、と咲姫は言ってた。だから、白夜という名前を持つてると」

夢を通して。流惟母さんにも、その母さんの凧お母さんにも、夢で過去や未来を視る感覚があります。そして咲姫おねえちゃんには、ヒトが持つ力や心がわかる心眼がある。

夜の夢や白昼夢を視て、ヒトの記憶を真っ白にしてしまう白夜の夢は、昔に関わった凧お母さんから流れてしまった力、というのが、咲姫おねえちゃんの視立てみたいです。

「咲姫が言う、その介入力の別名は『^{そら}空』。白夜はヒトの日常の空夢にまで侵入して、忘却の力を発揮できる」

「——」

何かが今、わたしの中で、音をたててはっきりつながりました。

——わたしは『空』です。そう名付けられた理由があります。『霧』と『凧』とわたしがあればこそ、混沌の水面に白夜を映せるのです。

バカ父はもちろん信用できない！ って、メールに書いた咲香おねえちゃん。ソラもキリも、そしてナギも、橘診療所全体が白夜の後ろ立て？

水燬をずっと、地下室で保護してることも、そう考えれば納得がいきます。

——あなたはみんなが悲しむ、と迷ってるけど、消えてしまうわけじゃない。

わたしを守りたい、と思ってくれるヒト達。その心を白夜に忘れさせて、診療所のみんなは、水燬を助けさせたい？ それだと全て、辻褄が合ってしまいます。

もしもそうなら、咲姫おねえちゃんと、橘診療所を敵対させてしまう。

母さんは悲しむだろうけど、凧お母さんの差し金だったら、きっと文句は言えない。ソラから付き人さんの「凧」の名前が出て来たのは、絶対に偶然じゃない。

頭がちょっと、くらっとしました。

咲杏おねえちゃんが今回、かなり強引にわたしに関わってきた理由もわかった。忘れさせられる前の咲姫おねえちゃんほど、事の詳細に気付いてるかはわからないけど、昔に悪魔に引き渡された咲杏おねえちゃんにとって、橘診療所は自分を見捨てた場所。

だからわたしにも、何をするかわからない、って心配してるんだ。咲姫おねえちゃんは咲杏おねえちゃんほど家がキライじゃないから、中立でいることしかできないし。

「そっか.....ありがと、パル。何となく、今起きてることが、大体わかったよ」

「そう？ 白夜が君に、どう近付いてるかわからないけど、どうか油断だけはしないで」

心配そうなパルの後ろで、咲杏おねえちゃんの重い怒り。全面戦争だ、という声が聞こえた気がしました。

これから多分、しばらくしたら、パルはこの話をしたことを忘れる。それが確認できたら、わたしはもう、身の振り方は決めてました。

「.....ごめんね。ありがと、サクラおねえちゃん」

本当は、消えた方が良い悪魔。そう言われてきた咲杏おねえちゃんだから、今きっと、唯一わたしの味方をしてしてくれてる。

所長も、橘診療所に借りはないからわたしを守ろうとしてくれた。それで十分です。

バイトの最後の方で、パルにちょっと無理をお願いして、わたしはいつもより早く事務所から出ました。咲杏おねえちゃんがわたしを、迎えに来てしまう前に。

「大丈夫だよ。『私』ならきっと、この先も何とかなるから」

夏が終わったばかりの夜は、まだほのかに明るいままで。相談所の灰色の廃ビルが、何だか夕闇に消えそうに見えて。ふるふる、と首を振って、ぺこっと一度頭を下げて、慣れ親しんだバイト先に背中を向けました。

「.....わたしが、自分で闘わないとね」

今日は荷物がほとんどなくて、ポケットに入れたスマホからも、大事なものをすぐに取り出せるようにセットしました。

小さく深く、息を吸います。そのまま、完全に落ちてく夕陽と一緒に、約束の公園にわたしは向かいます――

* * *

暗い所が、わたしはすごく嫌いです。

太陽がないだけの、夜の暗さはいいの。でも、何かに閉じ込められた真っ暗な所は、水底で見る夢を思い出すから.....。

「.....見たくないことは.....わたし、観たくはなかったな.....」

気が付けばわたしは、不思議な霞^{かすみ}の公園についてました。

霧よりも冷たい白い空気が、ひんやりとします。周りの木の葉にも霜が降りてます。

季節が違うから、もう紫陽花は咲いてません。昼間のベンチに白夜のヒトはいなくて、わたしはほとんど本能的に、雑木林に足を向けます。

「わたしがわたしであること、って……何処までが、わたしの望み？」

林の中にぽつんと隠れる、和風の休憩所に向かっているわたし。

そのわたしがかつて、本当は聞くはずだった声が、今頃聞こえた気がしました。

——どうしてここに来たの、サツリクの天使さん？

いつかにもここに来て、それからわたしは、わたしでなくなったって。声はわたしに、それは本当にわたしの望みか、って何度も尋ねてきます。

——あなた、自分が誰か、本当にわかってる？

その時にわたしは、精一杯の心でこたえたとと思う。

わたしの望みなら、何になっても、それは結局私じゃないの？ 　って。

——あなたは……自分でわかっていなくても、それを望まずにはいられないのね。

それはギマンだ、と、声はとても悲しそうでした。

あなたは、自分に嘘をついてまでも守るのね、って。

その時、多分、わたしはわかりたくなかったんだ。

だって、その意味をわかってしまえば、ためらいの気持ちが生まれてくるから。

——そろそろ種明かしをしちゃおうか。この、有り得なかった世界の夢を。

今の世界は、何かが変わって。ほんとはきっと、随分前からわたしは感じてました。

いっぱい幸せがありました。幸せ過ぎて、おかしいくらいに。

わたしはヒト殺しなのに、みんなが大事に守ってくれた。こんなことは、普通じゃないって……いつかこの夢は覚めるって、何処かでわかってました。

——猫羽は、幸せにならなければいけませんよ。

ここは、有り得なかった世界。

わたしが一番目を背けたのは、その確信です。

「知らない間に、誰かがいなくなって……知らない間に、誰かが救われてる」

休憩所の中に、白夜のヒトが座って待つのが見えました。ふっと、バイトの面接の時の所長を思い出しました。

——猫羽ちゃん。この世界は平和でしょう？

うん、わたしもそう思うよ。色んなことが都合良過ぎて、でもみんなが幸せそうだから、観て見ぬふりをしてきたんだ。

——平和とは、目に見えないものにも支えられているんですよ。時には、いなくなった方が良いものの退場によっても。

大分前に、世界から消えてしまった汐ノ香。今でも汐ノ香を探してるのに、誰も恨まなかった翼の悪魔さん。

「いなくなった方が良いもの」。それが自分になった時、どれだけのヒトがそうできるんだろう？ わたしはここまで、ためらい続けてきたんだと思う。

だって、「いなくなった方が良いもの」って、人間には決められないよ。災いだと思っただけなのに、そうじゃないことも絶対にある。

今でもこたえは、わからないけど。今夜はわたし、自分の意志でここに来ました。正解じゃないかもしれないけど、できることがまだ、ここにはあるから。

真っ白な霞に囲まれた、肌寒い休憩所。昼のベンチにいた白夜のヒトは、わたしが着いたのを見て、音もなく立ち上がりました。

「待ってたよ、榎猫羽。橘咲香を振り切ってまで、ここに来たということは——それが、あなたの答だよね？」

「.....」

「私の正体のことも、あなたは知った。私——白夜はね、ここ以外では消滅させられてしまふ、行き場のない運命なんだ。この有り得なかった世界だけが、白夜と汐ノ香、そして水燬を存在させてくれる」

わたしは多分、白夜のヒトの言うこと、ほとんど理解はできてないと思う。

でも今、白夜が言った以外のヒトも、色んなヒトがこの世界では生きられている。家族になれたり、出会えたりしてるんだって、夢の何処かでわかってました。

だからわたしは、黙って、ずっと——

所長からもらった、幻想を斬る鎌。「桃花水」を組み込んだわたしの武器を、スマホの画面からなぞって、霞の中で取り出します。

わたしが幻想の鎌を携えたのを見て、白夜のヒトは心から嬉しそうに、夜の中でも白んだ顔で微笑みました。

「……そう、その通りだよ。それが答で、あなたは間違っていない」

「……………」

「私もこの世界を、大切にしたいの。たとえそれが、有り得なかった夢でも」

幻想の鎌を持ったわたし。だからきっと、選択肢があったと思う。

みんなの意識に介入する「忘却」、白夜のヒトと、ここで戦って幻想を断つのか。

それとも、魂を失くせばどうなるかわからない、わたしの不安と闘うことか。

「ありがとう、楡猫羽。あなたの消える、この世界を選んでくれて」

わたしはずっと、何も言えずに。幻想の鎌をそっと、白夜のヒトに差し出しました。

刃の核には、「桃花水」が納まる大切な鎌。わたしの魂の実際のありかで、夜毎に必ず還る場所である混沌の「桃花水」。

身を守るための最大の武器を、自分から手放したわたしを、いつもの水底よりも冷たい霞が包み始めます。

幻想の鎌を手にした白夜のヒトは、慣れない手つきで振り上げると、休憩所^{くう}の空を斬るように斜めに振り下ろしました。

「——」

その瞬間、休憩所の四隅に貼られてた小さなお札が、大きな術を破られたように真っ白に燃え上がりました。

わたしはまず、お札があることすらも気付いてなかった。わたしに気付かせないよう、貼られたお札だった。その意味を考えられる前に、冷たい何かはわたしの芯を貫きます。

「——、ユウヤ……」

お札が灰になっていきます。それと同時に、わたしの意識も遠くなります。

これ、ユウヤ、怒るだろうな……って。冷たい雪原で眠るみたいに、何も考えられなくなった心は、あの時の微かな笑顔だけを、最後に思い出します。

——僕は別に、貴女のためにここにいるわけじゃありませんから。

それはきっと、この有り得ない世界の中で、特別おかしかったものの一つ。

いつもわたしには無愛想なのに、心配するな、って笑ってくれた。その時ユウヤの、裾を思わず掴んだわたしを、そっと離してくれた手が温かかった。

橘診療所の地下から上がる時にも、わたしの手を引っぱってくれた。わたしが泣いていることを、心から院長先生に怒ってた小さな後ろ姿。

「ごめん——……ユウ、ヤ……」

体の意識がブラックアウトすると同時に、わたしは妙に冷静に、気付けば水底から外の世界を感じてました。

ここからはいつでも、もうあの白い部屋に行ける。けれどそれは、別に急ぐこともないものって、なんだか気持ちが白くなってます。

休憩所のコンクリートの床で、崩れ落ちてしまったわたしを、白夜のヒトがしゃがんで見守ってました。

「……どうして？ 早く猫羽の体を起こさない、風漓」

白夜のヒトは、幻想の鎌を置いて、倒れるわたしの背中に手を当てて顔をしかめます。

「いないの、風漓？ 何処にいったの——あなたに他に、依り代があるというの？」

なんだか多分、わたしが倒れ続けていることが、白夜のヒトには想定外みたい。

わたしにはそれが、かざりというヒト——わたしの中にいる霧の精霊のおねえちゃんが、白夜のヒトに隠し切ったこと、とすぐにわかりました。

前の夢の時から、精霊のおねえちゃんは、白夜のヒトにやせ我慢って言われて、それでも何かを言い争ってた。

おねえちゃんはこの、不思議な紫陽花の公園みたいに、掴み所がない霧の精霊。夜に消える霧のように、自分自身を騙すことが上手いヒトです。

だからきっと、おねえちゃん自身も意識しないままわたしから出ることで、白夜のヒトの介入から逃れたのかな。

——目を背けることこそが、貴女だから。

精霊のおねえちゃん。今何処にいるのかは、わたしにはわかります。

そしてそれが、わたしの選択に対する、おねえちゃんのこたえなんだということも。

「あなたまでこの体を放置すれば、生き物としての火が今度こそ消えてしまう。せっかく与えられた最後のチャンスなのに、風漓はそれでもいいの？」

そうなんだ。このまま誰も、わたしの体にはないと、多分死んじゃう。白夜のヒトはそう言ってるんだ。だから白夜のヒトも困ってるみたい。そうだよ、わたしを殺すことが目的じゃないものね。

わたしもさすがに、体の方が死んじゃったら困るね？ せっかく空いてるんだから、おねえちゃんが使えらるなら、使ってくれたらいいのに……。

わたしと「私」の、選択のずれ。

朝に咲香おねえちゃんと契約した時、すでに心を決めてた「私」が、ここで大きな賭けに出たんだ、とようやくわかりました。

「意地でも猫羽に、この体に還ってこい、と。それが、貴女の答なのね……風漓」

それから白夜のヒトは立ち上がると、幻想の鎌を持って小さい背中を向けました。
休憩所に誰かが近付いてきてる。白夜のヒトの人形の体で、倒れるわたしを連れてく
のは無理だから、一人で何処かに消えてしまいました。

暗い水底にいるわたし。観えるのは、わたしの魂が飛んでいける場所。
何かのつながりや縁が強いところだけ、わたしはここから気配を感じられます。今そ
こで起きてることか、それとも本当は、すでに感じ取ってた過去の出来事を。

——その夢の見方は危険です。それでなくともあなたの直観は広範囲なのに、それでは
ますます、あなたの魂が拡散してしまう。

とりあえずわたし、白夜のヒトが持つ鎌の「桃花水」が本拠だけど、閉じてたはずの
混沌の水は、今は色んなところに流れてるみたい。暗くても外を感じることができるの
は、そういうことなんだと思う。

そして一度流れ出したら、その路を今度は変えることができない。今まで「桃花水」の
内で循環を続けて、多くの可能性を秘めてた水流は、雪解けと共に一つの運河を形作っ
たことをわたしは知ります。

ここはもう、有り得なかった世界じゃない。
有り得てほしかった夢の続きが、幻を超えて産声をあげた。
それは同時に、この世界のために消えた誰かが、ほんとに消えてしまった瞬間で……。

——兄さん……ごめん、なさい……。

これだけ色んなところを一気に観るのは、負担がすごく大きいみたい。わたしの意識
はそこで途切れて、外の現実から水底の夢に堕ちちゃいました。

これから始まる、新しい世界。最後の水門が開くのをゆっくりと待ちます。
その先の未来がわたしには、真っ暗な夜だけだったとしても。

Target.4 了

☆ details: 夜葩風瀉

椋猫羽を送った帰りに、途上の公園に寄りたい、と言うと、生まれた時から主^{あるじ}である玖堂里史が嬉しそうに笑った。

「霧、最近ほんっと積極的だよな。母さんも理由がわからないって言ってたけど、おれは霧が、人間みたいになっていくと嬉しいや」

「霧」は、玖堂里史の母が造った機械人形だ。里史に仕え、守るための召使であり、モチーフの狐のように用心深く賢く設定されている。運動能力も高い方で、野球部の里史とは小さい頃からボール遊びをよくしていた。

それらは全て、プログラムされた行動だったが、里史の言う通り、このところプログラム外の動きをし始めたのは、「霧」自身も自己解析ができないでいた。

ところが同じ召使機械の凧に、ひっそりおかしなことを言われてから、ますます「霧」の行動範囲は広がり始めた。

「今だけあたしが手伝ってあげる、キリちゃん。本当はこんなに急に、依り代を動かすのはあなたには無理だけど、しばらくは好きになさい？ 夜葩風瀉^{よひらかざり}」

夜葩風瀉。凧にそう呼ばれた瞬間、機械である「霧」の中に、「風瀉という自意識」が生まれた。大元の水の器に夜の霧を満たした、曖昧な己。

けれどこれは、誰にも隠さなければいけない。何故かそう感じて、「風瀉」がそうであったように、その名前をもう一度無意識に沈めた。それでもそこからの行動は、ほとんどおそらく「霧のプログラム」でなく、「風瀉」が取らせた動きだった。

里史と共に、梅雨には紫陽花が綺麗な公園に立ち寄る。雲もないのに、うっすら白い霧が出ていた。不思議そうな里史と共に、林の奥にある和風の休憩所まで行く。

「霧、こんな所知ってたんだな。にしてもなんだろ、あの四隅に貼ってあるお札？」

「.....あれは、神橋^{しんきょう}の封印呪符でございます。ヒトの世と神世をつなぐ橋を塞ぎます」

「え、よくわかんないけどマジで？ 何処でそんなこと調べたんだよ？」

こうした会話に使っている言葉は、現在ではほとんど勝手に出てくるものだ。出典は「霧」にはわからないが、「風瀉」は魔術も呪術も、一通り知っている博識だった。知識だけで使うことはできなかったが、そうした術式の補助具を造ったのが生前の風瀉で、意識せずともその能を反映できることこそ、「霧」の名の意味とも言えた。

境界も濃度も曖昧な霧。水の器から迷い出て、風にしみこむ薄い水の意で「風瀉」はつけられた。「風」にはそもそも「霊」の意があり、霧の精霊である彼女を表す名だ。

「霧って自覚があるのかなのか、よくわかんないよなー。何でここに来たのかきいても、何かわからなさそーだもんな」

里史の言う通り、今でも「霧」はわかっていないだろう。何となく畳のベンチに座り、里史と休憩しながら呪符を見上げている。

しかし風瀆の方は、この公園に在る時には己を強く知覚できる。神橋の封印呪符が貼られるような神域と、風瀆の相性が良いらしい。それは最早、「神魔」の領域の精霊だった。

以前にここで、風瀆は呪符を貼った者に一度祓われている。本来は椀猫羽に憑く霧の精霊は、力が強まったせいで猫羽の体を奪ってしまった。祓われた後はなるべく自我を閉じていたはずなのに、気が付けばこうして「霧」に影響を与えていた。

「……でも、これがあれば、同じことにはなりませんよね」

「——？」

願うような思いが口に出たこと。それも自覚はしていない。ただ、休憩所の呪符を貼った烏丸悠夜への、感謝だけが浮かんだ。

公園にあった、他の結界は破られてしまっている。ここでは特に、風瀆の影響を受ける猫羽を遠ざける結界だった。残っているのはこの場の呪符だけだ。

自覚できないままで、風瀆は思う。こうして風瀆に自我が戻ってしまったから、おそらく双子の烙人は短命になった。元の精霊を、猫羽より以前に維持していたのが烙人で、精霊は本来自我がない自然の化生なのに、意識を与えることは烙人に大きな負担をかけた。

それで命を分けることになっても、烙人は精霊が持った霧の自我の存続を願った。その理由はただ、一人ぼっちが嫌だったために。

双子である風瀆が死んで、烙人は天涯孤独になった。だから己の持つ泉の精霊を風瀆——霧にしてでも、風瀆の魂をこの世に留めた。烙人のあの淋しさは、烏丸悠夜に似ている。人並み外れて敏い感性を持つが故に、他者を信じられないからこそ、心を許せる誰かを渴望している。

風瀆の代わりに救った相手が、橘咲杏だ。烙人は咲杏の妹を好きだったが、想いは伝えられていなかった。素直でない、という次元を乗り越えて、あまりに淋しさが大きいために、相手に迂闊に背負わせることができないのだ。

「里史様は……烏丸様のことは、どう思われますか」

「烏丸先輩？ 何か結構脆そうだから、優しい椀さんとはお似合いだな、って思うけど？」

「霧」から見ると、里史は、「自分を好きになってくれる人と付き合いたい」人間だ。生来優しく、誰にも気さくに接するが、アプローチをかけても脈がなければ諦めが良い。その意味では控えめな椀猫羽とは相性が悪い。

「でも椀さん、めっちゃ笑顔なの自分で気付いてないし、烏丸先輩はしがらみが多そうだし。おれも家が普通と違うから、烏丸先輩が引き気味なのはわかる気がする」

「……」

「それならおれも、ワンチャンあるかな？ 大病する以外の方法でさあ」

「……そうでございますね、里史様。椀様は本当に鈍いお方なので、おそらく先に、既成事実を作られるのが良いかと存じます」

「だから霧、発想が飛び過ぎで怖いって!? 頼むから人前ではやめてくれな!？」

仕える里史には、何でも正直な言葉を言うのが「霧」だ。理由があれば、案外簡単に猫羽は落ちる、と風漓は冷静に見込んでいる。

実際問題、猫羽は心と頭——魂の繋がりが弱く、心が生む感情と、魂がもたらす理性が離れている。笑顔や涙といった心が体に現れていても、魂は自覚し切れていない。

そうした者には、体の存在感を魂に強く知覚させるのが有効なことがある。烙人が無理をし過ぎる時には、風漓はあえて烙人に痛みを与え、その行動を抑制していた。

こうして、色々な心が浮かんできても、それらはすぐに夜の霧に消える。

霧の精霊に風漓の名をつけた橘桃花は、その意味を「欺瞞」だと言った。

——目を背けることこそが、貴女だから。

猫羽のように、心と魂のつながりが弱いわけではない。意識することもなく、心を押し込められる才能。それでいて思考はできる心。

おそらく生前に、魂に多大な負荷を受けてから風漓はそうなった。烙人の内で霧の精霊となって以後は、烙人がある悪魔に出会うまでは、こんな自我は芽生えなかった。

生前より少し大人になった今の自我の始まりは、三カ月だけ烙人の弟子になった、翼の悪魔への憧れだった。その頃は悪魔を討伐しようと付き纏っていた天使の汐ノ香も、風漓は烙人の目を通して知っていた。

「帰りましょう、里史様。遅くなってしまいました」

「ん？ 霧が満足ならそれでいーよ。また何でも遠慮なく言えよ！」

翼の悪魔と汐ノ香は、後に互いを最も大事に思う間柄になったので、風漓が関与できる余地はなかった。それでも何故か今、風漓は猫羽の内で汐ノ香の残骸の接触を受け、そして風漓が「霧」に影響を与えている時には、僅かに翼の悪魔の気配が訪れる。

それが「霧」の機体内に保存された、猫羽と汐音という悪魔の血から、とは知る由もない。わかるのはこうして、烙人や誰かを想う心こそ、風漓に自我を与えることだ。

「.....烏丸様も、椀様も。もっと本能に忠実になればよろしいのでございます」

風漓も淋しい。それだけは決して拭えない心で、会えるものならもう一度、烙人に会いたい。今の宿主である猫羽とも関わりたい。しかし精霊の状態では自我を育てれば、おそらく猫羽の命も削る。それどころか純粋過ぎる猫羽が、風漓に体を明け渡す可能性もある。

それでも、何の心も無い水の器より、淋しさを持てる今の「霧」が、尊い。

烏丸悠夜に祓われてから、戻ってきてしまった心は、今度こそ御したかった。

「気付いて下さい、烏丸様.....椀様には、貴男の重さが必要です」

祈りは薄い霧夜に消えた。烏丸悠夜の最後の呪符が、燃え上がって朽ちるその時に。

★ Target.5: 烏丸一家離散事件

沈む水底で、小さい頃の夢を見ました。

わたしがサツリクの天使から人間に戻れて、橘桃花の幼体^{カラダ}でこの世に還った時のこと。橘桃花が死んだ後に、トウカの名前を継いだ暗闇のヒトがしてくれたお話。

わたしに体をくれたトウカは、死んだ体をわざわざ子供にした理由を、いつかの水底で教えてくれました。

——貴女が『椀猫羽』だと信じているものは、貴女という現象に過ぎない。

わたしはわけがわからなかった。どうしてそんなことを伝えてくるのか、トウカの心が温かかったことだけは覚えてます。

——全ての現象は、器によって再現される。心は、体なくしては心たり得ないもの。だから貴女も、最早真名は口にしないのでしょう。貴女の本当の体は失われたから。

トウカはなるべく、わたしをわたしらしい人間にしたかったんだ。それには体を、人間の頃のわたしに近付ける必要があるって、無茶を言ったみたいでした。

——本来なら魂魄こそが、体の形を決める。でも貴女の魂は『桃花水』に流れ続けて、この体も『桃花水』の虜^{とりこ}だから、貴女の同一性は再現できない。

だから、わたしがわたしである理由は、「心」だけなんだって。咲姫おねえちゃんや、父さんみたく心を見る眼を持つヒト達に、トウカはわたしのことを託しました。

——心だけが在るものは、『神』を蔵^{しん}すか、体に従うか。生き物というのは、体あつての一時の現象。この体がこの心を、『椀猫羽』にできることを、祈ってるから。

新しい世界から、こぼれ落ちかけた「椀猫羽」。魂はとっくにあちこちに散って、わたしの体には留まろうとしない。

いつかはそうなるって、トウカはわかってたのかな。この世界にしかない、トウカとの夢。その意味を考えながら、わたしはずっと、水底から外の現実を眺め続けます……。

* * *

日曜の夜に、公園の休憩所で倒れたわたしを、すぐに見つけたのは咲杏おねえちゃんでした。

何とか起こせないかを視てる内に、休憩所の呪符がなくなったことに気付いたユウヤがお兄さんと来て、なんとわたしは、ユウヤ達のマンションに運ばれたことに気付くのはもう少し後です。

悪魔の咲杏おねえちゃんと、呪術師のユウヤ見解は、見事に一致してるみたいでした。「猫羽さんの体から、魂だけが抜けてしまってます。どうやら誰かに奪われたようです」「スマホを見たけど、レヴァリー・サイズがなくなってるの。それがネコハの魂の本拠、『桃花水』が納められた鎌なんだけど」

ユウヤと咲杏おねえちゃんは、初対面です。なのにユウヤはおねえちゃんをかまわず家に入れて、わたしを運んでくれたお兄さんは、公園周辺をもう一度探してくる、と言って出て行きました。

お父さんとお母さんは、週末から旅行中で、帰るのは月曜日の夜みたい。マンションのリビングにユウヤと咲杏おねえちゃんが二人で、敷き物の上にわたしを寝かせてくれたところまで、朝になってからわたしは夢で見ました。

橘診療所は、今回は信頼できない。咲杏おねえちゃんが言うのをユウヤも納得しての、ユウヤ達のマンション。

でもユウヤは白夜のヒトに、記憶を消されてることを知らない。「力」がほんとに強いユウヤだから、わたし関係のことを完全には消されてない。公園の結界や呪符のことは、七夕からの長い記憶だから覚えてるけど、橘診療所をどうして信頼できないのかは、思い出せないみたいでした。

白夜のヒトは、記憶の期間が長い——重い方が消しにくいんだね。

土曜の夕方、診療所で水燬を見たことをユウヤは忘れてて、咲杏おねえちゃんに言われて愕然としてました。

咲杏おねえちゃんは坦々と、夜更けまでに、わたしの現状をユウヤに話しました。

「前にユウヤ君が助けてくれてからは、カザリはもう、ネコハの体を使おうとはしてない。ネコハとカザリの境界はすごく薄くなってしまってるけど、だからこのところのカザリは、ネコハから少し離れているの」

「それでは彼女は、今回奪われた猫羽さんの魂には、関わっていないんですね」

「でなければカザリは、私を喚ばなかったでしょう。十中八九、ネコハの魂を奪ったのは白夜。最終的な行き先はミズキのはずだから、私はそっちを見張るけど……」

悪魔らしく冷静なおねえちゃんは、何故か「水燬」と大きく紙に書きます。細々と呼吸を続けるわたしを、伶俐な眼差しで見下ろして言います。

「ユウヤ君はお兄さんが帰ってきたら、一緒にネコハの体をこのまま守ってくれるかしら。この世界では、ユウヤ君達の霊能は、大きく制限されるでしょう。どうせ白夜の邪魔も入るし、術は成功しないと思った方がいいわ」

「それは、その通りです。けれどあなたも同条件でしょうに、大丈夫なんですか？」

「もちろんボディガードの探偵を連れていく。カレンにも連絡して休暇はとってあるし」

なんだか、大きな話になってきちゃいました。先輩探偵のおにいちゃんも巻き込むつもりだ、咲杏おねえちゃん。

橘診療所が閉じられちゃえば、父さんとか兄さんとか、他の応援はもうよべないよね。ほんとにそれ、大丈夫なのかなあ……。

ユウヤも何だか暗い顔色で、床に座った状態で俯いちゃいます。

「僕達は——待ってることしか、できませんか？」

それから、咲杏おねえちゃんが出ていくまでの間、二人が何を話したのかはわかりません。多分これ、白夜のヒトにわたしも介入されてるみたい。夢が不自然にここで途切れたから。

でもそれだけじゃなくて、わたしもどうしてか、夢を見続けられません。今、外の世界がどうなってるか、直接感じるのはもっとできない。

気付いた時からすごく寒くて、体がふるえて動けないの。いつも冷たい水底だけど、これはおかしい。一人でぶるぶる、形の無い体を抱えて、そしてやっと、気付くことになります……わたしは今、ここでもう、一人ぼっちになってしまったんだって。

——おねえちゃんと、トウカが……いない……？

この氷みみたいな冷たさのわけ。現実を感じた頭が真っ白になります。

ただふるえ続けて、何も動くことができない。

水燬の所にいく思いさえ浮かばずに、わたしは時間が止まったみたいな意識で、わたしを包む現実を悟ります。

——ここには、もう……わたししか、いない……。

今までずっと、わたしを守ってくれてたはずのトウカ。わたしについててくれたはずの、精霊のおねえちゃん。

そのどっちもが、この暗闇では感じられません。わたしが昔、ずっと一人で、「桃花水」に封じられてたあの頃のように。

意識のボタンを、まるで掛け違えたみたい。一人ぼっちの寒さにあえぐわたしと、もう何も感じなくなったわたしがいました。

どうしてこの暗闇に来たのか、それがどうでもよくなってしまった。わたしは確か、何かをしないとイケなかったのに。

それはきっと、わたしの心が最後に見たものが、ここに来た目的とは違ってしまったから。

——ごめん——……ユウ、ヤ……。

わたしが選んだはずの、望み。魂が願った我が侘も関係ないこと。

もう体のなくなったわたしは、離れる直前の視界だけを繰り返し想います。

燃え上がって消えてく四枚のお札。凍てつく寒さにふるえながら、ひたすら見ようとし続ける光景。

同時にもう、何も思っていないわたしがいる。きっとずっと、わたしにはそういうところがあって、それをトウカと精霊のおねえちゃんが助けてくれてたんだ。

でも新しい世界では、二人がいなくなってしまった。それはきっと、精霊のおねえちゃんを、違う依り代に遷すために。

わたしはそれで、まるで元々、死んだ人みたいな空っぽな意識で……。

これがきっと、サツリクの天使のほんとの姿。水葵があの時言ってたような、生きてるフリをした屍。

これ以上の夢も探せず、悪魔を喚ぶことも思い付けずに、わたしの意識は暗闇にとけ出してく。

もういいや、って……こんなに寒いなら、また眠ろう、って。わたしがそこで、完全に意識を手放そうとした時のことでした。

真っ暗な冷たい夜の中で。死んだ人みたいに固まった体で、ふっとわたしは、とても懐かしい着物の子供の残像を見ました。

——貴女は、誰なんですか？

黒猫みたいに真っ黒な髪。それにキレイな青闇の目。

子供の頃から御所ではいつも、小袖と袴を着てた小さなユウヤ。

「…… ——……」

どんなに冷たい真っ暗闇でも、そこにユウヤがいるなら、寒くないんだ。

ただ温かだった、燃え行く呪符の真っ白な炎。もう一度わたしは、最後の光景を繰り返し見ます。

けれどユウヤは、まるで穢れたものを見るような眼差しで、ふっとわたしに背を向けました。

「——待って……！」

この闇では前から、わたしに自分のカタチなんてないのに、どうしてか思わず声が出ました。

同時に黒い世界が震え始めて、必死にのぼすわたしの手だけが、薄い光で輪郭を持ち始めます。

「待って、ユウヤ……！ どうして、いなくなっちゃうの……!?!」

どれだけ必死に追いかけようとしても、やっぱりわたしにはカタチがなくて、暗闇の中から出ることができません。

そうして遠ざかってく子供のユウヤは、最後に一度だけ、悲しそうな顔で振り返って……。

——僕達は——待ってることしかできませんか？

着物姿の子供のユウヤと、制服姿の今のユウヤが重なりました。

果てしない闇が、揺らぎました。ちょっとだけ、ユウヤのいる所だけ明るくなります。

「……帰ってきてください。……猫羽さん」

そこは、知らない建物の広い屋上。明るい星の見える夜空を向いて、手の平を上向きに掲げて、わたしに呼びかけるユウヤがいました。

両手にはひらひらと、まるで着物の袖みたいに、風に揺れる二つのリボン。

「ユウヤ……なんで……？」

それは多分、わたしの蜜柑色のリボンを使った^{かみあそび}神遊。生者の魂を呼んで振るわせる、^{しょうこんまつり}招魂祭をしてる。無言のまま、舞うように腕を振るユウヤを見つめて、わたしの呼吸が止まりました。

わたしに関する術を使うと、手順を間違えてしまう、と言ったユウヤ。

でも^{かぐら}神楽の舞とか神遊の歌は、意識よりも体が憶えてるもの。衰弱した魂を活性化する^{たまふ}魂振り、かなり簡単にしてあるその呪いは、ユウヤだからできる招魂祭。わたしがずっと観て来たユウヤが、稀にしか使わなかった大がかりな呪術です。

それはもしも、死者に使えば、禁術とされてしまうもの。呪術という禁忌には、普通、^{かや}返りの風——術が大きいほどにすごく襲ってくる、力の反動があります。

無力に座り込んでたわたしに、流れ込んでくる温かさ。それは、ユウヤの命も同然のはずだって、わたしは暗闇で怖くなってしまいました。

「もういいよ、ユウヤ……!! わたしはここにいるから、一人でも大丈夫だから……!!」

わたしは、悪魔使いなんだから。わたしさえ望めば、ここから誰かと、話だってできる。白夜のヒトも言ってたこと。外の世界が観える、それは封じられた昔とは違う。

わたしはわたしの我が侘でここに来たから、そのツケをユウヤが払うなんて、そんなのイヤだ、それなら座り込んでなんてられない……—

立ち上がると同時に、ユウヤの姿はすぐに、暗闇から消えてしまいました。
「あれ……わた、し……？」
代わりに、全身の形だけが浮かび上がったわたし。うん、この腕は間違いなく、わたしの体だよな？
「ユウヤ……どこ……？」
よくわからずに、こぼれる声は震えてました。でも確かに今は、わたしの声が出てる。わたしはいったい、どんな顔をしてるかわからないけど、したいことだけははっきりしてきました。

外の世界に、意識を向けてみます。夢を見た朝から、まだ全然時間がたってません。わたしの魂の大半は、招いてくれたユウヤの家——自分の体の近くにいました。闇から遠目に、わたしの隣で疲れて眠る、リボンを持ったままのユウヤが観えました。ユウヤの硬派なお兄さんも、Tシャツにジーンズでソファに座って、腕を組んでウトウトしてます。今日は、連休の月曜日だから。夜に呪術を使って疲れたユウヤは、もうしばらくは眠ってそうです。わたしもずっと、外を観続けるのはきつくて、一度、水底に意識を戻します。

白夜のヒトは、わたし次第で人とも話せる。そう言ったけど、その時、咲杏おねえちゃんみたいに、って言ってたよね。
悪魔になれば、ってことかと思ったけど、水底には誰も悪魔がこれてないから、悪魔なしに悪魔になる方法はちょっとわかりません。
咲杏おねえちゃんは、普段は咲姫おねえちゃんの中にいる。わたしから PHS の伝話か、悪魔召喚の魔法陣を使わないと、連絡は取れません。
悪魔の意識だけの、咲杏おねえちゃんから連絡するのは、契約した相手でないといけないです。もちろんちょっと、咲姫おねえちゃんの体を使ってメールや電話ならできるだろうけど、「力」を載せて契約もできる「伝話」は、伝波を自分で作れる咲姫おねえちゃんでない、この世界ではできないと思う。
咲姫おねえちゃんの、そういう「力」まで使うためには、「力」を宿す体が応えてくれる契約が必要みたい。でもわたしは、咲杏おねえちゃんと契約はしなかった。
精霊のおねえちゃんが、昨日、咲杏おねえちゃんと契約しろ、と言ったのはこのためだったんだ。おねえちゃんが契約してたらいいや、と思っちゃったけど、おねえちゃんはその時にはもう、わたしから出ていくつもりだったんだね。
「じゃあわたしが、ここで一人で、できそうなことは……」

声を出せて、体の形はわかるようになった水底。
試しにちょっと、指先で宙をなぞってみます。

「.....あ.....意識すれば、線は描ける.....？」

何も考えないとダメになるけど、わたしの輪郭の光を分けるように、イメージしながら指を動かします。ちょっと疲れるけど、数分は残る魔法陣が描けそうでした。

これなら、悪魔召喚ができます。陣と詠唱が可能なら、この水底に、悪魔を喚べるかもしれない。

わたしみたいに、魔力のない人間が悪魔を喚ぶには、何かの媒介か縁えにしがいます。異世界からはるばる、流惟母さんを喚べる力はまずないから、媒介もないし、縁ある咲香おねえちゃんしかつながらないと思う。

それならわたしは、ここからどうするか、先に考えないといけませんでした。

わたしが今、水燬の所に行かずに、ここに留まってる理由。

ユウヤ達には、せめて、ごめんって言いたくって。そのために咲香おねえちゃんを召喚したら、わたしはどうなるのかな？

「当然、サクラおねえちゃんは.....わたしを連れて、帰ろうとするよね.....」

でもそれは、無理だと思う。だってこの「桃花水」の混沌は、わたしの命でもあるから。

「桃花水」の鎌がないと、自分の体をさっき動かせなかった。だから、白夜のヒトも持ってったんだと思う。

咲香おねえちゃんに連れ出されたら、鎌が見つかるまでは、一緒に咲姫おねえちゃんの中にいることになりそう。そうなることを覚悟してでも、わたしは悪魔召喚をする.....？

「でも、水燬の所に行っても、サクラおねえちゃん、今は待ち構えてる.....」

わたしはここに、自分で来た目的は果たさないと。わたしを呼んでくれたユウヤには、さよならを言わないとダメかな、と思って。

ここから何か動くなら、あるのはそのこたえだけ。死んだ人みたいに、その意志は何も変わることがありません。

「さよなら、って.....言えたら、ほんとにいい.....？」

わたしが自分の形を持ってから、揺らぎが減ってたはずの水が、不意にまた、凍える寒さになってきました。

声と意志が、何だかずれてる。

また薄れてしまいそうな体がたった一つできること。必死の思いで声を出します。

「ちゃんと、話したい.....ユウヤも、サクラおねえちゃんとも、話さないと.....このままじゃ心配ばかりで、そんなの、ダメだよ.....」

それが、どんな結果になるか、なんて。考えるのはもうイヤみたいに、わたしの指は勝手に動き始めました。

まるでそれは、わたしもユウヤの呪術と一緒に、体が憶えてる祈りみたいに。

すごく久しぶりだけど、慣れ親しんだ悪魔召喚の陣。
知らない間に口ずさんでた、いつもの詠唱とは何かが違う誘いのうた。
「かごめ、かごめ……いついつでやる……」
わたしは今、どうしてこんな、余計なことをしてるんだろう。
声がなんで、震えるんだろう。何も感じないはずの指先が、すごく冷たい。
光で陣形を描くほど消えてく自分を、突き動かすのはただ、ユウヤがくれた温かさだけ……。
「後ろの正面……だあれ……？」

それはいったい、誰が教えてくれて、どうしてわたしがうたったのかはわかりません。
描き終わった魔法陣が成功を示すように、一瞬大きく光った後に、白が薄れると共に現れたのは。それは——どう見ても、水燬のニセモノの悪魔さんでした。
「——」

ポカン、としてたら、顕れた悪魔さんが、蒼くなった目を開けます。どうしてなのか、今までとは違う優しい顔で、ふわりと笑います。
「……契約、する？ ……捻、猫羽」
そう言えば、わたし、この悪魔さんとすでにつながってたっけ。だから今の、召喚に応じてくれたんだ。でもそれだけじゃ、こんな風には笑わない気がする。
そこでふっと、銀色の髪の悪魔さんは、わたしにあるものを差し出しました。
「……これ……なん、で……」

それはまず、人間界にいたわたしには、決して有り得ないはずの贈り物。見覚えのあり過ぎる、とても大事な黒いバンダナ。
茫然とするわたしを見て、悪魔さんは水燬の顔で、水燬はしなかった柔らかな笑顔になります。
「オレが今、ここにいるのは……猫羽ちゃんを心配してる、みんなの力」
そもそもあの地下室で、水燬の中にいるはずの悪魔さん。
それは水燬を、助けたいから。水燬を助けようとしたヒトのために、天使の羽から生まれた悪魔だから。その縁は知らない内に、沢山のヒトにつながってて。
「それでも猫羽ちゃんが、オレと契約をしたいなら、取り返しておいで——ユウヤ君にもっていかれた、猫羽ちゃんの大半の魂を……」

わたししかいないはずの、暗くて冷たいだけの水底で。わたしと同じように呼ばれた悪魔さんが、暗闇に振り返りました。
赤い眼の水燬とは違う、蒼い視線の先にあるのは、苦しそうに膝をついてるユウヤの制服姿でした。
「……!？」

どうしてユウヤが、ここにいるの？ 即座にそう思ったほど、その気配は今までの夢とは違う、存在の濃さでした。

思わずもう一度外の世界に意識を向けたら、わたしの傍らにいたユウヤが全身を折り曲げて、心配するお兄さんの膝で苦しんでる姿が見えました。

それからわたしは、この冷たい「桃花水」で、自分のほんとの姿を知ることになります——

* * *

暗闇で何故か、苦しんで膝をついてるユウヤ。駆けてくわたしを、水燬の悪魔さんが黙って見守ります。

悪魔さんからこの状況の、事情の光景が流れてきます。ユウヤの所に辿り着く前に、わたしはその夢を観終わってました。

待ってることしかできないのか、と咲香おねえちゃんに尋ねた夕べのユウヤに、咲香おねえちゃんはあっさり、ノーと答えました。

「余裕があれば、ミズキもどきの悪魔を確保してくれる？　今はパルシィが仮押さえ中で、媒介はそのリボンってことはわかってるから」

「水燬」と書いた紙を、残した咲香おねえちゃんの意図。ユウヤはその後、マンションの屋上に出て、わたしのリボンでわたしの魂を振るのと同時に、そこにいた水燬の悪魔さんを捕まえる招魂祭をしたんだ。

パルが昨日、わたしを洗脳しようとした時、リボンに悪魔がいるって気付いたみたい。パルも悪魔使いだから、その悪魔と契約をしてみたら、悪魔さんは今のような蒼い目に変ったわけです。

「現状は究極、そいつとネコハを契約させなければいいの。ただしもし、ユウヤ君がそいつを捕まえたら、一緒に『桃花水』に引きずられるかもしれない。パルシィとネコハの両方に繋がる悪魔で、その接点はかつて、二人が共有した『桃花水』になるはずだから」

その時咲香おねえちゃんは、いかにも悪魔らしい顔で微笑みました。

ユウヤはたとえ、ここに囚われてもそうする、ってわかってたんだ。でないとわたしのリボンに悪魔がいるって、わざわざ教えてはいかないよね？

眠る時には、髪を下ろしてるから、ここでわたしにリボンがないのは意識もしてなかったけど。そう言えば今のわたしは、制服姿で自分の形をとってます。なのに髪にはリボンがなくて、それは暗闇の中のユウヤが、胸ポケットに入れて持ってました。

何でリボンに、水燬の悪魔さんがいるのかは難しいけど、さっき渡されたものを考えたら、こたえはわかる気もしました。

——……契約、する？ ……楡猫羽。

そう言ってわたしに、失踪中の兄さんの黒いバンダナを差し出した悪魔さん。兄さんは確か、母さん達のいる元の世界で、兄さんに翼を分けてくれた悪魔——このリボンをくれたヒトで、水葵の^{あるじ}主の所にいるはずだから。

そのヒト。リボンをくれた翼の悪魔さんは、水燬を助けたかったヒトだから、水燬のニセモノさんのルーツはそこだったんだ。白夜のヒトが「汐音」と言ったニセモノさんは、翼の悪魔さんに渡された、汐ノ香の羽から生まれた悪魔。

ニセモノさんとわたしの縁、つながりはリボン。だからパルとユウヤが、二人がかりでそこからニセモノさんを招いた。その前に兄さんが、何故か翼の悪魔さんに大事なバンダナを渡して、それをニセモノさんがわたしに届けた。

その意味までは、さっぱりわからないまま。ニセモノさんに引きずられて、水底に来てしまったユウヤにわたしは駆け寄ります。

わたしと同じで、輪郭が光るだけのユウヤは、呪術で無理やり、あるべき体から離れてしまった状態みたいです。

「ユウヤ、どうしたの——どうして、こんな所にいるの？」

「——……」

両膝をついて、自分の肩を抱いて、闇に押しつぶされるように項垂れてるユウヤ。

これ、「世界中の淋しさが入ってくる」発作かもしれない。小さい頃は何度もそれで、お父さんに抱えられてたユウヤの姿が重なります。

ここには確かに、誰もいない。冷たく淋しいだけの場所です。そんな所に引きずり込まれたら、わたしよりずっと感受性が強いユウヤは、いったいどうなっちゃうんだろう……？

「どこか痛いの？ 大丈夫だよ、淋しくないよ、みんなユウヤのそばにいるよ」

「……………」

わたしも両膝をついて、ユウヤに話しかけます。自分を抱えるように俯くユウヤは、今にも倒れそうだから、そっと両手で肩を支えます。

外の世界でも、お兄さんがユウヤの背中を支えて、痛ましい顔で髪を撫でてました。苦しそうなユウヤは、わたしのリボンを握りしめてました。

このままじゃユウヤ、みんなが心配しちゃうよ。こっちではユウヤの胸にあるリボンを見ながら、わたしは心を決めて言います。

「だから、ユウヤ……わたしには、無理に関わらないでいいよ？」

きっと、リボンを返してもらえば、ユウヤはここから外に帰れる。

優しいせいで、こんな所まで巻き込まれたユウヤ。ちゃんここで、さよならを言って止めなきゃ。

そう思って、リボンを胸ポケットからもらおうとした、その時のことでした。

「……猫羽さんは……どこにいるんですか」

ふらり、と急に、俯いたままのユウヤが立ち上がりました。わたしも慌てて、追いかけるように立った瞬間でした。

「——え？」

こけるみたいに重心がずれて、何が起きたかわからなかった。

ただ気が付けば、ぐいっとわたしを引き寄せた腕の中で、ユウヤの鼓動が間近に波を打っていました。

「ここは真っ暗で……どこにいても、貴女がみえない」

「——……」

「どうすれば、貴女に会えるんですか——……淋しいのは、貴女でしょう？」

わたしがみえない。そう言いながら、わたしを捕まえるユウヤ。その声がふるえて、水の揺らぎに消えそうでした。

「どうして貴女は、ずっとこんな、冷たいところにいなくちゃいけないんですか……」

上げられない顔。どっちも体温の消えた体。

呼吸なんてしてないはずなのに、わたしの息が止まりました。

痛いのは、わたし？ それともユウヤ？

わたしがここにいるのは、ずっと当たり前のことなのに……どうしてそんなことを、ユウヤはきくの……？

「だって……わたしは……——」

沢山のヒトを殺した、昔のわたし。魂を封じられたサツリクの天使。

ユウヤ達がどれだけ優しくっても、わたしの過去はなくなりません。

でももう、声が出ないのはなんで？ ユウヤを外に帰さなきゃダメなのに、背中を掴む両手を振りほどけないのは、なんで……？

「猫羽さんは……殺したかったんですか？」

わたしが沢山、背負い続ける命が視えてるはずのユウヤ。かすかに顔を上げた黒い目の先にも、水燬のニセモノさんが映るのが観えます。

「貴女はどうして……ヒトを殺したんですか」

びく、っと思わずふるえました。ますますユウヤの腕が強くなって、ぴったりした胸から伝わる心が力を奪います。

このまま、いなくなればいいのに……なんでもか、そう、思っちゃった。

いなくなりたいって、わたしは、思ったことなんてないのに。

そもそも今、わたしは何を感じてるの？
ユウヤは何を、きいてるのかな。どうしてここまで来ちゃったんだろう。でも何か、もう、こたえはどうでもよくなっちゃって……。

わたしがヒトを、殺した理由。水燬も父さんも、人間も化け物も、色んなヒトを手にかけてわたし。

魔物だったとか、暴走したとか。それぞれ、理由はあったけれど……でも、理由があれば殺していいなんて、そんなことはなかった。

ざるからこぼれ落ちるみたいに、ユウヤから離れちゃいました。

わたしの体が、また消えたみたいです。ニセモノさんが取り返せ、って言ってたし、霊を視れるユウヤがみえないと言うなら、ここにいる意識はわたしの魂だよ。

それならさっきまで、薄く光って見えた体は？ どうしてユウヤに、触れられたのかな。わたしの形はなくなったのに、ここにいるユウヤやニセモノさんは、どうしてまだ見えているの？

見えなくなったわたしの後ろから、ユウヤを見ているニセモノさんに、ユウヤが悲しそうに口を開きました。

「猫羽さんを惑わせるのは、もうやめてください。これ以上利用するつもりなら、僕が貴方を祓うしかない」

利用って、何だろう。どうしてユウヤが、水燬の悪魔さんを祓うの？

ニセモノさんは曖昧な笑顔で、ユウヤに静かに応えを言います。

「君が手を汚すことを、猫羽ちゃんは望んでいない。今一時でも、猫羽ちゃんの霊を連れてきてくれたから、君も嫌というほどわかったでしょ？」

それは、まるで、ユウヤが水燬を完全に死なせてしまう宣告。

水燬の最後の道を、閉ざすのは誰か。

ニセモノさんの存在自体に、ユウヤが痛んでいること。わたしも確かに感じました。

「やはり、それが……『水燬』の望みですね」

だめ。それ以上は言わないで、ユウヤ。

咄嗟にそう思ったけど、体のないわたしには、もう声が出せません。

「猫羽さんは、どこまでも処刑人です。そして、犠牲者だ。消えたいと望んだのは水燬だから、猫羽さんも貴方も、迷い続けてここに留まっている」

ニセモノさんが、苦しそうに笑いました。水燬も最後に見せた同じ顔で。

「貴方が猫羽さんを連れて水燬の魂となっても、どの道、彼の意識は消える。水燬君は、解放されることを望んでいる。でもそれをまた、猫羽さんにさせるというなら……今度は僕が、貴方達を祓う」

解放……水燬は、消えることを望んでる？

わたしの中で、何かがかちりと、やっとカケラがつながっていきます。

「……水燬の霊を、貴女から祓わせてください、猫羽さん」

ずっと一緒に、わたしと水底にいたはずの水燬。わたしが奪ってしまった命。

わたしが水燬を助けたら——望みを叶えたら、水燬だったヒトは消える。ニセモノさんが水燬になること、そのねじれた現実の意味は。

「この闇を全て、祓うことは僕にはできません。それでも、そのヒトだけは……」

やめて、って、必死に暗闇を揺らしてもユウヤには届きません。

わたしはどうして、やめてほしいんだろう？ 水底で水燬の、最後の想いを思い出します。

——オレは、どうして……死にたくなかったんだろう？

とにかく生きるために、魔物として人を食べてた水燬。

そんなヒトが、わたしに殺された時、呪うと同時に流れて消えていった心。

——オレは、どうして……魔物に、生まれたんだろう……？

痛い。痛い。いたい。みんな、いたい……。

色んな人の、命の最後はいつも痛くて。だからわたしは、それを全部きくことにして……そして……殺したくないヒトなら、殺さなかった。

——……言い残すことはある？

これから形だけ、水燬の目を覚まさせたら、水燬の家族は喜ぶのかな……それとももっと、悲しむことになる？

わからないけど、それでも水燬が望むことはわかったから、わたしはそうした……ここに来たのも、水燬を終わらせたあの時も、わたしは、本当は……。

——君がヒトを殺した理由に、あの頃には気が付けなかった。

それはあくまで、わたしの意志で……間違っただけかもしれないけど、それでも……。

「……猫羽さんが、僕に仕えてくれるつもりなら。それなら、僕以外の人に、利用なんかされないでください」

さっきまでの淋しさとは違う、何かの心を決めたユウヤの声色。
わたしのリボンを暗闇に掲げて、除霊と退魔の術式を、天才術師が同時に起動します。
そのままやがて、ニセモノの悪魔さんとユウヤは、「桃花水」の世界から消えていってしまっただけでした。

……わたしの形も、ここに来た理由も、全部なくなっちゃった。
どれくらいの間、呆然としてたんだろう。暗闇の中でひたすら、一人ぼっちでした。
精霊のおねえちゃんも水燬もいなければ、誰の望みもここには残ってない。
水燬の眠る部屋が、もう見えなくなった。行き方がわからなくなっちゃいました。

——猫羽さんに憑いた人外生物の多さも、大概ですけどね。

ユウヤは前に、そう言ってたけど、とっくに水燬のことも視えてたんだ。
水燬の霊が、わたしのところに在った縁……水燬がわたしに、殺された理由も。

ユウヤが水燬を祓っちゃったから、橘診療所はこれから、ユウヤの敵になるのかな？
地下室の水燬は、もう目を覚まさない。その咎をユウヤに負わせたことは、わたしの一生の後悔になる予感がします。
光の体がなくなったから、もう魔法陣も描けそうにないし、ここからどうしよう。できることがないのはわかってたけど、ついそう考えるわたしは、昔からです。
帰りたい、って、また思うようになるのかな。精霊のおねえちゃん——水の器^{アジサイのヒト}が見つけてくれるまで、わけもわからず願い続けた、遠い日のわたしみたいに。

ふっと、ニセモノさんがくれた兄さんの黒いバンダナが、まだ残ってることに気がきました。

うん……これがあれば、淋しくないかな。兄さんを長く支えてくれた呪いが、この大事なバンダナにはあるから。

ただ、ユウヤがせっかく仕えさせてくれそうな感じだったのに、もう体に帰れないのは残念だね。

白夜のヒトは、わたしの鎌を持って何処に行ったんだろう？ 水燬のことがダメになっても現れないのは、もうきっと色々、どうしようもないんだらうな……。

ぼけっとそんなことを考えてたら、同じように白夜のヒトの所にいるはずの、水葵の言葉を不意に思い出しました。

—あなたは、いつか烏丸悠夜に仕えたいと言っていましたね。今でもその気持ちは同じですか？

うん、と一人、イメージで頷きます。ほんとに声がしたみたいな気がして。

他には特に、やりたいことはないよ。そう答えると、記憶の水葵がわたしにさらに問いかけてきます。

—あなたは本当に、それでいいのですか。

そう言ったあの時の水葵は、それで幸せになれるですか？　って続けたっけ。

わたしは今まで、幸せになるためって、考えたことがなくて。

だって、父さんと母さんと兄さんがいて、他にも色々なヒトに会うことができる今は、もう十分幸せだったんだから。

だからこれ以上、欲しいものはなかったと思う。それよりも、わたしにできることを何か見つけたくて、今回みたいにわたしにしかできないことなら、我が俣になっちゃう。

それでユウヤを、こんなにいっぱい、巻き込んだのに.....。

—.....帰ってきてください。.....猫羽さん。

ユウヤ、全然怒ってなかった。ただずっと、哀しそうにしてた。

どうしてかわからないから、その理由を聞いたかったなって、そう思った時.....ふっと、またわたしの体が、かすかに光を持ってました。

「これ.....なん、で.....？」

さっきから、ユウヤのことを考えると、わたしに戻ってくる声と形。

わたしの姿をした薄い光。頭をよぎったのは、いつかのトウカの言葉でした。

—貴女が『椀猫羽』だと信じているものは、貴女という現象に過ぎない。

これは、「わたしに似てみえる姿」。わたしの体みたいな形をとった光。

—全ての現象は、器によって再現される。心は体なくしては、心たり得ない。

それならこのかすかな光は、わたしの心？

ユウヤがわたしの魂だけでなく、連れてきてくれた心.....わたしは心の一部までユウヤのところにおいて、だから今、「わたし」の姿をとれてるんだ？

それがどうして.....こんなにも温かいの.....？　何でか、不意に、泣き出しそうになっちゃいました。

—率直なのは、あなたの体だけです。踏み込もうとすれば、怯えて立ち止まってしまふ。

そっか……わたし、怖かったんだ。「わたしになる」のが……わたしの心が、怖い。だって、わたしは、ヒト殺しだから。今でもわたしは、もしもそれが必要なことなら、ヒト殺しに戻れると思う。それはわたしと、優しく暮らすユウヤ達の、絶対の違い。……でもユウヤは最後まで、わたし自身に向けては、ヒト殺しとは言わなかった。

——猫羽さんは、どこまでも処刑人です。

悪いものとか、魔物とか。そういう風には、言われたことはあるよ。でもわたしの殺した命が視えてるのに、ユウヤはわたしに、ヒト殺し、とだけは言わない。だからわたしは、ユウヤに仕えたいんだ。ユウヤのところにいれば、わたしもきっと、ヒト殺し以外の何かになれる気がして……。

ぼろぼろと、光の涙がとめどなくこぼれて、暗闇の中で膝を抱えながら、やっとその想いをわたしが自覚した時のことでした。

「それならこんな所でさぼってないで、さっさと出て来て下さい、猫羽」

「——え？」

ついさっきまで、思い出からわたしに話しかけてきた水葵。

でも今は、過去じゃない声。それも口調が水葵なだけで、水葵とは微妙に違う、知らない声色なのがヘンなことで……。

「今の私の声は聞こえるはずですよ。あくまで応えない気なら、私にも考えがあります」

そうして唐突に、水葵みたいな声の主は、わたしの意識を外の世界に引っ張り出します。

橘診療所が、突然、大変なことになってました。

玖堂さんのお家を警備する機械の一つが、何故かわたしの鎌を持って、院長先生の居室に押し入ったみたいです。

「さあて、忌々しい蠅はえの悪魔、今度ばかりは年貢の納め時でしょうか？ 積年の恨みを晴らされたくなければ、速やかに私の言うことをきいてもらいましょうか」

「お前、海竜……というか、辰か……？」

院長先生は啞然と口を開けて、火をつける前の煙草を落しました。

そこに現れたのは、十二支の「辰」をモチーフにされた警備機械さん。一緒にソラがついてて、何だかいつもと全然違う、余裕の顔で笑ってるソラです。

「くすくす、橘先生すみません、いやあ面白い、戦闘型に『辰』がいてくれて本当良かった、ふふふふ……」

多分ソラが、その「辰」さんを、連れてきたみたいなんだけど。どう見ても水葵化してる「辰」さんは、ソファに座る院長先生を足蹴に動きを封じて、わたしの鎌を下段から突き付ける鬼みみたいな形相でした。

「貴男が何かと嫁を甘やかすから、些少な事態がここまで混乱するのです」

「いやそれ、凧の件では『空』も同罪だろ、むしろ俺は必死に事態改善に走り回ってるぞ……」

「『空』はわざわざ、猫羽周囲から私の記憶を奪うなどして異状を警告してくれました。ここぞで私に幻想鎌も持たせて解放し、白夜の裏をかきました。なので有罪は貴男だけです」

「ちょっと待て、お前ら俺のせいにすればいいと思ってないか、誰も凧に直接言えないだけだろ、というか『空』、裏切ったな……」

いつもは院長先生の下で、真面目そうに働いてるソラ。

水葵が自分の人形を使わずに、「辰」を動かしてるのは不思議だけど、不自然に表情があくどいソラより滑らかに鎌を操る「辰」さんです。

すっかり諦めたような院長先生が、白衣を脱ぎながら立ち上がりました。

「……で、俺に何をしろと言うんだ、お前ら」

それから院長先生が「辰」と一緒に、ユウヤ達のマンションに往診に来てくれるまでを、わたしは追いかけることになります。

原則的に、絶対診療所から動かない院長先生なのに、よっぽど水葵入りの「辰」が怖かったんだね。「桃花水」の鎌を持つてるから、今の「辰」さんに敵うヒトはそうそうなさそうです。

それからの展開は、ユウヤ達もびっくりの怒涛でした。

ユウヤのマンションで、わたしの鎌はスマホに戻されたけど、完全に抜けた魂がもう一度定着するのは時間がかかる、とあって、その間に死んじゃわないよう、院長先生がわたしの体の処置をしてくれました。

その旨をわたしのスマホから電話された咲杏おねえちゃんは、診療所の地下でずっと水燬を見張ってたみたい。同時に白夜のヒトも牽制する役回り、白夜のヒトは何処にも現れずに終わりました。

一人にするのは心配だから、って、眠るわたしはそのまま、ユウヤ達のお家に預かれることになっちゃいました。

帰ってきたユウヤのお母さんが、「きゃーっ、親がいない間に悠ちゃんが女の子を連れ込んでー！」ってすごく驚いて、お父さんと一緒に代わるがわる、わたしの看護をしてくれました。毎日二人が、よしよし、ってしてくれて、気持ちいいなあ……って思った時に、わたしの目は覚めることになります。

「猫羽は激しく反省して下さい。まだまだあなたの魂は不安定ですから、当分人間生活をさぼろうとは思わないことです」

水葵は自分の人形が、白夜のヒトと一緒に行方不明で、「辰」さんを動かすのに沢山魔力を使ったから、また里帰りすることになりました。

本当に、人形歴が長い水葵だからあっさり「辰」を動かせたけど、それでもかなり消耗したみたいです。それに今度こそ、主と共に汐ノ香の行方を追うって言ってたから、当分日本には来ないんじゃないかな。

「白夜はまたいつでも介入してくる可能性があります。今度は猫羽が気付けるでしょうが、『空』の手綱は向こうに握られているので、油断はしないで下さいね」

鎌を取り戻す時にだけ、ソラを動かして協力してくれた『空』のヒト。そのヒトは汐ノ香の力も、白夜のヒトに使わせられる切札の不死人なんだって。

この件みたく、わたし達の日常まで介入できるのは、『空』のヒトがあればこそで……機械のソラは何も覚えてなくて「？」だったけど、院長先生に仕事を増やされて不満そうです。

知らない内にいなくなっちゃった精霊のおねえちゃんは、気が付けば還ってきてくれました。ほんとに、霧みたいな神出鬼没です。

そんなこんなで、長月のはずの九月は、あっという間に過ぎてったのでした。

* * *

わたしが数日で目を覚ました後も、体の弱いユウヤの方は、体調がなかなか回復しませんでした。自分の家に帰ったわたしは、週末にユウヤ達のマンションを訪ねました。

ユウヤが気にするといけないから、気配を探って、お父さん達がいらない時にしたよ。お兄さんは、夕飯を作るって言って部屋を出て行って、わたしにも食べてけ、って目が真剣でした。兄さんの兄弟子だから、わたしのことも昔から可愛がってくれてるんだ。

わたしが眠ってる間は、お兄さんが貸してくれたベッドで、ユウヤと同じ部屋で二人で寝込んでたみたい。お見舞いに来たわたしの前で、寝巻で横になってるユウヤは、まだひかない熱で赤い顔で恨めしそうでした。

「とりあえず『桃花水』、寒過ぎでしょう……猫羽さんはいったい何で、毎晩あんな所にいて風邪をひかないんですか……」

「むしろなんで、ユウヤは体までそんなに冷えちゃったの？ わたしは多分、それがないんだと思うけどな」

冷たいなあ。って毎日思って起きるけど、体には何も異状はないよ。それでも朝のシャワーは大好きだけどね。

「それは猫羽さんが、魂だけで飛んでるからです。そんな芸当は普通できません、霊体への影響は体にも表れるものなんです」

そうなんだ。じゃあユウヤは魂だけじゃなくて、霊魂って形で引き込まれたのかな？
それも危なそうだな、と思うけど、ユウヤ曰く、霊は霊体全体が「心」で、その内の頭が「魂」のイメージなんだって。霊の頭だけが飛び回ってると考えたら、うん、確かにわたし、それはあんまりしない方が良さそう……。

何にせよ、ユウヤがダウンしちゃったのはわたしのせいだと思うから。何かできることはない？ って、何度もきくわたしなんだけど……。

「だから言ってるじゃないですか。僕は別に、貴女のために動いたわけじゃないです」

あれだけ助けてくれたのに、ユウヤはその一点張り。わたしに従者さんの仕事は、まだまだくれそうにないです。

まあ日本では、特にすることもなさそうだよ。高校の勉強とかはわたしが教えてほしいくらいだし、うう、やっぱり、できることが全然ないです……。

「わたしのためじゃないなら、何のためだったの？ ユウヤ」

「桃花水」に、悪魔づてに引き込まれるのを承知で、大きな呪術を人間界で使ったユウヤ。こうやって長く寝込んでるのも、その代償だよ。今日はわたし、理由を初めてきいてみました。

でもユウヤは面白くなさそうな顔で、ベッドの横にいるわたしに、ふいっと背中を向けちゃいます。

「貴女に何かあれば、父様や兄様が悲しむからです。猫羽さんはもう少し、御所のゆるキャラである自覚を持っていただくべきです」

うーん……ゆるきゃら……？ よくわからないな、無理がないかな……。

わたしもしばらく診てもらおう院長先生は、一番最近に行った時に、ため息混じりにヘンなことを言ってたんだけど。

「烏丸悠夜にとって、おまえは確実に魔物だ、山猫。好き好きって全身で言いながらとことん無自覚で、その上危なげで保護欲もそそる美少女は反則だろう。好きとかどうとか考える以前に、気にならない存在であるわけがない」

どれの主語が、誰なんだろう……わたしはユウヤが大好きだから自覚はあるし、ヘンなお話だよ。……。

でも今日は、ユウヤのお父さん達、元の世界に帰る準備をしに行ってるんだって。ここと元の世界では、時間の進み方が違って、一カ月いるだけでも向こうでは半年近くたっちゃうから、あんまり長く御所を空けるわけにはいかないんだよね。

リビングも片付けられ始めてて、淋しくなるな、ってしみりしちゃいました。

「ユウヤの体調が良くなったら、もうみんな、ここを出るんだよね？」

「その予定ですけど……それが、何か？」

わたしがしょぼんとしてるのを、ユウヤがちらっと振り返って、訝しそうにします。

「母様のお弁当がなくなるの、そんなに残念ですか」

「あ、そっか。そっちもなくなっちゃうんだ、余計に淋しいね」

短い間だったけど、屋上でユウヤと食べるお弁当は、ほんとにおいしかったな。

水葵もないし、パルも今回の件が一段落したから帰るっていうし、賑やかだった分、今後は淋しくなるね。

わたしの後ろに、暗闇と音が浮かんでそうなくらい、しょぼん……としてたら、やれやれ、という感じで、ユウヤがベッドの上に起き上がりました。

「お弁当はなくなりますが、代わりに猫羽さんが暇でしたら、いつでも遊びにどうぞ。今日みたいに、ご飯がつく日もあると思いますよ」

「うん、そうだよね……って、え？」

「誰が全員、御所に帰ると言ったんですか。母様はまた旅に、父様は仕事に復帰するので、もう少し経済的な部屋に移るだけです」

「って……え……？」

もうここから出る、と、荷物をまとめてるユウヤ達のお家。

社員寮らしい家族用のマンションは広くて、その分家賃が高いから、そもそも玖堂さんの厚意なんだけど……その中でもう少し、狭い部屋に変わるってこと？

「ユウヤはまだ、人間界にいるの？」

思いもかけないお話に、胸がぼくぼくしてきます。

え、ウソ、それってつまりは……？

「そのために橘診療所で、しばらくバイト生活ですけどね。帰っても元服、と言われるだけですし、こちらの方がまだ幾分かは気が楽です」

「え……え……じゃあ、ユウヤ……じゃあ……」

サイドテーブルからお茶をとって、菓の包みを開けたユウヤ。ひたすらびっくりなわたしは、思わず何も考えずに言っちゃいました。

「じゃあユウヤ、わたしの家に来たら、バイトもしなくていいと思うよ？」

ぼふおっと、飲みかけたお茶をユウヤが吹き出しました。

お菓を含む前だったけど、げほげほむせるユウヤを前に、わたしは荷物を置いて背中をさすります。

「ごめんねユウヤ、大丈夫？　なんでそんなに驚いてるの？」

まだ苦しそうな咳のユウヤを見て、院長先生の「おまえは魔物だ」って言葉が、何でかふっと頭をよぎります。

ユウヤはしばらく咳をして、やっと落ち着いてから、何だか無理に冷静にした声を、バツが悪そうに絞るのでした。

「せっかくですが、僕を一人で置いていくわけにはいかない、と兄様も言ってくれてますから。二人でお世話になるのは無理だと思うので、遠慮します」

「あ、そっか。それはそうだね、一人じゃないよね」

それでも、お父さん達が帰った後なら、いつでも遊びに来ていい、って言ってくれたんだね。わたしがあんまりしょぼんとしてたから、心配してくれたのかな。

やっぱり優しいね、ユウヤは……うん、わたしは大好き、ユウヤのこと。

いっぱい迷惑かけちゃったから、わたしの一生をかけてお返しができたらいいな。

それはきっと、わたしが昔に暗闇で待ち続けた長さに比べたら、あっという間に過ぎちゃう時間だろうから……。

「大好き、ユウヤ」

思ったことが、そのまま声に出たら、ユウヤがまたむせかけて、お茶をコトンと離れた所に置きました。

拗ねたような目をするから、どうしたのかな、と思って覗き込んでみます。すると顔を隠したいみたいに、わたしのおでこを自分の胸に押し付けちゃいました。

「……？」

これ、淋しい発作なのかな？ 後ろから頭を押えられてるから、上を向けなくてユウヤの顔色がよくわかりません。

気配はいつも隠されてるし、ユウヤほど心がわからないヒトは、そう言えばわたしの周りには少ないね。

でも細い体がまだ熱っぽくて、それがあの時の、水底の光みたいに温かかったから——

ほんとにユウヤ、ここにいてくれるんだな、って。今更実感がわいてきて、顔がゆるみました。

「大丈夫だよ、淋しくないよ。……そばにいるよ」

ユウヤが一瞬、呼吸を止めて指の力を強めました。わたしの髪をくすぐるような、ほっとしたような柔らかい手付きで。

これからもしばらく、わたしは毎日、冷たい暗闇を這い上がります。

迷探偵の乙女事件簿 了



☆ a sequel

気が付けば、もう、紅葉も終わりかけた冬月でした。

高校の期末テストが近くなって、わたしはどうせダメダメなんだけど、英語と国語は何とかしましょう、とユウヤに最近スパルタをされてます。

元いた世界の言葉に似てるもんね、英語と国語。でもユウヤ、そんなにマジメにこっちでも勉強しなくても……って思うんだけど。

「ひょっとしてユウヤ、もう三月まで、こっちにいるの？」

「そのつもりですけど。猫羽さんより先に帰ったら、僕だけどんどん歳を食うじゃないですか」

あ、故郷の京都にいるままだったら、ユウヤは二十歳を超えてるよね。

遅くても十八歳になれば元服っていうの、そんなにイヤなのかなあ。こっちで十八歳の誕生日が終わってからも、ユウヤは帰ろうとしません。

わたしは高校、一年だけで帰る予定だから、高校生活はもう後三分の一も残ってないんだね。二学期からも色々あったけど、早いなあ。

最初はよく、ユウヤ達の下宿に遊びに行ったんだけど、ユウヤが勉強を教えてくれるようになってから、わたしのところにユウヤが来ます。

橘診療所から、ちゃんと家庭教師代が出てるんだって。何でだろ……。

通院してる時、機械の「凧」に憑く凧お母さんに初めて会えて、「ごめんねー、試練をきつくし過ぎだって流惟に拗ねられちゃった☆ 埋め合わせはちゃんとするね？」って言ってたのと、関係してるのかな……？

遅かれ早かれ、わたしは同じ問題に直面するから、そのために人間界に出されたんだって、今ならわかるけど。流惟母さんも、「あなたは乗り越えなければいけない」って言ってたもんね。

人間界で半年以上暮らして、わたしはちょっとでも、人間らしくなってるのかな？ ユウヤが気にするから、もう悪魔はほとんど使っていないし、探偵バイトでも鎌を使うこともそんなにないし。

でも一つだけ、まだまだわたしを追いかけてくる、人間以外の環境が実はあった。

受付けバイトが終わって家に帰ると、今日もその、人外のヒトは待ち受けてました。

「お、お帰りー、猫羽！ すっかり暗いな、ご飯できてるぜ！」

「.....ただいま、キラ」

エプロンを着て楽しそうに、何故か家事をしてくれる「キラ」.....銀色の髪、人外なヒト。

見た目は若くて中学生くらいなのに、ぴんぴんはねてる髪をうまくまとめる黒いバンダナと、真っ赤な眼が不思議に大人びた人外生物さん。

「.....多分、バンダナを外せばもうほんとに、水燬みたいだと思うよ」

「え、そーかな、でも外すわけにいかないしなー？ 記憶はまだ戻らねーし、まあゆっくりやるよ、気にすんなよ猫羽！」

ずっと、橘診療所の地下室で眠ってたはずのヒト。

それが今は、こうしてほとんど毎晩わたしの家に来ては、家事をしてくれて帰ってく毎日が、最近続いているのでした。

ユウヤがわたしのせいで、「桃花水」まで来たあの時のこと。わたしは水燬のニセモノの悪魔さんから、兄さんの黒いバンダナをもらってました。

でも目が覚めたらバンダナは何処にもなくて、考えてみれば「桃花水」の世界でもらったから実物じゃないはずで、それはきっと、あのバンダナの形をとってみえた誰かの魂だったんだ、って、後から院長先生が教えてくれました。

兄さんのバンダナの形をとった、誰かの魂。

どうしてニセモノさんは、わざわざわたしにそれを届けてきたのかなって思ってたら、しばらくしてからすごい状況で、わたしはそのバンダナに再会します。

「^{つばめ}燕雨と^{よくる}翼櫓の頼みで、守りに来たぜ！ オレは水燬キラ、ただいま水燬の記憶、取戻し中！」

診療所で突然、元気にわたしを待ってたそのヒト。

院長先生も想定外の事態だったらしいんだけど、わたしが「桃花水」で燕雨兄さんの黒いバンダナを受け取った時、眠る水燬は目を覚ましたみたいです。

でもずっと、水燬の記憶は戻ってなくて.....バンダナの形の誰かの魂が、ユウヤがわたしから祓った水燬の霊と一つになったことで、生き物になれる最低条件を取り戻せたんだとか何とか。完全に一つになれるくらい、水燬にぴったりの靈魂だから、体も動かせるんだろうっていう話でした。

すごくびっくりしたわたしだったけど、院長先生はやっと納得した、と言わんばかりの呆れっぷりでした。

「まあ、氷輪翼の一人勝ちだな。山科^{やましな}燕雨から受け取ったバンダナの呪いを、見逃さなかったのはさすがだ」

水燬を助けたかったはずの、翼の悪魔さん。兄さんのバンダナに宿る気配が水燬に似てるって、もらった後に気付いたみたいなんだって。水燬は元々、魂のすごく弱い魔物で、あのバンダナならその補助になる、って。

それは、バンダナだけでもダメで、わたしと一緒に「桃花水」にいる水燬の霊を、何とか掬い出さないといけなくて。ユウヤが「桃花水」まで来て水燬を解放してくれなければ、ここにいる人外生物さんは有り得なかったんだよね。

わたしがわざわざ、人外生物さんって言うのは、今のこのヒトは悪魔じゃなくて、魔物手前の中途半端な状態みたいで……。

「水燬の記憶が完全に戻ったら、また魔物化しないように注意しないと。『オレ』^{キラ}は元々人間と魔のハーフで、どっちにも転べるようになってるんだよ」

バンダナの形をしてたヒトの魂が、最初に思い出した名前は「キラ」。

それはバンダナを持ってた燕雨兄さんにも大切なヒトで、もう心臓が止まりそうなくらい、わたし以上に驚いてた、とききました。

翼の悪魔さんにもにやにやと、「ホントの相方が還って良かったじゃん？」と言われてみたい。それはこれから、汐ノ香の行方がわかるまでは問題保留！ 　って言って、海竜状態の水葵も連れて、二人で汐ノ香を探しに出たんだって。兄さん達がそれで完全に音信不通になるから、代わりにしばらくリハビリがてら、わたしを見守ってほしいと頼まれて、キラはここに来たわけでした。

簡単な家事は、昔から得意なんだ！ 　って、キラは毎日素朴なご飯を作ってくれます。「あ、そろそろ悠夜さんが来る時間？ 　どうする、オレ、おいとまする？」

「え？ 　なんで？」

「何で、ってきいちゃうのが、相変わらずの猫羽だなー。まあ、オレは虫よけの役回りだから、こんなこと言ってちゃダメなんだけどなー」

キラが来るようになってから、なんでかユウヤまで、毎晩勉強を教えてくれるようになってしまいました。

今日もそれで、ぴんぼんが鳴りました。いつも時間ぴったりで、ユウヤは真面目だね。「こんばんは。お邪魔します、猫羽さん」

「あー、悠夜さんナイスタイミング！ 　ご飯一緒に、先にどーぞ！」

わたしより楽しそうにユウヤを出迎えるキラに、何だかユウヤは複雑そうです。「呼び捨てでいいです、別に……本来は貴男の方が年上だったじゃないですか、水燬君」「んーでも、まだ何も記憶戻ってないしさー。悠夜さんと呪術の話するの超楽しいし、天才過ぎて尊敬するし！」

キラがこうして、満面の笑顔でユウヤのご飯も用意するから、大きな溜め息をつくユウヤです。

「貴男の方が、失われた古代の呪術に詳しいでしょう。ほとんど文献の残っていない、古術の唯一の使い手ですよ」

「いやー、そう言われると何か照れるなー。と言っても使い手が凡だから、現代呪術をしっかりと教授してほしい次第！」

ユウヤが難しい顔をしながら、みんなで食卓につきます。キラは作るけど、自分はまだご飯を食べれない体調なんだって。それもユウヤを悩ませてる原因みたい。

「魔物退行一步手前、悪魔化寸前、吸血鬼侵蝕..... 貴男に猫羽さんの血は、いつまで必要なんですか.....」

今のところ、キラはわたしの血がないと、本当は動くことも難しい衰弱状態なんです。わたしはそれくらいで助けられるなら、院長先生がくれた血のお薬を飲んで、大丈夫な範囲であげてる最近です。ゆくゆくは他のエネルギーも見つけないと、キラも大変。

実際これから、水燬の記憶が戻るかも未知数で、できることは何でも手伝いたいな。

そんなわけで、わたしの近況は、ちょっと貧血でふらふらしてるけど、ユウヤと勉強を頑張りながらバイトも続ける人間生活です。

院長先生曰く、何も言わない尻お母さんの、無茶振りの賭け。それはきっと、この世界では上手くいったんだと思うな。

みんなは尻お母さんを怖がってるけど、わたしはなんだか、まだよくわからないや。ただ、自分の役目は終わったって言っていなくなっちゃったから、尻お母さんも帰って来れないのかなって、それが気になってるよ。

キラが来てから、毎晩ユウヤと勉強会です。終わって二人を送り出したら、もうへとへとになって、すぐ眠っちゃいます。いつも通りに、暗い水底にいきます。

クリスマスが近くなったある日、わたしはすごく不思議な夢を観ました。

——猫羽ちゃん、クリスマスは誰と過ごすつもりかな!? 人間界、特に日本では一大イベントなんだから、うかうかしてちゃダメなんだよー!

あれ、水葵.....? じゃなくて、水葵の人形で、髪の毛を右ポニーテールにした、黒いダッフルコートの女のこ.....?

おかしいな、水葵の人形はまだ行方不明で、兄さん達が探しにいったはずなのに.....このヒトはいったい、誰なんだろう?

——あ、こっちには来ちゃダメだからね、相変わらず猫羽ちゃんは危ないんだからね！
風漓、ぐっじょぶ！ 猫羽ちゃんと風漓が幸せなこと、オレ達はずっと祈ってるから！

とてもキレイで、優しそうな笑顔。それはきっと、この世界では居場所がなく、それでもいい、って笑ってるヒト。でもね、そうとも限らないよ？

だってここは、誰も知らない新しい世界。消えたい、と望んだはずの水燧が、元気なキラになって目を覚ましたように。

「ありがと……もうちょっとだけ、そっちも待っててね、シオン」

ここはもう、有り得なかった世界じゃない。有り得てほしかった夢の続きが、幻を超えて産声をあげた。

だからまだまだ、できることはあるはずだから……この先の未来が、わたしにも明るい夜になるように、次の水門が開くのを楽しみに待ちます——



謝辞

ここまでご覧下さった方があれば、本当にありがとうございました。

よろず事件簿+乙女事件簿、合わせて出すと20万字近い大長編になってしまいました。

★2024.2.24：本作よろず事件簿に乙女事件簿追加 (<https://puboo.jp/book/134686>)

☆以前の「番外編」のあるバージョンは配信終了、「番外編」中の「神探シ-裏編-」を下記に移動しました

☆番外編：『迷探偵猫羽の乙女事件簿・序』 (<https://puboo.jp/book/134653>)

※本作を含む有り得なかった夢、「橘診療所シリーズ」全般ネタバレを収録しています

よろず事件簿の-INFOMATION-に記載した星空文庫のパラレル作品、直観探偵シリーズを含めて、猫羽というキャラの誕生は素敵なイラストを描いて下さったハトリさんの存在あってこそでした。

(<https://estar.jp/users/104802264>)

現在、猫羽が主役である話のストックはもうありません。

もし、興味を持って下さる方がおられれば、橘診療所シリーズでも直観探偵シリーズでもない正史の猫羽は以下になります。

(<https://www.novelabo.com/books/6723/chapters>)

または、猫羽の殺戮の天使時代の話は下記になります。

(<https://www.novelabo.com/books/6334/chapters>)

今後、本作迷探偵、もしくは星空文庫の直観探偵シリーズに続編があるかは、全くわかりません。何かを思い付いたり、神が降りてきたら有り得るかもしれません。

ご縁があれば、またお会いできれば幸いです。

改めて、御閲覧本当にありがとうございました。

Studio ***46 X: 滓@kazari_sou

迷探偵猫羽のよろず事件簿

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
